

MA J I K O I × D R  
I F T E R S

霜烧雪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

生死の狭間で開かれる、異世界への扉。現在ではない何時かへ、現実ではない何処かへ、武士の血を受け継ぐ猛者たちが導かれる。

自由奔放に駆け回り引つ掻き回す、漂流物。ドリフターズ

災禍の使途となり破壊を望む、廃棄物。エンス

これは、世界の混乱の物語――

◇ ◆ ◇

「真剣で私に恋しなさい!シリーズ」の二次小説作者様方と、平野耕太氏原作の「ドリフターズ」の舞台をお借りしてのコラボ企画作品となります。

真剣で私に恋しなさい！の登場人物で構成されているため、「ドリフターズ」のキャラクタ―は本編に登場いたしません。

また、現状分かっている設定のみで運用していくため、今後の平野耕太氏の展開とは異なる設定が使用されると予想されます。ご了承ください。

参加者様一覧（五十音順）

炎狼様：真剣で武神の姉に恋しなさい！

ナマクラ様：真剣で川神弟に恋しなさい！

冬月 道斗様：せめて、せめて一勝を

兵隊様：真剣で王に恋しなさい！

モーティス様：真剣でアイツに恋してる！ Restart

youkey様：真剣で私に恋しなさい！S 〳西方恋愛記〳

りせつと様：真剣で私に恋しなさい！ 〳Junk Student〳

# 目次

第零幕 旅立ちの鐘が鳴る 1

第一幕 DOWN BY THE RIVER 145

VERSLIDE 11

第二幕 Climax Jump 29

第三幕 上陸！ロッキンロール・タイ

フーン 45

第四幕 Wiping All Out 62

第五幕 いい女 85

第六幕 virtual insanity 107

第七幕 Samurai heart

侍魂 127

第八幕 Paradise Lost

145

第九幕 Mass Destruction 162

第十幕 HEART OF SWORD 206

〜夜明け前〜 184

第十一幕 狂気沈殿 206

第十二幕 僕の宗教へようこそ | We

come to my religi

on | 229

第十三幕 世の中ワンダフル | 247

第十四幕	S u g a r M o u n t a i n	263	第二十二幕	お願い！シンデレラ	460
第十五幕	シミ	283	第二十三幕	例外の方が多い規則	478
第十六幕	爆走夢歌	303	第二十四幕	われらフロシャイム川崎支部	493
第十七幕	いざたて戦人よ	324	第二十五幕	v i v i	507
第十八幕	気まぐれのように揺れる世界	344	第二十六幕	いつか君に殺されても	524
第十九幕	誰ガ為ノ世界	364	第二十七幕	N E E D I N G / G E T T I N G	537
第十八幕	スラツシユ禅問答	392	第二十八幕	涙をぶつ飛ばせ!!	549
第十九幕	m o m e n t s	407	第二十九幕	じゃじゃ馬にさせないで	549
第二十幕	ハンマーソングと痛みの塔	422			
第二十一幕	百萬発弾	441			

566

第三十幕 ポケットにファンタジー

581

第三十一幕 WOW WAR TONI

GHT く時には起こせよムーヴメント

594

## 第零幕 旅立ちの鐘が鳴る

「

扉がある。それは一つではなく、数えきれない程多い。それらは統一されておらず、素材も開け方も、使われていた時代背景も全て異なり、造りが同じ扉は二つとない。扉の博物館にいるようだった。

一本の通路の壁に等間隔に設置された扉は一つも開かず閉じられている。開く気配がしない。堅く固く、絵画や彫像と錯覚させられるほどに動かない。

通路は何の面白味もない真っ直ぐで真っ白なもの、そこに扉が装飾として飾り付けられているようだった。まさしく、扉のためだけにあるような世界が広がっている。

永遠に引き伸ばされた直方体の中、通路は正しくそれだった。出ることができないと思わせる閉塞感が充満していた。

通行人が来る気配は微塵もしない空間ではあるのだが、通路の本来の役目である通り道と言う機能を邪魔するように、通路の中央に置かれたオフィスデスクのような幅の広

い木製の机が置かれていた。

いつ崩れてしまうか分からない危険性を孕んだプリントと書類の山、何に使われるか分からない整理券の発券機。その机は役所になれば立派に見えたことだろう。この通路に存在してしまつたせいで、机の異質感は拭いきれない。

その机を猫背で占領し、ポットで湯を沸かし珈琲をじっくりと入れ、煙草を加えながら新聞を読んでいる眼鏡の男がいた。

男は無表情、何の感情が今彼に宿っているのかも解らないが、その瞳の奥には何かが眠つていそうであつた。深く深く、暗い瞳。

男は新聞の頁を、捲らない。ただただ同じ頁を開いて目を通していた。

男は新聞を捲る必要はなかつた。“新聞の内容が勝手に変わつてくれるのだ”。雑巾に水が染み込んでいくように前の記事は消え、じわじわと滲み上がるように新しい記事へと更新される。



“新たな敵、崩王現る”

男の煙草を加えている口が僅かに動いた。暫し男の動きは止まり、煙草を手を持ち替え珈琲を一口啜る。

そこで、その通路に異変が起きた。

男から見て前方の通路が、奥から暗くなっていく。電灯が消えたとかそんな生易しいものではない。壁が床が天井が、多種多様な扉たちが「黒」に塗り潰されていく。

残ったのは真つ黒な通路と、かつて扉があったところをなぞるような真つ白な輪郭線。

その地獄へ通ずる回廊に姿を変えてしまった通路の奥から、カツカツ、と小さな足音が男に向かって近づいてきていた。

男は眉を僅かに潜め、新聞から視線を外して目だけでその足音の主を睨み付けた。

「また無駄な抵抗をしているのね、紫」

眼鏡の男を紫と呼んだ足音の主は、まだ小学生かと思わせる容姿を、黒いゴシックロリータの服で包み込んだ黒髪の少女だった。

少女は紫の机の前に仁王立ちし、右腕を紫にやんわりと突き出して笑いながら紫に話しかける。

「何をしてても、無駄なことなの。あなたが幾ら漂流者ドリップを呼ぼうと、もう一つの世界も私の廃棄者エンスズの支配下に置かれるの。崩王はあなたの漂流者を根絶やしにするわ。私の勝ちなの」

勝ち誇った優勢者、少女はまさにそれだった。紫をからかうように挑発し、指を一本一本丁寧に曲げて誘ってきているようだった。

「失せよ、E A S Y」

E A S Yと呼ばれた少女を、紫は一喝して切り捨てた。

紫はようやく新聞紙を読む体勢から身体を起こし、眉を吊り上げてE A S Yを睨んだ。

「間違いは正さねばならない。哀れな女よ」

紫の言葉を聞いたE A S Yは、先程まで紫をからかっていた口を開けて数秒間硬直した後、段々と表情を変化させていき、最終的には悔しがるように紫を下から睨み付けた。悔しがると思うよりは、かまってもらえない不機嫌な子供の様とも言えた。E A S Yの容姿がそのような印象を与えてしまうのだろう。

しかし、それも一瞬のこと。E A S Yは直ぐに先程のような調子を取り戻し、紫に背を向けて言い放つ。

「何をしても無駄なの。私の廃棄者エンスズの勝ち揺るがないの」  
「くだらぬ。世界にあるべき形を求めることは不要な酔狂だ。崩壊を求めることすら、形を求めることだ」

EASYは背を向けたまま、紫は新聞へと視線を落とし、相手の意思を汲み取ろうとしない乱暴な対話が行われている。自身の意思を貫き通し、対抗する意思を淘汰する。彼らの会話は、暴力だ。

「何を言うのかしら。くだらないのは貴方。飽きもせず私に對抗しようとする」

「あの男を呼び寄せた時点で、次なる闘争は始まった」

「崩壊は優秀なの。これ以上ないくらい、没義道を歩んでいく」

「なればこそ、止めねばならん」

「せいぜい頑張るのね。結果は見えているのだけれど」

「くだらぬ企みも終わりだ。漂流物ドリフタースを甘く見ないことだ」

E A S Y は来た道を引き返す。深淵な闇となった通路を闊歩する。すると、まるで鉛筆で塗りつぶされたノートに消しゴムをかけるように、E A S Y が通った道が元通り白くなっていく。

E A S Y が最後に紫に振り返る。その顔は確かに歪んだ笑いを浮かべていたと、すべてを飲み込む暗闇の中でも確認できてしまった。

しかし、紫は顔を上げない。E A S Y にくれてやる別れの言葉はないと言わんばかりに、視線をやろうとはしない。

E A S Y は顔を歪ませ闇の中に消え、通路は完全な白に染まり、扉も復元される。それを確認した紫はプリントとファイルの山を崩すことなく、先程まで手に取っていたバインダーを引き出しにしまい、大きな一つの本を広げる。それはまるで手記帳のようであり、宿泊者名簿のようでもあった。

「次」

カツ！ と、気味のいい足音が響き渡った。

何者かがEASYの立っていた場所に突如現れる。その際に部屋が僅かに歪んだが、白いまま黒くはならない。この部屋は正常に機能している証拠だった。

「……どうだ、ハハは」

黒髪の少女がまるで見知らぬ場所に放り投げられたかのように周囲を見回す。見慣れない扉だらけの風景、あまりにも静寂で厳かな空間、そこに鎮座する異質な眼鏡の男、何もかもが少女を不安にさせようとしていた。

少女の困惑は至極当然であり、この場に必要なものだった。それがなければ、彼女の自我は改変されていると思われる。ここに正当な方法で来た以上、彼には無傷の自我と確固たる意思がなくてはならない。

誰にも左右されない、自由な嵐のような意思が。

紫は少女を一瞥すると、他に多くの名前が書かれた名簿に名を刻む。

——  
川神百代。

名を書き終わった瞬間、少女の体は真横に吸い寄せられる。

「なっ——」

少女は抵抗する暇もなく、開いた障子の中に吸い込まれていく。障子の先には何も見えない。それこそ暗闇だった。しかし、EASYが作った空間とは違う。こちらの方が混沌として、正体不明で、何故か暖かい。

少女は大きな口を開けて障子の中に落ちていった。何かを叫んでいたように見えるが、その声は紫には届かない。その声は、渡された世界へ届けられる。

「次」

紫は少女の安否を気にせず事務を続ける。

死んでも構わないと割り切っているのか、死ぬはずがないと信賴しているのか。どちらにしても、少女が落ちたということには無関心だった。

そしてまた、この通路の空間が歪む。



第一幕  
DOWN BY THE RIVERSIDE

ズドンッ!!

怪力乱神と語られる少女による無慈悲な拳が、眼鏡の少年の腹部に叩きこまれた。くぐもつた嗚咽、脂汗の滲む額、目尻に浮かぶ涙。少年の吐き気は最高潮に達する。

平衡感覚を失い、視界まで歪んできた少年は無様にも倒れ込む。少年の視界にあるのは、少年をそうさせた張本人の踝と、自分たちが大切に使ってきた秘密基地の床や家具だけ。

少女の表情は見えない。会心の一撃が決まり悦に浸っているのか、無様な少年の有様を冷ややかに見下しているのか、少年には分からなかった。

少年が分かることは一つ。自身はただの障害物としか見られておらず、明確な敵意は向けられていなかったこと。その目線は別の標的を指しており、その直線状に少年がいた、それだけだ。

少女にとって少年を地に伏させることは、周囲に飛び回る羽虫を軽く手で払う程度のこと。少年の抵抗など無意味だと言わんばかりに、少女はその場を何の未練もなしに立

ち去った。

少年は少女を追いかけようと、肩から床に体重を預けていた体勢を立て直し、両腕を付いて四つん這いの状態になり——口の中に溜まっていた唾液と、消化器官から逆流した吐瀉物を盛大にぶちまけた。

突き上げるように放たれた少女の拳は、少年の臍辺りから上腹部に向かって衝撃を与え、少年の嘔吐感を促進させ、吐き出させたのだ。

目の下に隈ができたと思わせる程に顔色を悪くし、二、三度に渡りドロドロしたものを吐き出す。それは僅かに黒く染まっており、どこかで出血した血が混じっていることが分かる。しかし、少年自身はただ吐いているという認識しかなく、色が黄色だろうが白色だろうが黒色だろうが、そんなことは些細な問題だった。

今、少年が意地を見せてすべきこと。それは自分を殴ってくれた少女、自身の姉を追いかけて足止めすることだ。

少年は口の端に付いた小間物をグイッと拭い去り、眼鏡に付いた汚れを袖で拭い取り、壁に寄りかかりながら震える足で何とか立ち上がり——再び吐き出した。

今度は唾液の方が多い。そこで少年は一つの確証を得る。

——吐き出せるものは吐き出せた、かな。

ふつと笑みが零れるが、決してそれは、過食からの嘔吐という流れに覚える快樂から来ているものではない。少年自身自覚していない、この一合により自分は満たされていくという優越感から来ているものだ。どちらにしろ、若干狂った快感に値する。

少年は自身の中身に溜まっていた反吐が撒き散らされ、悪臭とともに醜く染まった部屋を後にする。部屋の清潔さより、自身と姉の貞潔さの方が大事だった。

ふと、僅かな殺気の増徴のようなものを肌で感じ取った少年は、通路の窓を開けて発信源である何かがいる下を覗き込んだ。

そこには、少年を一撃で蛙の様に喘がせた少女と、対峙する二人一組の人影があつた。あのままでは二人は襲われてしまう。二人の内一人は刀を持っているが、相手が悪いと少年は判断していた。それほどまで、少年は実の姉が危険人物だと認識していた。

しかし、それこそ自分が割り込んでどうにかなるものではない。相手は自分の姉、怪力乱神と恐れられ、武神と評価される人類最強クラスの武人。どう足掻こうが勝てるはずがない。蟻が像に勝てないと比喻されるよりも、絶対的な敗北が少年に押し掛かる。

——だからどうした。

戦力差の明らかな戦いに挑む無謀さを自問自答により理解し直し、それでもなお少年は諦めなかった。

窓を全開にし、淵に足をかけ、上枠を手で掴み体勢を整える少年。未だに混乱する脳内、今にも途切れてしまいそうな意識、高層ビル故に押し付けるように襲い来る突風で体が吹き飛ばされそうな状況を必死に耐える。

ガタガタと震える手は、吐き気や虚脱感から来る激しい動悸によるものか、化け物に立ち向かう手前の恐怖から来るものか、少年の今の思考回路では判別できない。

しかし、少年にとってそんなことは関係ない。少年は今、体が動くことだけ確認できればいい。体を蝕むものが身体の問題なのか精神の問題なのかは二の次だ。少年は、何故危険を顧みずに行動ができるか。

——意地があんだろ！ 男の子にはよッ!!

——そうだ、意地なんだよ！

ほんの少し前に自身が宣った言葉を反芻し、覚悟を決め直す。

パツ、と上枠を掴んでいた手を放した。そのまま体重を前面に押し出し、少年は落下する。くるりと一度だけ体を回し、足を突き出し、武神目がけて蹴りを放つ。

当たるか分からない、あたつたところでどうなるかも分からない。それでも、少年の体は落ちる。それでも、少年の足は少女の頭上へ降りかかる。それでも、それでも――

――  
カツツ!

自身の足音が高く響いた瞬間、少年の世界は一変した。

「は？」

ビルから落下する際に見られた夕焼けの綺麗な風景は霧のように消え失せ、築けば一本の通路の中に少年は閉じ込められていた。

通路は狭くもなく広くもない。人が寝そべっても僅かに余裕の持てる幅と、人が二人縦に並んで天井に届くか届かないかの高さ、前も後ろも果てがなく、通路の端は暗くて何も見えないほど深い奥行き。それらの要素からこの通路は成り立っている。

永遠に引き伸ばされた直方体の中、通路は正しくそれだった。出ることができないと思わせる閉塞感が充満していた。

何の音もない、何の光もない。それなのに静寂を裂くような音が少年の耳を貫き、通路の色や形状は少年の網膜を焼き付ける。

矛盾だらけの一本通路。

少年の崩壊した平衡感覚を無視するように、その通路は綺麗に直方体を維持してい

た。少年の感覚は未だに乱れている。その乱れに合わせて通路が歪んでいるのかと錯覚させる程に、通路は少年から見て正確な点と点を結んだ図形を維持している。

しかし、それすらも些末なことと思わせるような光景が、通路の奥から迫ってくるひよつとすると、少年が引き寄せられているのかもしれない。壊れた感覚での判断は難しかった。

少年の両脇の壁を添うように、大量な何かが等速度で並べられていく。

それは、扉だった。

それは一つではなく、数えきれない程多い。それらは統一されておらず、素材も開け方も、使われていた時代背景も全て異なり、造りが同じ扉は二つとない。扉の博物館にいるようだった。

一本の通路の壁に等間隔に設置された扉は一つも開いていない。開く気配がしない。堅く固く、壁画かと思わせる程に締め切られている。

通路は何の面白味もない真っ直ぐで真っ白なもの、そこに扉が装飾として張り付けられているようだった。まさしく、扉のためだけにあるような世界に豹変した。

そんな閉ざされた扉のための空間の中央——奥行きが解らない以上、完全な中央とは

言えないが——に、オフィスデスクのような幅の広い木製の机に、整理整頓の精神など投げ棄てたようにプリントと書類を山積みにし、ポットで湯を沸かし珈琲をじっくりと入れ、煙草を加えながら新聞を読んでいる眼鏡の男がいた。

男は無表情、何の感情が今彼に宿っているのかも解らないが、その瞳の奥には何かが宿っていた。それが読み取れない程に、深く深く、暗い瞳。

男は新聞の頁を、捲らない。ただただ同じ頁を開いて目を通していた。

少年は男に声をかけようとする。こんな不可思議な場所に投げ出されたのだ。少年の頭は正しく機能しておらず、普段の彼らしさも失われているようだ。

「次」

男は少年を一瞥すると、直ぐにペンを取り出し、机の上に置かれていたバインダーをどけて、新しく広げた本に名を刻む。



刻まれたその名は——川神十夜。

「お、おい。何で、俺の名前——」

少年、川神十夜が男に自分の名前を知っている理由を尋ねようとすると、少年の右側にあつたドット絵のような扉が勢いよく大きく口を開けた。扉の先には何も見えない。それこそ暗闇だった。混沌として、正体不明で、何故か暖かい。

十夜はまるで飛行中に開け放たれた扉に吸い込まれるかのように、その身を暗闇に浸すこととなる。

叫んだ。言語として伝わることのない、悲痛で恐怖と驚愕に塗り固められた本能の咆哮を。しかし、それが眼鏡の男や誰かに届くことはない。

その声は、扉の先へ届けられるのだから――



MAJIKOI×DRIFTERS



ざわざわと木々が風で揺れ、山に積り始めたばかりの乾いた落ち葉が巻き上げられ、十夜の顔を掠めた。スツと引つ搔かれたような白い線と、水分を多く含んだしけた腐葉土が十夜の顔を汚す。

ほんのちよつとした刺激と、泥の僅かな冷やかさが、十夜の意識を真つ黒な沼からゆつくりと引きあげ、沼の水面にまで持ち上げること成功した。

あとは、ほんのちよつとしたきつかけがあれば、十夜は眠りから掬い上げられる。そしてそのきつかけは、まだ未成熟な少年の幼い声という網だった。

『お兄さん、生きてる?』

十夜が目を覚まして最初に聞いた声は、何を言っているのかよく聞き取れなかった。その声で意識がはつきりとしたようなものだから、理解に及ばないのは仕方のないことだと思ひ、もう一度耳を澄ませる。

『ねえねえ、お兄さん?』

——何言ってるか、さっぱり分からん。

『大丈夫? お腹空いてるの?』

『少しだけなら木の実もあるよ?』

「あいむ……………のつと、おーけー……………」

自身が使える精一杯の異国語で、自分の現状を伝えようとする十夜。しかし、十夜の周りにいる声の主がそれを理解できていないというのは、返答がすぐに帰ってこない時

点で分かってしまう。

言語によるコミュニケーションを諦めつつあった十夜は、せめてその声の主の容姿を確認しようとして、今にも落ちてしまいそうな臉を必死に抉じ開ける。

瞳の中に映える橙と黒のコントラスト、肌の角質化などでは言いくるめられない細かな鱗のある手、シャギーカットのように見えるふわふわとした髪型。

明らかに人間離れした、背中から映える翼が、彼らが十夜の未知の存在であると示していた。

「あ、はは……。自殺紛いなことした罰が、当たったか……。？　はは、羽生えてら……。天使かよ……」

十夜かすれるような声でそう呟き、目の前の異世界のような光景に失笑して意識を失った。

バタリと倒れてしまった十夜をじっと見つめ、背丈の小さな方の少年が、もう一人の

少年に向けて訊ねる。

『ねえ、ファイル。何喋ってたか分かる？』

『分からないけど分かったよ、リユネ』

声の主である鳥と交わってしまったような少年、ファイルとリユネ二人が、純粋な人間である十夜を見て相談をする。

その結果、少し背丈の高い方のファイルが十夜を指さし、こう告げる。

『こいつは、  
//ドリフターズ  
漂流物だ』

『え、ええっ!?! それじゃあ、 “あの男たち” と同じ?』

『そう、 “あいつら” と同じだ』

半人半鳥の彼らには、十夜の正体と、同様の人間の存在を知っているような口ぶりだった。しかし、気を失ってしまった十夜には、その僅かながらに希望を与える会話は届かなかった。

ざわっ……、と大気が揺れ、木々が恐れる身震いするように枝葉を擦り合わせ、木漏れ日が慌ただしく模様を変えて山道を染める。川神十夜と、彼らが言う “あの男たち” との遭遇に、山が怯え焦燥しているようだった。

鳥としての能力なのか、敏感に山の異変を感じた彼らは、十夜を案内することを躊躇い始めた。

『今は木々より高く飛ぶのは自殺行為だ。できるだけ連れて行ってあげたいけど……』  
『本来なら接触は禁じられてるしね。どうしようか——』

『静止セヨ』

ゾクリ、と彼らの鳥のような鱗が生えた肌ではない、二の腕あたりの人のような肌が粟立ち、思わず目を見開いて立ち竦んでしまった。

彼らの背後から、キリリ、という何かが高い圧をかけられている音が響いた。いつ弾け飛んでしまうか分からない、恐怖心を煽る限界すれすれの音。首筋にナイフを突き立てられているかのように、彼らは一気に冷え込み戦慄した。

『此レヨリ先、我ラガ根城ナリ！ 近ツクモノ敵ト判断《ミ》ナシ、神罰ノ牙ガ、汝ラヲ穿ツ！ ナニヨウダ！』

発せられた声はたどたどしくありながらもハッキリとしたもので、殺意だけでなく言葉も用いて半人半鳥の彼らを威嚇することができた。

その殺気に怖気づいたのか、捲し立てるように背の低い方のリユネが、両手を上げ敵意がないことを表し、決して振り返ることなく返答する。

『こ、この人が倒れてたのが見えたから駆け寄っただけだよ！ 別にあんたらの住処に行こうなんて考えてない！ 木の実も渡そうかと思っただけだよ！』

『お、おいリュネ！ 何で食料を！』

『だって！ 元々介抱したら少し分けようって話してたじゃないか！』

あまりにも怯えていたせいか、リュネはフィルの意に反することを口走ってしまったようだ。彼らの背中に籠はなく、かと言って何かを仕舞っているような袋もなかった。恐らく、衣服に入れられるだけしか所持していないのだろう。そう考えれば、フィルの慌て様もうなづけた。

しかし、彼らの背後にいる人物は眉間に皺をよせ、僅かな苛立ちを見せる。

『……我が知覚器官二正シク届カズ、チエン・ジツヲモチイテ話セ』

『ちえん、じつ……？』

『ゆつくり喋れってことだと思う……。多分』

何とか意思疎通ができた彼らは、今ここにいる大きな理由の一つである十夜を二人で



担ぎ上げ、勢いよく振り返った。

『ほら、これ!』

その姿を見た殺意の発信源である人物、リユネやフィルから見ても同年代に見えるような黒いシャツの少年は、大きく目を見開いて驚きの表情を顕にした。数秒ほど硬直し、直ぐに殺意の滲み出る表情へ変化させ威嚇する。

『我ニソノモノヲ委ネ、立チ去レ』

『もう、なんなんだよもう。訳わかんない』

『置いていけばいいさ。違ったら止めてくれるだろうし』

リユネとフィルは顔を見合わせ、ゆっくりと十夜を地面に下ろし、肩を撫で下ろしてそそくさと山を後にした。

半人半鳥の二人が視界から消え、戻ってくる様子が感じられない圏外にまで気配が離

脱したところで、その人物は弓をおろして十夜へ歩み寄った。

十夜は起きる気配がない。しかし、十夜が目覚めるかどうかは問題ではなかった。問題なのは、十夜が今着ているその服。

「……川神学園の制服か。俺と同じ世界の住人かは分らんが、保護することに越したことはないな」

十夜を背負い、黒いシャツの少年は山のさらに奥へと進んでいく。

目指すは、彼の根城——

## 第二幕 C l i m a x J u m p

川神十夜は夢を見た。夢を見ている間に、自分が夢の中にいると自覚してしまった。こういうものを明晰夢と呼ぶのだったかと一瞬思案したが、十夜は今見ている光景に意識を集中させることにする。

十夜よりも幼い少年が、血を吐き、体を歪ませ、悶絶して泣き叫んでいた。

実に無様で、あまりにも凄惨で、十夜の心の奥の黒い部分を握りしめる。何とも言い難い間隔が十夜の胸を締め付ける。いや、締め付けるとい言葉もあまり正しくはない。十夜が感じたまま表現するなら、ずぶり、と心臓が黒い沼に沈み溶けていくような、不快感。

バキバキというか、ボコボコというか、グチャグチャというか、ともかくにも惨烈なオノマトペが似合うような光景。生きているのが不思議なくらいには叩きのめされた幼い少年を見て、十夜は絶望や恐怖に押しつぶされそうになる。

——なんて弱かったんだろうな、俺。



「——また、この夢か」

十夜はゆつくりと瞼を開き、歎息を吐いた。横たわっていた体を起こし、背中を丸めて少しだけ気持ちを整えようとした。気分の切り替えに加えて、夢の影響なのか、身体のどこかに悪いところはないかと確認していると、誰かからの視線を感じた。

十夜が顔を視線の来る方へ向けると、そこには紫色の弓を体に預け、弓に付いている弦の端にある輪を弄り何かを調整していた灰色の髪の少年がいた。

輪を弄っているとは言え、その手元は見えていない。もう何千何万と繰り返してきた作業化の様に、手元を見ずに最適な形を作り出しているようだった。

その行為に興味を持った十夜は、少年に話しかけずに視線を逸らしてしまう。

視線を逸らしたことがばれないように周囲を見渡す。辺りは薄暗いが、周囲に立てかけてある松明が足下や壁を照らしてくれているので、この空間の広さと形状は把握できた。

二人がいる空間は洞窟である。それも奥行きが全くない、秘密基地とするにはもってこいの小さな洞穴。一つしかない入口の向きのせい、陽光は入ってこない暗闇の空洞。

ようやく自分がいる空間が洞窟だと理解したところで、十夜は少年に目を向けようとするが、なかなかじつと少年を見つめることができない。そわそわしているその様はどこか女々しい。

「やっと起きたか」

視線を逸らし続けていることを対して咎めようともせず、少年は自身の作業を続けていた。その気遣いは十夜にとって嬉しいものではあったが、沈黙は沈黙で十夜を居たたまれない気持ちにさせてしまう。

少年の作業の音と松明の弾ける音がたまにはするものの、それ以外の音は何もしないはずの空間は十夜の耳を突き刺し、胸を何度も圧迫しては介抱する。生殺しにも近いようだったが、十夜からその状況を脱局しようとは考えない。

十夜は気楽に話せる相手がない場合、手元に暇つぶしができたり没頭できるものさえあれば問題はなかったのだが、何も手助けになるものがない上に見たことのない場所

にいますぎている。

——話しかけてくれ。

手元に本や携帯電話、ゲームがない時点で十夜に残された手段は受けの姿勢を取ることのみ。その受けの姿勢すら万全とも言えない不手際の悪さは、人付き合いが苦手であることの一歩の証拠とも言えた。

「お前」

「はひっ……っ？」

「……体の具合はどうだ？」

十夜の不完全な受けの姿勢から弾きだされたあまりにもみつももない返事すら、少年はほんの少し呆れ顔を見せる程度で済ませてくれた。それが十夜にとってはさらに居たたまれなくする行為でもあり、十夜は初対面の相手に恥を晒したことに顔を赤くして苦悶する。

「だ、大丈夫……？　だと、思います……」

「まあ不安なものも無理はないな。それだけでかい痣作ってんだしな」

「えっ……」

十夜は言われてようやく自分が一撃の拳で盛大に吐き散らしたことを思い出し、自分の上半身が白いシャツ一枚になっていることに気が付いた。白いシャツをめくると、そこには自分の拳よりも大きな青あざが浮かび上がっており、それを見た十夜の血の気が一気に引いた。

「うわあ……。痛そう……」

「いや、お前の体のことだからな」

「そ、そうですね……」

「上の制服は洗って外に干してある。ゲロ塗れだったからな」

「あ、ありがとう、ごさいます……」

自分の腹にできた真っ青な痣に顔をひきつらせている十夜に、少年は何度も言葉をかけてやるが、一向に会話らしいものが続かず少年は溜め息を吐いた。その溜め息で十夜

がビクツ、と一瞬だけ震えたのを見てまた一つ溜め息。

「お前、今自分がどういう状況にいるか分かってるか？」

なので、関係のない話から遠回りして探り合いの態度を取ろうと企むことは諦め、直球で少年に質問を投げかけることにした。

「えっと……。死んじゃったんですか、俺？」

「……………」

「そ、それとも、ここは死ぬ間際の、境界線、みたいな……？ 天使みたいなのがいましたし……………」

「良い読みだ。俺もそう感じていた。やはり『特異点』同士、感覚に似通ったものがあるな？」

死んでしまった可能性が否定されなかった、それよりも。

死と生の境界線、さながら黄泉平坂のような世界を肯定された、それよりも。

特異点『同士』と言われたことに十夜は疑問を抱かざるを得なかった。



「と、特異点……?」

「そうだ。お前も特異点だろう?」

「いやいや、そんなの初耳で——」

「無自覚、か。機関に気づかれていないのが幸いだな」

「聞けよ話を!」

思わず出てしまった大きな声に最も驚いたのは。その大きな声を発した十夜自身だった。人見知りか激しい彼が、何故かこの少年に対してほんの少しだけ心を開き始めている。その速度は十夜が信じられないと感じる程。何故自分は心を許し始めたのかと十夜は悩んだ。

その疑問を解消すべく、一つの仮定に基づき質問を投げかけることにする。

「無理もない。まだ兆候がないんだからな」

「あ、あのー……」

「どうした」

「貴方にとって、平和とは」

「フツ……。世の中が語る平和ってのは、偽りで固められた幻想に過ぎない」

この時点で十夜の仮定は認められ、一つの確証を得ることに成功した。

——昔の大和見てるみたいで、話しやすいんだな……。

「さて、一つ聞かせろ。お前がここに来る直前の暦は何年の何月だ」

特異点がどうのこうのと言う話は少年の中一段落したのか、少年は十夜に質問を投げかけた。

「に、二〇〇九年、七月」

「そうか。その時期の川神学園生で俺を知らないのなら、俺とは別の平行世界からやってきたということになるな」

一体どんな自意識過剰な生徒なんだろう、そう思った十夜の考えは間違っていない。そう言い張っているのは、彼の姉である武神や、九鬼の御曹司たる二年生にしか許され

ていない。

しかしそれは、十夜の世界での物差しでの言い分であり、少年の世界では通用しない。

「俺の名は那須与一。武士道プランにより現世に転生させられた特異点だ」

「えっと、那須与一って、源平の……扇打ち抜いた伝説の、弓兵？」

いきなりのカミングアウトに信じられないのか、十夜は苦笑いを浮かべていた。しかし、その苦笑いこそが、与一の求めていた反応と合致している。

「ああ。今から八百年くらいは昔のことだな。そいつはオリジナルで、俺はクローンだ」  
「く、クローン？」

クローンという言葉に聞き覚えがないわけではなかったが、十夜がクローンとして知っているのは、蛙だの牛だのといったクローンの実験動物であったり、ゲームや漫画

の中で出てくる未来的化学がなせるような存在だけ。

目の前の人間がいきなりクローン人間だと言われてしまうと、十夜の培ってきた常識が一瞬にして壊されるのも無理はなかった。

「クローン人間に違和感を覚えるくらいだ。武士道プランについても知らないような。これではつきりした」

混乱と動揺に脳内を掻き乱され困惑していた十夜を余所に、与一もまた一つの確証を得ることに成功した。

「お前と俺は別の世界の人間だ。これはたった今証明が完了した」

「……………さつきから、平行世界がどうのつて、なんなんですか……………」

「アメリカの有名な小説に『真世界アンバー』というものがある。知っているか？」

「い、いや……………」

「一つの本筋とされる世界であるアンバーが存在していて、そこから投影した影と言う無数の多元世界が存在するという定義がもとになっている小説だ。他にも多元世界を

題材にした作品は多いが、俺はこれがこの世の真実に最も近いと信じている。アンバーで起きた出来事は影に影響するが、影で起きた出来事は直接アンバーには影響しない。そしてアンバーに近ければ近い程影はアンバーと近い未来を辿り、遠ければ遠い程かけ離れた未来を辿るとされている」

「……そ、その言い方だと、何か一つは正しい世界がある、ってことじゃ……」

「そうだ。俺はそう信じている。それはお前の世界か俺の世界かもしれないし、そうでもないかもしれない。そう考えることは何も罪じゃない。何時か別の世界線に渡り、機関から完全に逃れ隠居をしようとは画策している。俺は特異点だ。不可能を可能にしてやる」

——姉貴とガクトは音楽だったが、アメリカかぶれも懐かしいなあ……。

「なる、ほど」

「混乱するのも無理はない。しかし、賽は既に投げられた。一度身を投じてしまった以上、俺たちは特異点として生きるしかないんだ。だが安心しろ。世界線の問題か、機関の目が存在していない。特異点のための世界のようだ……。ほんの僅かの暇いとまを楽しむため、神からの贈り物なのだろう」

——懐かしいけど、真劍<sup>マジ</sup>で何言ってるんだこの人。

敢えて口には出さなかったが、十夜は目の前のクローン人間が中二病という厄介な病  
気にかかっていることを理解し、放っておくことにした。

こういう病気は放置して自然に治るのを待つに限る、十夜は幼馴染たちの経験を活か  
し、与一をそっとしておくことにした。

「おいおい、他にも川神学園生いたのかよ」

ジャリ、と洞窟の入り口から誰かが入ってきた音と共に、その足音の主が十夜を見て呆れたように声を上げた。

その足音の主の姿が松明に照らされる。与一や十夜が所属している川神学園の制服、松明の明かりを反射し一つの光源となっているスキンヘッド、大きめのメツセンジャーバッグ。如何にも現代風の格好に奇抜な頭。

その人物に見覚えのある十夜は、思わず立ち上がり大きな声を上げる。

「は、ハゲ先輩!？」

「おい井上。言われてるぞ」

「おいおい、初対面の相手には「はじめまして」っていう挨拶が大事って小学校で習わなかったか？ この社会の常套句ですよ？ 開口一番に何いきなり人の頭馬鹿にしてくれちやってんの？」

十夜の言葉は確かに無礼で済まされない程度には失礼な言葉。初対面相手では尚更だ。現れた人物が学生服を着ていながら坊主の様に照り輝く頭を持っていれば、そちらに意識と視線が集中してしまうのは仕方のないことではあるのだが。

問題は、スキンヘッドの少年が十夜のことを知らないということだ。

「は、ハゲ先輩？ 俺ですよ、川神十夜ですよ？」

「知らん」

少年の容赦のない一言に、十夜は膝から崩れ落ちてひどく落ち込んだ。四つん這いになってブルブルと震えだしてしまう。

——こ、これが、別の世界線ってことなのか……？

知己の中であつた人間が、一方的な関係になつてしまうこの世界に、十夜は恐怖を覚えざるを得なかつた。

「おい井上。どうやらこいつの世界線ではずいぶん慕われていたらしいな。俺と二人き



りの時には見せなかつた笑顔を振りまいていたぞ」

「そうは言われてもだな、川神姓の男子生徒なんていなかったしな」

「ハゲ先輩のヘッドが照らされて光明が見えたと思つたのに……」

「俺はどの世界でもこんな扱いなのか」

十夜の暴言を割と真面目に受け止めてしまつたスキンヘッドの少年は少し沈んでしまつた。それをきっかけに三人の間に沈黙が流れてしまう。与一ですら作業の手を止めてしまうほど気まずい空気になつてしまつた。

それを打破しようと動いたのは、つい先ほど見ず知らずの少年に容姿を虚仮にされた人物。

「ま、まあ知らないもんはしょうがないけどよ。まずはお互いを知ることから始めようぜ。お前らは俺のこと知つてるみたいだし気楽に接してくれていいけどよ。俺がどうしたらいいか解らないからな」

「ハゲ先輩に協調性がある、だと……?」

「驚いたな。幼女に走り真つ先に輪を乱しそうな奴が」

「あのね、これでも補佐役は慣れたもんなの。人を立てるのは割と得意よ、俺」

「じゃあ自己紹介だな。クローン、那須与一だ。この中では真っ先にこの世界に迷い込んだ特異点だろう」

「知っているだろうが、俺は井上準。お前らは普段通り接してくれ。すこしばかりぎこちないかもしれないが、努力する」

「か、川神十夜。川神百代の実弟で、一年です。姉みたいな強さを求められると困りますが、雑用なら、何でも出来ます」

## 第三幕 上陸!ロックンロール・タイフーン

「それじゃあ簡単に情報共有をするか。主に身辺のことになるだろうけどな」  
「ならまず俺に聞け。機関の目がないからな、少しは話せることもあるはずだ」

互いの名乗りが済んだところで質疑応答へと推移する。まず質問をされる側を買って出たのは与一。与一の世界にいたものならば、彼がこういったことに乗り気であるのは珍しいことと思うだろう。

彼からすると、今現在羽を伸ばせている状況を精一杯謳歌しようとしているのだろう。ニヒルにかぶれている表情の隙間から、年相応の笑顔が垣間見えてしまう。

「その武士道プランってのは、他にクローンがいたりするのかわ？」

「ああ。源義経と武蔵坊弁慶の二人に、もう一人葉桜清楚っていう三年の先輩がいる。この人だけはオリジナルが分からんが、妙に逆らえんオーラを纏っている時がある。そ

れだけじゃなくても、弁慶とはいいい思ひ出がなくなてな……」

その時のことを思い出しているのか、与一の顔がほんの少しだけ青くなつた。きつと何か暴力的な意味で怖いことがあつたのだらうと、その表情を見て察する十夜と準。

準は学園で行われているラジオのパーソナリティに骨を外されるわ殴られるわの毎日。十夜はちよつとした失言で実の姉からの制裁を受ける毎日。

この三人、妙なところで共通点が存在している。

「きつと、すごい人、なんでしようね……」

「誤解無きよう忠告しておくが、俺以外は女のクローンだ」

「ん？ 義経も弁慶も男じゃないのか？」

「それが女でな。学園の人気者だ」

源義経、武蔵坊弁慶と聞けば、源平合戦の軍記に記されている源平武者の中でもとくに有名な主従関係にある偉人である。方や絶世の美少年、方や得物狩りの巨漢、どちらも史実上は男性である。

与一の話から推測するに、その男性の遺伝子から生まれたクローンは、学園のトップ

クラスの美女に対抗できるほどの美少女となつて転生しているらしい。武の実力もオリジナルの名に恥じないものだというから、十夜と準は呆れを通り越して感心してしまう。

「九鬼つて何でもできるんだな」

「もう九鬼一社だけでいいんじゃないかな」

「九鬼の支部ができただけでその国の財政が好転するレベル」

三人の世界の共通概念は、九鬼はすごい、ということに集束してしまった。

「もう一度言うが、義経だけじゃなく弁慶も女だからな?　ゴリラみたいなのは想像するな。鼻目に見なくてもあれは一応美人の枠に入る。暴力ばかりふるってくる女だな……」

「容姿だけなら美人の枠……。うっ……。!?」

「毎日振るわれる暴力……。頭がっ……。!?」

「お前らも、何か背負ってきたんだな……。!」

ボソボソと呪詛の様に反芻した言葉に、三人はその場で身震いする。女性から受ける暴力の度が行き過ぎていく点や、その暴力の理由がほとんど理不尽である点など、三人はシンパシーを感じざるを得なかった。

この後数分間、極度の人見知りの十夜でさえ肩を組んで慰め合うほど、三人の結束は強いものとなっていた。初対面の間は共通点を見つければ見つける程親密になると言うが、この場合は暴力を振るわれているという負の要因が作用しているため、その効果は極めて高かったようだ。

「ところで、あの弓お前のか？」

慰め合いが一段落したところで、準が壁に立てかけてある弓を指さした。その弓は一般的な和弓とは違い、余分な造形が施されている。また、その大きさも太さも一線を画している。超弩級、と表現してもいいのだろうか。それほどまでに与える印象は大きい。

「ああ。基本の作りは変わらないが、やはり飛距離は出るな。俺が天下五弓に選ばれたのも——いや、忘れてくれ。なんでもない」

与一は自身の射の性質を語ろうとしたが、直前でそれをやめた。

また何か中二病が発症した結果だろうと思つた準と十夜だったが、それは全く違う考えだった。これは、与一のプライドにかかわる問題であつた。

天下五弓に選ばれたという実力に自尊心は当然ついており、それを外に出さないものの、与一もそれを当然のように誇りにしている。だからこそ、与一の存在しない他の世界の天下五弓、若しくはそれ以上の弓兵の存在など知りたくなかつた。自分がいない世界にいる自分の代わりなど知りたくなかつた。

与一はそんな心配が杞憂に終わることなど露知らず、一人で抱え込んでしまうのであつた。彼の過去にある、大人たちに那須与一「なんか」と指差されたという心の傷はまだ癒え切っていないようだ。

「それより、次はお前だ。川神十夜」

話の追及をさせないように、矛先を十夜へとずらした。ずらされた十夜はと言うと、突然のことにびつくりして座っていた石から転げ落ちてしまう。

「……お前、本当に武神の血縁者か？」

ついに来たか、四つん這いで尻を与一と準に突き出した状態で、来るだろうと覚悟していた質問を受け入れて何とか耐える。その姿勢や格好は実に無様であるが。

その無様な格好を直し、再び石へ座つて大きく深呼吸をし、十夜は与一へ向き返つた。

「……一応は。 武術の鍛錬はもうやめちゃつたんで強くはないです。 最近は勘をちよつとだけ取り戻したから、少しはマシになつたかな、と言う程度ですよ。 色々ありまして……」

十夜は何年も武術の鍛錬をこなしていなかつた。 一般人よりは目がいいし、そこそこの経験も積んでいるため、余程のことがない限り不良から逃げきれないということはなかつた。 加えて、ここ最近の軍人仕込みのトレーニングに加え、大きな戦闘大会があつた。 全盛期には程遠いが、実力は武術の鍛錬をしていたところに戻り始めている。

しかし、例え全盛期に近づこうとも、十夜は実の姉に追いつくことは決してない。 それを理解してしまつたからこそ、十夜は武術から離れてしまつたのだが。

その質問をされて十夜の態度が急にそわそわし始めたのは与一だけでなく、準にさえ



分かってしまう。余程触れられたくない話題だったと見える。

見るに見かねてか、与一が声をかける。

「……あっているかは知らんが一つだけ言わせてもらおう」

「……?」

「比べられるのは、辛はずだ」

「!」

「クローンとして生まれたつてのはよかった。何せ偉人の生き写し、蘇りだ。大いに称えられたもんだ。けどな、史実の義経にはもつと有名な部下がいただろうと言われることが次第に多くなっていった。値踏みされてたんだよ。どんなもん使えるかってのをな。だから、お前のその暗い表情が比べられていることに対するトラウマだとするなら、少しは分かる」

義経には優秀な部下がいたとされる。義経四天王とまで称され、それが異説で広がり八人あげられている。その中に与一の名前はない。心無い研究者によつて告げられた事実は、与一の心を捻じ曲げてしまった。

「比べられて欠点が見つかる、それは大きなコンプレックスになって付きまとう。ステータス異常みたいなものだ。自分だけの力じゃどうやっても取り除けない。誰かからの協力が必要になる」

「……………」

「だが、そう心を砕く必要はない。本来人は死ぬまで孤独な生き物だ。比べられようが貶されようが、俺らは変わらず俺らだ。残酷なこの世界、せめて苦しんで生きよう」

——それなりに良いことを言っていたのに、何でニヒルかぶれで終わったんだ。

本の少しだけ与一の言葉が身に染みていた十夜だったが、最後の若干達観したような物言いに感動は漂白されて流されてしまった。

そうとは知らず、与一は自身の言葉の決まり具合に心酔し余韻に浸っていた。

「それにしても、川神弟ねえ」

二人の話が一段落したところで、準が話に入り込んできた。

「川神のところは女ばかりだろ? だからあのじいさん以外で男つてのはやつぱり違和感あるな」

「俺からしたら、女ばかりの川神家つてのはやつぱり違和感を感じますよ」

「まあそうだろうな。女の間にも男が挟まれてなぶと読める。本当は男に挟まれてるもんだが、あの家計ならこの漢字の意味がよく分かるな。何せ女が四人もいるんだし、姦しいどころじゃなくて大変——」

「は?」

準の何気ない一言に、思わず声を合わせて驚いてしまふ十夜と与一。

準も与一も十夜も、全員が何を言っているんだという顔をしている。この情報共有のもっとも期待されていたところ、世界線による食い違いがようやく如実に表れてきた。

「女、四人?」

「姉貴にワン子……。数えるまでもなく二人だぞ? 両親は今川神にいないし」

「モモ先輩と同じ三年生に一人いるだろ? 双子の姉が」

「武神が双子だど!? そんなことは初耳、というかありえん! それなら学園中で有名になっっているはずだ! 例えそれが弱かろうが強かろうが美しかろうが醜かろうが!」

「引き籠つてた俺が言うのもなんですけど、うちの血族半端ないよ？ 姉貴の姉貴なんかいたら世界滅びるって！」

準の平然とした言い方に十夜も与一も信じられないといった表情を浮かべる。松明の明かりで仄かに照らされていることもあり、その表情はより動揺しているように見え  
てしまう。

「いやそれだけじゃないぞ。なんせその人娘までいるし」

「娘え!？」

「ああ。一回会っただけで俺の脳内フォルダ三つは彼女で埋め尽くされた。ロリはやはりいい」

その娘の顔を脳内フォルダを開きスライドショーでも起動して高速に流しつつ愛でているのだろう、準の表情は変質者そのものであった。

準が幼女に対して見境がなくなってしまうのは十夜の世界でも与一の世界でも同じ  
ようで、その光景は何故か二人を安心させてしまう。変わらずこの男は変態であつた  
と。

「天使だったな。健全なお付き合いは認められている。一步間違えれば惨殺されるだろうが、イエスロリーターノータッチ。心得ている」

「与一さん。別の世界って進んでるね」

「俺が扇を射抜けないくらい手が震える程戦慄」

「で、その人の名前だけど——」

ドオン!!

「「!?!」」

準がその人物の名を述べようとした瞬間、体ごと揺さぶるとてつもなく大きな爆音と、地震のような大地の揺れが発生した。

あまりにも唐突なことだったので、十夜は再び石から転げ落ちる。他の二人も同様に振り落とされてしまうが、直ぐに体勢を立て直して立ち上がった。十夜は二転三転したが、先程よりも幾分か素早く姿勢を正すことに成功した。

「い、今の何!？」

「外に出た方がよさそうだな。崩落なんかされたら堪ったもんじゃない」

準が危惧しているのは、自分たちが生き埋めになってしまおうという最悪のケースだった。どういう洞窟が頑丈で、どういう洞窟が崩れやすいかなどは彼らには分からない。しかし、パラパラと天井から粒の大きい砂が落ちてきているところから、準はすぐにごこを出るべきだと判断したのだ。

十夜も与一も異論はないようで、あるだけの荷物を持って外へ飛び出す三人。その三人に、洞窟の暗がりに慣れてしまった目を日中の太陽の明かりが襲う。

一瞬のこととは言え、視界を取られるのは痛かったのか、十夜は目頭を押さえたまま

準の袖を掴んでいた。しかし、準もまた目をやられたようで、目頭を押さえながら与一を探していた。

「じつとしてろ。様子を見てくる」

しかし、与一は準に袖を掴まれることを拒絶し、準たちから離れ単独で行動を開始した。同時に、少しだけ準が落ち込んでいたのを誰も見ることはなかった。

ようやく目の痛みが治まった十夜は、何とか与一の向かった先を記憶しつつ、洞窟の外の色を把握する。

洞窟の外は、天使のように背中から翼の生えた少年二人と出会った場所と同じ、木々の茂る山の中だった。陽光の角度は五十度から四十度と言った具合だろうか。空の明るさから判断して、日の入りに向かっていているのだろうと当夜は推測した。

与一は近くの登りやすい樹に登って行ったようで、樹の幹や枝にところどころ足に付いていた泥が付着している。

待つこと一分弱、樹の頂点から張った声が聞こえてきた。

「煙が上がっている！ ハーピーの村で何かあったようだ！」

「ハーピー？」

「お前を介抱しようとしてくれていた羽の生えた人間だ。鳥人間というべきか？ 亜人だとか言われたりしてるが、まあそいつらだ。与一がそう名付けた。よくこの辺りまで木の実を拾いに来るんだが、その度に与一が弓で威嚇してたりする」

「間違いなくファンタジーなゲームのやりすぎですね」

与一の命名に苦笑していた十夜と準だが、そのハーピーたちが襲われているというのはどういふことだろうか。十夜たちの疑問は解消されないまま与一の実況が続く。

「兵士が見える！ 侵略を敢行しているように見えるぞ！ 足軽みたいな兵は槍や剣を構えている！」

「おいおい、穏やかじゃないぜ……？」

「それだけじゃあない、指揮官がいる！」

軍が村を蹂躪しようとして侵攻していることは明らかだと与一は推測し、それを準と十夜に告げた。



「あまり関わりたくはないが、近隣住民がやられていく様を見過ごすのは性に合わん！  
井上！ ソドムの弓を用意してくれ！ ここから狙撃する！」

「そう言うと思つて準備しといたぜ！ 矢も作つておいた甲斐があつたつてもんだ！」

準は与一がこの状況を見過ごせないと察知していたのか、侵略と言う単語が出た瞬間に、十夜と協力して与一の弓を張つていたのだ。大弓のためかなり力のいる作業ではあつたが、鍛え直している十夜と現在進行形で鍛えている準の二人係だ。決して楽とは言えなかつたが、なんとか弓を張ることに成功した。

「弓を担いだまま登れる自信はねえ！ いったん降りてこい！」

「待て！ 指揮官の顔に見覚えがある！ 兜を被つているが、角度的にもうすぐ見える！」

与一はそう言うとしばし無言になり、十数秒後にスルスルと頂点から降りてきた。

降りてきた与一は弓を肩にかけ、体に矢筒を複数装備していく。その様は実に手慣れたもので、弓の名手那須与一のクローンであることはだてではないと見せつけているようであつた。

準備をしている与一を手伝いながら、準は与一に質問を投げかける。

「それで、指揮官の顔は見えたのか？」

「ああ。よく見れば上着の中は川神学園の制服で、一気に確信に至った。雰囲気が違うから違うと思ったんだが、外見が一致し過ぎている」

与一は自信たっぷりにもう語るが、本人自身が自分の言っていることに納得がいていないようだった。雰囲気が違うがどう見ても自分の知っている人物であると言っている。それはつまり、与一が言うところの「別の世界線の知人」なのだろう。

「それで、誰だったんですか？」

「話題にも上がってたな。川神の末っ子、川神一子だ」

その言葉を聞いた瞬間、十夜は頭に金槌で殴られたかのような衝撃を受けた。

第四幕  
W i p i n g  
A l l  
O u t

川神一子が村を襲っている。

与一のその言葉に十夜の頭は真っ白になり、フラフラとおぼつかない足取りで体のバランスを崩し、与一が登っている樹を背にしてズルズルと腰を落としてしまう。

川神一子は誰よりも優しく、人情に溢れた皆の人気者。マスコットとも慕われ、年上から愛でられることも少なくない。自分の祖父が溺愛しているのも知っている。男だの女だのと分け隔てもなく、どんな人にも気遣いもでき、心を洗い救い上げてくれる。かつての十夜も救い上げられた人間だった。

川神一子の底抜けの明るさと諦めの悪さに、十夜は絶望と失望から脱却することができたのだ。故に、十夜は一子の優しさと世話焼きなところを身を以て知っている。

加えて、十夜の世界では家族関係にある。家族としても、一人の友人としても、一人の女性としても、川神一子に惚れて憧れていた。

だからこそ、与一の見た光景が、伝えられた事実が信じられなかった。

「っ——！」

「おい川神！……どこへ行く?！」

居てもたつてもいられなくなった十夜は鉄砲玉のように飛び出した。準の言葉に耳を貸さず、一心不乱に山道を駆け抜けていった。十夜を制止しようと準が手を伸ばすが、走ることだけを考えている十夜に手が届かない。

足場も気にしながら走る準と、足場や怪我を気にせずひたすらに走るだけの十夜。反射的な自己防衛だけでなく理性が怪我を躊躇っている準が、我武者羅に突っ走る十夜に追いつけるはずがなかった。

十夜は準の静止を振り切り、と言うか気にも留めずに山を駆け下りていく。

ハーピーという種族が襲われている。確かにそれも行動原理としては大事なことだ。仮にも十夜は介抱された身だ。恩を感じていないはずはない。

まるでゲームのような世界と、RPGのような展開が十夜の身に降りかかっている。

心底ゲームが好きなら人間ならば、一度は物語の世界に入ってみたいと考えることだろう。ゲームマーとしての叶うはずのない願いが果たされた、これもまた行動原理としては相応しい。

そんな後付のような理由など、十夜の頭の中には存在しない。あるのは直情的な、一子に対する想いだけ。

枝が頬を切った、厭わない。

泥が口の中に入った、構わない。

蜘蛛の巣に顔が捉えられる、顧みない。

足を滑らせ地を踏み外し関節に痛みが走る、歯牙にもかけない。

自分の体の問題など二の次である。目指すはハーピーの村、それだけを視野に入れて突き抜ける。引き籠っていたままの自分だったら、こんな無茶はできなかつたとふと思つた。一子には感謝してもしきれない。

その救世主とも言える一子の不可解な行動の理由を、与一が見た信じられない光景の

真偽を確かめるべく、十夜はひた走る。

——ワン子、ワン子、ワン子っ……！！

「ワン子おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！」

十夜の目の前の光景は、地獄だった。

羽をものがれ地に叩きつけられ血を流すハーピーたち。中には剣や槍による傷が目立つ死体もあつた。酷いものの例を挙げるなら、首や四肢が切り取られた肉塊にまで成り果てている仏もあつた。

むせ返る悪臭、耳を疑う悲鳴、駆り立てられる恐怖。村に漂う空気は戦場のそれだった。

明確に十夜に擦り付けられる死のイメージ。彼が今まで経験してきた武とは確実に違う世界の出来事にしか思えなかつた。未熟な武術が故の殺人、武術に関しては素人の殺戮。十夜の世界から飛び出した、一歩的な暴力による死の蔓延する外界。

何も食べていない、何も飲んでいない。それなのに十夜は再び吐き出す。自分のいた世界での原因とは全く違う、視覚や聴覚からきた気持ち悪さだけでやってきた嘔吐。実に無様で、正常な人間なら仕方がないことだつた。

人ではないが、人に近い亜人の死。十夜はそれを受け止めきれなかつた。

『いやあああああああああ』

『助けてくれ、誰か、誰かあ』

『ひいいい、ぐえつ——』



何を言っているか分からないが、その言葉にこもっている感情は十夜にも分かる。分からない者はまずい。恐怖という感情が渦巻き、この村は完全に崩壊してしまっていた。止むことない断末魔、無言で殺戮を続ける黒い兵士。

ゲーマーが抱く夢など、現実なってしまうえば拒絶したくなる不条理なのだ。現実ではないからこそ、彼らは拒絶でき没頭できるのである。

十夜は吐き出した後も四つん這いになったままその光景を見つめていた。最早何がどうなっているのか分からず、自分が地に足と手を付けているのかさえ自身がなくなってしまった。

そこで十夜を見つけた一人の兵士が、高らかに声を上げた。

『目標発見！ 目標発見!!』

何を言っているか分からないが、十夜と目が合った途端に叫び出したのだ。自分がその叫びの原因だというのは自明の理だ。

『(バ)苦労様』

十夜の視界に一人の人間が現れた。黒い兵士とは違い、明らかに格が上だと知らしめるような服を着ていた。

赤いマントが付いた銀の肩ポールドロン甲。体を守ると言うよりかは威厳を示す意味で装着しているような肘当てと籠手が繋がったような銀の防具。大鎧、具足等によく見られる草摺くさずりも膝まで伸びており、まるで戦闘向きとは思えない、和洋折衷の異常な鎧。頭部には耳と頭だけを覆う日本よりの銀の兜を被っている。

その下に着ているのは川神学園の制服。全く似合っているとは言えないが、似合っていないとも言えない。

何よりも不釣り合いなのは、それを着ているのは十夜よりも小柄な少女だということ。

「向こうの言葉でいいのよね、漂流物ドリフさん？」

「おい、何やってんだよ……？ 何を、悪の將軍みたいな恰好で先導してんだよ……」

疑いもなく、その少女は川神一子当人だった。持っている武器の薙刀も十夜の記憶にある一子の薙刀と一致している。家で、学校で、秘密基地で、多馬川のほとりで、毎日顔を合わせているのだ。十夜が一子を見間違えるはずはなかった。

「衰弱してるわね。張り合いのなさそうな漂流物<sup>ドリフ</sup>だわ」

「何やってるかって聞いてんだ……！ 答えろワン子お!!」

十夜を見ても何の変化を見せず、恨み失望するような目で十夜を見下ろす一子のその態度に、十夜はついに激昂する。

「……………うふ」

「何笑って——」

「うあッはははははははははははははははははははははははア!? 今からみつともなく殺されるのに、生意気にもアタシに人道とやらの講釈垂れる氣イ!?!」

「は？」

左右で開き具合の違う目。その奥にある澱み腐りきった負の感情。皺が寄り切った眉を吊り上げた歪みきったその表情と、狂気に塗れた叫び声に十夜の思考が停止してしまふ。

「大して強そうじゃないし、武器も持ってないし、何で呼ばれたのかしらねエ？」

外見と本能による格付けだけで人を値踏みする一子を目の当たりにし、ようやく十夜はこの世界のシステムを真の意味で実感する。

——これが、別の世界から来た一子なのかよっ……!!

「あれ、黙っちゃってどうしたの？ 今更怯えちゃった？」

薙刀を後ろ首に押し付けけるようにして肩で担ぎ、片側の口角だけ吊り上げて挿入するように話しかける一子。十夜の知る一子の正反対の悪魔が、一子の皮を被って十夜に近寄ってくる。

それだけで、十夜が戦闘態勢に入るには十分だった。目の前の悪夢を打ち払おうとするのは必然だった。

「あれ、殺り合う気？ まあ貧弱そうな見た目だけで判断するのはダメだったのは、あの不死身くん」で学んでるし、気は抜かないようにしようかな」

十夜の構えを見た一子は実に愉しそうに笑い、薙刀を必要以上に振り回して十夜に突きだした。攻撃のための行動ではなく、かかってこいよと挑発するだけの行為。彼の知る一子には到底できない、他人を見下すような視線と必要以上の煽り。

——もう、こんな一子は見たくない。

戦闘を意識しただけでなく、少しでも視界を悪くしようとする眼鏡を外した。本来の彼が戦闘の際に眼鏡を外す理由と、今眼鏡を外した理由には大きな違いがあった。

前者は眼鏡と顔を守るため、後者は自分の心と記憶を保つため。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!」

パワーもない、技自体のキレもない、スピードもすばしっこいと評される程度。武道から離れた十夜の鈍った体では、一子とまともに戦うことなどできないだろう。目の前にいる一子は十夜の知らない一子だが、薙刀の扱いは完全に一子のそれだった。いや、十夜の知る一子よりも若干巧かったかもしれない。

勝ち目がないのは火を見るより明らか。そんなことは関係なかった。

十夜がなすべきことは、目の前にいる一子の皮を被った何かを排除すること。十夜はなりふり構わず一子へ突撃した。

「殲滅開始イ……！」

一子が薙刀を頭上に持っていき、天地上段の構えを取った。その瞬間、一子の背後に陽炎が発生したように空間がゆらりと揺れる。

その光景を見た十夜は全力で後方へ飛んだ。正確には、その光景を見たことで首が跳ねられるイメージが見えてしまったから、十夜は引かざるを得なかったのだ。

心臓が爆発したように大きく爆ぜ、十夜の体からブワツ、と大量の汗が滲み出る。死に直面したことによる恐怖心が体の機能が必要以上に作用させていた。

「伊達に漂流物ドリフターズじゃないわね。もう一步踏み込んでたら死んでたわよ？」

一子は十夜に賞賛のようなものを送るが、一子の顔は先程よりも黒く歪んでいった。奥歯を噛み砕こうとしているのかと疑わせる程、ガリガリと音を立てて歯を噛み締める様は怨憎に支配された一種の自傷行為だった。

「才能ある奴ばかり、嫉妬しちゃう。ま、才能がなかったら漂流物ドリフターズとしては落第なんだけどね」

「おい、今のは何だよ……」

十夜は急激に早くなった脈拍を抑えつつ、一子の背後にある何かについて問い質す。先程の殺気についてもそうだが、人を簡単かつ人外的に殺せるような手段を、十夜の知る一子は持つていなかった。

それなのに何故か、十夜は一子の背後にある揺らめきに既視感を覚えていた。十夜からすれば、気味が悪くて仕方がない。

「どうでもいいじゃない、そんなこと。わざわざ殺す手段聞いたところで死ぬのは一緒じゃない？ 冥土の土産って概念はアタシにはないわよ？」

「——は、はは。さつきから難しい言葉使いやがって。気持ち悪いな、くそつ……！」

十夜は涙ながら悔しそうに言葉を漏らした。しかし、戦いの姿勢は解かない。一子に對し最後まで戦い抜くという意思表示だ。

「じゃあ次はもっと早く——」



「オラア!!」

一子が余計に薙刀を回していると、一子の背後から一人の男が忍び寄り跳び蹴りを食らわせた。

しかし、一子の後頭部にその蹴りは届いていなかった。何か分厚く見えない壁のようなものがあるのか、頭の手前で蹴りは止まっていたのだ。

「ハゲ先輩!」

「……あら、井上くんじゃない」

「ちつ、本当に川神妹かよ……。信じらんねえが、こう目にしちまうと信じなくちやいけなさそうだ」

準は一子の背後にある何かから足を離し後方へ素早く下がる。何か拙いと一度の接触で感じ取ったのか、準が置いた距離は必要以上に大きく、一子の薙刀が三つは間にあっても余裕ができるほど離れていた。

十夜同様、準も死に近い何かをイメージしてしまったのだろうか、接近しただけで準の呼吸が乱れていた。

攻撃された一子はというと、十夜を背にして準へと向き返っていた。獲物を見つけた獣のような表情、纏っている莫大な気の量。準は別人のような一子に対して嫌悪感を覚える。

「お前、俺の世界の川神妹じゃないな。雰囲気で分かる。こんなことで世界の違いつてのは分かりたくなかったがな……」

「そう？　アタシらはみんな壊れちゃってるからね、雰囲気なんかじゃ判別できないわよ？」

「どつちでもいいさ。お前がこうして異常な行動を取っている以上、俺にとつちや仲間だとか言ったらんねえ」

「潔い決断ね。容赦しないって感じの目をしてる。吠えるだけしか能の無さそうな地味っ子よりは張り合いありそうな漂流物ドリフタレズで安心したわ？」

十夜も準も一子の言葉には耳を貸さない。一子の言葉を聞いてしまうと、聞き入れようが聞き流そうが、決意して宿した闘志が揺らいでしまいそうだから。

無視されたというか、挑発が意味をなさないと察した一子はずまらなそうに薙刀を地面に刺し、両手を組んで大きく天へ向けて伸ばす。同時に首をぐるりと大きく回し、自

身の周囲全方位を一瞬にして見渡した。

「井上くん。ハーピー逃がすためにちよつと頑張ったのかなア？ アタシの兵が二割ほどダウンしてるんだけど」

「剣の握りも振りもド素人じゃねえか。たつた十七人、お前らみたいな武士娘相手にしてるよりは随分楽な仕事だったぞ？」

「ふうん？ やつぱり漂流物ねエ。あれでもそこそこ使えるようにはしたのよ？」

ま、所詮畜生紛いの兵が一朝一夕で漂流物ドリフタヌに勝てるようにするのは無理があつたか——  
——なッ!？」

一子は薙刀を地面から抜き、大きく横に薙ぎ払つた。すると、一子の薙刀には何も触れていないのに、一子より十メートルほど離れた場所で、ガキーン！ という金属が弾かれたような音が聞こえた。

十夜と準は何が起きたのか分からなかつたが、空から降ってきた何かの残骸を見てようやく理解する。

「優秀な弓兵がいるじゃない。アタシらの兵を鍛えて欲しいくらい。兵士がドンドン射

抜かれちゃうから困っちゃうわ、ねッ!!」

粉々に砕け散り、矢の先端である鏃と弓に取り付ける筈を、一子は振り上げた足で思いつき踏み潰してグリグリと踏み躪る。

与一の援護射撃だと理解した準と十夜は目を見合わせ、次に来るであろう援護射撃が攻撃のタイミングだと理解し、待ちの姿勢を取った。

しかし、問題が一つある。

「厄介ねエ。さっさと潰してあげましょうか」

それは、一子の攻撃の手段が未だ分かっておらず、防ぎ切れるかどうかすら分からないうことだった。例え急所を守っていても、心臓や頭を吹き飛ばされたらそれで終わり。それほどの威力があるかもしれないと、十夜と準は互いの一合でそれを危険視している。

それほどまでに、一子の背後にいる何かは恐ろしいのだ。

「——双槌・毘沙門天」

「ツ!？」

一子がそう呟いた瞬間、一子の背後から視認できるほど濃く密集した気が、車よりも大きな拳を形成していく。その拳は恐ろしく速く放たれ、準も十夜も拳が見えたと思つた瞬間には、既にその拳に襲われていた。

十夜と準は気の塊である拳から発生した衝撃波に吹き飛ばされ、それぞれ一子から離れていくように弾き飛ばされた。準はハーピーたちの民家の壁を破壊するほどの勢いで叩きつけられ、十夜はハーピーたちが自給自足のために育てていたであろう野菜の畑を抉るように滑っていく。

「ぐ、ふっ……!？」

「しぶといわねエ。ま、アンタにはちよつと弱めに打つてあげたわ。それにここならあの弓兵からしたら死角。援護はないと思いなさいな」

体のどこかがへし折れていても不思議ではないほどの衝撃に見舞われ、畑の土と同化しかけている十夜の下に一子が近寄ってきた。

十夜の頭のすぐ横に薙刀を鍔の様にザクツ、と突き刺し、刃を十夜的首筋にピタリと当てる。

「漂流物は皆殺し。これは変わらないけど一つ聞かせなさい」

「……………」

「臭うのよ。アンタから、アタシや武神の臭いが、色つ濃くね」

一子は薙刀の持ち手を刃と柄の間である唾まで落とし、十夜的首元を左手で引つ張りシャツを引き裂き、鎖骨部分に顔を這わせる。

ゾクゾクツ、と何とも言えない感覚に襲われ身震いした十夜。ムカデに這われているようでもあり、優しく包まれているようでもあった。こんなことを一子は自分に決してしない、目の前にいるのは一子ではない、そう言い聞かせてもこの快感に近い感覚を、身体的にも精神的にも拒絶しきれなかった。

「すウ、はア…………」

「……………う、あつ……………!」

「懐かしいくて、気持ちの悪い臭い……。アンタの世界じゃ、アタシらは親しい関係だったんじゃない?」

どうやつても考えないようにしていたことを一子から告げられる。自分の耳を塞ぎたくても、一子の口を塞ぎたくても、この場から逃げ出したくても、体の自由が利かない十夜にとって、今のこの状況は生殺しそのものだった。

「まともに声も出せないようね。表情を見れば大体分かるわ。アタリみたいね?」

もう一度首筋に鼻を寄せられ、一子の吐息が十夜をピリピリと刺激する。

「いい仲間になれたかもしれないのに、ドリフターズ漂流物なのが惜しいわア……。せめて見慣れた顔の手で殺されるんだから、悦びなさい?」

地面に刺さっていた薙刀を抜き、脇差でも扱っているように薙刀を構え、十夜の首を落下地点とする。

——ちく、しよおお……!!

一子に良い様にされ、あつけなく殺されてしまう自分を十夜は悔やみ恥じ、心で盛大に泣いた。ひよつとすると本当に泣いているかもしれないが、その涙は焔に紛れてしまい、一子に見せることはできない。

しかし、それでよかったのかもしれないと十夜は思い直す。

仮にも、姿は自分の憧れ惚れた川神一子だ。みつともなく泣く様を、これ以上見せるわけにはいかないと、殺されることを受け入れてしまった。

「……………?」

受け入れたというのに、諦めたというのに、いつまで経っても一子の手は振り降ろされない。それどころか、一子は十夜の上からゆっくりと退いてしまった。

一体何があったのかと、精一杯の力を込めて瞼を開けて目を凝らし、一子の視線を辿りその先を見る。



そこには、古錆びた上下開閉式の鉄格子がポツリと浮かんでいた。

ガラガラガラガラ、と大きな音を立てて鉄格子が引き上げられていく。鉄格子は地面に口を向けているため、引き上げられていくという表現は不適切かもしれない。しかし、*「向こう側」*では確かに引き上げられているのだ。

十夜はふと、ああいうタイプの鉄格子と言うものは、ゲームでよく目にする闘技場で設置されているものだと思った。そこから出てくるのは人よりも獣を連想させられる、武骨で頑丈な鉄格子。飾り気などまるでない。

ガキーン！ と完全に鉄格子が開けられた音がしたのと同時に、大きな白銀の狼が飛来し、隕石のようクレーターを作り着弾した。土煙と衝撃波を発生させ、辺りの木々は薙ぎ倒されてしまう。

吹き飛ばされた黒い兵士たち、怯え竦むハーピーたち。

上半身を何とか起こした瀕死の十夜、醜く歪んだ笑顔で薙刀を構える一子、頭から血を流し壁に背を預ける準。

彼らが見た者は、齒を剥き出しにして鬪争本能を振りまく狼を従える、黒い髪を後頭部でまとめ上げたポニーテールの少女。

「——瑠奈はどこ？」

その場にいる者全てに暴力的な殺意を向け、来訪者は、鬼となる。

## 第五幕 いい女

神か仏かと見間違ふほどに巨大な拳。車に弾かれた方がまだ無事でいられたかもしれないと錯覚してしまうくらい暴力的な攻撃に、準は抵抗できずに民家に弾き飛ばされてしまった。頭を強く打ち、体のところどころも動かそうとするだけで激痛が走る。怪我を負ったばかりと言うことを考慮しても、準の体は悲鳴を上げ過ぎていた。

準は吹き飛ばされる間際、同様に拳を食らってしまった十夜の姿を見てしまった。自分の体のこともそうだが、十夜の体は自分と違って鍛錬から離れた身だと本人から通告されていたこともあり、準は十夜が気がかりだった。

出会って数時間と経っていない人間にここまで親身になれるのは、井上準の長所であり欠点でもある。

ひよつとしたら川神十夜という男は何かを隠していて、窮地に達した瞬間に並の武人を凌駕する存在になるかもしれない。自分を弱く見せる技法に長けていて、それにまともに準が騙されているだけかもしれない。

しかし、十夜が自分のコンプレックスを与へと共感し合っていた際に見せた憂いの表情を、第三者として冷静に観察していた準はどうしても嘘や虚構の類とは思えなかった。

——どちらにしろ、真偽は、確かめなくっちゃな……！

準は匍匐前肢とも言えない、実に雑な動きで民家の中を這いずり回る。準が通った道は、まるで蛞蝓が通った跡の様にヌメツとしており、準の出血量が多いことが分かる。

自身がぶち抜いてしまった壁から何とか身を乗り出し、大きく前転する様に民家から脱出した準は、既に満身創痍だった。体を壁に預け、呼吸を整えつつ十夜を探す。

十夜を見つける前に、準は一子が薙刀を何かに向けて振り降ろさんとしている姿を見つけてしまう。振り下ろそうとしているその先には、泥まみれになって誰か判別のつかない人型の何かがいた。

それが誰かは見なくても分かる。間違いなく川神十夜だ。今この場にいる者で一子がそうしなければならぬ対象は、準を除き一人しかない。他の考察は不要だった。助けられなかった。その言葉が頭に浮かんだ瞬間、準は自分の世界で仲の良かった二人を思い出した。

自分が体を張つても助けるべきだった二人は、もう壊れてしまっている。誰一人としてその二人の二の舞にはさせない。密かにそう誓っていた準の信条は目の前であつさりとは崩れ去つてしまう。

——ハゲ先輩！

自分の知らない人間だったが、向こうは自分のことを先輩と慕つていてくれた。ハゲと罵るような単語を多用するが、それを含めて面白い奴だと思つていた。気安く話しかけてくれる男子の後輩など、今までの自分にはいないこともあり新鮮だった。

その少年を守れなかった。準は悔恨の情に駆られ、唇を噛み切つてしまう。

やめてくれ、殺さないでくれ、正気に戻つてくれ。声を発することすらままならない準は心の中で一子に訴えかける。そんなことは無駄だと分かかっていても、そうしなければ気が済まなかったのだ。

——誰かアイツを、助けてやってくれ……!!

準の心の叫びが懇願から祈願へと昇華した、その時だった。

準は頭上から、やけに覚えのある気配を感じた。どこか精悍であるようで、静謐な雰囲気も相まっている。ほんの少しだけ距離を置いて、その場全てを宥めることに長けた母親のような、優しく柔らかな気配。

その気配の先には、ゆっくりと開けられている無骨な鉄格子が浮かんでいる。一子もそれに気づき、十夜を殺そうとしていた手を止めてまでその気配に立ち返った。

——嗚呼、祈ってみるもんだな……。

神様がいるのなら少しだけ感謝してやるかと、静かに微笑んだ準は意識を手放した。



『包囲しろオ!!』

怒号のような命令が黒い兵士たちに伝えられる。黒い兵士たちは突然の落下物に動揺し時間が止まったように静止していたが、一子の差配により螺子を巻き終わつた玩具のようにキビキビと動きだし、落下物たる一人の少女と一匹の狼を取り囲んだ。

取り囲まれた少女は、その兵士たち全体に向けて嵐のような殺気を向けた。

黒い兵士たちは少女の殺気により、体の芯から揺さぶられ士気を引き下げられる。中には過呼吸を起こし、一子の命令が聞こえなくなつてしまつている者もいた。威嚇などと言う生易しいものではなく、少女の殺気は殺害の手段として成り立っている。

『まだ襲うな』

全方位に計七十人強で形成された三重の包囲網の一部を掻き分け、一子が薙刀を肩で担いだまま少女へ歩み寄ろうとする。

「一子……？ 何をしているのかしら、お前は」

「あら、またアタシの関係者なのかしら？ 人気者で困つちやうわア。ま、その奇妙なくらいに武神に似てる顔でアタシと無関係ってのはないだろうけど——」

「何をしているのかって、聞いているのだけれど？」

ズンツ！ と地震が起きても聞こえないような音が、大気と大地の激しい揺らめきと共に一子たちを襲った。気迫、気合、殺意、それだけで半数以上の黒い兵士たちが泡を吹き膝をついてしまう。膝をつく程度ならまだ耐えられた方なのか、途端に白目をむいて背中からバタリと倒れた兵もいる。

黒い三重の包囲網は一瞬にして瓦解した。その光景を見た一子は、辛うじて耐えた兵士全員に聞こえるように苛立ちのこもった舌打ちをする。

『アンタら。この程度で膝ついてどうする。ドリフターズ漂流物に気を抜いてかかるなど口を酸っぱくしていつてあげたでしょーが。これだから豚畜生共は』

黒い兵士たち、特に辛うじて意識のある者たちは一子の声にビクビクとしつつ、その言葉を糧にして立ち上がるとうとする奇妙な光景が見られた。



『そうそう。やればできるじゃない。気張りなさい!』

黒い兵士たちの諦めの悪さに一子は満足したようで、パンパン! と二回手を打ち鳴らして激励と称賛の入り混じった行為をすると、歪んだ表情で狼を従える少女に向けて殺気を放つ。

「さて、何をしてるかだっけエ? 決まってるじゃない、そこらへんでビクビク震えて小便垂らしてるの鳥紛い共の殲滅よ」

「……お前、本当に一子?」

「アタシはアンタに見覚ええないし、別の世界の知人って奴じゃないかしら。記憶の差異以外はほとんど一緒だけど、少なくともアンタをこれから殺すことに、アタシは快樂と愉快しか感じないわよオ?」

「……………ふーん、そう。それじゃあ——」

一子の言葉を一つ一つじっくりと噛み締め、反芻するように頭の中でグルグルと言葉を周回させ、ゆっくりと目を閉じる少女。

数秒後、開けたその瞳の奥には、全方位に向けた乱暴な殺意ではなく、研ぎ澄まされた刃のような鋭い殺意が一子にだけ向けられる。

「無理やりにも思い出させてやろうじゃないの」

少女がそう宣言した瞬間、牙をむき出しにして唸っているだけに見えた狼が、突如膨れ上がり少女を軽く超える巨大な体格に変貌する。

『総員下がれ!! 絶対に近づくんじゃ——!!』

それを見た一子は即座に狼の危険性を察知し、自身の配下に逃げるように伝えようとしたが、一子の言葉が締めくくられるよりも先に狼が一子の腹に頭をめり込ませていた。突進の衝撃で一子の肺に溜まっていた空気が唾液と共に吐き出されてしまう。

しかし、一子は弾き飛ばされることなく、元いた場所から数十センチ押し込まれただけだった。ニヤリと不敵な笑みを浮かべた一子は、気により実態化した狼の口を脇でがつちりと固め、噛みつかれないように対策を講じていた。

「蹂躪・毘沙門天」

次の瞬間、狼は頭上から現れた大きな人の足の形をした気の塊に踏みつぶされてしまふ。気で作られた狼であるために叫び声は出ないが、その悲痛な表情はまるで意思があるのかと錯覚させる程によくできていた。

口を大きく開けて舌をだらりと垂らし、虫の息な姿を見せられてしまえば、仕留めたともうのも無理はない。

「がおうそうろうじん  
餓皇双狼刃」

少女は右手を前に突き出し膨大な気を放出する。その気の塊は瞬間的に狼の形となり、一子の気で作りだされた巨体の足を軽々と食い破る。

一子は自身の背後の何かと連結している気の塊を食い破られたことにより、体内にある生命力をこっそりと奪われたように疲弊してしまう。一子がここにきて初めて純粹な苦痛の表情を浮かべていた。

一方、一子の気を食い大きく膨れ上がった狼は、横たわり大きく息をするように体を動かしていた狼に体を寄せ、溜め込んでいた気を分け合っていた。すると、倒れていた

狼はゆっくりと立ち上がり、遠吠えをするように空を仰ぎ体を思いつきり反らす。

二匹の狼は互いに体を摺り寄せあうと、直ぐに主である少女の下へ駆け寄った。狼は少女の周りをグルグルと回りつつ体を擦りつけ、褒めてもらうことを強請っているように見えた。まるで意識があるかのように行動する狼を、少女は呆れながら首元をさすつてやる。

「……アンタ。名前を聞かせなさい」

一子は少女を睨み、背後に存在してた揺らめきを薙刀で掻き消した。少しだけ話す必要があるかもしれない、話さなくてはならない、次第に少女に対する興味が湧き始めたのだ。

「川神院次期総代候補、武神の双子の姉、鬼神、川神千李」

「アンタと武神、どっちが強いのかしら？」

「私の方が上ね。時期的な差が出てるのかしらね」

「そう。アンタの世界のアタシとは仲が良かったみたいね」

「家族よ。仲が良いなんて言葉だけで片付けるなんて無粋じゃない？」

「アタシには関係のないことよ。アタシは廃棄物<sup>エセンズ</sup>。アンタは漂流物<sup>ドリフターズ</sup>。殺し合うだけの関係。さつき思い出させるだのなんだのって言ってたけど、感覚で分からない？ アタシらは、一方的な関係なのよ」

千季から聞きたいことは聞けたと言わんばかりに、薙刀を回した後に構え直し殺気をぶつける。これからはただ殺し合いをするだけだと、口を固く閉ざし会話を断ち切った。

一方、千季は大きく溜め息を吐いて俯きながら首を横に大きく振っていた。表情には出していないが、千季は相当動揺していた。背中が見えない一子には分からないだろうが、背中を見れば一目瞭然。千季の背中とシャツはびったりと張り付き、下着の線を浮かび上がらせていた。

困惑と焦燥、千季は前面の体裁を保つだけで精一杯の様だ。

—— 疑問はたくさんある。解決できそうもないものが沢山。

顔を上げ一子を見据える千季。目の前にいる一子は彼女にとって妹であり、決して傷つけず守りきるのは千季の役目。その一子が殺意を剥き出しに敵対している。動揺し

ないはずがなかった。

——気絶させてでも、止めてやる。聞き出してやる。

その動揺を悟らせず、一子を躡けるのもまた千李の役目だ。

「覚悟決まったかしらア？ お・ね・え・さ・ま？」

「ええ。全力で叩き潰してあげる」

「こっちの台詞よ」

表情を醜く歪めた一子は勢いよく地を蹴り、綺麗に放物線を描いて千李へと突撃する。

「銀狼牙鍊撃！」  
ぎんろうがれんげき

それを千李は拳の連打で迎え撃つ。拳の壁と表現しても差し支えない程の連撃速度に一子は驚愕し、目を見開き悦に浸っていた。

その拳の壁に対し、一子は気の壁をぶつけることにする。

「掌底・毘沙門天」

釈迦の突きだされた掌の様に形作られた気の塊と千李の拳が衝突する。千李の拳はそれを打ち破ろうと連打フラッシュを続けるが、削った分はすぐに修繕リペアされてしまう。先程よりも密度が濃く堅固な気の塊。勢いは少しだけ落ちたが、それだけだ。

拳の壁を押し返した掌が目の前まで迫り、千李は拳を出すのをやめて両手を額の前に出して体で受け止める。

千李は何とか踏ん張りを利かせるものの、ズリズリと押されて地に二本の足の軌跡ができてしまう。

「いん、のお!!」

千李は右腕を気の壁から離し、手を広げて中指を中心として指を寄せて鋭くし、気の壁に腕を差し込んだ。まるでアイスピックの様に鋭利な工具を連想させるように、高密度な気を纏った一撃だった。

気の塊に腕を晒していることもあり、その高密度の気を纏っていないければ腕は焼け爛れたように腫れ上がっていたことだろう。その腕を支えとし、千李は気の壁にしがみついた。千李はそのまま掌に押し出されてしまう。

押し出されることも厭わなかった千李は、余っていた左腕も同様に気の壁に差し込んでありつたけの気を両手に送る。

「餓皇双狼刃!!」

千李の掌から二匹の狼が産み落とされる。周囲は狼の餌である高密度高純度の気。さながら紋白蝶の幼虫に産み落とされた寄生蜂の卵が孵化した瞬間に餌に囲まれているようで、狼は歓喜に打ち震え大口を開けて餌に被りつく。

「挟撃・毘沙門天」

バチン!! という拍手のような音が鳴り響く。その音の正体は、一子の背後から延びてきたもう一つの掌と千李の引っ付いている掌がぶつかり合った音だった。その気の両手は合掌の形を作り固定される。



千李は氣の壁に挟まれてしまうが、千李が産み出した狼は未だ健在だ。狼は氣の塊の片側を食い破り穴を空け、一匹が一子に襲いかかってくる。狼が消えないところを見ると、どうやらまだ千李の意識はあるようだ。

「死なないものね。割と本気だったのだけだ」

襲い来る狼をかわして千李がいるであろう場所に突撃する一子。薙刀に氣を纏い、先程の意趣返しと言わんばかりに突きによる攻撃を向けた。

薙刀の先端が氣の塊を貫こうとした瞬間、氣の塊の中から一本の手がズボツ、と飛び出して薙刀を掴み止めた。

「!？」

「捕まえた……!」

薙刀の刀身の背を掴んだ腕がそれを力任せに引き寄せ、さらに氣の塊から現れたもう一本の手が薙刀の柄を掴んでさらに引き寄せる。

すると、先程まで固まったままだった氣の塊が揺らぎ、霧のように空中に消えて行つ

てしまった。その跡に残ったのは、捉えられていた千李の姿だけ。千李の顔は笑っていたが、額に僅かな汗が滲んでいる。

「爆発させないよう相殺するのは神経使ったわ。デリケートな作業だったもの」

「息上がってるわよ？ 割とギリギリだったんじゃない？」

「余計なお世話っ！」

千李は薙刀を握りつぶさんほどの握力で薙刀を固定し、グイッ、と勢いよく薙刀を地面と垂直になる様に持ち上げた。あまりにも速すぎて豪快な行動であったため、一子は薙刀から手を離すことを忘れて一緒に持ち上げられてしまう。

今から手を離してしまえば、空中で完全な無防備な状況になってしまう。しかし、このままだと地面に叩きつけられて敗北するのは目に見えている。

故に一子は一度薙刀を手放し、薙刀を伝うように垂直に落下した。当然の如く千李はそれを迎え撃とうとする。

しかし、千李の構えた拳は片手だけ。もう片方の手は確りと薙刀を握っている。これが誤算だった。

千李が地に固定された電信柱よりも耐震に強い柱を薙刀で作ってくれているので、一

子はそれを引き寄せるようにして落下の速度を上げる。

「!？」

「せやア！」

千李の拳を加速して掻い潜り、ありつたけの気を込め蹴りを千李の左肩に突き刺した。

「ぐうっ!？」

千李が肩の痛みに思わず左目を閉じてしまう。その瞬間に一子は千李の左側に素早く着地して背後に回り、両手を千李の背中に押し付けた。

「こうげき靠撃・毘沙門天」

一子の背後から発生した気の塊は、筋骨隆々とした巨体の肩と背中を形作る。その体軀は凄まじい速度で千李に衝突し、先程の掌底のように押すだけでなく壊すことも視野

に入れた暴力的な攻撃を繰り出してきた。

千李は抵抗することができずに勢いよく弾き飛ばされるが、手を伸ばして地面を掴むようにして勢いを殺し、二度バウンドしただけで即座に体制を整える。

しかし、一子の追撃は止まない。

「山崩し」

一子は薙刀の持ち手を石突にまで落として回転させ、限界まで発生させた遠心力を薙刀の刀身に乘せて振り降ろした。

千李は白刃取りの要領で挟んで刀身を受け止めるが、速く重い一撃を完全に停止させるために全力を使ったため、千李の左肩にさらに激痛が走る。

「あははア！ 痛い？ ねえ痛い？」

「しっしっしっしっ！」

薙刀を引き寄せて蹴りを放つ千李だが、薙刀を手放しそれを一子はひよいとかわし、ググツと蛙の様に縮こまってから勢いよく蹴りを放つ。

それを上体を反らして回避する千李だが、意識が蹴りに向いた瞬間に薙刀を一子に奪還されてしまった。

——じじいとはちよつと違う気による神々の顕現に、師範代クラスの身体能力か……。

千李はジワジワと痛みが滲む左肩を抑えつつ、余裕の態度で薙刀をグルグルと回している一子を見つめる。余裕と言うよりは、優越感や達成感に近い感情に体を浸しているようだった。

——ちよつともらい過ぎたわね……。

一子の力が千李の予想の遙か上を行っていたことを責めるように、左肩の痛みは一向に治まろうとしない。気を用いて一瞬で治せないこともないが、そうすることは彼女の信条に反する。瞬間回復は彼女にとっては使えると言うだけにすぎない。

固より常人よりも速い回復速度に桁違いの体力だ。使う必要がないというのもあるが、依存が弱さを生むことを千李は知っている。

「もう一押しで肩が壊れるかしら？ あっけないわねエ」

一子の挑発に耳を貸さず、千季は左肩が動くことを確認すると、ゆつくりと周囲を見回した。

「大丈夫そうね」

千季はそう呟くと、パンツ！ と一度手を叩いた。

すると、二匹の狼がそれぞれ一人ずつ人間を口にくわえて千季の下に戻ってきた。一人は泥まみれで何とか気を保っている少年、もう一人は気を失ってだらしとしているスキンヘッドの少年だった。

一子は目を見開き眉を寄せ、今まで一度も狼の攻撃が当たらなかったことと、一匹ずつ牽制にしか狼を仕向けてこなかったことを思い出す。

そして見てしまう。自分が従えてきた黒い兵士が、誰一人として両足でたつておらず地に伏している光景を。今までの千季の攻撃と今見える光景を判断材料として、一つの仮定を導き出した一子。

その自分自身が打ち立てた仮定の内容に、一子は歯を剥き出しにして激昂する。

「アンタ、手を抜いてたわねエ!？」

「手は抜いてないわ。狼たちに襲われている妙な姿の人たちの救出と、襲ってる悪い奴らの成敗と、嗅いだことのある臭い二人をここに連れてくるのに半分の力を注いでいたから、残りの半分の全力で戦ってあげたわ」

「アタシと戦いながら、そんな正義の味方ぶってた訳エ!？」

「そうなるかしら。左肩の負傷は痛手だったわ。少し無茶をしたのかしら」

ぐるりと左肩を回し、すり寄る狼から気を分けてもらい左肩の負傷を軽減する。これで千李のコンディションは回復し始める。いや、半分の力を費やしていた狼が元に戻ったのだ。千李のコンディションは先程よりもはるかに好調だ。

「さて、仕切り直しよ」



## 第六幕 virtual insanity

キリキリと、限界まで弦が引つ張られて弓が撓る。かけと呼ばれる弓を引く際に必要な手袋が、弦を捻りすぎ返し過ぎず、理想的な位置で弦を引いたまま保つ。

その姿勢を保ったままでいるのは、決して狙いが定まらない訳ではない。弓道における射の基本事項は“真善美”。弓術を扱う与一がそれを踏襲して弓を扱っているかどうかは分からない。しかし、弓を放つ手前で体勢を保つ与一のその姿は美しさを意識して会得したものに他ならない。最早意識せずともその美しさを表現できるようになつてしまったのだろう。

射の精度を上げるために必要なのは速さではない、美しさを見せつけることだ。

驚異的な飛距離を保ちつつ驚異的な命中率を維持するために、与一は一射一射長い時間をかけて大事に放つ。確実に一人一人、敵の兵を戦闘不能に追い込んでいく。

本来なら、与一も準と同様に十夜を追いかけろべきだったのだろうが、彼はそれを放棄した。

十夜と準がハーピーの村まで行くことはまず間違いないと判断し、与一は完全なサポートに徹することにしたのだ。正確には、準と十夜が守ってくれるであろうハーピーたちを守るために狙撃兵となった。

準に夜なべして作り方を教え、不器用ながらも十分な矢の本数を確保できた。本数は百もないが、五十もあれば十分だった。襲ってきた兵は百にも満たず、準が二十人近くを気絶させていたこともあり、兵隊を半数どころか七割は壊滅させることができる計算だった。

しかし、その兵隊の指揮者はその計算を無意味にする程圧倒的だった。

与一が威嚇として放った矢を触れずして弾き落とし、仲間がやられていくことで士気が下がりがかけていた兵を持ち直させる何かを持っていた。これ以上ないくらいに、合戦としては厄介な将だった。

何とか敵の指揮者を揺るがせようとしたが、それよりも先に準と十夜がやられてしまう。準の方はまだサポートできる位置だったが、十夜は民家や木々により完全な死角に持って行かれてしまう。

与一の額から滲んだ汗が雫となって頬を伝い襟元を濡らす。精神力に関しては偉人

の中でも最高クラスのクローンである彼も、不可能を前にしてしまえば動揺の極致に達してしまふ。弓と矢の性質上、跳弾は使用できない。天下五弓の肩書を持つ弓兵の中には矢の軌道を曲げる技えお持つものがあると聞くが、与一はそれを扱うことはできない。

準の周りの敵兵は始末した。しかし、十夜を助けることができない。

——万事休すか……!?

焦る。与一。何とかしなくてはならないと思いつつ、弓を構えることはできなかつた。左手に弓を準備する際に使う、野球で言うところのロージンバッグを握る様に、滑り止めの灰色の粉を左手に、右手の手袋に黄色の粉をそれぞれ馴染ませていた。実に呑気に冷静に、準備だけを推し進めていた。

彼の中にある偉人の遺伝子の一部が「戦って死んだのなら、それは恥晒しではなく誉れだ」と訴えかけてくる。見捨てると、仄めかす。

——そんな非情だから、お前らは身内殺しって言われんだよ!!

—— オリジナルの俺もオリジナルの義経も、黙って死んでおけ!!

与一は諦めることなく弓を構えた。自分は自分だ。クローンであっても那須与一オリジナルとは違う。そう知らしめんばかりの行為。与一は偉人の幻影を打ち払うべく弓を引き保つ。

それを邪魔するように、上空から乱入者が現れる。

与一はそれを迎撃しようと狙いを瞬時に変え、その乱入者が落ちてきた瞬間を狙い矢を放とうとした。

その瞬間、乱入者が先に気で作られた大砲のような塊を放ってきた。与一の矢では弾くことはおろか反らすこともできない。そう察した与一は樹から樹へ飛び移ってそれを回避する。少しでも判断が遅れていれば、立っていた樹の枝ごと消滅させられていたことだろう。

何とか右手で別の樹の枝を掴んで地面に落ちることはなかったが、死に隣接した体験

により体の汗腺からブワツと汗が大量に滲み出した。

弓も矢も落とすことなく、再び高台とも言える樹の上に立ち、息を整えつつ足場を何とか見繕うことに成功する。与一が猛禽類のような目で戦場を確認すると、黒い兵士の七割が沈黙し、指揮官である川神一子と乱入者が戦っていた。

加えて、乱入者と同じ気配を感じる気で作られた狼がハーピーたちを救出し、安全な場所へ避難させていた。生き残ったハーピーたちは与一の方へ向かってきているようだ。

——あの乱入者、味方か？

確信は持てない。少なくとも、準と十夜を自分の背後において庇うような体制を取っている。

それだけで、一子よりは信頼できると判断した与一は、乱入者の援護を開始する——



「流星・毘沙門天!!」

轟ッ!! と一子の上空で大きく大気が歪むほどの莫大な気が収束し、準や十夜を吹き飛ばした時よりも大きな拳となつて、斜め上から千李に向かつて降りかかる。

「餓皇双狼刃!」

豪ッ!! と千李の両手の周囲に渦が発生して空気が震え、使役していた二匹の狼の親狼と思わせるように大きな狼が姿を現し、一子の放つた巨大な拳に向かつて牙をむき出しにして飛び掛かった。

大地を抉り、大気を蹴つて拳に噛みついた狼。まるで綿菓子でも噛みきる様に、あっさりと拳は食いちぎられて狼の腹の中に納まった。

またしても気を奪われて疲弊する一子。顔にはじんわりと発汗した汗が浮かび上がり、歯を食いしばつて耐え忍んでいた。

「舐めやがつて、舐めやがつて、舐めやがつてエ……!」

「舐めてないわよ。だからこうして全力を出してるんじゃない」

——この状態での全力だけど。

「……………さつきから、人を値踏みしてるその態度が——舐めてるって言うてんのよオ!!」

一子は怒りにまかせて薙刀を全力で横に薙いだ。その薙刀の刀身から黒く染まった気の波が飛ばされる。その気の色は先程の毘沙門天とは打って変わって、生まれながらにして戦闘に狂った者が産み出すような黒い闘気に近かった。

伸びきった筋肉が唸りを上げ、肩と肘の関節が外れてしまいそうなほど腕が伸びきっている。歯を剥き出しにし目を細め痛みに耐えている一子の表情は、一子が全力を出しているという証拠だった。

「爪刃狼影斬」  
そうはろっえいせん

しかし、千李はその飛ばされた斬撃を、気で作りだした鉤爪のような刃で真横にあっ

さりと弾いた。その手はどこか洋画に出てきそうな形状をしており、狼を扱う彼女のイメージにそぐわない技と見える。

全力で放った気の波も弾かれ、一子は一瞬呆然としてしまう。憤りを全て乗せた技が呆気なく弾かれてしまったことにより、一子の胸に穴が開いたような虚無感がやってくる。

しかし、その穴もすぐに怒りによって埋められる。

顔を凄惨に歪ませながら、一子は距離を一気に詰めた。迎撃しようと気で作った爪を構えた千季だったが、一子の口角が若干上がっていることに嫌な予感があったのか、迎撃から回避に移ろうとした。

「遅い!!」

一子は薙刀を構えて千季の胸に刃の先を向けて、薙刀を握り潰さない程度に握力を込め、全身の筋肉を最大限に使えるように関節の潤滑油を送り出す。

「六花・顎りっか!」



薙刀の高速の振り上げから続く、稲妻のような振り降ろし。川神流の奥義、顎。千李もそれを一度だけ実際に見たことがある。故にその性質も知っており対処もできる。しかし、その技は千李の遥か上を行った。

体を千李に対して垂直にしているため、獣の噛みつきのような挟撃だけでなく、ほぼ同じ速度でオールを漕ぐ様に角度を変えて二回の顎を同時に放った。その軌跡を辿れば、まさしく雪の結晶のような六花を描いた。

千李はそれを何とか捌こうと両手の鉤爪を犠牲にするが、残った一組の顎により千李の左肩から右脇腹にかけてが切り裂かれてしまう。

「あはははははははははははははははははははははははア!! 当たった当たったア!!」

千李の出血を浴び、一子は鳥肌を立てて身震いして興奮する。ゾゾツ、と体に小気味悪い感覚が遅い、絶頂の寸止めに達する。快楽と愉悅の渦に巻き込まれて宙に浮いたような気分になっていた。

実に卑猥に、実に艶めかしく、狂気に塗れた一子は欣喜雀躍としていた。

「——アハハ」

しかし、笑っているのは一子だけではない。

「あら、気でも狂ったの？ 出血多量で死ぬわよ？」

「お生憎様、柄にもなく熱くなつてたから、血を抜く熱さましに丁度いいわ」

そう千李が呟いた瞬間、千李の出血がピタリと止まった。一子は不審がつて千李の傷口を見つめた。するとどうだろうか、千李の傷口にはまるで火傷のような跡がついてい  
るではないか。切り傷は火傷の後に変貌し、爛れによる痛みしか感じさせない。

千李は自身の気を炎に変換し、炎の狼を自身の肌に密着させて傷口を燃やした。焼灼止血法という緊急の応急処置として使われてきた治療法を、道具も何も使わず自分の身一つで成し遂げた。

傷口を塞ぐために自分の体を必要以上に痛めつけてるその異常な行動は、一子の異常な言動よつて引き起こされていた。

「殺そうとする辺りお前の方が性質が悪いけど、昔のアタシがあのまま生きてたらこうなつていたんだろうなつて考えたわ。偽物の妹見て我が振り見返すつてのはどうなの

よと、ノスタルジックでアイロニックな気持ちになっただけ」  
「何を言ってる——」

「だからね。これ以上ないくらいぶち切れちゃったかな」

千李の殺気の質が変わったのを、一子は千李の瞳を見て判断する。  
判断できたが、反応はできなかつた。

千李は一子の薙刀を無理やり一子から引きはがし、石突で一子の鳩尾を突いて身体を浮かび上がらせた。その際、一子を貫いた衝撃が村の上空一体を覆っていた薄黒い煙の

膜に、波紋が広がっていくように大きな穴を空けた。

一子が口を膨らませて唾を吐き出してしまいそうになった瞬間、唾液を吐き散らす前に一子の頭部をがっちり掴み、そのまま地面へ叩きつけた。今度は地面が再び大きなクレーターを作り出す。

後頭部がガツチリと埋まってしまった一子の目は焦点があつておらず、激しい脳震盪に襲われているようだった。口からはだらしなく唾液と舌を出し、気絶寸前と言えよう。

しかし、千李は攻撃の手を止めない。

これは一子じゃないと自己暗示をかけ、彼女は冷酷非情な鬼神となる。

四肢の経絡を潰す様に抜き手を打ち込み身体の自由を奪い、両手両足も地面に埋め込ませて一種の磔状態を作り出す。ジョナサン・スワイフト作のガリヴァー旅行記に出てくるガリヴァーのように捕えられた方が、幾分が人道的で情けがあつたのではないかと思わせる程、惨烈だ。

既に一子は虫の息だ。その虫の息すら耳障りだと言わんばかりに、千李は拳を振り上げた。その拳には膨大な気が渦巻いていて、拳の先が狼の罅アキトを映し出しているように見えた。

鬼の振り降ろした鉄槌は、一子の体を打ち砕き、大地を崩壊させた。



平和だったハーピーの村は、僅か三十分足らずで地獄と成り果てた。

ハーピーたちが見せしめの様に殺された。羽をちぎられ首を落とされ、子供が玩具を壊す様に殺された。壊れた玩具の後片付けはされない。誰も拾い集めることなく、それらは放置される。彼らの未来は最悪の天候だ。

突如ハーピーたちに救いの手が舞い込んだが、形勢はさほど変わらない。しかし、ハーピーたちの幾らかが救われたことは事実だった。雨は晴れ、雲が去るのを待つてい  
るようだ。

指揮官が救世主を瞬間的に打ちのめしてしまった。ハーピーたちは再び地獄を見ることになる。黒雲が再び立ち込める。雷鳴を轟かせ、嵐のような風がすべてを奪っていった。

新たな乱入者が現れた。敵か味方かは分からない。しかし、それは敵も同じだった。ハーピーたちは混乱と動揺のスパイラルの先へ到達しようとしていた。荒れる天候の先は、誰にも読めなかった。

指揮官と乱入者の勝負が始まった。ここでハーピーは確信した。あの乱入者は真の救世主であると。雨雲は去り陽光がようやく姿を現し、天使の階段が現れ虹もかかった。

救世主は村を消滅させた。空ばかり見ていたハーピーは、足元の絶望を見過ごしていた。仮想の未来は狂気によって打ち崩される。彼らの命は助かったが、彼らの血と汗の滲んだ故郷は救世主によって失われてしまった。

あまりの急展開に、ハーピーたちは着いていけない。生き残ったことを喜ぶべき

かどうか、そんな当たり前の判断すらつかなくなってしまうていた。

「——やりすぎちゃった」

後頭部をポリポリと搔きながら、申し訳なさそうに肩を落とす救世主の体は、指揮官の血で染まっていた。



“川神千李、ハーピーの村を壊滅？”

新聞紙の見出しを読み、僅かに口を歪ませる紫。その表情からは感情は読み取りにくい。憤っているのかもしれないし、哀れんでいるのかもしれない。嬉々としていられるかもしれない、悲嘆しているかもしれない。

少なくとも分かるのは、それを紫が求めていたものであるということ。

彼の感情の物差しにおける喜怒哀楽のどれかに当てはまっているのか、そんなことは紫の中では些細な問題であつた。

彼が求めるのは混乱であり、動乱であり、変遷であり、混沌なのだ。

故にこの見出しと内容は彼の興味を惹き、彼を満足させた。

すると、新聞の見出しがじわじわと滲みあがる様になつていく。この突然の変化を、紫は眉を顰めて煙草の煙を一気に吸い込み、溜め息と共に大きく吐き出した。

“崩王、コウガ第三帝国侵略完遂さる”

「急げ、

ドリフターズ  
漂流物」

紫はそう呟き、泥水のように濃い珈琲をズズツ、と啜つた。

「次」





「ふーん。川神学園の制服、か」

南端の貿易大国、コウガ第三帝国——跡地。

燃え盛る城下町と機能していない港、日本の各地に見られる城跡のような土台しか残していない絶望の体現。

その国の郊外、塀の外で赤いピアスの少年が陽気にステップを踏んでいたところ、黒い空間の歪みに仰向けに倒れている一人の少女を見つけた。

少女の服装は見覚えがある、というか、男も同じ学園の服を着ていた。

倒れている少女は体中血塗れで、何故こんな状況で生きているかさえ分からなかった。眠ったように閉じられた瞳、安らかな寝顔、ゆっくりと呼吸に合わせて上下する豊かな胸。なめまわす様にピアスの少年は少女を観察し、一つの結論に辿り着いた。

「——B88W59H89のEカップってところか」

何故かスリーサイズを完璧に言い当てると、満足気にドヤ顔をしてしまうピアスの少

年。

「何してるの？」

そのドヤ顔はぼつちりと見られていたようだが、ピアスの少年は恥じる様子がない。そのドヤ顔を確りと記憶に焼き付けたのは、男と同じ学生服を身に纏った少年だが、明らかに体格が違った。例えるなら、ピアスの少年は風俗街にいる客引きのようなシユツとしたスマートさがあるが、後から現れた少年は風俗街の締め出しや金を払えと恫喝するようながたいの良さが見受けられる。それくらいには印象の差がある。

身長はほぼ同じはずなのに、纏っている気迫と言うか、鬪気と言うか、生命から感じ取られる雰囲気からして別物だった。生きる方向性が異なっていた。

「これこれ、どつちだと思うよ？」

ピアスの少年は倒れている少女の胸をチョンチョンと突いてニヤニヤしながら少年に訊ねた。その問いに少年は大きく溜め息を吐いた後、実にいや嫌そうな雰囲気醸し出しつつ呆れたように答える。

「無駄なことは聞かないでほしいんだよね。臭いで分かるでしょ？」

「あー……。面白くねエな相変わらず。ちっとは心開こうぜ」

ピアスの少年の言い分に少年の目が一度閉じられ、うつすらと開けた目蓋から人を見下すような冷たい視線を送って呟く。

「——あーあ、面倒くさいなあ」

「時折出るその本音だけで話せばいいのにな？」

揶揄するような男の物言いに少年は何も答えず、倒れている少女の体を持ち上げて背負った。

「テメエ待ちやがれ！　ずるいぞ、背中に当たる二つの柔らかさに興奮するスケベは俺の担当だろうが！」

「——僕が興奮するのは自己主張激しい胸じゃなくて、適度に主張したつつましい

胸。あと、この場合重要なのは柔らかさじゃなくて臭いだから  
「お前やっぱり本音の方がいいって。いい感じにキモい」

## 第七幕 Samurai heart —侍魂—

川神千李がハーピーの村を救ったと同時に壊し尽くした頃。そこから遙か南の国、コウガ第三帝国が滅亡した。

コウガ第三帝国はこの世界の南半分の商業に関わっていた商業大国。特に流通や貿易に関しては支配権を握っていたと言える。食物衣類と言った生活必需品から、鎧や剣と言った戦争道具も彼らの商品として扱われていた。南半分に住んでいる住民にとつて、ありがたい存在でもあり目の上のたんこぶでもあった。

南の商業連合はコウガ第三帝国を本拠地としており、その内の九割が傘下に納まっていた。企業規模から保有人員まで異なった雑多な組合が集まり、一つの大きな国となっている。中枢にいる極少数の首脳陣と、ばらばらになりかねない組織の集まり、それがコウガ第三帝国という大国の正体である。

五十年以上昔のこと、一人の人間が何の取り柄もなかった村を数年で莫大な富をもた

らす国へ変貌させた。その手腕たるや、実に手慣れたものだったという。まるで「未来予知」ができていると思わせる程、先見の明に長けていたとされている。

その男、「悪七兵衛」と名乗った。

男は他国から利益を必要以上に得ようとしないう村人の態度に納得がいかず、全力をもつて交易の最重要な点は何たるかを叩きこんだ。必要な分だけ殺し採取し蓄えを持つとうとしない、昨今のインディアンの間違つた理想図のようなお人好し文化生活を男は忌み嫌っていた。

苛立ちを覚えつつも、男は他国との通貨の実質価値の差がこの貧困を招いていると指摘し、悪銭の廃棄から着手していった。

そして、如何にこの村が経済交易港として優秀かを伝え、利益を上げやすい手段を教えて村全体を唆した。まったく交易の知識がなかったこの村の人間に、バビロニアや古代ギリシャの古代交易から始まり、イスラーム黄金時代の一つの特産物の流れ、安土桃山時代の株仲間廃止後の楽市楽座、経済観念が市場に落ち着き現れた法則、そこから生まれる恐慌や好景気の流れ。これらの「欠点」と「失敗」を全て踏襲し、独自の経済交易論を展開していった。

男の指示に基づき、自身の村でしか取れない特産物の値を上げたり、港を使った交易を増やしていったりと、初歩的なことから始めた時点で、この村は国として生まれ変わ

り始めていた。交易港として非常に優秀なこの国の地価を上げ、参入を希望する他の商業連合からも資金を搾取する体制も整った。

数年後、村の規模が数十倍にまで達した。しかし、男の目はどんな未来を見たのか、突如男は姿を消してしまった。

彼が残したものはあまりにも大きかった。決して平等とは言えないコウガ第三帝国の利益運用は、コウガ第三帝国の存続に必要なものとなっており、残された者たちは彼の遺産を頼りに交易を繰り返していく。

しかし、彼らは男ほど交易の才覚がなかった。故に、分裂の危機に瀕しながらギリギリを保つ危うい爆弾のような国となってしまうているのだ。

話はその貿易大国であったコウガ第三帝国が滅びる一時間前に遡る。



コウガ第三帝国、南西のドラグ区、警備兵駐屯所。ドラグ区の治安維持や郊外の監視を務める警備兵たちが屯している。その駐屯場は上流階級の送迎など考えていない無機質なもので、何も知らない者が見れば監獄かと錯覚させられることだろう。

その駐屯所前に、ものものしい雰囲気を放つ無作法な有り様を見て、呆れたように溜め息を吐いた和服の男がいた。

男の服はこの世界において異彩を放っている。ギョツ強く絞めるのは腰の帯だけで、それは念入りに何重にも縛られている。それでいて、袖口や裾口は必要以上に大きく空いており、見ただけでは緩すぎる服装に見える。しかし、この服には身と気を引き締めてくれる効果がある。

まったくこの手の服がないという訳ではないが、それは遺産として管理されている。和服の男は大きく空いた左の袖に右手を入れ、真つ黒な扇を取り出した。これもまた、この世界では異質なものと扱われる。

男は扇子をパツと開き、口許に当てて声を発する。

「シン。交渉はどうだ」

『こちら北のペガス区、シン。駄目です。ここの連中、樂觀視しすぎて』

するとどうだろうか、扇子が男の声を聞いて返答したではないか。どうやら、男は扇子を通じて誰かとコンタクトをとっているようだ。その原理はこの世界でも別の世界でも皆目検討がつかない。



「最悪の状況を考えて、彼女の手を借りてくれ」

『漂流物<sup>ドリフタレス</sup>だけでも確保、ですな』

「そうだ。私も二人の漂流物<sup>ドリフタレス</sup>を保護する。後で中央のアルト区で合流しよう」

それを最後に男は扇子をパチンと閉じ、重々しい扉をグツと押し開ける。大して重くはなっていない人間用の出入り口とは言え、この場の雰囲気<sup>雰囲気</sup>に染まった扉は実際よりも重い物体であると錯覚させられてしまう。

男が中に入ると、人の出入りを管理している兵士が一瞬眉を顰めて疑惑の視線を送った。しかし、兵士は男の服に刺繍されている燈火<sup>ともしび</sup>のマークに気づき、身を改めて右手で敬礼をする。この右手の敬礼はコウガ創立時からの決まりのようだ。

『行燈<sup>ラ</sup>機構<sup>ン</sup>様。御足労、感謝いたします！』

『もてなしは不要だ。例の漂流物<sup>ドリフタレス</sup>と思しき二人組に会わせてくれ』

『はっ！』

男は扇子に向かって話していた時とは違う言語を使っていた。二つの言語を扱える

のならバイリンガルと言うのだろうか、この状況では若干不適切に思える。扱っている言語どころか、存在している世界が違うのだから。

兵士は男に歩いてくるように伝え、先導して建物の奥深くへ進んでいく。奥深くと言いか、実際には螺旋階段を使つて垂直降下していく。

一分ほど階段を下つて男が見たのは、二重三重にと鎖で封がされていた鉄格子だった。鉄格子は煉瓦造りの壁に嵌められており、昔からある遺跡のようなものだと思断した。どこか彼の和服と同じ日本製の臭いがする。

地下に潜つたこともあり、男の体をひんやりとした冷気が掠めた。この冷気は熱を吸収する作りでできている空間が産んだものなのか、遺跡のような印象を与えるこの空間に残つた怨念のようなものが与える超常現象的なものなのか、男の興味は尽きない。

大きな鉄格子の鍵を開け中に入ると、おおよそ客を迎え入れるような場所ではない汚い個室ばかりの空間に出る。その個室もまた鉄格子で閉じられている。

男の知識と照らし合わせると、この空間には「独房」という名称が当てはまる。その独房の一つから、豪快な笑い声が響いてくる。

「おつ、なかなかいける口で……。ささもう一献!」

「いやあかたじけなか! この歳で独り身じやと飲み仲間は特攻ぶっこんで皆逝いつちまつて嘆いておつてのう。かように老体だけで花を咲かせて杯を交わすのが懐かしゆうて懐かしゆうて……」

「正しく、生き残つた者は辛いもんで。家内や親族が多い分、ワシは幸せなんだと痛感しとるよ」

「子宝を授かつて正解じゃぞ? 儂も近所の学生共と将棋を指したり茶をしばいたり、心が洗われ温められる。若い連中と長生きはするものじやと我が身で実感しておつてのう」

「そうは言うものの、やはり実の孫は可愛いながらも手を焼かされちまう。あれはどうだのこれはどうだの捲まし立てるように剣術を教えろとすがつてきよる」

「嬉しい悲鳴という奴じや。諦めて教えてしまえばよか。」

「結局教えちまつた。甘やかしてるつもりはないんだがよ」

「かつつか! 未熟さも不貞さも、何でもかんでも愚痴るとよか! 爺同士、喧しく文句と批判で肴を盛り付けようぞ!」

老人二人による豪快な笑い声と他人の目を気にしないような会話は、男が独房の目の前に立つても止むことがない。その独房だけ他の独房と違って暖かいイメージが植えつけられる。他の独房の色が黒や青といった寒色で染まっているとすると、この独房だけは橙や赤といった暖色で包まれていた。

独房から溢れてくるのは何も温かみだけではない。男の鼻腔を貫く強烈な臭いは独房に蔓延し、通気性だけは抜群のために簡単にその臭いは漏れてくる。

老人二人の紅潮した頬と、タガが外れたような大笑い。この臭いが酔っ払いの血の中にある酒の成分が呼吸器官に漏れた、俗にいう酒臭い吐息だと分かるのに十秒とかからなかった。

『彼らに酒を与えたのか？』

『はっ！ 彼らが漂流物ドリフターズというのは言葉と服装で判断し、そのため武器も押収してません。しかし、奪えない代わりに与えることが難しく、何を欲しがっているのか分かりませんでした。しかし、どこからともなく酒を出した左の老人がいきなり酒を酌み交わし始め、酒乱の様で鉄格子を叩き始め怒鳴りました。それはこちらの世界の酔っ払いと何ら変わりませんでしたので、適度に酒と肴を与えたら大人しくなりました。故に酒は随時提供しております！』

『……………何をしでかすか分からない彼らを宥めたのはいい判断だ。礼を言わせてもらおう、ありがとう』

『いえ！…これが任務ですので！』

男の言葉に兵士は僅かに頬を緩ませたが、すぐに表情を引き締め敬礼する。

兵士に鉄格子を開けさせ、鉄格子の中へ男は徐に侵入する。すると、着流しを着た男が自身の持つ二本の長い袋の内一本を手に取り、封を開けて中に入っていた刀を取り出して威嚇する。

「ああ？ 誰ぞお主！」

「ちーと暖まってきたところだな。折角のいい気分を壊されちゃあ堪ったもんじゃ

ねえ」

遅れて、というか一人の反応に任せていたもう一人の老人も苛立ちを我慢できなかったのか、脇に差していた刀に手をかけて殺気を放っていた。

その殺気に外で待機していた兵士たちが思わず剣を抜き構えたが、それを男が手で制する。この先に入ってくるなど無言の圧をかけた。

「日本出身の異世界人とお見受けします」

「ー」

「刀を収めてくれると助かります。話だけでもさせていただきたい」

男はそう言つて両手を上げた。敵意はないとその目と行動で示す。膝をついて額を床に擦りつけろと言われても応じるような潔さを二人に与えた。

老人二人はその姿を見た後で顔を見合わせ、大きく息を吐いて見せていた刃をしまった。

「お主、日本語が通じるようじゃのう。いやはや助かったわい」

「全くだ。ここの連中は何言ってるか分からねえ。何大陸の何人だよ、彫り深すぎだろ」  
「ははは、よく分かります。私も意思疎通が完全に測れるようになるまで数年を要しました」

「立ったままの話もなんじゃ、まあ座れ」

三人で酒樽を囲む様に座り、老人二人も刀を床に置いて戦う気がないことを示す。完全な話し合いの場を設けるという意思表示だ。

話の分かる人物でよかったと男は安堵して、話し合いを開始する。

「差支えがないようでしたら、お名前を伺いたい」

「大道寺銚治郎。とつくに隠居したしがない爺じゃよ」

「立花虎蔵。銚治郎殿と大して変わらん」

「なるほど。もう一つお聞きしたい。あなた方の世界の暦は何年でしたか？」

「儂は二〇〇九年じゃが……」

「ワシは二〇〇二年。銚治郎殿が七年後の人間だと申すからな、これが夢の中の話だと思ってたがどうも違うらしい。こんな現実味溢れる細かな夢があつてたまるかつての」

——なるほど、よく混乱せずここに留まってくれたものだ。

——やはり、酒を二人に与えたあの兵士には感謝してもしきれないな。

「申し訳ないが、もう少し質問に付き合っていたきたい。これが終わればそちらの疑問に全て答えましょう。全てに応えられる自信はありませんが、知っていることは全てお答えいたしますま——」

「待たんか」

食い気味に男の発言を止めた銚治郎。一体何事かと男も虎蔵も銚治郎に顔を向ける。

「疑問とか質問とかの解決よりもな？ 名乗りぐらいいせんか戯け。年長者にだけ名乗らせるとは無礼千万であるぞで？」

「銚治郎殿は本当に年功序列に拘るな」

「キツチリしておきたい性分でのう」

「失礼しました。私の名は——」



男が申し訳なきように自分の名前を名乗ろうとした瞬間、男は言葉を紡ぐのをやめた。いや、やめさせられたと言った方が正しいのかもしれない。それほど突発的に男の言葉は止まってしまったのだ。

それだけではない。銚治郎も虎蔵も、男が言葉を止めた瞬間に立ち上がり刀を取って臨戦態勢に突入した。周囲に敵はおらず、殺意も敵意も何も感じない。

何か、嫌な予感がするのだ。

男は焦燥感に駆られて扇子を取り出し広げ、先程のように交信を取ろうと図る。その手は若干震えており、汗も扇子の要に滲み出していた。

「シン、シン！ 聞こえるか!？」

『様！ 燈ともし、ザザッ！ ……う答……ザザザ……ます……様……!』

途切れ途切れの言葉しか扇子からは伝わってこない。電波が悪い携帯電話の砂嵐の

ような不快な音がするようだ。男は眉間に皺を寄せ、交信を取ろうと努力する。

しかし、その交信がうまく取れない理由を考え始めた男がハツとしたように顔を上げ、扇子を閉じて兵士に向かって叫んだ。

『崩王の手が迫っている!! たちちにコウガ全土に通達を——』

その言葉が最後まで紡がれることはなく、南西ドラグ区の駐屯所は崩壊した。



コウガ第三帝国からはるか西にある山林部、通称「黒き森」。

そこにはコウガ第三帝国らが邪魔だと押しやり見下してきたゴブリンたちの住処だった。決してその森には黒い色の木々もなく、黒を連想させるものなどせいぜい洞窟しかない程度には綺麗な場所だった。

しかし、十数年前にそこにゴブリンが強制的に収容されたことで、その森すらも醜く

扱われるようになった。ゴブリンの醜悪さは空気感染し、命ある者全てを汚していくと言わんばかりの処置だった。

ゴ布林たちは耐え忍んだ。自分たちが人間から何故こうも邪険に扱われるか分かっていなかったが、きつといつかは分かりあえる。そう信じてきた。姿は醜くとも、心はそこいらの人間よりもはるかに清らかだった。

——人間に見放されたと、家畜を見るような目で見られていると、自覚せよ。

しかし、顔に狐の面をつけた人物が現れたことで彼らの考えは一変する。その人物は黒と白のラインが交差するような柄の布を体全体に纏っており、顔も姿も何も分からない。しかし、この正体不明の人物がもたらしたものはすべて真実で、ゴ布林たちを揺さぶった。

狐面の人物はゴブリンの奥底に溜まっていた黒い感情、憎悪を引きずりあげ体中に浸透させ、醜い感情と醜い身体という完全一致の兵士を作り上げた。

—— 反抗犯行とは、正当でなくてはならない。

—— 謀反無品とは、栄光でなければならぬ。

—— 我らは下衆で無礼な連中を、下衆で無礼なやり方でやり返さねばならない。

—— 参集せよ。

—— 反乱犯濫を望むものよ。

黒く染まり切った彼らは決意した。

黒き森からずると這い出てくる、黒い兵隊の波。兵士は自身の顔を布で隠し全身を覆い、彼らの王を敬うかのような服装で現れる。

その黒い波を先導するのは、黒い馬に乗っている一人の金髪の少女。

少女は川神学園の制服を盛大に着崩し、下着を黒と赤が基調の下着を露出させてい

る。決して大きいとは言えない胸ではあるが、興奮しない男はそうそういないであろう。

「我ら南の崩王軍の初陣だ！ 気を引き締めろ豚共オ!!」

少女の罵倒に咆哮が爆発の様に発生する。彼ら兵士は自身が醜いと自覚し、開き直つて人間を殺そうとする者たち。歪んだ士気向上が、これ以上ないくらいに効果を発揮している。

その少女の遙か上空、少女が乗っている馬よりも大きな飛龍の上、川神学園の制服の上から、両肩に星のマークが入った縦縞のジャケットを羽織り、黒いキャップをやんちゃな少年の様に唾を反対にして被る少女がいた。キャップのサイズ調節の際に使うアジャスターから、二本の髪の毛がピヨンと飛び出ているのが妙に愛らしい。

「開幕戦の開始を告げる大役、果たさせてもらいます」

少女は背に納めて抱えたい金属製の棍棒を手を取った。その形状は半分が持つ場所の二倍程度膨らみ、残りは持ち手と接続部となっている。

これを少女の世界では、バット、と呼ぶ。

「星たちの怒りよ、降り注ぎなさい」

少女がバットで天を穿いた瞬間、コウガ第三帝国の上空に明かりが灯る。

その正体は、降り注ぐ隕石の壁だった。

第八幕 Paradise Lost

「こちらシン！ 燈火様！ 燈火様！ 燈火様！  
応答願います！ 燈火様！」

時を同じくして、北のペガス区駐屯所。南西のドラグ区とほぼ同じづくりの独房である地下室で、ドラグ区に赴いていた男とほぼ同じ服装で、同様に扇子を広げて会話を試みようとしている女がいた。

女の和服は桃色を基調としており帯は白、所々に華が散りばめられており、如何にも女の子が着るような服装だった。しかし、その女は女の子と言うには大人びていて、実に妖艶で美麗な女性のようにだった。

しかし、その女性の美しさも焦燥感に打ち消され、大人びているイメージは一旦取り外した方がよいだろう。額から滲んだ汗が煌めいているが、暖かさのある光ではない。

「ダメ……。通じない……。！」

「おい大丈夫か？」

奥歯を噛んで現状に焦るシンと名乗った女に、宥めるように声をかける少年がいた。少年は黄色と黒の虎縞の肌着の上から、右胸のポケットに硬貨程度の大きさのワンピーストだけ縫いこまれた白いシャツを着ていた。虎縞の肌着にも目を引かれがちだが、その腰に差してある日本刀が一際明瞭である。

さらに、少年の頭部には包帯が巻かれている。よく見ると体中に傷が目立ち、まだ治りかけであると印象付ける。少年は正しく怪我人であろう。

「何かさ、嫌な臭いがする。闘争とかそんなんじゃないな。こう、直接鼻を抉って脳にくるような……」

「あ、私も……」

少年の曖昧な感覚での物言いに、少年の背後に隠れていた少女がおずおずと手を上げて賛同した。

少女の服装は少年と同じように制服だが、少年の学校の校章と思われるワンピーストの刺繍はない。別の学校の制服なのだろう。少女のセーラー服のタイは緑色で、それに



合わせているのか、胸にかかる程度の長さの髪を肩の高さで二つに縛っているリボンの色は薄い緑色だ。固より髪が若干緑がかっているの、リボンは愛用していたもので、アイが後付けかもしれない。

「漂流物ドリフターズだけが分かる感覚——じゃあこの交信妨害も?」

シンが二人の言葉により何かを理解した瞬間、突如大きな震動が彼らを襲った。

地下深くに作られたこの独房にも到達する地響きだ。地震かもしれないが、少年少女が感じ取った感覚を信じているシンにとって、この揺れは地震ではないという確信めいたものがあつた。

パラパラと天井から砂が零れ落ちる。いくら頑丈に造られている地下室とは言え、強力な力で上から叩かれたら、はたきで落とされる埃の様に必然的に落ちる。

自身の焦りを何とか抑え込み、シンは数秒逡巡し決断を下す。

『警備兵はすぐにコウガ全土に通達しなさい！ 崩王の手が迫ってきています！ 今の揺れは崩王軍の攻撃で間違いありません！』

『な、何っ!?!』

『急ぎなさい！ 私ドリフターズは漂流物の二人をつれてここから脱出します！ 崩れる恐れも考慮して貴方も非難しなさい！』

『り、了解!!』

シンという女の宣告と命令に狼狽した兵士は、自身の装備を確認して素早く階段を駆け上がっていった。全く気を引き締めていなかったのだろうか、何度か躓きよろけている様は実に無様だった。

シンは燈火という和服の男がコウガに来た時点で、この国が侵略対象に定められていると兵士に告げた。しかし、兵士はそんなはずはないと樂觀視して聞き流していた。その結果が今の慌て様、シンはその姿に呆れてものも言えなかった。

兵士が駆け上がっていたことを確認したシンは座り込んで二人の肩を掴み、確りと目を見て話しかける。その吸い込まれるような瞳に、二人は思わず唾を飲み込んでしまう。

シンは二人の肩を握る力を強くして、息をゆつくりと大量に吸い込み、囁くように語

りかける。

「敵軍によるこの国の侵略が開始されました。ペガス区が陥落させられるのも時間の問題です」

「!?!」

「安心してください。貴方たち二人は、私が命を懸けて燈火様のところまで届けます。ですから、ここから脱出しま——によわっ!?!」

そう言つてシンは二人の肩を握っていた手で彼らの腕を掴み、引き上げ立たせて独房から連れ出そうとした。

しかし、シンは二人を引き上げることはできなかつた。まるで壁に取り付けられた縄でも引つ張つているかのように動く気配がなかつた。反発によりシンは逆に引つ張られるようにして尻餅を付いてしまう。

「あいたたた……。な、何してるんですか二人共！早く出なきや崩れてしまふかも——

——!」

「訂正してくれたら出ます」

「……………え？」

「さすが。オレも同じこと言おうとしてた」

ペタリと座り込んでしまったシンにずいつ、と近寄った二人の顔は、ほんの少しだけ怒気を孕んでいるように見えた。

シンが座っている床から来るひんやりとした冷たさと、独房特有の冷感も相まってか。二人の憤りの熱量を敏感に感じ取ってしまった。いた。

「シンさんは私たちを助けてくれたんだよ？　なのに最後まで助かりっぱなしってのは、死んでも御免です！」

「この郊外で死ぬ寸前だったからさ。シンには返しきれない恩がある。なのに命を懸けてつて、悲しいこと言わないでくれ」

「……………」

シンは二人と初めて出会ったころを思い出した。

一ヶ月前、シンが馬に乗ってコウガ第三帝国の郊外調査に出ていると、東側の野原に

少女を庇うように倒れている少年がいた。シンはすぐに二人に駆け寄り介抱しようとした。

すると、東側にある森から黒い兵士が三人出てきたではないか。

シンはその時瞬時に察した。この二人は漂流物なのだ。

漂流物の力ならば黒い兵士を三人打ち倒すのは簡単かもしれないが、漂流物と思しき

二人は気絶しており戦うことどころか立つこともできなかった。

シンは黒い兵士三人に立ち向かうことを決意した。漂流物は守り通さなくてはならない。それが彼女の所属する行燈機構の絶対的な意向なのだ。シンは行燈機構最高責任者である燈火と言う男から授かった魔法のような力で黒い兵士を圧倒する。

黒い兵士を追い返すことに成功し、シンは二人を馬に乗せて何とかコウガに連れ帰ることに成功した。漂流物は何をしでかすか分からない。そういつた統一固定観念のせいで独房という最悪の待遇ではあったが、シンは親身になって二人を介抱した。

少年は少女を庇い所々に傷を負っていたが、意外と傷も浅いこともあってすぐに快調へ向かった。少女は困惑していたが、同じ境遇に置かれた少年が一人いることで少しは平静を保っているようだった。

そして一ヶ月後。二人はすっかり普段の体調を取り戻したようだったが、シンは二人に懐かれたというか、頼られるようになっていた。

そんな二人が、シンのために戦おうとしていた。恩を返そうとしていた。

「これでも劍聖の娘です！ 自分の身は自分で守れます！」

「二応オレも劍聖の孫だ。『女に守られてばかりのヘタレ野郎』なんて言われちゃったから、じいちゃんの名前に傷が付いちやうからな」

少年少女は立ち上がり、自身が持っている装備を掲げた。

少年の剣は一切の波紋がなく、現代日本における日本刀としては異彩を放つ。しかし、その青々と光を反射する刀身は紛れもなく劍そのもの。美しさを捨て、力だけを求めた末に生まれた、折れも曲がれもしない人斬りの刀。何年と握り振り続けてきたその刀の以前の持ち主の名譽を守るため、少年は刀を振るう。

少女の剣は黒と金を基調とした日本刀。しかし、少女の手に確りと馴染んでいる様子は見受けられなかった。触ってまだ数回と言ったところか、真剣を握る回数も少ないのだろう。しかし、もう一本背負っている竹刀の持ち手はすり減り艶が出る程擦れていた。実戦経験の少なさを、これまでの人生全てで補う。

二人は顔を見合わせて笑い、剣を鞘に納めてシンに手を伸ばす。

「友達でしょ？ 私たち」

「少しくらい、恩返しさせてくれ」

「……………それじゃあ、一緒に逃げ切りましょう」

シンは涙目になりながら二人の手を取った。

いつか二人を裏切ることになるうとも、シンは決してこの手を傷つけない。そう誓った。



コウガ第三帝国は空襲を受け、既に半壊していた。階級を問わず人の住処は平等に押しつぶされ火事になり、道路や橋といった通路は悉く遮断されている。港にあった船は全て沈められている。出入り口である門も潰され、完全な虫籠となった貿易大国。住民は殺されるのを待つばかりとなってしまうている。

その恐怖の蔓延するコウガ第三帝国の中央のアルト区上空、まるで部屋に明かりを灯す照明器の様に、まるつとした月のような背中を持つ巨大な飛龍が停滞していた。その

飛龍とびりゆうが与えるのは希望あかりではなく、絶望かげであるが。

その飛龍の大きな背に乗る狐面の人物と四人の人間が乗っていた。狐面の人物だけが立っており、その人物に向かい四人の人間が跪いている。狐面の人物が主で、四人の人間は従っている関係だとハッキリ分かる。

「顔を上げよ」

狐面の人物は四人に顔を上げるよう指示し、四人は即座に顔を狐面の人物に向けた。

「大和田伊代」

「はい」

「東のタイタ区を落とせ」

「了解しました」



四人の内一番左にいた少女が立ち上がる。その少女、大和田伊代はこの惨状を作り上げた、縦縞と星のマークがついたジャケットを羽織った張本人だった。

伊予は飛龍の尾まで歩いていき、何の躊躇もなく飛び降りた。飛び降りた先には何匹もの飛龍が飛んでおり、その背中をピョンピョンと飛び跳ねて下に降りていく。人間業とは思えない曲芸だった。

「伊達瑠奈」

「はい！」

「北のペガス区を落とせ」

「了解です！ それじゃあ行ってきますね！」

残った三人の右恥にいた少女がびよん！ と飛び跳ねるように立ち上がった。その

少女、瑠奈は実に幼い容姿をしていた。年齢を数える際には両手の指で事足りるだろう。あまりにも若くあまりにも小さい。

そして最も特筆すべきことは、瑠奈は両目を真つ黒な包帯で塞いでいることだろう。一筋の光すら入らないよう何重にも巻かれていた。

瑠奈は龍を正面から見て右の翼に向かって勢いよく走っていき跳んだ。くるくると空中で何回転もしつつ、「いやっほー!!」という叫び声を上げながら落下していく。何も見えない瑠奈の先の見えない奇行だった。

「クリステイアーネ・フリードリヒ」

「おうっ！」

「南西のドラッグ区を落とせ」

「了解！ 豚共率いてまっさらな平地にしてやんよ！」

残った二人の内、露出を第一として考えたように服を着崩した金髪の少女が立ち上がった。金髪の少女、クリスもまた伊予と同様に、コウガ第三帝国にゴブリンの兵隊を差し向け崩壊の原因を作った張本人だった。

クリスは堂々とふてぶてしく左の翼に向かつて歩いていき、鞆に納めていたレイピアを抜いて振り降ろす。

次の瞬間、眩い閃光がクリスを包んだかと思うと、クリスの姿はそこから消失していった。

「高坂虎綱」

「……………なんですか、崩王様」

「中央のアルト区を落とせ」

「了解しました……。あー……。気が乗らないなあ……。やるけどさ」

最後に残った一人が、のろのろと立ち上がって後頭部をぼりぼりと搔いた。虎綱は真つ黒なシャツと真つ黒なパンツ。全身を黒で染めつくした上、腕に、足に、腰に、首を除く体中の至る所に橙色のベルトを巻きつけていた。動きが制限されることはないが、見ている者に息苦しさを与えるほどきつくまかれていた。

虎綱は気怠そうに狐面の人物の脇をすり抜け飛龍の首元まで来ると、空を飛んでいた一匹の小さな飛龍を呼び寄せて飛び移り、ゆっくりと下降していった。

「北の戦線から高坂や俺まで呼ぶ必要はなかったんじゃねーの？ 崩王ちゃん？」

大きな体躯をもつ飛龍の上に残されたのは、崩王と呼ばれた狐面の人物だけ、そのはずだった。

飛龍の背中の中央に、赤いピアスの男が大きな酒樽に片腕を乗せて座っていた。男の手には酒樽に入れてあつた柄杓が握られており、真つ赤な液体が零れる程掬われてい

た。

それを口を持って行き一気に飲み干し、再び柄杓を酒樽に入れてかき回す様に液体を掬う男に、崩王がゆっくりと歩み寄る。

「北の制圧は安定している、問題は無い。それに、お前がいると安心できる」

「嬉しいねエ。崩王様直々に口説かれちまったわ」

「好きにしていればいいぞ。参戦するもよし、傍観するもよし、だ」

「コウガはいい酒が集まるからな。二樽ずつ確保したし、この光景を肴にさせてもらおうかね。どうだい崩王ちゃん、駆けつけ一杯ならぬ、駆けつけてやったから一杯、なんつってな」

男はぐいつ、と酒の入った柄杓を崩王に差し出すが、崩王は男の手を押し返してそれを拒否する。「ちえつ」と残念そうな顔を浮かべた男だったが、その返された酒をぐつと呷りすぐに笑顔に戻る。

「国吉灯。お前は廃棄物か、漂流物か。明確にせよ」

「どーすつかね？ いい女が多い方に傾かせてもらうさ」



“BREAKER LORD MAKES A FIERCE ATTACK”

真つ黒な通路の末端にある部屋。扉に“EASY”と書かれたネームプレートが飾られてある部屋の中は妙にメルヘンチックだった。置いてある家具はどれもファンシーなものばかりで、少女の思い描くソファやドレッサーが置かれている。

ただ違うのは、それがすべてモノトーンの配色である、と言うことだろうか。本来なら目に優しくないようなピンクで彩られているようなソファも、とても味気のないものとなっている。ドレッサーに置かれている化粧道具もモノクロで、何のための道具かさっぱりわからない。

女の子の夢は幻想だと、思い描くだけで満足していると、夢を壊すただけに作られたような部屋だった。

さらに、その部屋の主が年端もいかない少女の姿をしているのだから、実に皮肉なものだ。

少女はソファーにどっかりと腰を掛けながらパソコンを弄っていた。そのパソコン

からはどこか悲しみを誘うような女性の歌が響き渡っていた。

パソコンの画面下に曲名が流れる。『歌劇オテロ第四幕「寂しい荒野に歌いながら泣く」』と表示され、そこから聞こえてくる女性の悲哀のメロディーに少女は浸り笑顔を浮かべる。

「——いい調子じゃない」

第九幕  
M a s s  
D e s t r u c t i o n

——タイタ区。

『——ドリフターズ漂流物の反応、なし。ハズレ、か』

燃え盛る街中、煙と共に蔓延するむせ返るような戦争の臭いをもとめせず、鼻をひくひくとさせて周囲の気配を察知していた大和田伊代。お目当ての人物はいなかったよう、バッドを右肩に担ぎつつ歎息を吐いた。

伊代は少しだけ貧乏ゆすりをしつつ、分かりやすく不機嫌そうな態度で、右手でバッドを勢い良く振り降ろした。

すると、バッドの振り降ろした先へ向けて、コウガの遙か上空から拳ほどの大きさの



球体が炎を纏って落下してくる。それは流星のような煌めきと勢いを保っており、見る者を興奮させ、瞬間的に死の淵へ追いやる悪魔の攻撃。

仮に生き残ったとしても、何が起きたか分からないまま激痛に悶え苦しむこととなる。隕石による攻撃など痛みも方法も想像ができないからだ。その痛みも方法も実感したところで、一度も考えつかないようなことだ。混乱と痛覚で先に精神が崩壊してしまう。

大和田伊代の奇術は、人を肉体的にも精神的にも殺しうるのだ。

たった今落下してきた流星はまだ崩壊していなかった民家に着弾する。この辺り一帯の住民は既に彼女たちの従える兵が殺してしまっているが、ひよつとしたら隠れ潜んでいたかもしれない。

しかし、目標となつたのは建造物だけだが、その建造物は跡形もなく粉みじんになり、着弾後のクレーターしか残らなかつた。人が隠れ潜んでいようがいまいが、そんなことは些細な問題だと言わんばかりに消滅してしまつた。

『大和田幹部』

『何?』

『周囲一帯の民家殲滅の進行速度、滞りなく続いております』

物質を完全に破壊しきつた光景を見ても一切動じず、黒い兵士の中でも隊長格にしか与えられない白の腕章をつけている兵士が伊予の目の前で膝をついた。

実につまらない報告だと思いつながら、伊予は一切兵士に視線を向けることなく、「ご苦労」とだけ告げて持ち場へ戻るように促した。

しかし、兵士はまだ伝えていないことがあるのか、その場でまだ膝をついたままだった。

『まだ、何か?』

『どうやらこの国のどこかに、漂流物ドリフタールズがいるとの伝令が入りました』

『!』

伊予はそこでようやくやく兵士へ視線を落とした。

『複数人いる模様です。行燈機構ランペンクトを複数班確認したと……』

『情報源は誰?』

『パルチザンです』

『国吉先輩、ね……』

情報の出所を確認したところで、伊予はぺろりと舌を出した。口元が緩んで落ちかけた唾液を素早く舐めとるためだ。その表情は恍惚に染まっており、極上の料理を目の前に出されたように伊予は歓喜に打ち震えていた。

『タイタ区担当の兵士全員へ通達。このタイタ区は、全て私のN・B・S<sup>スターマイン</sup>で葬る』

『! し、しかしそれでは物資が——』

『口答え以前に、兵士に伝えた方が得策』

有無を言わせない伊予の態度に、兵士は顔面蒼白とさせて一目散に駆け出して行った。格場の分隊長たちに伊予の行動を教える気であろう。

今の機械的対応は、物資は十分にあり崩王が分配に困るほどだということを、伊予は知っているからこそ取れる言動だった。物資がどうのこうのと言っているが、伊予からすれば足りなかりうが余り有ろうが、実にどうでもよかつた。

彼らは、世界を滅ぼす崩王の下についている。後先のことを考えていては、この世界をまつさらにできないからだ。

「……………まだ、打てる」

自身の再現あるエネルギーの残量を確認しつつ、伊予はバッドを両手で握って素振りをする。

「うーん、三分後にでも打とうかな」

気まぐれ、タイタ区完全消滅が三分後と決まった瞬間だった——



——ペガス区。

『何をしている！ たかが少女一人相手に！』

『そ、そんなこと言われても……!!』

『このガキ、滅茶苦茶だ!!』

劍を持ち、槍を握り、民家の上から弓を構える兵士たち。綺麗な円を描くように隊列を組み、中央にいる一人の少女を逃がすことのないように肉の壁を作る。

その形状はさながら小さなコロセウム。しかし、圧倒的な違いが内包されていた。

中央にいる少女が甚振られる様を見て興奮するような野蛮なものではない。こうでもしないと少女を殺しきることができないという苦肉の策だ。周囲を取り囲む兵士たちは興奮などしていない。むしろ恐怖に飲まれている。

その恐怖を助長し膨張させるのは、包帯で視界を完全に閉ざしてなお兵士を五人殺した異端な少女。人であった五人の肉塊を積み上げてその上で飛び跳ねる少女は、人を玩具か何かとしか思っていないようだった。

死の臭いというパフューム、血というチークを裝飾として身に塗りたい、少女はにつこりと笑う。

『おじさんたち、もっとホンキだしてよ!』

笑顔と言葉は実に愛らしく、そこだけ切り取って保存すれば、誰も彼もが少女のことを愛玩するに違いない。もし少女を貶すことがあるのであれば、間違いなく僻みや嫉妬心から来る醜い例外であろう。

しかし、少女の顔と少女の持つ双剣にはベツタリと血がこびりついており、その可愛らしさは悍ましさと姿を変える。敬愛の対象は畏怖の対象へとすり替わり、慈愛の目を向ける者たちは殺人の手段を向ける。

少女は混乱を生み出す怪物けものである。

この世に生まれ落ちたことを否定されるような存在と成り果てた。

『くそっ！ くそっ！』

『弓兵は何をしている!? とつと射殺せ!!』

『たった数メートル、外してんじやねえよ!!』

兵隊の作る輪の内側、最も近くで少女に触れている兵士が助けを求めるように声を上げた。実にみつともなく、失禁しているもおかしくない程恐怖に飲まれていた。声も体もブルブルと震え、平衡感覚すら確かではないだろう。

その叫び声の対象である弓兵たちは、肉壁を作る兵士たちとは違った恐怖に身をもま

れていた。

『矢が消えた、どうなってんだ!』

『一瞬でなくなっちゃった、矢を放った瞬間にどっかいつちまった!!』

『何なんだよ、何なんだよあのガキは!!』

弓兵たちはありったけの矢を全力で少女に放っていた。殺すつもりで急所を狙って射抜いていた。矢など当たってしまえば、体が小さい程に「死にやすい」。

剣術、槍術、騎乗など、騎士に必要な技能を訓練する際に最も気を付けて行うのは間違いない。理由は簡単、弓の事故は死と確実に隣りあわせだ。剣で手を切り落とすことになったとか、落馬して頭を打って半身不随だとか、命が残る事故の方が少ないが事故は多い。比べて、弓は事故率は低いが死亡率は極めて高い。

人に向けての武器としての殺傷性は極めて高い。細いと侮るなかれ、肉を引き裂き骨を貫き、簡単には抜けることのない殺人道具の一つだ。

それを鍛えられた兵士たちが少女を相手に本気で射ても戦果は一切上げられない。少女に矢が届くことなく、矢は底を尽きてしまう。

『う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

『うらああああああああああああああああああああああああ!!』

痺れを切らした、というか恐怖に耐えきれなくなり、一刻も早い解放を望んでしまった兵士二人が、大きく剣を振りかざして少女に向かって突貫した。それに続き、こうなれば物量で押しつかないと考えた兵士たちは、本能の赴くままに体を動かしひた走る。

兵士の間をすり抜け槍は突きだされ、多くの剣は幾重にも重なり面となる。避けることは不可能と断言できるほどの狂気の雨に、少女は心を躍らせる。

『そういうの知ってるよ。　ジサツシガンシヤ』　って言うんだよね？　プーさんに教えてもらった!』

少女は双剣を振り回し、スカートの裾を浮かび上がらせて綺麗な円を描く。それこそ踊っているようにふるまう少女だが、バレエのような形式ばった物ではなく、ただ適当にクルクルと回っているだけのような、児童に等しい拙いもの。



その円運動に触れた兵士とその武器は、瞬間的に消し飛ばされてしまう。

『うぎやあああああああああああああああああああ!』  
『もつともおつと、うたつて?』

肘から先がなくなり、のた打ち回る兵士や、四肢のどれかを失った兵士からの出血を浴びて腰を抜かしてしまった兵士たちは、少女に見下される形となって地面に這いつくばる。

それを見下すことなく見下ろして、少女は踊りを続ける。戦意を喪失してしまった兵士たちはもう用済みだと言わんばかりに、後片付けを開始する。

まだ立っている兵士の方が多い。瑠璃色の髪の少女、伊達瑠奈の学芸会は始まったばかりだ。



## ——ドラグ区。

『お前が廃棄物とやらかあ？』

南西にある酒場の多い港寄りのドラグ区。大和田伊代の派遣された民家の多いタイタ区や、伊達瑠奈の派遣された兵士の訓練場が多いペガス区とは違い、ここには外部からの人間が集まる集会場や酒場が多いため、多種多様の人物が集まる。

貿易大国とはよく言ったもので、獣人も人間も互いの利益のためだけに行動しており、商人はその際のリスクを軽減する策を常に講じている。

端的に言えば、用心棒然り傭兵然り、金で動く腕っ節に自慢のある屈強な戦士が集っていた。

コウガ第三帝国の四つの区の内、黒い兵士たちが一番苦戦していたのはこのドラグ区であった。戦士たちの坩堝と化しているこのドラグ区で、黒い兵士たちは侵略を押し進めることができないでいた。

その停滞状況を打破するために、一人の少女が眩い光と激しい轟音と共に降り立つ

た。

降り立った少女の風貌は決して清らかと言えるものではなかった。シャツのボタンはなく前が空いていたり、スカートもところどころボロボロになつていたりで下着が見えてしまつてゐる。それでも、少女はそれを隠そうとしない。むしろ見せつけてゐるようにも見えた。

そんな少女の前に一人の男が立ちふさがる。裕に二メートルは超えてゐるであろう身長に加え、丸太のような四肢を取り付けた巨大な体躯。その体中に傷が目立つが、少女同様それを見せつけてゐるようだった。

背中には自分の身の丈以上ある大剣を携えており、行商人とは呼び難い風貌だった。男のはるか後方で怯えながら様子を窺つてゐる、如何にも行商人のような人物を確認した少女は、この男が雇われた用心棒のようなものであると推測する。

『廃棄物<sup>エシズ</sup>だが、それがどうかしたか』

『聞いていた情報よりもちよいと大きいな。別の廃棄物<sup>エシズ</sup>つてことか……。まあいいか、お前らの首を王に差し出しゃ、一生遊んで暮らせるつて言うじやねえの』

『金欲しさか?』

『傭兵が金のために戦って何が悪い』

なるほどやはり傭兵だったか、と少女は冷笑を浮かべる。

『何がおかしい?』

『何も? 欲望に正直でいいことじゃないか?』

『そんじゃあ、欲望のために死んでくれや!』

話を強制的に中断させるように、体中の筋肉を全力で使って目にも止まらぬ速さで大剣を鞘から引っこ抜いて少女へ振り降ろした。剣が振り下ろされた瞬間、ドン!! とおおよそ剣で切り裂かれた際には聞こえないような音が響いた。

大木が薙ぎ倒された時の崩壊音や、大木を用いて城壁を破壊した時の轟音に近い、質量の大きさと威力の高さを示す打撃音に近かった。

傭兵は確かな手ごたえと仕留めたという確信を以て、だらしなく不敵に笑う。

しかし、その剣の下敷きになっていたのは少女ではなく、傭兵の後方で様子を窺っていた行商人だった。

『!?!』

『どうだい？ 自分で依頼人を殺す快樂つてのもいいもんじゃないか？』

少女の声が男の耳元で聞こえた。男は恐る恐る、がちりと錆で固まってしまった螺子の様にガクガクとしながら右を向いた。

するとそこには、男の肩の上で胡坐をかいている少女の姿があった。その表情は男よりもだらしがなく、実に不気味な笑顔だった。

『な、なん……!?!』

『悪いけどよ。答えてやる義理はないし、義理つて柵しがらみに囚われて足踏みするほど暇してなくてよ』

『ぐえっ!?!』

少女は股で男の首を横から絞めつけて動脈と気道を押し潰し、左手で頭頂部の髪を引つ張り上げて頭部を固定する。一時的な呼吸困難、動脈循環不全という、頭皮に勢いよく走った痛覚を塗りつぶすような本能的に拒絶したい苦しみが男を襲う。

何とか呼吸を取り戻そうと少女の太腿をグツ、と握りしめて引き千切つてでも剥がそうとする男だが、それよりも先に少女が動く。

腰に差していた細長いレイピアを抜き、男の首を持ったまま上体を反らして脇を締め、力を貯める。それを一気に爆発させて腕を伸ばし、男の耳から耳へとレイピアを貫通させた。

その時点で男の死は確定したのだが、男に刺さったレイピアから激しい電撃が迸った。

男の目は飛び出し、顔も誰か分からなくなるまでに崩壊し、依頼人の上に倒れ込んだ。

『こんな連中ばかりなら五分と要らないな』

男だったものからレイピア抜き取り、生き残っている行商人や傭兵にレイピアを向けた少女。その笑顔は先程よりも醜く歪んでいる。少女の美しさが崩壊していくことが目に見えて分かってしまう。

『このクリステイアーネがお前らを殺してやる、ありがたく思っとけ』

クリステイアーネ・フリードリヒによる虐殺が開始される。



——アルト区。

「……着きました。こちらです」

「思ったより遠い道のりだったな……。銚治郎殿、お体は大丈夫か？」

「な、なあに。お互い様じゃろう？ まだまだこれくらいは気張らねばなるまいて！」

燈火が立ち止まり、銚治郎と虎蔵はようやくかと言った具合に体の力を抜いた。銚治郎も虎蔵も持久力にはあまり自信がないのか、年老いた体を労わりつつも互いの身を案じていた。

南西のドラグ区の駐屯場が崩壊した直後、崩落してきた瓦礫を豆腐でも切る様に決じ

開けた銚治郎のおかげで、銚治郎、虎蔵、燈火の三人は無傷で脱出することに成功し、中央のアルト区へ向かうことにした。

道中、黒い兵士たちが幾度も襲ってきたが、虎蔵は兵士たちの手や武器だけを狙い戦いと言う行為を最小限に抑え、銚治郎も虎蔵に合わせるようにして相手に致命傷は負わせることなく逃げることを優先した。

燈火は「嵐」と一文字だけ書かれた扇子で黒い兵士や障害を扇ぎ、虫でも払うようにして吹き飛ばしていた。その際に何かを呟いているようだったが、虎蔵も銚治郎もそれを聞き取ることはできなかった。

そうこうして走り続けること十数分、既に半壊を通り越して全壊と言ってもいい程に集中砲火を浴びていたアルト区へ到着する。アルト区のシンボルとも言えたコウガ第三帝国の中央塔と、創始者である「悪七兵衛」の銅像は粉々に砕け、戦争の惨さを物語っていた。

そのアルト区にて燈火が二人を案内したのは、その「悪七兵衛」の銅像の台座。

「……………胡麻ハ数多ノ種ヲ孕ミ、自ズカラ弾ケ、其ノ腸ヲ撒キ散ラサン」

「悪七兵衛」の台座に手を当てて燈火が何かを呟いた。すると、台座は光を放ち均等



に四等分されたかと思うと、台座の下に現れた人一人が通れるような穴の中に吸い込まれていった。

「妖術じゃな、こりや」

「そのようなものです。さあ、早くこの中へ——」

「ちよつと待つてくれ」

ようやく逃避行が成功しようと言うところで虎蔵が待つたをかけた。一体何を呑気な事を言っているのかと責め立てようとした燈火だったが、虎蔵の真剣な表情に燈火は声をかけることを躊躇った。

「……………バカの声と臭いが混じってやがる」

「えっ…………？」

「燈火とやら、銚治郎殿を連れて先に行け。野暮用ができちまった」

「…………まさか、エシズ廃棄物ですか!？」

「バカかお前。それだったらワシだって一緒に逃げるに決まってるだろう」

燈火の疑問を一蹴した虎蔵は、この世界に来て人をまともに斬ることのなかった刀をまともに構える。その瞬間、周囲の空気が張りつめたように緊迫したものとなり、体感温度が一気に下がった。

その殺る<sup>ヤルキ</sup>気を体で確りと受け止めていながらも、銚治郎はゆつくりと虎蔵に歩み寄った。

「水臭いことを言うのう、虎蔵殿」

「銚治郎殿には関係のないことだからな」

「つれないことを言わんどいてくれ。盃を何杯も交わした仲じゃ。無理にでも同行させてもらおうぞ」

「……死んでも知らんぞ」

「かっかっか！ こつちの台詞じゃ！」

虎蔵同様刀を構え直す銚治郎。先程の逃げの一手で鬱憤が溜まっていたのだろうか、片側の口角を吊り上げてウズウズとしているのが丸分かりだった。

燈火を置いて戦場に舞い戻ろうとする二人の老剣士、だったが――

「燈火様 あああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「……!? シンじゃないか!」

燈火が二人を制止しようとしたところで、桃色の着物を着た女性が燈火に向かって飛び込んできた。飛び込んできた少女は涙目で、ぐしゃぐしゃの表情で何かを訴えかけようとしていた。

「ひっぐ、うぐ、と、どもじびぎばあ……!!」

詰まりに詰まった鼻によるくぐもった声と咽び泣いている嗚咽の泣き声が合わさり、それはもう聞き取りづらい言葉となってしまう。それが伝わらないせいで更にシンは泣いてしまう。

このままでは埒が明かないと判断した燈火は、強く心を込めてシンへ言葉を送る。

「『落ち着いて話せ』、シン。何があった」

「と、虎之助さんが……！」

沙也佳さんが……！」

ドリフターズ漂流物が、

エンズ廃棄物に囲まれて……！！」

「な、何だと!？」

「すぐ近くに応援を呼べる仲間がいるならその人を呼んできて」、「こんなことに頼っちゃつてごめん」、「無理なら一人で逃げてください」、「一人で絶対に戻つてくるな」、本気で怒られて、本気で信頼されて……………! それなのに! 燈火様のところに辿り着くのにもう何分もかかっちゃつて、これじゃあ!!」

「くそつ……………! 今すぐ私も助けに向かう! 虎蔵さんに銚治郎さん、申し訳ないがこちらへ——」

「あれ……………? 燈火様が連れてきた漂流物ドリフターズが、いない……………?」

## 第十幕 H E A R T O F S W O R D 〔夜明け前〕

「でええええええい!!」

「てやあああああああつ!!」

迫り来る槍を受け流し、襲いかかる剣を捌いて反撃する二人の若者。この作業だけで既に十分は経過している。

相手の剣を持つ手を切り裂き武器を落とす、槍の木製部分である柄を切り穂を落とし、相手の戦意を喪失させる。実にまどろっこしく、穏やかな方法でこの場を乗り切ろうとしている。

二人は背中を合わせ一呼吸置く。互いの背後を守る形となる、今できる最善の休息だ。

「ハハ、ちよつと数多いな」

「虎之助さんにはこの新年初売りのデパートの人混みのような大群がちよつとに見える

「んですか？」

「見えないな、どっちかつーと滅入ってるよ」

「ですよね」

「なんとか場を持たせようと会話を試みる虎之助であったが、結果的にはこの状況が如何に危ないものかを再認識させられる形となってしまうた。

「沙也佳ちゃんはまだ大丈夫？」

「体力的には、ですけど」

「ハハ、やっぱり精神的に来るものあったか」

何とか笑って見せる虎之助と沙也佳。しかし、現状は笑えるほど甘くはなかった。

黒い兵士の十数人は虎之助や沙也佳の攻撃に気絶してしまつたが、それ以外は武器を失つても後ろの兵士から補充し、再びこちらへ向かつてくる。殺してやろうという意思が溢れ出ている。

「なんというか、気味が悪いです……。武器を持つ手は明らかに素人なのに……」

「統制もすっかりしてないし、寄せ集めって感じがダダ漏れだ。なのに——」  
「——なのに、何度も何度も向かってくる」

「台所に出てくる黒いアレの方がまだマシだな。黒い見た目は一緒なのに」

虎之助と沙也佳はその表現に苦笑する。

二人を取り囲む黒い兵士たちは、おぼつかない不慣れな行動で二人へ向かってくる。何度も何度も、意識が途絶えるまで必死に向かってくる。

まるで、何かに怯えているように。

二人に武器を落とされ倒される様を見た他の兵士たちは、明らかに動揺し困惑していた。まともな言葉を発してはいなかったが、虎之助や沙也佳から見れば、「どうやったら勝てるんだ」、「こんなに強いなんて聞いていない」と言った具合に困惑しているような様だった。

それでもなお、兵士たちは二人に刃を向ける。

困惑し、動揺し、恐怖してもなお、二人に対して慣れない武器を持ち特攻する。まるで、二人以外の別の恐怖の要因があり、それに支配されているかのような、無様な傀儡だった。



「物量で押ししてこない。自分の攻撃が味方に当たるとのを恐れてるのか、その逆なのかは分からないけど、戦闘慣れしてないってことは分かる」

「物量で押す自信がないのでしようね。急造された兵士って感じがすごいですから」

「本当に、指揮官の一人でもいたらオレたち死んでるね」

「洒落にならないこと言わないでください！」

虎之助の冗談染みた発言に沙也佳が大声を上げる。それほどまでに、虎之助の発言があまりにも現実味を帯びていたからだ。

沙也佳の人混み発言にもあつたように、黒い兵士たちが物量という利点を活かし効率よく確実に殺しに來られたら、沙也佳も虎之助も剣技だけでは突破できないだろう。

沙也佳の不安を駆りたててしまったことに若干反省しつつ、虎之助は剣を握っていない方の手で自身の胸元を弄る<sup>まさぐ</sup>。まるで何かを探しているようだが、お目当てのものが見当たらないのか、虎之助の表情は晴れない。

——— “これ” 一つだけじゃ脱出できないな。

溜め息を押し殺し、虎之助はチラリと沙也佳の方を向いた。自分よりも小さい身長、

立ち向かうその姿勢に、一人の少女を投影する。

——何を敵の女といちやついておるかあー!!

「いやいやこれじゃないだろオレ！」

「え!? な、何が!？」

——トラ、確実に一人ずつ倒してゆくぞ！

「うん、状況的にこっちだな」

「だから何が!？」

「あ、悪い。ちよつと考え事を」

——身長ほとんど一緒の女の子と共闘するとなると、どうしてもダブつちやうよなあ……。

虎之助は自身の相棒とも呼べる、片恋慕の少女のことを思い起こしていた。虎之助がこの世界にやってくる前、盛大に告白したのはいいものの、その返事を聞くことなくこちらに誘われてしまった。

胸を張って告白の返事を聞けるように、この世界でも無様なまねはできない。

自己本位ではあるが、結果が他人のためとなる意志を抱き、虎之助は不敵に笑う。

「今度はちゃんと守らせてもらうよ」

「今度……? ああ、あの時のこと思い出していたんですか? いい具合にシンさんに

は勘違いされたままですよね」

「え? ……あ! いや、そういう訳じゃ」

「シンさんには虎之助さんが私を庇つてるように見えたみたいですけど、あの時は逃げてる最中に力尽きた虎之助さんを、非力な私が運んでる最中に足を躓いて転んだだけで

「わ、悪かったって！　ちよつと、その、軍人との戦闘後だったから余力もなくてさ……」

シンに保護される直前のこと、虎之助が沙也佳を庇うように覆いかぶさった状態で二人は発見された。その背後からは崩王の配下である黒い兵士たちが追撃しようと迫ってきていた。その光景を見たシンは、「虎之助は沙也佳を庇い、体中に傷を負ってしまった」のだと。

しかし、沙也佳と虎之助が知る事実が違う。

真実は、「空腹とダメージにより倒れてしまった虎之助を沙也佳が運んでいる最中、足をもつらせて転んでしまった」のだ。

この世界に来る寸前、ある軍人に滅多打ちにされた虎之助に、一人を庇いつつ逃走して追撃兵を追い払うと言う芸当はできなかった。

それをまるで弱みでも握っているかのように、沙也佳はシンにそのことを告げないまま虎之助の体裁を保っている。

「オレは話してもいいって言ってたのに、ズルズルとここまで引つ張ったもんだから言い出せなくなっちゃったんだぞ?」

「それを見計らった上で、シンさんの中の虎之助さんの好感度を上の中くらいまで上げたんじゃないですか」

「え? ……マジで?」

——この子、とんだ小悪魔じゃないか……。

「さ、雑談はこれくらいにしましょうか。向こうも痺れを切らしちやいそいです」

沙也佳に対するイメージががらりと変わった虎之助だったが、沙也佳の言葉により現実の戦場へと意識が戻される。

飛び込んで来ないものの、ジリジリと間合いを詰める兵士たち。気付けば二人を取り囲む兵士たちの密度がさらに大きくなっていった。

遂に、物量での押し込みに切り替わったのだろう、虎之助は思わず生唾をゴクリと飲み込んでしまう。乾きで張り付いていたような喉を引き裂くように、粘っこい唾液がゆつくりと通過する。

「なんとか頑張りましたよ。シンさんが戻ってくるまで！」

「そう、だな。よし！」

確りと剣を構え直す虎之助と沙也佳。くだらない話し合いは生き残った後に取っておこうと、言葉を交わさずに理解しあつた。

黒い兵士の一人が大きく剣を振り上げる。これが振り下ろされた瞬間、大群が波となって押し寄せる。虎之助も沙也佳も、生に向けての行動を開始する。

『行くぞ漂流<sup>ドリフター</sup>——』

「ぬあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああああつ!!」

黒い兵士の凶器で作られた大波が迫ろうとした瞬間、虎之助の前方の黒い兵士の集団の中央から獣のような叫び声と共に、何十人と言う黒い兵士が爆風に巻き込まれたように吹き飛ばされた。

「な、な!？」

同時に、沙也佳の前方の黒い兵士の集団にも異常が起きる。まるでドミノ倒しのよう  
に、扇状に兵士がバタバタと倒れていく。彫像のように固まってしまった兵士は、関節  
を曲げることも伸ばすこともなく、その体制のまま硬直して倒れ込んでいく。

「ワシの身内に手を出したあ、いい度胸だ」

決して大きくもなく鋭くもなく、通る声ではないその言葉は、まるで耳元で囁かれたように兵士全体に襲いかかる。その声の発信源たる人物から発せられた殺気に乗り、音速を超えて伝播する。

「え、なに、なに!?!」

沙也佳は目の前の異様な光景に、黒い兵士と同じように動揺する。刀を持つ手を思わず降ろしてしまうくらいだ。

しかし、沙也佳の背後に立っていた虎之助は違った。その声と殺気に一度は目を見開



いて驚いたが、その殺気に快楽を覚えてニヤリと笑う。虎之助は自覚していないが、涙腺から爆発したように涙が溢れ出していた。

———なんだよ、こんなところで彷徨ってたのかよ……！

その涙を決して拭くことなく、吹き飛ばされた兵士に気を取られて呆然としている兵士に飛び込んで、何人もの黒い兵士の腕や足を切り裂く。

「トウラトウラトウラアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

溢れ出る虎之助の涙が、兵士の返り血と混ざり還元される。黒い兵士たちはどちらに対応していいか解らず困惑する。

虎之助の雄叫びに数秒遅れて意識を明確にさせた沙也佳は、虎之助の様に兵士の中へ突っ込んでいく。彼女の剣技の速さは親族の中では遅いものの、素人から見ればまるで壁のように襲い来る驚異である。

「せやああああああああああああああああああ!!」

文字通り一瞬、瞬き一回すら間に合わないほどの速度で兵士の両腕を切り裂いていく沙也佳。決して致命傷を与えることなく、正確かつ迅速に対処していく。

関節がほぼ完全に凝り固まってしまっている兵士に止めを刺していくだけの行為、沙也佳がさほど手こずる理由は一つもなかった。

一方の虎之助は、ちぎっては投げちぎっては投げと言った具合に黒い兵士の塊を瓦解させていく。しかし、沙也佳の方とは違いこちらの兵士は身体の自由が利く。動揺しているからと言って、圧倒的多対一であることは変わらない。黒い兵士たちはもう我武者羅になって剣を振るう。

しかし、虎之助はその状況でも笑いを崩さない。

「使えるのはコイツで打ち止めだ……。吹っ飛びやがれ!!」

シユウウウウウウ……。と音と煙を放つ塊を虎之助は黒い兵士が密集しているところへ放り投げた。

コロコロと転がってきたその塊を見て、兵士が思わずそれを拾い上げようとした次の

瞬間——

——ドオン!! と眩い閃光と色鮮やかな花卉を纏った光と炎の爆弾が炸裂した。

兵士たちの何十人かは先程動揺、今度は本当に爆風に巻き込まれて打ち上げられた。兵士たちはもう何が何だか分からない状況に陥り、遂には武器を投げ出して敗走するものまで現れた。

彼らを支配していた恐怖という糸が、ドリフターズ漂流物の脅威という鋏に断ち切られたようだ。

「ハハハハハハ！ トウラトウラトウラ、トウラトウラトウラー!!」

歓天喜地の至境に達し、虎之助は残った兵士たちの武器を掻き集る。

黒い兵士たちが半壊してきたところで、遅れて二人の和服姿の人物が戦場に参加する。

「オンパン音走螺<sub>ッ</sub>！」

「吹クカラニ、秋ノ草木ノ、シラルレバ、ムベ山風ヲ、アラシト言フラム」

一本の透明な柱のような塊が地面からせり上がり、黒い兵士だけを吹き飛ばすような暴風が吹き荒れる。黒い兵士が密集していた場所はほとんどなくなってしまう。まるでこの二つの攻撃は黒い兵士だけを一扫するためだけに作られたものようだ。

「シン！ 無事だったか——」

「どらのずげざああああああああああああああああああん!!」

「え、みぎや!？」

シンは虎之助の無事に感極まり、虎之助の腹部目がけて飛び込んで頭を腹部に食い込ませた。衝撃に一度は声を発したものの、徐々に襲い来る気持ち悪さに虎之助の顔は次第に青く染まっていく。

耐え切れなくなった虎之助はそのまま背後へ倒れ込んでしまう。同時にシンの頭がさらに突き刺さり、虎之助の意識が手放されようとしていた。

「シン、退きなさい。虎之助氏が今にも死にそうだ」

「によわっ!? ぐ、ぐめんなさい!」

燈火の言葉で現状を理解したのか、シンは勢いよく虎之助から飛び降りるが、虎之助はまともに言葉を発することができないでいた。

「……………情けない。こんな風になるような軟な育て方はしてないつもりなんだがな」

「まあ、虎之助さんですし、少し抜けていても…………」

「それで得心行くのはどうなのかのう…………」

成長した自身の孫がグツタリとしている様を見て、嬉しくもあり悲しくもある複雑な気持ちを含んだ表情を浮かべる、立花虎蔵。

出会ったばかりのことを思い出し、少しだけ頼りづらいことを理解しているからか、虎蔵同様に感情の混じった顔を作る、黛沙也佳。

虎之助という人物がどういふ人間なのかを二人の言葉からしか読み取れず、虎之助に對してあまりいい感触を得ることができない、大道寺銑治郎。

氣絶寸前の立花虎之助を囲う様に、三人の漂流物ドリフが集結する。それを見て、燈火は思わず歡喜に打ち震えて笑顔を零してしまう。

敗退した漂流物ドリフターズとは明らかに違う。

これほどまでに結束力のある漂流物ドリフターズがいたのだろうか。

団体行動を拒み単独で突撃し、帰ってこなかった忍がいた。

戦争の記憶に体を支配され、兵器と共に自爆したメイドもいた。

彼らと似通っていて、それでいて決定的に違う。

まるで、廃棄物エンスズのような特攻をする剣士たち。

それでいて、漂流物ドリフターズにしかない和を重んじる心がある。

漂流物ドリフターズと廃棄物エンスズの遺伝配合、と言った具合か。

——紫。此度の選別で、この世界の役目は終わりが見えるぞ？

「しかたねえな、つと」

燈火が考察を繰り返していると、いつまで経つても意識がはつきりとしめない虎之助の首根つこを掴み、虎蔵は自身の背中に虎之助を乗せる。

「こんなデカくなった孫を背負う羽目になるとは思わなかったな」

「似合うとるぞ？」

「うるせえ」

「それじゃあシンさん。早いとこここから逃げましょうか」

燈火とシンはそこでようやく最も優先すべき行動を思い出す。

自分たちがなすべきことは、漂流物を逃がして集結させること。そのためにこのコウガ第三帝国からは即刻脱出しなければならない。

「そうですね……。燈火様、早く『悪七兵衛』の像に——」

「——待て」

シンが燈火に案内を頼んだ瞬間、銚治郎が静止をかける。

「どうした、銚治郎殿」

「儂らが向かう方向から、この戦争の臭いとは別の血生臭い悪臭が漂ってきよる。儂が先導してそいつの足止めを任せようぞ」

「なに……？ 私は何も感じないが……」

銚治郎が感じたその臭いを、燈火同様、他の誰もそれを察知することはできなかつた。

「儂だけに向けられとる殺気、そう判断して間違いないじやろう。なあに、厄介な相手だったら頃合いを見て儂も抜け出すわい」

「ならばワシも」

「ならん」

虎蔵の申し出に、銚治郎は重くのしかかるような威圧感を込めた声で拒絶する。銚治



郎の目は虎蔵を責め立てるような冷たい視線を放っている。

「家族を背負ったままじゃ。そのまま戦わせることは儂は許さん。放り出すことも許さん。その虎之助とやらを担ぎ、燈火とやらに従って疾く疾く逃げい」

「し、しかしだな」

「それに、酒に乗じて宣っておつたではないか。なるだけ剣は使いとうないと。無理して戦わせることなぞ儂にはできん」

虎蔵に向けていた視線が急に緩んだ暖かいものとなる。まるで慈悲の視線でも向けているような、仄かにひと肌を感じさせる母親のような目。

「虎蔵殿が来たのは儂より未来じゃが、歳は儂の方がちよいと上じゃ。儂の顔を立てい。もう直に米寿だとかいう欲しくもない肩書が下る。祝い事と言う意味でも良いぞ？」

「……………銚治郎殿」

「しつかり餓鬼共を護つとくれ。それになんだ、杞憂やもしれぬしな。かつかつか！」

銚治郎が声高らかに笑う。それが大げさに振る舞っているものだと理解するのは、虎

蔵にとって難しくないことだった。

——先程から刀に手をかけたままのくせに、何を言ってるんだ。

しかし、虎蔵はそれを口にするこなく、銚治郎の覚悟を汲み取ることにした。

「任せたぞ。再び会えたらまた一杯交わそう」

「旨い酒を用意しとけ」

虎蔵と銚治郎は腕をぶつけあい、一つの約束を交わした。

銚治郎はすぐに燈火よりも前に立ち、刀を抜いて肩に担ぐ。

「先導は任せてもらおう」

「……………シン」

「分かっています」

銚治郎と虎蔵の会話を聞いていた燈火はシンに何かを耳打ちしていたようで、燈火の

呼びかけに対してシンは静かに頷いた。

「……………？ 何じゃ？」

「こちらの話です。先導、お任せします」

「……………かっかっか、任された！」

銚治郎を先頭とし、漂流物脱出組は出口へめけて疾走を開始する。

## 第十一幕 狂氣沈殿

「つまらない」

霞んだ幽霊の様に街道の隅に佇む少年が、誰にも聞かせる必要のない心の声を、敢えて口に出して自らに言い聞かせる。その独り言すら、戦争の喧騒に打ち消されてしまふ。

ギシギシと、自分の体と左腕をきつく縛る橙色のベルトを強引に引つ張り軋ませる。引き千切るとは恐らくそう難しいことではないのだろうが、少年はそれをしようとしていない。自分が縛られているということを確かめることで、自分が生きていくことを確かめているようだった。

自分が生きているという実感と身動きが取れないことに悦を感じ、自分が惨めに晒されることに快楽を覚える。自縄自縛と言う諺を、我が身を以て体現しようとした結果とも言えよう。

少年は狂っていると自覚していた。

いつから狂い始めたかは分からない。翳りを帯びた瞳がすでに常軌を逸している。少なくとも、狂気の象徴とも言えるこのような装いに身を包むようになったのは、少年が「こちら側の世界」に誘われてからだだった。「向こう側の世界」では、生気のおかげでも感じさせない、俗にいう地味な存在。すれ違った者に自分の記憶に留めさせないような印象の薄さを秘めた、暗躍者だった。

目立たないという訳ではない。「目立てなくてはいけない」のだ。

こちらの世界に来る前、少年は一人の少女との決闘を終えたばかりだった。

——高坂君、死んじやうの？

その言葉に揺さぶられ、少年は死と言うものについて考えていた。

少年が挑むのは天上、あるいは辺獄と隣接した決闘、死に臨む大一番。その相手の一撃一撃が少年を死の谷へ突き落そうとしてくる。迷いはなかったが、不安はあった。

無事の保証などなかった。彼を支持してくれる人間も、彼の生死や安否に関して、絶対の保証などしてくれなかった。彼の決闘を見守る監督者でさえも、死ぬことを念頭に

入れている送り出しともいえた。死に対する覚悟はあったが、死にゆく恐怖もあった。そんな死合に臨む前日の帰り道のこと。

少年は自分の生を望んでくれた少女との決闘の後、暗い夜道を一人で歩いて帰っていた。その帰り道自体は普段から使っているもので、迷う理由は何一つとしてなかった。

その普段の通り道に、奇妙な亀裂が入っていること以外は。

少年は目を疑いつつも、その亀裂を凝視してしまう。死という不明瞭で曖昧な存在を無意味に考察し始めてしまった彼にとって、その亀裂は実に興味深く惹かれるものだった。それほどまでに、その亀裂は現実離れた異質なものだった。

不明瞭で霞んだ亀裂は、少年の瞳と同族だと訴えかけてくるようだった。

少年が一步亀裂に近づこうとすると、その亀裂はこつちへ来いと言わんばかりに、ゆつくりと大きくなっていく。まるで亀裂は扉の様に口を開き切り、奥の空間へ通ずる通り道となっていく。

通り道は黒く深く長い。少年がイメージしている死に最も近い、深淵と言っても過言

ではない。

——おいで。

その後のことは少年もはつきりと覚えていない。自分からその亀裂の間に足を踏み入れたのか、亀裂の中にいた奇妙な存在に引き入れられたのか、それすらも確かではない。

今現在、生きているか死んでいるかも明らかではない。痛みがあると言うことは、縛られているということは、生きているということなのだろうと自分に言い聞かせているだけだ。悦に浸ると同時に、安堵していたのだ。

あつさり訪れた“死”を、少年は否定し続ける。

気が付けば、少年は奇妙な服と言うか帯と言うか、奇抜な革製の縄のようなものに縛られて、ある人物の配下に着くことになる。

いつの日か、向こうの世界に帰り、長きに渡る因縁に決着をつけるために。

「何がつまらんのじゃ小僧」

少年は声をかけてきた人物に気怠そうに視線をやった。少年に向けて刀の先を突出し牽制している老人を一瞥し、少年は再び視線を足下に戻した。

「別に、大したことじゃないですよ」

「呆れたものじゃ。先程の冷たく鋭い殺気は遊び半分だったのかの？」

老人は一步少年に踏み込み、先程の威圧の真偽を問おうとする。実害は出ていないものの、喧嘩が売られたということは事実。それも尋常ではない殺気を用いたものだ。老人が問い質そうとするのは至極当然のことだった。

その好戦的な態度に、殺気を向けるという無礼な行動で喧嘩を売ったはずの少年が、まるで老人を宥めるような体勢を取ろうとする。

しかし、その態度は明らかかな挑発にしか見えない。



「落ち着いてくださいよ。目的は貴方なんかじゃないんですから」

「ほう？ あのの中の別の人間に向けた殺気だったか？ それにしちや精度が悪か。儂だけに向けたようにしか感じられんかったがのう」

「貴方に向けましたが、貴方が目的じゃないんですよ」

「奇妙なことをぬかしおる。儂が目的じゃないのであれば、誰が目的じゃ」

「川神百代。貴方から武神の臭いがする」

ピクリ、と老人の肩が揺れた。そのわずかな反応と表情から、少年は得るべき情報をすべて手に入れたと言わんばかりに、老人に対して背を向けるように踵を返す。

「待たんかい！」

「まだ何か用があるのかな？」

「大有りじゃ。あの小娘のことを狙っておると言うのであれば、儂はお主を見逃すわけ

にはいかん！」

老人は少年の項に穂先を添えるように刀を構える。少年の首に巻かれている首輪のようなベルトに触れているため、ほんの少しでも力を入れれば首に刀が突き刺さってしまう状況。完全な威嚇、脅迫であつた。

元来足止めとは、挑発と脅迫から成立する。

「大道寺銑治郎。罷り通らせてもらおうぞ」

「……………めんどうだなあ」

少年が少しだけ体をかがませて刀から間合いを取り、老人に対して逆の方向に数歩進んで距離を取り、老人に体の正面を向けるように再び身を翻す。

その距離は完全に、死合う前の間合いと合致している。

「高坂虎綱。名乗り返しておかないと、卑怯と言われそうだからね。それじゃあ、やろうか」

少年、虎綱が縛られた左手を動かすことなく、右手だけを前に突き出して、かかっ  
こいよと中指を数回追って銚治郎を挑発する。

老人、銚治郎はそれに対しニヤリと笑い、乱雑に刈り取られた無精髭を露出させてい  
ない左手でさすり、右肩で刀を担いで左半身を前にする。

その動作を見て、虎綱もまたニヤリと笑う。

互いに臨戦態勢が整ったという合図に他ならない。

「ぜやっ!!」

開始の合図の存在しない殺し合いの火蓋を切ったのは銚治郎だった。

銚治郎は即座に決着を付けようと、虎綱の脇を目にも止まらぬ速さで駆け抜け、右手  
一本で虎綱の体を一闪、斜めに断ち切った。

しかし、銚治郎の顔はすぐれない。

刀を持つ右手がビリビリと痺れ、刀が悶絶するように高周波の音を発しながら身震い  
していた。この感覚は、硬いものを切り損じたのとほぼ同じだと銚治郎は感じ取って  
いた。

即座に虎綱から間合いを取って刀を構え直した銚治郎の目に映ったのは、背後に回っ

た銚治郎を視界に入れようとゆっくり振り向く虎綱の姿。全く慌てることなく、かといつて余裕という訳でもなく、ただただ冷静沈着に落ち着いて、生気のない瞳で銚治郎を見つめていた。

生気がないと言う表現すら御幣を帯びる。あれは「死」だ、死人の目だ。

死者の瞳に全身の肌が粟立った銚治郎だったが、それを抑えようとはしなかった。むしろさらに前進の体毛を逆立てようと、その肌の総立ちを促進させていた。殺意という狂気が満ちた海に身を投じることで、全身の感覚をより鋭くしようとしていた。

銚治郎はまたしても右肩で刀を構え、再び全力で虎綱に突撃する。今度はすり抜けることなく虎綱の懐で止まり、以前相対した偉人への尊敬を忘れることなく、瞬間的な連続斬撃を繰り返した。

虎綱の瞬き一回が終わるまでの間に繰り返された斬撃の回数は、実に六回。完全再現できないのは銚治郎自身が一番理解していたが、ここまでできただけでも脅威である。

加えて、先程の手の痺れの原因とも思える革のベルトを避けるように、露出した肌の部分を狙って斬撃を繰り返したのだ。精密さだけ見れば、真似た偉人にも引けを取ることはないだろう。

「ぬう……っ！」

それでも、銚治郎の右手はさらに痺れていた。

何故斬れなかったのかと思ひ虎綱の体を見ると、革のベルトがまるで生きた蛇や百足のように、虎綱の体を這つて位置を変えているではないか。

銚治郎はその奇妙な光景に思わず呆氣にとられてしまい、意識の空白を作つてしまふ。

その虚を突き、虎綱は銚治郎の左肩に右手を添えた。

「はい、まず一つ」

ガキツ、と銚治郎の体内から奇妙な音が響いた。

「ぎっ——いい!？」

音と共に迸つた激痛に堪らず声を漏らしそうになるが、銚治郎は奥歯を噛み砕き合わせるほどの強さで歯を噛み締め、即座に虎綱から距離を置いた。

銚治郎は音の発信源、自身の左肩の状況を確かめる。肩が全く動かせず、形も奇妙に

歪んでいる。いつも見ている自分の肩の形が違うことなど、それこそ一目瞭然だった。

——関節を外されたようじやのう……。こりや年寄にやあ、ちと嫌な責め方じや。

銚治郎は右手に持っていた刀を口に加え、左肩をグツと押し込んだ。

その際に走るさらなる激痛に刀を噛み砕きそうになるが、何とか腕の骨の丸い先端を肩の骨の凹んだ部分に嵌めることに成功する。痛みがふつと消えたことを確認し、吊るす様にしていた左手をそのまま固定し、余っていた刀袋でギユツと縛る。

——元々包帯巻いておるのに、これでは本当に三角巾みたいになつてしまつたわい。

銚治郎は左肩が使えないことを少しだけ不安に覚えながらも、決して闘志を絶やすことなく再び刀を構える。虎綱はそれを見ても全く動こうとしない。専守防衛のつもりなのかかもしれないが、銚治郎にとっては都合がよかつた。

動かない程、剣技の精度が上がる理由はないと断言できたからだ。

「天国式、小鴉」

銑治郎は先程よりも体制を低くし、爆発的な速度で再び虎綱の脇を駆け抜けた。

しかし、今回の接触で表情がすぐれなかったのは虎綱だった。

防いでもないし、食らっていないでもない。これはただすり抜けられただけと理解し、虎綱が振り返ると、そこには人影のような何かがあった。

その人影はまるで幽霊のように、陽炎のように、ぶれて複数人いるように見える程速く揺らめいて移動していた。銑治郎の特技の一つである。

——拙い。本体が見極められない。僕なんかよりよっぽど不確かじゃないか。

虎綱は戦慄する。あれは速いとか見切れないとか、そういう問題ではないことを感覚で理解してしまった。

——あれは、間違いなく攪乱、揺動。

——と、思っておるんじゃないなあ。かっかっか。

全方位に意識を拡散しつつ、どの方向からの攻撃にも耐えられるように虎綱は注意を張り巡らせる。まるで自分の中心にした球体のセンサーでも張り巡らせているかのよう、虎綱の警戒心は最大に達していた。

そんな中、揺らめく銚治郎はニヤリと不敵に笑う。本質を見極めすぎた結果ど壺にはまった人間を見る程、愉快なものはないと言わんばかりに口角を吊り上げている。

——剣士でもないお主に、全てを曝け出すはずなからうて。

銚治郎は複数人に見えるように体をぶらしたまま、虎綱の正面から突撃する。

虎綱は決してそれから目を離すことなく、革のベルトによる防御を固めていた。いつでもどこから襲ってきてても良い様に、警戒心を高めていた。

しかし、それこそが銚治郎の罠だった。

ゴトリ、と虎綱の背後で音を立てて何かが落ちた。その音の正体を確かめようと素早く振り返った虎綱。



彼が目にしたものは、革のベルトで雁字搦めにされていた筈の自分の左腕だった。

何故あそこに自分の左腕があるのかが分からなかったが、痛覚が時間を忘れていたように、慌てて表層に現れる。

普段から痛覚を客観的にしか痛いと感じ取っていないような性格が相まってか、虎綱は未だに腕が切り落とされたことに理解が追いついていなかった。あそこに腕が落ちている、程度の感覚でしか物が見れなかったのだ。

しかし、自分の左手が先程より自由に動くことと、左肘から先の感覚がない以上、あれが自分の腕だと認めざるを得なかった虎綱は、ようやく銚治郎を睨み付けることができた。

「もちつと痛がるもんじやと思つたが、そんなものか。左腕以外は斬れる自信がなかったが、よかよか。それにしても、豆腐みたいに「やわつこい」のう、お主の身体は？」

刀を一度素早く振るい、滴り落ちていた血液を払い落す銚治郎。

——さて、どう出る……？

銚治郎は警戒心を強めて虎綱との距離を広く保ったまま刀を担ぎ直す。得体のしれない死人のような人間が次にとる行動を予測できない銚治郎は、虎綱と言う人間を警戒してもしたりない。して損をすることはないので。

しかし、必要以上に発せられた警戒は視野を狭め、凝り固まった常識と言う観点をさらに凍りつかせてしまう。

「——来い」

その次の瞬間だった。

バチン！ と小気味いい音が銚治郎の体から聞こえたと思えば、銚治郎の体が瞬間的に引き寄せられ、虎綱の左腕に固定されていた。

「な——!?」

「貴方を見せしめにすれば、あの人は来てくれるかな？」

状況の理解できていない銚治郎の体に、きつく虎綱の革のベルトが巻きつけられていく。

「い、やつつ……！ 帯を武器にできるのか……!?」

ようやく自分が引き寄せられた力の正体を把握した銚治郎の首に、ゆつくりと虎綱の右手が添えられようとしていた。

——いかん……！ いくら儂でも脊椎をあかも綺麗に外され損傷でもしたら、立ち直ることができるとかどうかとか、そんなちやちなことではすまんぞ!?

銚治郎は必死に脱出を試みるが、きつく縛りつけられた革のベルトを切ることもできず、ほどくことも叶わない。

ゆつくりと虎綱の右手が銚治郎の背中に近寄り、距離が縮まるほどに銚治郎の心臓が早鐘を打つ。

万事休すか、そう思い銚治郎は歯を食いしばる。

「音走螺!!」

銑治郎の背中に虎綱の手が触れる直前、虎綱の足もとから音と風によつて構成された透明な柱が出現した。その柱は虎綱の身体の表面を切り裂き、虎綱の右手を上方に弾き飛ばした。その影響で虎綱に巻きついているベルトが再び動き出す。

それを見逃さなかつた銑治郎は、自由が利いた右腕で今度は虎綱の左肩ごと露出した部分を切り落とし、緩んだベルトの拘束から即座に脱出することに成功した。返り血を浴びつつも、無傷で脱出できたのは彼にとって僥倖だった。

「銚治郎さん！　ご無事ですか!？」

刀を支えに何とか立っていられた銚治郎の下に、透明な柱を出現させた張本人が近寄ってきた。

「……シンと申したな、小娘」

「は、はい!」

「戯け、何故ここにおる!　燈火とやらと先に行くよう、全員に伝えたじやろうが!」

桃色の着物を着た呪術師、シンに対して銚治郎は激昂する。

しかし、シンはそれに屈しようとするまい。

「ど、漂流物ドリフタルを護ることが、我ら行燈機構ラデンの使命です!　その命に半分従い、半分背かせていただきました!　私だけ、ここに残らせていただきます!」

「な——　よ、よりにもよってお主か……?」

「ふ、不満でしたか!?!」

——満足じゃよ。満足なんじゃが、うむむ……。

銚治郎はかつての初恋の相手を思い出す。その若かりし頃の初恋の人物と、目の前にいるシンと言う少女が酷似している。この場に一人で残ってくれと言う忠誠さは実に有り難いのだが、同時に戦場にシンが来てしまったことに怒りを覚えていた。

感情が混濁し、シンに対して無暗に起こることができず、かと言って素直に喜ぶこともできない銚治郎は、自分の心内で悶々とする。

「せ、銚治郎さん？」

「ぬっ？ い、いやあ、何でもなか。こう助けられてしまったら、無下に帰れと言えやせんのお……。燈火や虎蔵殿らは脱出できたか？」

「恐らく。今頃は脱出口に到達している頃かと——」

「——そんな簡単には逃げられないんじゃないかな？」

銑治郎とシンはその声に一瞬硬直してしまう。

その声の主は、左肩から先がなく、体中切り傷塗れで血だらけになっている——  
筈だった。

ゆっくりと立ち上がった声の主は、左肩から先を無理やりベルトで固定し、切り傷も上からベルトで押しつけて止血している。まるで木乃伊かと思わせるようなその風貌に、二人は思わず一步下がってしまう。

「頼まれていた所要も達成したし、僕自身もほんの少し満たされたし、折角だから教えてあげるよ」

無謀な応急治療で立ち上がった虎綱は、死んだ魚のような目で二人を見つめて微笑む。その容姿に加え、足元に溜まった鮮血がより彼を死人に近づけていた。

「教える、じゃと？」

「そう。僕が頼まれていたんだよ。一人は足止めしておいてくれってね。誤解無きよう補足しておくよ、貴方を狙ったのは僕の目的が大半の理由を締めていたからね？」

虎綱の喋り方が先程よりも生き生きとしている。血が抜けてより生き人になつてくるといふ矛盾に、シンは吐き気を覚えて虎綱を直視できなくなってしまう。

「なんでもよい。とつとと教えるなら教えんかい。享受してやろうぞ」

「簡単なことですよ。あの脱出ルートを知っていた廃棄物<sup>エ</sup><sub>ズ</sub>が、中で待ち伏せしてるんですよ」





“悪七兵衛”の像から通ずる脱出口は、このコウガ第三帝国の地下に張り巡らされた地下道に通じていた。しかもその地下道の中でも、“悪七兵衛”の失踪により建設段階で放置されてしまった未完成のものだ。

それを見つけた燈火は行燈機構の力を使い、最悪のケースを想定して脱出のルートを作っておいたのだ。その逃走経路を作り上げたのは今から五年前、燈火が廃棄物に初めてであつた頃だ。

「——シンはいないのか。残念。じっくり“観察”しようと思つたのに」

「お、ぐ……！」

「燈火さん。五年ぶりですね」

逃走経路の中腹に、彼らの行く手を阻む人影が出口の光を背に立ちふさがつていた。それは川神学園の制服を着ているが、その中に着ているものが異様だった。

決して服とは呼べないような敵つい袖なしの黒いベスト。それを堂々と見せつけるように制服の前ボタンは締めていない。決して学園生が着るとは思えない、一体何と戦うために来ているか分からない防御性の高いベストを強調した彼は、真つ黒な指ぬきグローブを両手に嵌めながら会話を続ける。

「もう少し喜んでくださいよ燈火。先輩。爽やかなお顔が台無しですよ」

「ぐつ、ふう……!?!」

「——僕の非凡なパンチ二発でそんなに苦しむことはないでしょう？ 武神に比べたら蚊蜻蛉ですよ？ 仮にも漂流物ドリフタースなんだから、頑張つてほしいなあ。そう簡単に壊れないでほしいなあ」

そう言いつつ、蹲る燈火を彼は嘲笑う。

その場に倒れている。四人の漂流物ドリフタースを見下しながら、彼はにつこり笑う。その笑いは決して純粋なものではない。喜びを悦びと表記し、少しだけ濁つた雰囲気を出しているようだった。

「——本当に、この世界は最高だね。漂流物ドリフタースになら何してもいいんだから」

## 第十二幕 僕の宗教へようこそ —Welcome to

o my religion —

「〃<sup>プレッシャー</sup>圧轢〃」

四人の漂流物ドリフターズに、正確には四人の周囲に何かが押し掛かっていた。それは塊のようであり液体のようでもあり、半固形のドロツとしたものが上から覆いかぶさってくるようだった。

彼らはこれが殺気でないことはすぐに分かった。殺気を当てられた時の怖気、悪寒、それらが一切感じられることのないままに彼らは叩き伏せられたからだ。何か不可視で不可思議な圧力が襲いかかってきている。原理は分からずとも、そうとしか考えられなかった。

その何かを行使しているがたいの良い少年は、彼らを見下し暗く微笑む。彼の表情から滲み出る感情は不安定だ。いつ何をするのか、彼ら漂流物ドリフターズには読み切れない。

それが、廃棄物エクスズだ。

「すごい便利なんだよこれ。いちいち逃げる相手を追わなくて済むしね」

「み、なとつ……!! 三千尋オ……!!」

起き上がろうと手をつけ肘を立てようとする燈火だが、重みに負けてすぐに肘が曲がり何度も倒れ込んでしまう。まるで瀕死の蟻のように、ただばたついていることしかできない。まな板の上の魚よりも滑稽だ。

「先輩、苦しそうですね」

その姿を嘲笑いながら、ゆっくりと燈火に滲み寄る三千尋。燈火が苦しみ足掻く姿を間近で見ようと興味本位で歩み寄る。

しかし、あと数歩の距離にまで近づいたところで、三千尋の笑みがスツと失われる。燈火の目が、眩しいくらいに輝いていたのだ。諦めを知らない、諦めることを知らない、不屈の心と志がその瞳に宿っていたのを、三千尋は目にしてしまった。

ふと、三千尋は倒れている残りの三人の表情も確認する。

一人は背負われたまま気絶しており目を除くことはできないが、残りの二人の瞳は諦

めの敗戦色を見せようとしな。瞳に宿るのは、勝つて生きようという前向きな意志だけ、眩い志だけ。

——勝てると思ってるのかな。

「——いやいや、そりゃねえだろ」

三千尋は齒を剥き出しにして口角を吊り上げ、燈火の顎を軽く横に払う様に蹴った。意識を奪うための蹴りではない、甚振るための軽い遊びのような蹴りだ。

「う、ぐ……い！」

蹴られてもなお、燈火が再び睨み付けるように三千尋を見上げた瞬間、三千尋はしゃがみこんで燈火の前髪を掴んでグイッと引き寄せた。

「何その目」

「っ……」

「……助けてあげようか？」

三千尋は燈火の顔を自分の顔にグツと近づけて、黒い笑みを浮かべて囁き出した。

「助ける、だと……!?!」

「そう。無暗に人を殺すのはよくないことだと思いませんか？」

「……崩王の下僕が、戯言をほざくか」

パンツッ！ と乾いた音と共に燈火の頬が叩かれる。平手でまたしても軽く、その場の痛みだけを考えたもの。倒そうだとか気絶させようだとかは今の彼の脳内にはないようだ。

「とにかく、いい話じゃないですか？」

「本当に助けるつもりか……？ 下らんな、見え透いた嘘を……」

「いえいえ、きつちり助けてあげますよ？」

三千尋は少し間を開け、自分の口をさらに燈火の耳に近づけた。

「先輩だけ、助けてあげますよ」

「っ!？」

「あれえ、どうしたんですか？ そんな怖い顔をして」

燈火は目を見開き、三千尋を鋭い眼光で睨み付ける。先程とは違い、その目に対して不快ではなく愉悦を覚える三千尋。

「また補充すればいい話ですよ？」

「ふ、ざけるなあ!!」

「使い捨てですよ。廃棄物僕たちも、漂流物先輩たちね。何人見殺しにしてみました？ 何人戦場から帰ってきませんでした？ 今回もそれと同じですよ。死んだ沢山の仲間たちに、三人追加されるだけで微々たるものですよ」

燈火は奥歯を噛み締め、三千尋の言葉で蘇ってしまったかつての仲間の死がフラッシュバックする。かつての仲間を殺しきって自害した剣士、愛する者に誑かされた弓兵、仲間を逃がすための囿になって帰ってこなかった不良、引き裂かれ殺し合うしかで  
きなかつた双子。どれもこれも、燈火のかつての仲間だ。

それを知っているかのような口ぶりで、三千尋は燈火の心を抉る。的確に傷口に塩を塗って揉みしだく。

「さあ、助けて欲しいですか？ 一人だけですけ——」

「お断りだ!!」

「……ま、そう言うと思ってましたけどね」

食い気味に三千尋の言葉を遮り拒絶の意思を示す燈火。怒気を孕んだその表情と叫びに、三千尋は少し冷めたように溜め息を吐いた。

「——じゃあ、趣向を変えよう」

三千尋は右手を振り上げ、軽く振り降ろした。



「ブレッシャー 圧 轢 ”」

「あ、ぐあつ!?!」

すると、倒れている漂流物ドリフターズから苦しそうな叫び声が上がった。

「沙也佳さん!?!」

「実力で排除します。もう三段階くらい強くしたら圧殺できますよ。次第に強くなつていくので、恐怖も相まっていい声を上げてくれますよ、きつと」

「あ、あつ……!?! うあ、あああああああつ……!?!」

沙也佳が身動きもとれず悶えて苦しんでいく。上から押し掛かる重圧に肺が押され、内臓は圧迫され、頭には快樂物質ドーパミンによる不可解な興奮と、恐怖物質ノルアドレナリンによる当然のパニックが混濁し、沙也佳の脳内が未体験の感覚に犯される。

沙也佳の意識が朦朧とし出し、目の焦点も会わない程混乱してしまう。顔を紅潮させたとすれば全身を粟立たせ、自分の感情が理解できない状態に貶められてしまった。だらしなく唾液を垂らし、意識を保つので精一杯のようだ。

何とか支えになろうと、もう一人の漂流物ドリフターズである虎蔵が近づこうとするが、虎之助を背負ったまま二人分圧力をかけられているため、どうしても近づぐことができない。

「沙也佳ちゃんを狙うのは甚だ不本意だけど、しかたないよね。悲しいけどこれ戦争なんだよね」

「や、めろっ……!! やるなら私から殺せっ……!!」

「先輩は今のところ生かしておこうと思つてます。僕は優しいですからね」

そう言いながら三千尋はもう一度腕を振り降ろす。そうするとさらに沙也佳の身体がビクビクと痙攣して体が悲鳴を上げだす。

「いやっ、いやあああ……!! ひぎっ、いやっ、やだあああああ——」

それを最後に、沙也佳はまともな声を上げられなくなつてしまった。人語にならない、掠れた動物のような叫び声。

「さ、できるだけ平等に殺してあげたいので、次はそのおじいさんに喘いでもらいましょ

うか」

「ぐっ……」

「やめろ、やめろ港……！」

「——やめないよ、こんなこと滅多にできないんだからさ」

燈火の懇願を振り切り、虎藏を標的にして再び能力を行使しようとする三千尋。彼の腕が不条理に挙げられ——

「川神流、無双正拳突き!!」

三千尋の背後から脇腹に鋭い拳が食い込んだ。

「——ぐっ……!?!」

「ちよつとやりすぎたな、お前」

「かつ、川神、百代っ……!?! 何で——」

「答える義務は、ない!!」

百代は余していたもう一つの腕で、三千尋を地下道の最奥まで一気に弾き飛ばした。

三千尋は未完成の地下道の遥か深くに落下してしまう。地下道の奥から三千尋の叫び声が響き渡ってくるが、百代はそれを気に掛けることなく燈火に近づいた。

それをやってのけた張本人は、艶やかな黒い髪を揺らし、燈火に対して手を差し伸べた。

「大丈夫か？」

「……ああ、助かった。よく来てくれた」

燈火は百代の手を掴み立ち上がり、すぐさま沙也佳の下に駆け寄る。

「あ、あ……………」

「沙也佳さん、沙也佳さん！」

「退け。こういうのは同じ女に任せろ。男に見せちゃいけない顔してるからな」

百代は燈火をグイッと押しつけ、着ていた川神学園の制服をかけて沙也佳を覆い、沙也佳の顔を隠す様に抱きしめた。次第に沙也佳の痙攣も収まり、気づくと沙也佳は眠りに落ちていた。

「つう…………。スマン、何もできなかつた」

ようやく自由が利くようになった虎蔵が、虎之助を叩き起こしてこちらへ寄つてきた。

「じいちゃん、何かあったのか？ ていうか沙也佳ちゃん大丈夫!?!」

「もう黙つてろ」

「沙也佳さん以外は何か大丈夫か……。川神、沙也佳さんを任せていいか？」  
「ああ。まゆつちから頼まれていたことでもある。任せておけ」

百代が沙也佳を背負ったところで移動を再開しようとした燈火の下に、二つの人影が向かってくる。

「おお！ お主ら無事だったか！」

「銚治郎殿！ 生きておったか！」

「そう易々としにやせんわい、かっかっか！」

無事生還した銚治郎と虎蔵はがっちり握手を交わす。それを横で見ている虎之助は全く銚治郎との面識がないせいでの光景が不思議で仕方がなかった。

「さ、沙也佳さん!?! どうしたんですか一体!?!」

その虎之助の横を駆け抜け、シンが意識を失っている沙也佳に駆け寄りアワアワとしていたが、そつと沙也佳を触つてシンは沙也佳が生きていることを確認する。

沙也佳が生きている、それだけでシンに涙を流させるには十分だった。

「よかったあああああ……！」

「さて、全員揃ったな」

燈火は全員の姿を確認する。

沙也佳が倒れている理由も分からず困惑しているが、虎蔵から一定の距離を保ち離れようとしないうつ。しつこくまとわりつく虎之助を何度も肘や足で弾いては困ったように笑う虎蔵。その二人のやり取りを笑いながら見守る銚治郎。

気を失っているものの、まだ戦線に復帰できる可能性のある沙也佳。沙也佳背負いながらも圧倒的な力を見せつけることができるであろう百代。百代に背負われた沙也佳の顔色を何度も確かめようとするシン。

—— 使い捨てですよ。

—— 使い捨てなどではない！

三千尋に言われた言葉を思い出し、心の中で反論する。

——此度の徴収で、この戦いを終わらせてみせる。そのために私は私を捨てたのだ。

燈火の決意は固い——



「——武神はなしだろ」

地下道の最奥まで弾き飛ばされたはずの三千尋は、百代の正拳による傷以外の大きな外傷は見受けられなかった。ピンピンしているという表現は間違っているが、同様に満身創痍という言葉も似つかわしくない。かと言って、平然としている訳でもない。体は確かに大きな怪我を刻んでいるが、三千尋の興奮状態は冷め止まないでいた。

肉体と精神の繋がりが希薄なのか、三千尋の状態は正常ではなかった。



「崩王様々だよ、まったく」

三千尋が立ち上がり体の異常を確かめる。

——右拳だったのは幸いだったかな。

三千尋はまだ戦えると判断し、これからどうしようかと思考を巡らせる。

「目的は果たしたし、漂流物撲滅つてのももう少し先延ばししてもよさそうだし」  
「追わないの？」

そこに、革のベルトでギチギチに固められた少年が来訪する。

「高坂、君こそ追わなくていいの？ 待望の武神様がいるっていうのに」

「伝言は渡した。それに、あの人が誰かを背負った状態での決闘は望まないから」

「そう。それじゃあ帰る？」

「いやいやお前ら。廃棄物<sup>エィンズ</sup>って自覚あんのか？」

虎綱と三千尋が帰宅の意思を示して出口へ向かおうとしたところに、またしても新たな来訪者がやってきた。

「灯、接待はもういいの？」

「手早く終わらせてきたぜ。崩王ちゃん自分で動こうとしないもんだから」

「——ちゃん付けするお前の方が廃棄物エンズとしての自覚あるのかよ」

「立場、弁えてみようか？」

「余計なお世話だ修行馬鹿共。それより、もう帰っちゃまうのか？」

やいのやいのと言い合いを続けながらも、三人は漂流物ドリフターズが向かう出口とは別の出口、漂流物にとつての入り口だった「悪七兵衛」の像の足もとへ向かう。

「それで、灯は何でここまで？」

「戦果の報告だ。一応全員に通達しないと崩王がうるさいもんでよ」

「まるで友人みたいな口ぶりはやめてくれないかな？ 一応僕たちの頭張ってるんだから」

三千尋が灯の態度に苦言を呈する。上下関係というか、主従の関係から部を弁えろと暗に指摘しているのだ。

しかし、灯は飄々とその苦言を意に介さず適当に受け流してしまう。

「はいはいご忠告どーも。そんなお前に素敵な指令<sup>プレセント</sup>。今から俺と一緒に残党狩りです」

「今さつき団体様を逃がしたばかりなんだから」

「間に合わなかつたって報告すりゃいいけど、やらなかつたら流石に俺も怒られる。そりゃ勘弁願いたいんでね」

「はあ……。命令だつていうならやるよ、やればいいんでしょ？」

諦めたように溜め息を吐き、三千尋は灯と一緒に残党狩りに講じることとなった。

「あれ、僕は？」

「先に北の戦線帰つても良いぜ？」

「真剣<sup>まじ</sup>か、寂しい」

「男に懇願されたつてホイホイ着いていかねーからな？」

「じゃあ終わるまで待つてるよ。なんか廃棄物エのみんな僕の目を見てくれないから寂しいんだよね」

「———そんな死んだような目を好き好んで見る奴いねえよ」

## 第十三幕 世の中ワンダフル

—— どうしてこんなことに……。

木々の生い茂った山々が霞んだような深い翠の髪からピヨコン、と犬のような耳を生やした少女は思案する。思考が廻らされている脳漿が混乱を対処しようとするればするほど、犬耳はピコピコと不規則な動きを繰り返す。

少女の自慢の尻尾もパタパタ震えているどころか、時には針金でも入っているかのようになり、と立ったり、ねじ切れてもおかしくないような勢いで回転するばかり。

少女のアイデンティティ足る耳や尻尾は、少女の内面に敏感に反応していた。

—— さつきまで漂流物ドリフターズを捜索していただけなのに……。

少女はほんの数分前、激しい爆音が聞こえ戦場に到着したばかりだった。

少女の師とも言える人物に命じられた通りに、漂流物ドリフターズの捜索のために東奔西走してい

た少女。その最中、耳に届いた多くの悲鳴と明らかな戦争の臭いに、少女はこの世界以外の存在をかすかに感じた。

ただの紛争ではない、崩王の絡んだ殺戮だと、少女の感覚器官が訴えかけていた。

少女はその戦争の下へ全力で駆け抜けていった。その走りは犬の耳や尻尾が伊達や酔狂で生えていると言わせない、人間が到底追いつけないような獣の走りを連想させた。蹴った地面が抉れ、木の葉が少女の引き裂いた風によって叩き落とされた。

——  
廃棄物<sup>エンズ</sup>だけなんてことはありませんように。

少女はそう強く願いながら駆けること数分、少女は戦場へ到達した。

その瞬間、天は貫かれ、地が裂けた。

恐ろしい衝撃の余波に少女は吹き飛ばされないように大木に身を隠したが、その大木すらも根元から引き剥がされそうになっていた。少女は巻き添えにならないように

木々を転々としながら事なきを得たが、その衝撃の中心は実に凄惨なものだった。

少女の記憶には、この辺り一帯は自給自足の生活を営む大人しいハーピーたちの村があつたとある。畑の面積も大きく、かと言って居住区が少ないわけでもない。コミュニケーションとしても小さいわけではない。

その村が、完全に崩壊してしまっている。

家は根こそぎ吹き飛ばされ、畑と居住区の区別は一切つかない。嵐にあつた方がまだ被害は抑えられたことだろう。

ただ少女が不思議に思うのは、周囲に隠れていたハーピーが恐る恐る姿を現しても、その中央にいる人間は何食わぬ顔で佇んでいるということだ。

人間とはかけ離れた化け物のような行動をした異質な少女、その気配は異常ではなく泥状である、という矛盾だ。この惨状を引き起こした人間が、生存者に対して殺意を向けていないのだ。

廃棄物の所業に、漂流物のような態度を兼ね備えた、危険人物。

——どっち？ どっちなの？

ドリフターズ  
漂流物との遭遇は初めてではない少女にとっても未知との遭遇。混乱を招いた少女の頭を落ち着かせようと、少女は自分の師の言葉を思い返そうとした。

——ドリフターズ  
漂流物は目を見ればわかる。お前もできるはずだ。

——め、目か……。よし……！

少女は木々の隙間からそつと、村の中央にいるドリフターズ漂流物と思しき人物の双眸の奥にある性質を見極めようとした。その瞳に宿しているのは人情か、無情か。

『静止セヨ』

ギリッ……！ と、少女の背後から何かが撓る音がした。少女の耳はこの音を知っている。この世界の戦争における重要な遠距離武器、弓が発射体制に移った時の弓と弦が



こすれる音だ。

少女は本能的に両手を上げて降伏の意思を示した。

———  
なんで漂流物ドリフタースの捕虜にされてるの？ 私……。

少女は自分の置かれている状況を確認して涙目になりつつ、両手を頭に着けた状態で二人のハーピーに剣やナイフを向けられていた。

『与一さん、どうするの？』

『今暫ク監視スル。アノ怪物ノ動キヲ優先サセル』

『分かった！』

———  
勢いよく刃物を突きつけないでください……！



「さあ、話してもらおうわよ。お前はどこの誰で、何でこんなことをしたのかを」

「あ——へ——」

ハーピーの村の跡地、その中央にある巨大なクレーターを作った張本人、川神千李は敵將、川神一子の胸倉を掴みあげてガクガクと揺さぶった。一子が体中に着けている武器の重みなど関係ない様に、千李は実に軽々と一子を乱暴に扱っていた。

仕置きの意味合いが籠った扱いなのだろう、決して壊したり殺したりだとかは考えていない程度の力の入れようだ。尤も、桁外れの仕置きが既に実行されたことはこのクレーターが証明しているのだが。

自分の知らない一子という存在に対する扱いを、千李は掴みきれないでいた。

一方、一子はどうに虫の息。まともな人語を使える訳もなく、ただだらしなく口を開けて焦点の合っていない目で空を仰いでいた。痛覚など関係なく、既に意識すらも飛んでしまっているのだろう。

「……やっぱりやりすぎたわね」

千李は一子をゆっくりと地面に下ろして軽く溜め息を吐いた。怒りに我を忘れてここまで叩きのめしてしまったことに、精神面での弱さを痛感してしまった千李。

これではまるで妹のようだと、千李は我が振りを見直して猛省した。

——家族を侮辱されたとはいえ、こうしちやった相手が家族に酷似してるし……。やれやれだわ、まったく。

一子のことので頭の中が混乱しそうになったのを、千李は頭をブンブンと横に振って霧のような思考の残滓を振り払った。

一子のことでも大事ではあったが、千李からすればもう一つの問題があった。その問題の二人に向かつて千李は足を進める。

千李の攻撃の余波により狼は皆消し飛んでしまったが、確りと気絶している二人を護ってくれたようだった。倒れている二人には確保した時と比べて追加されたダメージは見受けられない。それだけで千李は一先ず安心して起きく息を吐き出した。

「おーい、井上くん、生きてるー?」

ペシペシと、千李は気絶している二人の内一人、井上準のスキンヘッドの頭をリズムよく叩いていく。死んでいないと分かっているからこそできる行為だ。

千李は頭を叩きながら、少しずつ自分の気を分け与えていく。ほんの少しでも回復に向かえばいいとの思いでの行動だったが、それが功を奏したようで、準が呻き声を上げる。

「お、起きたね？」

「うつ……？ あ、あれ……？」

地に伏せていた準が両手を使って何とか体を起こし、現状を確認しようとして周囲を見回そうとしたが、それよりも先に目に飛び込んできたのは、準の頭をひたすらペシペシと叩き続ける見覚えのある人物だった。

「お義母さん!？」

次の瞬間、ペシペシという小気味の良い音が消え失せ、準の頭蓋骨が千李の握力によつて悲鳴を上げた。

「うおうわああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ!？」

「誰がお義母さんよ」

「し、しっつれいしました千李先輩ツ!!」

「よろしく」

まだ万力の方がじわじわと力をかけてくれる分優しいのではないだろうか、準は千李の握力地獄から解放されてそう感じた。

「……………せ、千李先輩は、俺のこと分かりますよね?」

準は痛みが残る頭を摩りながら、千李に恐る恐る質問を投げかけた。千李はその質問に笑いながら疑問符を浮かべるが、準にとってはそんな軽いものではない。

「……………知ってるに決まってるじゃない。さっきの一子擬きより親近感があるわよ」

「……………ようやく会えたぜ……………。俺と同じ世界線の人に……………」

「世界線? ちよつと、どういうこと?」

準は余程安心したのだろう、再び意識を手放して地面に大の字で倒れ込んでしまった。周囲の状況を確認し、村が更地になっていることに驚くどころか気付きもしなかったようだ。

千李は準に言葉の真意を聞き出そうとするも、流石に千李も怪我人を一度強制的に起こしたようなことをしていないながら、もう一度目覚めさせるのは気が引けたのか、準から離れてもう一人の学生に意識を変えた。

はだけた服から垣間見える擦傷や腹部にある痣の治りをよくしようと思いを送りつつ、千李は少年の存在自体に疑問を抱いていた。

——私と同じ？

見たこともない顔、感じたこともない気配、明らかに初対面だとしか思わせないその邂逅は、千李の頭を混乱させるだけだった。

千李が気を送り込んでいる最中、その気と少年の身体の親和性が異常であることに気がついたのだ。並の人間ではこうはいかない、武を嗜み気に精通している人間でもこうはいかないだろう。

あり得る可能性は千李の頭に浮かんだが、千李はそれを即座に否定した。否定しかできなかつた。

——川神の血族？ それも私とすごく近い……。

まるで姉弟のようだ、という考えは決して浮かばせないようにしていた。そう考えること自体が既に、その可能性が最も高いことを示してしまっている。

——隠し子？ いや、でも外見的にも年齢は近そうだし……。

千李の疑問を解消できるかどうかはともかく、千李の話をまともに聞いてくれるような人間は今弛みきった表情で倒れている。千李の頭にかかった霧はどうやって晴れはしない。濃くなり答えを隠す一方だ。

濃霧を生み出しているのは、千李の否定自身であるのだが。

「——つだああああああああああああああああああああああああああああ!! うだうだ考えてもしようがないじゃない!!」

やけになった千李は大声を上げた。その大声は生物の危険信号を本能的に発令させるものなのか、周囲に隠れていたハーピーたちはさらに千李から距離を置いてしまう。

千李はそうなったことに気づいていながら気に留めなかった。ハーピーと言う存在自体、まだ千李の否定の中だからだ。

「一子はよく分からないし、井上くんは寝ちゃうし、隠し子みたいな男の子もいるし、よく分からんコスプレ連中もいるし、何なのよもう!!」

「おーおー、荒れてるねえ」



千李の遙か後方から、感じ慣れた莫大な気と聞き慣れた声が押し掛かった。威圧でも威嚇でもなく、かと言って緩和や友愛でもない。

これは守衛だ、千李は経験でそう察する。

千李は両手に気を集中させつつ、勢いよく身を翻して声の主に殺意を向けた。明確で鋭い殺意、並の武人ならばその殺意だけで気絶してしまうことだろう。

しかし、声の主は倒れない。

声の主の気配はその殺意を当てられて増徴する。まるで油を注がれた焚火のように、火の粉を散らし燃え盛る劫火と化す。

「いい殺気だ。変わらねえな」

「……釈迦堂さん？」

声の主、釈迦堂刑部は殺意に対して怯えたように肩を震わせたが、その表情は殺気に対して狂喜する。

へらへらとしている刑部の装いに、千李は不審の視線を向ける。裸の上から真っ黒な

コートを羽織っており、筋骨隆々とした肉体を見せつけて元師範代であるということをアピールしているようだった。

普段から変わらずグレーの無地のポロシャツを着ていた千李のイメージとは打って変わり、ゲームやアニメに出てきそうな服装である刑部に千李は疑惑しか覚ええない。

「似合ってると思ってるんですか？」

「おいおい、一言目にそれかあ？」

けたけたと笑う刑部に千李は溜め息を吐きつつ殺気を送り続ける。ほんの少しだけ、準の先程の質問を体で分かった気がしたのだ。

——なるほど、疑ってかかる世界ってこと。

千李の知っている釈迦堂の気配ではあるが、その上から何かが付く足されていると千李は感じ取った。

「……………なあ千李よ。そんな親の仇でも見ているように見つめてくるんじゃないよ」

「だったらいつも通りの格好をしてくださいよ」

「これはこっちの大将からもらったもんでよ。そうそう簡単に脱げるもんじゃなくてな」

刑部はそういうとコートを軽く叩いて風に乗せた。材質は分からないが、やけに丈夫そうであると千李は見込む。

「まあそんなくだらん会話は置いておこうや。本題に入ろうぜ?」

刑部は笑いを崩すことなく千李を睨む。しかし、その笑いに明確な殺意が宿り始めた。千李に対して向けられたものかは分からないが、千李が殺意を向け続けている状態での変化だ。

千李に対する殺意の返事、そう受け取って何の問題もないだろう。しばらくの沈黙が二人の間に流れ、その沈黙を刑部が切り裂く。

「川神一子、回収させてもらおうぜ?」

「そう、釈迦堂さんも一子擬きと同じってこと」

「ちよつと違うぜ？ 俺はお前から見たらお前の知ってる釈迦堂刑部だ。擬きじゃねえよ。コイツもお前に取っっちゃ一子擬きなのかもしれんが、あのムツツリから見れば川神一子本人なんだよ」

刑部は千季に講釈を垂れるように、上からの物言いで状況を説明しようとするが、それは千季にとって煽りにしか受け取れないだろう。

何より、刑部は彼が言う所の千季から見た一子擬きの肩を持った、その時点で千季は刑部を敵とみなした。

「丁度いいです。聞きたいことに全部答えてもらいましょうか。気絶寸前まで殴った後にね」

## 第十四幕 Sugar Mountain

突如始まった戦争の第二ラウンド。一対一の決闘のはずが、周囲から見れば何よりも暴力的で圧倒的な闘争に思えてしまう。先程の第一ラウンド、一子の黒い兵士を用いた殺戮の方が生易しく感じられることだろう。

方や鬼神、方や悪童。

狼を従える鬼神は両の腕を豪々と輝かせ、臨戦態勢に突入する。悪童の目的を達成させず、かつ自分の得心を得るために戦う。

飄々とした悪童は笑みを崩さない。鬼神と戦うことが、鬼神と出会ったこと自体が彼の目的の一部のように、彼の調子は崩れない。

結果を述べてしまえば、鬼神は悪童に敗北する。

殺されるわけでもない、かといって満身創痍になるわけでもない。それでも鬼神は悪童に大敗を期すことになる。

悪童はすべての目的を完遂し、鬼神を詭謀に陥れる。鬼神はそれを防ぐことができなかった。

これから始まる闘争は、悪童の命がけの奇譚。



「無双正拳突きい!!」

「おっと」

千李の目にも止まらぬ速さで放たれた拳を、刑部は紙一重で回避する。その回避された拳の先にあった複数の家屋の残骸がさらに粉みじんにされてしまう。

「さらに乱れ突きい!!」

「よっほっほっ」と

辺りを破壊しながら繰り出される猛追を軽やかに回避していく刑部。攻撃をすることがないので、ただただかわし続けて千李を挑発していく。

「ちよこまかと……」

「爆弾みたいなもんいちいち構ってらんねえよっとお！」

刑部は急激に速度を上げて千李に襲いかかる。殴ろうとしている訳ではなく、掴みかかろうとするように両手を大きく広げての突進だ。千李は瞬時にそう察して一歩下がって、刑部が仕損じた瞬間を狙って拳を叩きこもうと気を集中させる。

それを予期していたのか、刑部はさらにスピードを上げて掴みかかろうとしていた体を勢いよく丸め、宇宙の要領で飛び込み千李に踵落としを仕掛ける。

千李は僅かに不意を突かれた形となるが、拳を放つことに変更はない。千李は刑部の脚を砕こうと拳を向けた。

「ところがぎつちよん！」

待つてましたと言わんばかりに、刑部の口角がさらに吊り上った。

千李の拳は刑部の脚には当たらなかつた。千李の右腕の肘を擦る様にすり抜けた刑部の右足は地面に吸い付き、刑部の身体は千李の右脇に入り込んだ。

固より刑部の脚は千李を狙つていなかったのか、してやつたりと不敵な笑みを浮かべていた。千李が右拳を出したことにより開けた右のわき腹に、刑部は全力の拳を叩きこもうとする。

「何がぎつちよん、よっ!!」

しかし、千李はその追撃を許さない。

体中から闘気を爆発させて衝撃波を発生させ、刑部の身体ごとその拳を弾き返した。

「……ぎつちよんなんだな、これがよお……」

悪童の奸計の一つが嵌った。



「っ!？」

千李の身体に不可解な怖気が走った。攻撃を防ぎ、なおかつ反撃を成功させて上向きな流れを掴んでいるのは間違いない千李だ。傍から見ても千李から見ても、千李が優位に立っているのは明白だろう。

しかし、刑部の笑みは歪んでいくばかりだ。自分の怪我に何かしらの快楽を禁じ得ながら立ち上がった。所々から出血し、折角の高価なトレンチコートにも血の染みがついてしまう。それでも、刑部は笑う。

「へっへっへ……」

「……気持ち悪いわね、その態度」

「悪いね。こんな感じにされちまったもんだからよ……」

刑部は自分の腹を摩り、口の周りに着いた血をべろりと舐めとり、硬骨な表情を浮かべつつ千李ににじり寄る。

本能的に千李は刑部に拒絶反応を覚え、滅多に恐怖を覚えない体が鳥肌を立たせる。女性的にも動物的にも、刑部は敵と判断された。

「変態になり下がりましたね」

「へへっ、変態の方がもう少しマシだろうぜ」

笑いながら歩み寄る足を止めようとしなかった刑部に、千李はついに攻撃を仕掛けてしまった。

「銀狼牙錬撃!!」

千李は拳の嵐を刑部に向けつつ、複数の気弾を交えて刑部を排除しようと猛攻撃に移る。その壁のように迫る攻撃を全て回避することは刑部にはできず、弾きいなしてなんとか耐え忍ぼうとしたが、鬼神に対してその考えは甘かった。

気弾のいくつかを胴体に食らい、さらには拳も直撃してしまう刑部。口からは盛大に血を吐き出し、全身に痛々しい傷跡を付けられてしまう。

「ぐふっ……!! へ、へっへっへ……!!」

それでも、刑部は笑ったままだ。体中の傷から血を流し、立っていられるのが不思議なほどの重症にも拘らず、刑部はまだ千李に歩み寄る。

もつと殴れ、もつと痛めつけろ、そう訴えかけるような行為だ。

その刑部の屍のような振る舞いに、千李は一步後ずさる。

「……えっ?」

後ずさったのは千李、しかし、理性的には千李は立ち止まっているつもりだった。千李の本能が恐怖を覚え、危険だと判断した結果の現れだ。

千李に対し、刑部はこれ以上ない恐怖の象徴と化した。

「逃げるなよ……。お前が危なっかしかった頃から今に至るまで潰してきた人間は、もつと、もつと惨い姿だったろ……?」

「くっ、そ……!」

「お前は精神修行やらなんやらで忘れたのかしらねえけどよ、背負うべきもん忘れてる

わけじゃねえだろ？ お前は捨ててきていいって思ってたんなら、親失格だよなあ……？」

千李は拳を構えるが、その構えが安定していない。動揺が表面に現れてしまった証拠だ。

千李の今までの被害者の全てを知っているように立ち振る舞う刑部は、千李の罪悪感を駆り立てる。千李は刑部の背後に、再起不能になった死人のような武人の大軍を視認する。

悪童の奸計がまた一つ、嵌る。

「戦えねえか？　じゃあ一子は貰っていくぜ？」

動揺を隠しきれなかった千李の隙を突き、刑部は素早い動きで一子のいるクレーターに駆け寄り、倒れている一子を抱きかかえた。

その動きに千李は驚愕する。決してその速度が見切れない訳ではなかった。問題は、満身創痍の刑部がそれほど速く動けたと言う事実。

「な——」

「体中痛い、痛いだけだからな。まあ……」

この程度で動揺する方が悪い、そう刑部が言い放った瞬間に、千李の右腕から鬨気が爆発した。

「餓皇双狼刃!!」

牙をガチガチと鳴らし、爪を最大限に立たせた狼が顕現する。千李がこの世界に来て作り出した狼の中で最も巨大で、最も獰猛な獣。

千李はそれを憤怒と焦燥に任せて解き放つ。爆破させるように地面を蹴り、空気を引き裂き刑部へ襲いかかる。大きく開けられた口から発せられる咆哮は、千李の心の怒号の現れだろう。

その狼を見て、刑部は最高に歪んだ笑顔を浮かべた。

「一子、やれ」

次の瞬間、一子の両目が大きく開け放たれた。目尻と目頭を引き裂かん勢いでこじ開けられたその双眸は、千季の狼をしっかりと視界に捕えた。

「強奪<sup>シズ</sup>」

悪童の奸計が、がっちりと嵌った。

「っ!?!」

千季の身体から、ごっそりと「何か」がなくなつた。千季は激しい虚脱感と嘔吐感に襲われ、千季はその場に跪いてしまう。しかし、千季は倒れ込みそうになりながら何とか刑部を見据える。

そこには、一子の背後から延びた大きな手が、狼を握りつぶそうとしている光景があった。

千李は訳も分からぬままその光景を眺めているだけ。狼を戻そうとしても制御が効かない。足掻きも虚しく、千李は地面に座り込んでしまい、狼は一子の背後にある「何か」に吸い込まれてしまった。

それを見た刑部は、今までのような口角を上げるだけの笑顔を消し、腹を抑えてしまいそうなほど高らかに爆笑する。

「ハーツハハハハア!! こいつは我ながら傑作だあ!!」

「な、にを……」

「ご丁寧に教えてやろうか千李? お前が無様にも「力を失くした」原因をよお?」

千李に対する挑発を止めようとし、刑部に對し、千李は何とか立ち上がって再び戦闘に突入しようとしたが、どうしても足が言うことを聞かなかつた。立ち上がるどころか、手を地面についていないとバランスが取れない程。

「……ま、俺からしたら気分もいいし、ご教授してやろう。有りがたく聞いとけ」

一子を背中に背負い直し、刑部は千李に少しだけ近寄つた。反撃はされまいと僅かに警戒心を残しているのだろう。千李が立ち上がり動かない限りは刑部に届くことはない距離だ。

「俺ら廃棄物<sup>エンズ</sup>つて連中には、よく分からんちつこいガキから一人一つちよつと特殊な力が与えられる。今の現象もそれだ」

そう言つて刑部は一子を背負い直す。

「一子の強奪<sup>シズ</sup>は、対象の気を奪い行使する”つて力だ。一子の本能が才能を欲したんだらうぜ？」



コイツには才能がないからな、と刑部は一子を優しく揺すりながらそう付け加える。

「だが、コイツは才能がないことを認めたくはない。だから本人の意識があるうちは使えねえ。誰かしらが命令しない限り、使うことはできても奪い取ることはできねえ」

「じゃあ、この失われた感じって——」

「お前の狼は、一子の中だ」

千李の頭が真っ白になった。

今まで培ってきた技の一つが、あっさり与他人のものになってしまったという事実を認めたくないのに、体は狼がいなくなってしまうたことをはつきりと理解している。千李の肉体と精神が齟齬をきたし始めた。

しかし、いなくなったのはあくまで一匹、右腕の一匹だ。

「と言つても、一匹分の氣をもらつただけだろうぜ。一子が毘沙門天を奪つた時も、他の顕現は奪えなかつたからな」

その言葉に、千李の精神がさらに不安定になる。

「今、なんて——」

「お前のジジイを殺す前に奪つて話だが、それがどうしたよ？」



千李がその不発に疑問を覚えてようやく思考を復活させたところで、刑部は自分の腹にめり込んで停止した気弾を、直に挿んで口に運んだ。

「グラットン  
悪食」

ばかり、と気弾を一口で食べた刑部に、千李はもう何が何だかわからなくなってしまっていた。

「——ごちそうさま。と言った感じに、俺は『他人の気を食べる』。一子と違って相手に回復を赦しちゃうから、これは相手に対する力じゃなくて自分に対する力だ」

「あ、う……」

「それにしても、大分気を詰め込んだみたいだな」

千李の気を完全に体内に取り込んだ刑部の傷が見る見るうちに回復していく様を見て、千李はもう声を出すことすらままならなくなっていた。

娘を追ってやってきたこの世界で、千李は娘だけでなく妹も技も、プライドまでも奪われてしまう。

「じゃあ俺らは帰るわ。せいぜい元通りに回復しておいてくれよ？　また食べに来てやるから、な」

その貪欲な瞳に、千李は何の反応もできなかつた。ただ見つめられ、身を震わせただけ。反撃の意思すら奪われていた。

「誰も殺さずに帰って正解なのかねえ……。まあ一子の力が発動しなかつたら俺死んでたし、許してもらえるか」

そう言い残し、刑部は颯爽とその場から立ち去って行った。

残されたのは、瀕死の漂流物たちと、森の中にポツンとできたクレーターだけ。

「……………何がどうなってやがる」

その光景を見つめる弓兵と、生き延びたハーピーたちは戸惑うばかり。

「……こんなところで、終わらせない……」

その中でただ一人、前向きな希望を瞳に宿した犬耳の少女がいた。  
彼らの戦争はまだ始まったばかりだ。



「与ー!! 弁慶ー!!」

「誰もいないようだな。あの阿呆共、大将である俺を置いてどこに消えた……」

大陸の遙か東にある密林地帯。そこで二人の剣士が遭難していた。

一人は少女、馬の尻尾のような髪の毛を揺らしながらキョロキョロと辺りを見回しながら、自分の信頼できる人物の名前をひたすらに叫んでいる。

一人は少年、トラのマークが入った白いベルトに差した刀をしきりに触りながら、何やら不満を爆発させているようだ。

「十勇士の連中ならばともかく、高坂までいなくなるとはどういう了見だ……」

「よいちいー!! べんけえー!!」

「ええい鬱陶しい!! 少しは叫ぶのを止めんか!!」

「よいぢいー!! べんげえー!!」

「な、泣くな阿呆!!」

思わず涙目になった少女を慰める少年。こういうことに慣れていないのか、少年もあわあわとしながら少女をあやす。

—— ええい、武士道プランの申し子の癖に泣き虫な!!

少年は不満を決して口に出さず、少女をひたすらにあやしていた。

すると突然少女は泣きやみ、少年の背後に見える何かをじっと見つめる。

「……………」

「……………」

少年も少女と同じ方向を見ようと振り返る。そこには木々が並んでいるだけで、三六〇度全方位変わらぬ景色、少年にはそうとしか見えなかった。

しかし、少女は明らかに何かを見ている。抽象的な何かではない、もつとはつきりとした光景をその視覚は捕えている。

それと同時に、少女の鼻がヒクヒクと動く。視覚だけでなく嗅覚でも何かを察知したようだ。

「火の手が上がってる。それに、戦の臭い……」

ドリフターズ  
漂流物による闘争が再び――



## 第十五幕 シミ

立ち込める煙、燃え盛る堆積物、荒らされた土地、丘のように積まれた土に不自然に立てられた木の枝。

堆積物の煙と共に飛来するむせ返るような焼かれた臭いは、二人の剣士の鼻腔をガリガリと削り、黒色の粘膜をベツタリと植え付ける。一息吸い込んでしまえば、肺まであつさりと犯されてしまう。体中に染みこみ、魂にまで染みを付けて臭いを残す。

二人の剣士が数キロ走って辿り着いたその村は、既に何者かに襲われた後だった。

「なんだ、これは……！」

その現実離れた現実、二人の剣士の内一人である少年が、醜いものを吐き出す様に言葉を捻りだした。何か言葉を出さないと、非日常の光景に自分が溶け込んでしまいうさだだったから。

ガチガチと、少年の刀を握る手が震えてしまう。その震えの原因は恐怖では決してない。少年は自信を以て言えた。かと言って、堂に入った武者震いでもない。困惑とも言い難い、動揺とも名状し難い。

少年はこの感情を理解できずに、血を沸かせ目を見開いていた。

一方、もう一人の剣士である少女は黙ったままその光景を見つめていた。しかし、絶句という心情下にいるわけではない。この場に走ってきた時点で、この様に凄惨な状況であると言うことは覚悟していた。

少女が言葉を紡げない理由は、その鼻腔を抉る独特な臭いに心の奥の何かが打ち震えていたからだ。

—— 亀割山にて生むまれ給へる若君も、判官殿と同じ様に白衣を召して、野辺の送りをし給へり。見奉るにいとど哀れぞ勝りける。同じ道にと悲しみ給へども、むなしき野辺はただ独り、送り捨ててぞ帰り給ひぬ。哀れなりし事どもなり。

奇妙なことに、怪奇な文章が少女の頭の中を駆け抜けた。その文に少女は得も言われぬ悲しさを感じてしまう。咽び泣いてもおかしくない卑劣な光景に、少女は懐かしさに近い思いに耽り、心で涙を流す。

—— オリジナルの……? ——

すると、一人の男が煙の立つ方を見つめて野原で立ち尽くす光景が少女の頭に突如現れた。男は刀を握り、馬の手綱を腕に巻きつけ、一筋の涙を頬に伝わせていた。

悲しみに涙を零してもなお、その男の強さはあふれ出し ——

「おい、義経!」

その光景にのめり込んでいた義経を引き剥がしたのは、瞳孔が通常時よりも開き始めた少年の呼びかけだった。

「な、なんだろうか!」

「ここら一带の様子を見て来い」

「え、ええ!?! 独りでか!?! い、石田君も一緒に……」

てつきり一緒に行くものだと思っていたのか、義経と呼ばれた少女は飛び跳ねるよう

に驚いていた。

「阿呆、手分けをした方が効率がいいに決まっているだろう」

それに対し、何を愚かなことを言っているのだと軽くあしらう石田と呼ばれた少年。少しばかり体を震わせているが、少年にとつてこの現象の源泉が恐怖ではないという時点で、少年より優位に立っている自信があった。

小馬鹿にされつつ意見を否定された少女はと言うと、直ぐに涙目になって少年を見上げていた。懇願するように、無言の訴えを投げかける。

「……ええいつもいつも鬱陶しい！ そんなに一人が嫌か！」

「嫌だ！」

「……好きにしろ。俺は勝手に調査する」

——義経と出会って約一週間、何故こいつはこうも一人を嫌う……。

少年は少女と出会った時のことをふと思い出した。

少年がこの世界にやってきたのも一週間ほど前のこと、少年が川神に突如出現した城の中を駆け巡っている時だった。友人のためと珍しく張り切つて階段を登り、ある階層に到達した瞬間、*“彼”*の下に誘われた。

少年は彼に「下らん幻影か？」と、物珍しさに周囲を見渡しながらいかけた。

——次。

それに対する彼の返事は、返事とも呼べない事務的なもので完結した。さらに言及しようとした少年だったが、ガララツ！ とけたたましい音を立てて開いたシャツターの奥に吸い込まれてしまう。見えない不可解な力によつて吸い寄せられた少年は、それから逃れることはできなかった。

少年はシャツターの奥に転がりながら吐き出され、密林地帯に放り出された。

そのままの勢いで思い切り樹に激突し、悶絶していたところに訪れたのが少女だ。

——天神館の、大将!?

——源、義経!!

その瞬間、少年は剣を抜いて少女と対峙した。少年が飛ばされてきた世界では、義経は討つべき将としてリストアップされていた。それに加え、少年にとっては雪辱を晴らすべき因縁の相手であった。

この瞬間、義経が少年の本名を度忘れしていたことにより少年の闘争本能が爆発したが、義経は剣を向けることなく逃げて専念したこともあり互いに剣を仕舞って話し合いをすることになった。

——いいな源義経？ 西方十勇士が最強の男、出世街道を歩むこの俺の名は石田三郎だ！ 二度も三度も言わんぞ？ いいな、確りと記憶したな!?

——す、すまない！ 確りと覚えた！

その後、少女と少年、源義経と石田三郎は行動を共にすることになる。数週間、今に至るまで二人きりでの行動だ。

義経の水浴びの場に寝起きで寝ぼけていた三郎が出くわしてしまったり。

木の実を取っていた義経の下着が三郎の視界に入ったり。

小便をしていた三郎と食料調達帰りの義経が遭遇したり。

三郎が曖昧な記憶の下作った獣を脚を捉える罫に義経が引つかかったり。焚火の火が消えて夜風が涼しいからと寝ぼけた義経が三郎に抱き着いたり。

三郎が黙って食料調達に行った帰りに義経が大泣きしていたり。

草で手を切ってしまった三郎の指を義経が口でくわえて消毒したり。

捕まえた猪を弔った後に果敢に捌く義経を遠目に三郎が眺めていたり。

寝言で「弁慶……」と呟いて涙を流していた義経の頭を三郎が渋々撫でたり。

泥濘に足を滑らせた三郎を義経が華麗に支えてお姫様抱っこしたり。

ここ最近二人の間にあつた距離が物理的に縮まったりしたが、全てを総括しても二人の間に過ちはなかった。

そうして辿り着いたこの村を、三郎が妥協して結局二人で調査することになった。既に平穏な村と呼べる部分は半分消失してしまっているが、それでも調べる必要がある。

ここで一体何があつたのかを調べ、二人は心に覚悟を決める必要がある。

「ものの見事に、敗戦だな。復興の兆しがない」

「……酷々」

辺りの惨状を見て、三郎は胸に溜まった不快なものを言葉として吐露し、義経は思わず口を押えて嘔吐感を抑えようとしていた。

辺りに飛び散っている血痕と、何かを引きずったと思われる血の跡。それは山になった土と、悪臭の発生源である燃え盛る堆積物へと続いていることから、あの土の山が何の役割を果たしているかを表していた。

「墳墓、か。実に雑な埋葬だ」

それが何者かの、何者たちかの墓だと分かり、二人は手を合わせてしばし目を閉じた。誰彼知らずに手を合わせるのは彼ら日本人特有の性質なのだろう。

武士ならば尚のこと、御仏が敵と分かっても手を合わせしうへ首を垂れる。

「……火葬の、臭い」

「今も吊っている最中だろうな、人の肉が焼ける独特な臭いだ。火葬場に漂うそれと同じ臭いがする」

肉の焼ける臭いは人の食欲をそそることが多い、それは対象を食物とみなしている日



常に起こり得る現象だからだ。唾液を口内に蓄え、隙間を作ろうと胃が視力を振り絞  
り、脳内を弾けさせる様に覚醒させる。肉が焼ける臭いは人の欲求の対象なのだ。

だが、人の肉が焼けたことで発生する臭いは、個人差や個体差はあれど悪臭と表記、表  
現されることが多い。それは人体は最も身近な同類であり、死体はもつとも生き行く日  
常から乖離しており、人肉を焼くと言う行為が非日常であるからだ。

唐突に訪れた非日常を、ほとんどの人間は拒絶する。画像で死体を見た際と、現実で  
死体を見た際の気分の差にそれがよく現れるという。五感に語りかける非日常は、人体  
にとつて害悪なものだ。

勿論、それが万人に当てはまるわけではない。それが万人に当てはまるようなら、  
人肉嗜好や屍体愛好などという言葉は世に現れなかつた。閲覧禁止などと言う規制も  
造られる必要がない程に。

尤も、普遍からかけ離れた特殊であるからこそ、このような行為に特別な言葉が当て  
嵌められるのだが。

そして三郎も義経もこの例には漏れず、今回に限っては大衆とされる人間の一部に値  
する。

「行くぞ義経」

「……ほ、本当に行くのか？」

「阿呆、煙が立っている方に向かえば十中八九人間がいるに決まっている。今回ばかりは口答えを許さん。もう一つ火葬している場所があるようだ、行くぞ！」

今度ばかりは折れようとしなない三郎は、義経の首根っこを掴んでズルズルと引きずりながら、煙を上げて悪臭を放ち死者を吊っているであろう場所に向けて進んでいく。

この光景を見れば、ようやくまともなコミュニケーションが取れるようになったと、三郎の側近であつた老け顔の少年も感涙することだろう。

一年と立たずに急変した自身の変化には全く気付かず、三郎は勇猛果敢足取同道、義経を率いてさっさと進む。義経の反論などお構いなしにさっさと進む。

その歩みの果てに辿り着いたが、これもまた彼らにとつての非日常。

猫のような耳と尻尾を生やした人間が背を丸め、ごうごうと燃え盛る塊に向かつて両手を組んで目を閉じていた。

「……ね、ハッ。」

そう三郎が呟くと、引きずられていた義経も振り返りその光景を確認する。

「……猫、だ」

しばらくその光景を黙ったまま二人が見ていると、猫耳の人間が二人の気配に気づいたのだろうか、くるりと顔だけ二人に向けた。

ばちっ、と三郎と猫耳の人間の視線がぶつかり、互いの両目が見開かれる。

「ゴホッ、ゴホッ！ ど、ドリフターズ漂流物……？」

猫耳の人間は三郎と義経に対し、震えるような声で声を漏らした。今まで我慢してきたものが決壊する寸前のような表情と共に、その掠れ声は絞り出された。

一方、猫耳の人間同様、視線が合った瞬間に目を見開き驚愕を顔にした三郎は、信じられないようなものを見たように呟く。

「……お、大村？ お前、何故そんなコスプレを……？」  
 「こす……？ ゴホッ！ 何のことでしょうか……」



「行燈機構ラント、キツです……。ゴッホ！」

キツと名乗ったひ弱そうな男に連れられて、三郎と義経はまだ崩壊していなかった家屋の一つに案内される。その室内に飾られている“伝”と力強く書かれた日本文化の一つで絵ある真つ赤な提灯が二人の目に留まる。

この密林地帯に飛ばされた二人がようやく見つけた、懐かしい香りのする存在だ。

キツと名乗った猫耳の少年は咳き込む度に尻尾や耳をピクピクさせつつ、義経と三郎に暖かいお茶を金属製の器に入れて差し出した。持ち手の部分に布が巻かれているのは、手を火傷させないための配慮だろう。

義経は両手で器を持ってズズツ、とお茶を啜る。

「あ、美味しい……」

「それはよかったです。自家栽培の葉草から煮出しているのですが、私たち以外にも受け入れられてよかつ——」

「ぬるこ」

義経とキツの間に流れた和やかな空気を、三郎が厳しい言葉を放ち一瞬にして壊した。

「客人に出す温度とは思えん。よくこんなものを出したものだ」

「は、はわわ……」

苛立ちを顕にして器を机に置き、器から火傷対策の布を剥がして別々にして返す。もう二度と飲まないと言ったような、作り直せと言わんばかりの堂々とした態度。堂々としているが、無礼千万極まりない。

その態度に、義経が何故か戦々恐々として体を震わせていた。無礼な態度を身内が取ると義経はよく慌てふためく癖があるのだが、三郎は義経と会ってからまだ一週間しか経っていない。それはつまり、義経の中で三郎に対する警戒心が溶けて懐き度が友達レベルにまで上昇していることを意味する。

すると、キツは顔を蒼くしてガタガタと震えだした。

「いぶあ?」

「!?」

震えが止まった瞬間、キツが盛大に血を吐き出した。

「ちよ、キツさん!」

「た、たかが茶を返された程度で何故吐血する!」

「げぶつ、き、気にしないでください……。持病ですから……」

「ええい紛らわしい!」

慌てふためく二人を余所に、キツは再発した震える手で三郎の器を下げ、吐き出した自分の慣れた手つきでさつさと拭いてしまう。

「げぶつ、我々ケツトシーは皆猫舌でして、ぬるかったのは申し訳ありません」

「あ、ああ。次は気を付けろ。しっかり淹れたてを寄越せ」

出世街道を歩む男、十勇士最強にしてリーダーと言ひ張る三郎も、キツの突然の吐血には動揺を隠しきれなかつたようだ。

——ヨツシーは演技だが、こうもヨツシー似た奴が本当に病弱だと、困る。

なにより、三郎の知る人物とキツが酷似していることも原因の一つだ。

三郎の知るキツに似た人物は、十勇士の秘密兵器とも言える強さを秘めた古武術の使い手だ。その強さを隠すため、普段から病弱を装い強者としての風格を消している。激しい運動をして咳き込むのも演技、長時間の活動で気絶してしまうのも演技だ。

しかし、目の前にいる人物は演技ではない。至つて真剣に深刻に、病弱を訴えている。

——何だ、この奇妙な罪悪感は。

三郎は珍しく初対面の相手に気を遣うハメになった。

「……………ここにあなた方を招いたのは、他でもありません」

咳も落ち着いたキツが、二人に対して面と向かって会話ができるように対面に座り話を切り出した。

義経は初めに差し出されたお茶を全て飲みきり、二杯目を勧められて断り切れずにもう一杯。三郎は出された熱々のお茶をゆっくりゆくりと、火傷をしないようにチビチビ飲みながら話を聞いていた。

「この村の惨状について、です」

「戦の直後、だろう」

「……はい、お察しの通りです。我々ケットシーは、崩王と呼ばれる<sup>エ</sup>廃棄物の長が従える黒の兵士の攻撃を受けました」

「………<sup>エ</sup>廃棄物？」

義経が小首を傾げて疑問符を浮かべていた。三郎も疑問符は出さないものの、説明しろと言った無言の圧力をキツに掛ける。

「<sup>エ</sup>廃棄物とは、この世界に招かれた悪魔のようなもの。別の世界で強く重く黒い感情を



持った者や、廃棄物の生みの親とも言える存在に魅入られた人間が廃棄物と成り得ます」

「……それだと私たちも廃棄物に？」

「ああ、義経はそうだろうな。何せオリジナルが兄に見限られて追放されているのだから、怨恨や悔恨の一つや百個あっても」

「義経は義経だからオリジナルは関係ない！」

オリジナルと同一視されたことが気に食わなかったのか、義経は三郎に食い掛かろうとした。三郎は冗談だと言って義経を宥めるが、それから数分の間義経は三郎を睨み続けた。

「いえ、あなた方は廃棄物ではないでしょう。まず間違いなく」

「根拠は」

「会話が成立していることです」

三郎の問いかけに、キツはまっすぐな目と清らかな声できっぱりと言いつつ放った。

「エンズ廃棄物の軍勢に会話は通じません。エンズ廃棄物の中には会話を楽しむ者もいますが、まず間違ひなくその後には戦闘に発展します。穏やかな会話であろうとお構ひなしに。その配下の黒い兵士の軍勢は、エンズ廃棄物の恐怖的圧政と、彼らの長である崩王によつて説法されてより性質が悪い。すぐに攻撃を仕掛けてきます」

「なるほど、その崩王とやらがどのようなものかは知らんが、俺らはそいつに会つていない時点でエンズ廃棄物ではないな。ドリフターズ漂流物、と言つたか」

「そう、そうなんでゲボオ!!」

「だあつ!! 熱くなるな血を吐くなすぐ拭けい!!」

興奮して身を乗り出したキツが机をバンツ! と叩いた瞬間に机全体にキツの吐いた血が広がった。

三郎はそれを避けるようにガタツ、と立ち上がり身を反らして飛び散つた血が付着するのを回避しようとした。一方の義経はと言いうと、あまりの突然の出来事に数瞬体を硬直させてしまつていたが、直ぐにキツの背中を優しく摩つていた。

「す、すいません……」

キツが数分かけてゆつくりと心を落ち着かせ、会話を再開させる。

「あなた方漂流物ドリフターズは、廃棄物エンズに対抗するべく呼ばれた人間。彼と同じ、この世界の救世主  
！」

「……彼、ですか？」

「はい、もうそろそろケットシー数名との見回りから帰ってくる頃かと……」

キツが彼と呼ぶ人物についての話題を振り始めた瞬間、コンコン、と三人がいる家屋の扉がノックされた。

「帰ってきたようですね……」

「ふん、一体どこのどいつだ。その救世主とやらは」

キツが扉に向こうにいる来訪者に返答する前に、三郎が素早く扉の前まで言つて無言で扉を開けようとドアノブに手をかけた。

「誰かは知らんが、顔を拝ませてもらおうじゃないか」

ガチャリ！ と勢いよく三郎が扉を開け放つ。

「フハハハハ!! 我ら無事に帰還したぞ!!」

救世主と称された彼、金色の龍を背中に刻んだ額に十字傷のある益荒男は高らかに笑う。

## 第十六幕 爆走夢歌

「あなた方漂流物はこの世界とは別の世界から招かれた人間です」

調査隊が帰還して数十分後、キツは咳き込むことなく言葉を紡ぎ、自分と同じ空間にいる人間三人にそれを投げかけた。

「別世界の人間でも、姓名容姿性格全てが一致した記憶違いの同一人物が存在します。故に、二度目の初対面、一方通行的な面識が発生します」

「二度目の初対面？」

「あなた方に説明するには、平行世界の同一存在だとか、他の選択肢を選んだもう一人の自分だと説明すると伝わりやすいようですが」

「つまり、その東の大將が俺を覚えていないのは、俺が知っている九鬼英雄ではない。そう言いたいのか」

三郎はキツの言葉に対して、僅かな苛立ちを込めた言葉で聞き返す。

九鬼英雄が調査から帰還した直後、三郎は英雄に対して友好的、とは言わないが、見知った間柄のような振る舞いで話しかけた。

どうやってここに来た、他の連中はいるのか、お前がいながらこの村の有様はなんだ、そもそもこの世界はなんだ、聞きたいことを英雄に対してぶつけた。キツから話を聞けばよかつたのだろうが、猫耳を生やした男子の知人に妙な違和感を覚えた三郎は、まだ正常な英雄に全てを聞こうとした。

——まずは名乗れ。お前ら、初対面の人間に対しての礼儀を欠いているではないか。

その一言は、またしても三郎の眼を見開かせた。

三郎は英雄に対するどうしようもない怒りを覚えて刀を抜こうとしたが、どうやら英雄は三郎の隣にいる義経にも面識がないような態度をとっていた。

少しばかり思考を巡らせるために頭を冷やすことに成功した三郎は、義経を知らないと宣った英雄に奇妙な違和感を覚えた。

その違和感を感じた三郎に説明するため、キツは二人の仲裁をとるように間に入り、三人を同じテーブルに座らせ、今に至る。

「そもそも、だ。我は天神館は知っているが、その生徒との交流は皆無と言つていいほどない。先程の怒りはお門違いだ」

三郎の言い分を、英雄は僅かに苛立ちを覚えながら跳ね返した。

「……天神館の夏服など、見る機会はないものだと思つていたがな」

「ふん、いいだろう。お前が俺の知る九鬼英雄ではない、ということは何んとか認めてやろう。あの財閥の御曹司がそうそう人の顔を忘れるはずがない。ましてや、お前らが手塩を掛けて成就させた武士道プランのコイツを知らないという時点で、本人であるかどうかも怪しいところだからな」

そう言つて三郎は義経の肩をポンと叩いた。

肩を叩かれた義経はと言うと、急に話を振られたことに驚いたように肩を震わせたが、それ以前に何かに脅えて言うように縮こまつてしまつていた。背中を丸め、肩をす

ぼめ、視線すらまともに前を向けていない。

「義経、と言ったな。あの源義経のクローン、と」

義経は英雄に声を掛けられて再び肩を震わせてしまう。

怯えている原因はまず間違はなく九鬼英雄だ、そう悟った三郎は義経に声をかけようとしたが、寸前でその言葉をごくりと飲み込んだ。

ここでかけるべきは言葉ではなく、気遣いだ。

「覚えてない、というか、知らないのだな……」

「うむ」

きつぱりと英雄は言い放った。その齒に衣着せぬ直球的な物言いが、鋭利で長い刃物となつて義経の心に突き刺さる。それはずぐりずぐり、と音を立てて心を引き裂こうと深く広く傷口を広げていく。

その痛みを耐えながら、義経は言葉を紡ごうと頭を回転させる。



「……それでも、少しは頼つてもいいか？」

頭を必死に悩ませて、心の痛みを必死に耐え忍びながら、心の奥から絞り出した言葉は懇願だった。

三郎の妙にやさしい視線に包まれ、ようやく発せる事が出来た義経の本音の言葉。

「……フハハハハ！ 要らぬ心配だな！」

その本音だけで構成された言葉に対して、英雄からはじき出されたるは豪快な笑い声と、よそよそしく願ひ事を述べた義経に対する指摘。

「民を慕うのは我らが役目！ 加えてもう一人の我が招いたことだといふのであれば、なおのこと懇意にせねばなるまい！」

覇者は自身の胸を拳で叩き、義経に対して爽やかな笑顔を向けた。燦々と輝く太陽のように明るく熱いその様に、義経だけでなく三郎までもが目を見張る。

一瞬だけポカンとしてしまった義経だったが、直後花開かせたように明るい笑顔を取

り戻した義経。

そのやり取りを見ながら、三郎は考察する。

——なるほど、本質は変わらないということか。

奇妙な保護者のような存在であつた三郎が、ふつとほくそ笑んだ。



「別世界の人間との関係性は実に奇妙で興味深いものです」

コウガ第三帝国から西へ向かう山道、ガタガタと荷馬車に揺られながら、燈火は漂流物ドリフターズに対して知識を享受していた。

馬車を操るシンも、激しく駆け抜けていく馬の足音や散らされる石が弾ける音の隙間を縫つて、燈火の話に聞き耳を立てていた。

「この世界はあなた方の存在していた世界とはかけ離れた異世界ですが、あなた方の世

界は薄氷一枚で隔たれた密な関係にある。ただの他人とは訳が違うのです」

「私が銚治郎さんを知らないのに、銚治郎さんが私のことを知っている。こんな一方通行的な関係がよく見られるんだ」

「確かに、儂が知る百代とは雰囲気も態度も違うようじゃ。かように心がお淑やかで強かとは、別人のようじゃな」

百代は対面に座っていた銚治郎を例に挙げ、その例を銚治郎自身が実感していた。

銚治郎の知識にある百代はもう少し落ち着きがなく、強者を追い求めるような不安定さを兼ね備えた危うい存在だった。銚治郎は百代の違いをこの中で最も理解していることだろう。

その揶揄するような発言に、百代は苦笑しながら返答する。

「そつちの私はお淑やかではないんですか？」

「お主の方が別嬪さんじゃのう。生きるために命を燃やしておる様が煌びやかじゃ」

ニカツと笑った銚治郎に、百代も笑いで返す。銚治郎が百代のことを知っていたこともあり、早くも二人はなじみ始めているようだ。

「この二人の關係のように、一方だけが相手のことを知っている状態が一つ。他には――」

「ワシとこの馬鹿みたく、互いが互いを見知っているってことだろう。世界線とやらはよく分かんが、まず間違いなく同じだろうよ」

燈火の説明を上から塗り潰すように、虎蔵が虎之助の頭をワシヤワシヤと掻き回しながら発言する。虎蔵が力任せに髪を掻き分け頭皮に指を立ててぐわんぐわんと頭を揺らすと、虎之助は心地よい痛みと無理やり頭を振らされていることに奇妙な感覚を覚えていた。

「うおつ、いきなり何すんだじーちゃん！」

虎蔵の力強い撫で回しに嫌そうな言葉を並べるが、その声はどう聞いても毛嫌いしているように聞こえない。恥ずかしさを隠すために言葉だけ反抗的になっているだけのようだ。

その表情は分かりやすく、虎之助が上機嫌であることを示すような明るい笑顔。

—— 虎之助さん、嬉しそう。

決して声には出さなかったが、それを見ていた沙也佳は虎之助を温かい目で見つめつつ、少しばかり悲しい感情を覚えていた。

身内がいることを見せびらかせられると、どうしても身内が恋しくなってしまう。家族仲がいい人間ならそれは当然の感情だろう。

加えて、沙也佳は先程まで三千尋に襲われた恐怖から抜け出せないままでいた。ようやく解放された今も、まだ声を出すのが躊躇われるほどに精神がやれてしまっている。投げ所であった少年がああも蕩けてしまっただけでは、沙也佳の投げ所とはならない。人肌以上に心の温かみを探している沙也佳に対し、背後から人影が近寄る。

「他の関係性と言えば！」

「わひゃあ!？」

ほんの少しだけ憂いを帯びた表情を浮かべた沙也佳に、突然百代が飛びついて両腕を沙也佳のお腹に回してギュッと固定した。

「互いに知っているが、世界線が違うという感じだろう。沙也佳ちゃんのお姉ちゃんから話は聞いていたぞ?。」

「わ、私も一応、手紙伝いですけど……」

「……だが、私とは別の世界の沙也佳ちゃんみたいだけどな」

そう言うと百代は少しだけ力を加え、沙也佳をさらに自分に引き寄せた。ひと肌のぬくもりを求めているような行為だが、彼女の表情から満足や充足という言葉は読み取れない。

あるのは物寂しき、齒痒さ。

今の不安定な精神状態の沙也佳にとってはきつい抱きしめが相応しいかったが、百代はそれを意図的に行った訳ではない。百代もまた、不安定なのだ。

「私はその立花一家の存在を知らない。東西交流戦で天神館の試合を全部見たが、二年生でそんな奇怪な刀を使う奴はいなかった。それに、剣聖と呼ばれていた人間に立花なんて人間はいなかったしな」

「そいつは不思議だな。一応剣聖の看板は背負わされていた身で言わせてもらうが、こ

れでも広告塔として劍聖の肩書を後生大事に抱えてきたんだ。川神院の直径ともあるう武神がそいつを知らないってなると、教養不足を疑う」

「教養不足なのは認めるが、強者に関してだけは例外なんですよ？ 私の知識は」

世界線の問題でなければ馬鹿にされてもおかしくないぞと、僅かに白い目で百代を見つめた虎蔵に対し、百代は真つ向から視線をぶつけ合った。

「けど、沙也佳ちゃんは二人のことを知っている。これで私たちは別の世界線の人間とということになる」

百代は虎之助、沙也佳、虎蔵の三人に意識を向けながら確信を以て宣言する。

——私もまた、別の世界線だろう。

その様子を見ながら、燈火もまた疑問を抱えていた。

燈火と同じ世界線の人間は、はたして漂流物ドリフターズか廃棄物エンスか——



「あなた方は最も複雑な例、互いを知らない姉弟という立場です」

与一が根城としていた洞穴の中、四人の漂流物と一人の犬耳の少女がその場に会していた。

パチパチと、洞穴内を照らす焚き木が燃え盛り火の粉を上げて、静寂を打ち消している。

刑部が撤退した後、与一と協力して漂流物ドリフタレスをここまで運んできた犬耳の少女は、与一の説得に成功していた。

——我々行燈機構ラデンキゴウは、あなた方の味方なんです！

非日常を求め非日常を演じていた与一にとって、行燈機構ラデンキゴウなどと言う不可思議な組織の存在は願ってもない展開であった。

与一は少女に対し、お前らが特異点をここに集めたのかと問うた。



——我々は、あなた方をかき集めるために存在しています。

与一はその一言に弓を取めた。下手な動きを見せたら即座に射殺すと言う警告を付けて、犬耳の少女に現状の説明と解放を頼んだのだ。

少女の使う奇術は実に奇妙なものだった。

傷ついた漂流物の痛みを緩和させる効果によって、目を覚ました漂流物ドリフターズを会話に参加させることに成功させていたのだ。

そして今、漂流物同士の関係性について焦点が移っていた。

「同じ川神姓、加えて同じ家族構成から養子までが一致しているという条件下、あなた方は互いを知らない」

「……姉貴は、一人だけ、です」

両膝を抱えながら、十夜は決して顔を上げることなく呟いた。

十夜はあの戦いの後で最も早く目を覚まし、ハーピーたちの死体の埋葬や介抱に尽力を尽くしていた。一子について考えてしまうことから逃れるため、逃避の手段として傷を抱えつつ他人のために動いた。人見知りなど押し殺し、無心で働いた。

しかし今、一子のことを否応なしに考えさせられる状況になってしまった。十夜の精神状態が急速に風化し崩れ去る。

「私だって弟なんかいないわ。まゆつち、適当なこと言わないで」

千李は苛立ちを顔にしながら少女に反論する。

千李は一子を奪われ、狼を奪われ、自身の不甲斐なさに怒りをため込んでしまった。その怒りが漏れた結果がこの苛立ちだ。

あの戦いの後は決して気絶することはなかったが、千李はしばらく呆然と自分の右手を見つめたまま動けずにいた。狼が奪われたと言うことを直視することを避けるように、無気力に近い状態になりかけていた。

互いが互いを牽制しあう様に、焚き木を挟んで対角線上に座り込む十夜と千李。否定しあい、威嚇しあい、血の繋がりを否定していた。

自暴自棄手前の十夜と自分に対する怒りを抱えた千李の威圧感をひしひしと受けながら、まゆつちと呼ばれた少女は千李をじつと見据える。

「適当なんかじゃありません。現に変わり果てた妹を見ているのでしょうか？ 十夜さん

にとつては姉、ですか。あと、私はまゆつちではなくユイです」

強気になつて反論するその様は、十夜と千季を驚愕させるには十分だった。

ユイの容姿は十夜も千季も知っている、彼らが属していたグループにいた大人しい少女と同じであつた。まゆつちという愛称もそこから引き出されている。故に、口を開けば謝罪をし、本音は馬のストラップに代弁させていた彼女の姿で、堂々と意見を述べて反駁までやつてのけたその姿に、二人は驚愕を禁じ得なかつた。

「妹さんもまた、あなた方と違う世界線の血縁者でしょう。あなた方がそう感じたはずです」

「……あんなの、ワン子じゃない」

ギリツ、と十夜の奥歯が悲鳴を上げる。

一子の変貌ぶりを目の当たりにし、一子の妖艶な奇行に振り回されたことに、十夜はどうしようもない感情をため込んでいた。自分の憧れであり恩人であり家族である少女の姿をした悪魔に、十夜は引つ掻き回されてしまった。

しかもそれが廃棄物エクスという存在にされたことによる“変化”であるという事実がま

た、十夜を苦しめていく。

「俺もあれは違うと思うぜ。感覚の物言いだけどよ」

「同じく、あんな悪の塊が同じ世界の特異点とは思いたくもない」

十夜たちと同じように焚き木から間隔を開けて岩を椅子と見立てて座り込んでいた準と与一も、奇妙な具足を身に纏っていた一子の存在を否定していた。

準はあの後最も遅く目が覚め、気が付いた時には既にこの状況に突入していたため、話し合いには強制的に参加させられる形となっていた。尤も、目を覚ましていてもこの話し合いに参加していたのは明白であるが。

準は一子という人間を、他クラスであったとは言えよく知っているつもりであった。彼女の姉から、彼女を慕う者たちから、彼女の仲間たちから、嫌と言うほど彼女の魅力について語られ、それを目の当たりしている。準が襲ってきた異形の一子を、自分の知る一子と認められるはずがなかった。

一子との接触は最小限であった与一でさえも、あの一子に關しては嫌悪感しか示していない。自分が知る川神一子と言う少女は、誰よりも思いやりのある優しい人間だと、ひねくれた与一もそう感じていた。

「この世界に招かれた以上、こういう奇妙な関係は普遍的に発生します。故に、あなた方には覚悟が必要とされます。かつての仲間と敵対する、殺し合う覚悟が」

ユイは淡々と冷ややかに、四人に対して現実を叩きつけた。

「……ふざけんな」

その現実を最も否定し、拒絶した十夜が立ち上がってユイに詰め寄る。

「何が漂流物だ、何が廃棄物だ！ 何が殺し合いだ！ 俺は、俺たちは道具じゃねえんだぞー！」

「これだけでは道具のように感じたかもしれませんが——」

「道具じゃねえか、戦争の駒ってことだろうが、なあ!？」

十夜が吠えた。頭も心も沸騰させ、無抵抗に戦争に呼ばれた理不尽さをユイに訴えかける。ユイがこれを仕組んだ人間ではないと言うのは重々分かっている十夜だったが、

十夜は声に出してぶちまけてしまいたかった。

それほどまでに十夜の内側に怒りが積もっていた。しかし、その怒りは自分に向けたものではない。

—— あんなことをやっちまうような性格に弄繰り回されたワン子が、可哀想だろうが……!!

十夜が抱えていたのは、家族を道具にされたことに対する憤怒だった。恩人を人形にされたことに対する義憤だった。

自分のことよりも、ここにいる別の漂流物ドリフターズよりも、廃棄物エンプズとされた仲間に降りかかった不条理さを嘆いていた。

「落ち着きなさい」

高ぶった感情のままにユイに掴みかかろうとしていた十夜の肩が、弱い手によって掴まれた。

「……千李、さん……。何ですか……」

「その子に当たったって意味はないでしょ？ 冷静になりなさいな」

「アンタだって、一子の家族だろ!? 何でそんな落ち着いてんだ!」

「……落ち着いてないわよ」

十夜の言葉が痛いところを突いたのか、千李の口内からゴリツ！ と聞き慣れない音が聞こえた。

すると、千李の口元から血が溢れ出した。それを千李は手でグイツと拭い取り、十夜の目の前に突き出した。その赤黒い血の跡に、十夜は少しだけ頭を冷やされる。

千李の口内がどうなっているか、十夜には想像もつかない。

「一周回ってクールになったわ。だから、今は自分に対する怒りを自分にぶつけてまた一つクールになった。後は、残った熱い怒りを一子をあんな化け物にした張本人にぶつけるだけ。ユイちゃんにぶつけても、解決しない」

「……分かつてる、分かつてるよ……っ!」

自分を痛めつけて冷静になった千李に戦慄しながら、十夜は何とかして自分も落ち着

こうとする。しかし、十夜に溜まった怒りは千李以上の意味合いがある。幾重にも重なり複雑になった彼の一子に対する想いは、どうやっても押さえ付けることはできない。その抑えられない思いに従って千李の手を払い除け、十夜は洞穴の出口に覚束無い足取りで向かつて行った。

「お、おい川神！」

その消え入りそうな後ろ姿に不安を覚えてしまった準が十夜の跡を追って出口へ走っていく。

「アンタは追わないのか？」

十夜を止めた千李に対し与一が問いかける。最後まで止め切らないのかと、責務を問いたです。

「警戒されてるからね。私が出る幕じゃないわ。井上くん任せましょう」



——それに、他人に構っていられるほどの余裕がないのよ。

千李は自身の右手を見つめ、自身の目的を改めようとする。

## 第十七幕 いざたて戦人よ

「断る」

静寂を切り裂いた三郎の不満げな一言。ある者は目を見開かせ、ある者は動揺し、ある者はただただそれを傍観している。傍観に関しては追及することなく捨て置き、自身の言葉に驚きに近いものを感じた二人には、苛立ちの籠った視線で彼らの心臓を射抜く。

「崩王の討伐？ 廃棄物の打倒？ 黒き兵隊の瓦解？ 何故俺がそのようなことに協力してやらねばならん」

「い、石田くん……」

「義経、お前は黙っている」

立ち上がろうとした義経の肩をグツと押さえ、義経を無理やり座らせた三郎。これで義経に対する処置は済ませたと言わんばかりに義経を意識から外し、ジツとキツを見据える。無言の圧力とでもいうべきか、強者の圧がキツに襲いかかる。

「貴様らが俺や義経を漂流物ドリフターズなどと呼ぶのは勝手だがな、俺がそれに答えると思つてるその態度が気に入らん」

「そ、そんなことは……」

「ある。断じてやろう。貴様の文言には誠意が感じられん。かくかくしかじかと、この世界のことや俺たちが置かれた現状を説明してくれたのは感謝しているが、それだけの説明、説明だけで俺たちが「分かりましたお手伝いいたしましたよう」となると考えていること自体、無礼でなく何だと言う」

人差し指をキツの首に向け突き出す。鋭い剣気けんきを帯びた視線と指先、それを向けられたキツは無意識にゴクリ、と唾を飲み込んでしまう。首元に抜身の刀を宛がわれている、そんな脅しを受けているような錯覚。

「その東の大将は、それで上手くいったらうがな」

対面、キツの隣に座る英雄を首で意識をやる。

「義経もそれでコロツと墮ちる。一週間でコイツの性格と人の好きは何となくだが分かったから言い切れる。頼られたら断れぬ優しすぎる奴だ」

「そ、そんなことは……。えへへ」

三郎の指摘に、義経は若干頬を赤らめて首の後ろを軽く搔いた。小恥ずかしさからくるむず痒さを解消しようとしているのだろう。

その行動が予想通りのことだったとはいえ、三郎は溜め息を吐いてキツに視線を戻す。

「……こうも皮肉が通らん阿呆だ。あつさり行くだろうが、俺はそうはいかんぞ」  
「……西の、石田と言ったな。そこまで狭量とは、天神館の名が泣くぞ？」

その非協力的な態度に、英雄が若干の笑みを浮かべながら三郎を弁難する。

「言っている。俺からすれば、困った者ならば誰でも幾らでも助けようとするその考えが虚けにしか思えん」

「困窮する民全てを救ってこそ頂点に立つ者。その志すら立てることができぬ臆病者に理解はできまい」

「ふん。こんなわけの分からん世界でもその王道のような持論を展開し貫き通すか。流石は川神学園代表、と褒めてやりたいところだが、所詮は“あの”反逆を引き起こしてしまった阿呆よ。褒められたものではない」

足下がお留守とはこのことを言うのだらうよ、そう英雄を嘲笑う三郎。自身が生きてきた世界において、九鬼の管理能力の甘さを決して口には出さず、ただただ思い起こして微笑を浮かべる。

その見下すような物言いに、流石の英雄も違和感と苛立ちを混じらせ、ずいつ、と身乗り出し三郎に指を突き立てる。

「石田三郎、貴様は何を見てきた？」

「下らん反乱だ。他愛もない反逆だ。貴様は監禁され、貴様の姉は安否不明、奮起しているのは妹だけときた。呆れてものも言えんぞ？ 次期財閥当主の候補様？」

ダンツ！ と机に手を着き三郎も身を乗り出した。

喧嘩を売ったり買ったりしたわけでもない、単なる意地の張り合いとしか見えないその行動に、何故か義経は身震いする。互いの尊厳のかかった視線のぶつかり合いに、両者の誇りを垣間見たからだろう。

しかし、ここで義経は違和感を覚えた。

英雄の持つ尊厳から来る圧には納得がいく。九鬼に厄介になっっている身としては、あの環境を作り上げた「九鬼」という人間に宿る生命力には幾度となく驚かされているからだ。ただ豪快であるわけではなく、それを助長させる自信と気迫を義経は知っている。

だが、石田三郎は何かが違う。

東西交流戦で一度しか出会ったことのない義経は断言できないが、一番の違いは目であると感じていた。以前であった際の三郎にはない、温かみや優しさ、何よりも更なる強さだ。少なくとも義経の世界で出会った三郎はない、人情溢れる炎が燃えている。

義経はようやく三郎と言う人間を見る目を、一週間ほどの共存と今回の熱き瞳を確信とし、改めた。

「……妹は、紋はどうしていると言った」

そこで、英雄が目を細め視線を鋭くし、三郎の双眸を射抜き問うた。

「九鬼紋白か。あやつは気張っていたぞ。敵陣に自ら乗り込み、貴様や他の人質どもを解放しようと思気揚々、目を見張ったものよ。それを何だ、助けられる側にいるのが兄とは、情けなくは思えんのか？」

言葉だけでなく、目でも責め立てる三郎。皮肉でもなんでもない、本心からの一言であろう。三郎は英雄に対し、沸々と怒りを込み上げさせてしまっていた。

一体どのような言い訳をするか、それとも黙り込むか、三郎は英雄の出方を窺いつつ精神を滾らせていく。

その硬直した睨みあいの中、英雄は大きく息を吐き出した。

「———そうか。紋は、無事か。それでいて尚、奮迅しているか……」

「……？」

「我が監禁、姉上が安否不明で反乱ときた。クラウディオかヒュームのどちらか、あるいは双方がそれに加担しているのだろうよ。その中で紋は逃げ切り、立て直し、諦めずにいる——」

英雄は三郎から視線を離し、ドカツ！と椅子に座り直し上を仰ぎ見て、高らかに笑う。

「フハハハハハハハハハハツ!!」

その光景に、義経もキツも、三郎も目を見開き啞然とする。

「怯える必要なし、案ずる必要なし！ 紋が無事ならばどうとでもなろう！ フツハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!」

天上を見上げながら笑い続ける英雄に対し、三郎が怒りのボルテージを上げて立ち上



が  
つ  
た。

「……おい九鬼英雄！ 貴様、何を的外れな感想を述べて——」

「——孰れ、このようなことが起きる予感いずはしていた」

笑いを失くし、三郎に視線を戻した英雄の視線は、酷く冷たく揺るぐ気配のないまっすぐなもの。自身の持つ記憶や感情を全て度外視し、客観的に全てを把握しようとするその冷たい視線は、まさしく社会の上に立つべきもののそれ、支配者だけが持つことを許されるものだ。

三郎は思わず一步下がりに、椅子を蹴り倒してしまふ。ガタンガタン、と大きな音を立てて倒された椅子の音は、この場にいる誰の耳にも届いていない。

この場は既に、九鬼英雄に支配されている。

「膿を出す、というのは組織を運営するにあたって必ず通らなければならない道である。勿論、管理が甘いことや側近とも言える従者部隊に反乱分子がいたことは恥はずべきことだ。死かと受け止め、苦しませてもらう。向こうの世界に帰ったなら、即座に諮問会を開く。しかし、それは試練だ。我らが乗り切らねばならない壁だ」

「な、何を突然、自身の甘さを正当化しようとする！ あれは過ちだ！」  
「うむ、過ちだ。なればこそ、精算するのも我らが宿業よ」

途端に気迫の性質を、学生から指導者に切り替えた英雄に動揺せざるを得なかつた三郎。何とかして反論するも、それに対する切り返しにまたしても三郎は動揺させられる。

三郎の思い描く展開に辿り着く道筋は、既に途絶えてしまった。

「くっ………！ ならば！ その宿業とやらを妹に押し付け、情けなく思わんのか!？」

「———ふむ。ここが、見解の相違であろう」

「………何?」

英雄は両手を組んで机の上に置き、グツと腰を曲げた。姿勢は低くなり、視線も自然と見上げるようになった。それでいて尚、英雄の気迫は途切れない。それどころか、より貫録のようなものを伴い膨れ上がる一方だ。

「我ら九鬼が三人の跡継ぎは、三つ首の犬とでも思え。最後の一人が残り後を討てば、そ

れでいい。紋は我よりも人望がある故、任せられる」

「……違う！ 俺が言いたいのは——」

「自身の組織すらまともに管理できぬ奴が、民をどうこうできるわけがない」、だろう？  
実に耳の痛い話だ」

そちらの我也悔やんでいることだろう、と英雄は達観したように呟いた。

「何を開き直って——」

「もう一度言おう。これは試練だ。霸道の一步だ。完璧な指導者など、この世には存在しない、しなかった、してはならないのだ。この地球——ではないな、今は。『あの地球がその証人であり証拠である』」

地面を指さした英雄だったが、数秒の間指をふらふらと宙に泳がせ考え抜いた結果、天井を指さした。天井を越え、雲を貫き、神秘的な宇宙を駆け抜け、英雄の思い描く青い惑星を指さした。

「正しくあろうとし、民を思う指導者こそが真である。完璧な指導者はこれから必ず」

外れる”。が、民を救い切ると言う志の結果の反乱かと聞かれれば、それもまた真と言えよう。この世は上手くいかないものでな」

何も霸道に限ったことではないがな、と付けたして英雄は自嘲する。

「民を思つた結果、民の反感を買う。民を蹴落とそうとしたが、何を血迷つたか民は高ぶり感涙を流す。散々なものだ。愛しき人のために行動しても、愛しき人には届かん。恋愛は霸道の縮図、と言えるのやもしれん」

三郎も義経も、英雄のその世界を遮ることはできなかった。神聖な空間に土足で立ち入ることは許されないと、禁忌を犯そうとする体を本能が抑え込む様に、英雄の邪魔をすることを抑止している。

「だからこそ、我らは頭を悩ませ心を砕き、霸道を探求し歩んでいくのだ。一度立てた志を無様に引き下ろす方が、さらなる過ちだと考えるが、どうだ？」

ふつ、と空間が弛緩してくのを英雄以外の三人は感じ取っていた。英雄の目は普段通

り、少しだけふざけているようで至って真面目、自身の意志を貫き悪を許さず黄金の道を振り返らずに歩み続ける、快活な性格を宿す視線に戻っていた。

キツはこの現象に、ある種の得心を得ていた。指導者が発する言葉には目には見えな  
い魂が宿り、聞くものに洗脳に近い納得を与えろと言う。奇跡カキの恩恵スマ的言語を扱つてみ  
せた彼は、明らかに王の資格を持つていと、肌で感じとつた。

義経もまた、得心を得ていたと言うか、改めて九鬼英雄という人間を認識し感心させ  
られていた。九鬼という人間が持つ気迫があればこそ、慕われ覇道を突き進むことができ  
る。自身を生み出した組織に対する敬意は未だに膨れ上がるばかりである。

三郎は言葉を失い、倒してしまった椅子を立て直し席に着き、大きく息を吐き出して  
英雄の言葉を脳内で何度も再生していた。出世街道などと自称し、自らの進路を歩む三  
郎にとって、覇道を突き進む姿は一種の尊敬の対象である。首元に噛みついたと思つた  
ものは指先に過ぎず、逆に軽々と丸のみにされた気分を味わつた三郎は、ようやく英雄  
の言葉を飲み込んだ。

「情けないなどと非難したことは謝ろう。見誤っていた」

「うむ、素直は美德である」

「そ、それでは！」

「だが、貴様の頼みは聞けんな」

ガタンッ！ と音を立て、キツは椅子から転げ落ちた。キツはこの流れで何とか説得しきろうと思っていた矢先の否定に、勢い余ったキツの余力は転倒に使われてしまったようだ。

「な、何故ですがほおっ!!」

そして盛大に血を吐き出した。

「うわあああああああああああああああああああ!? キツさああああああああああああああああああああん!!」

「げふっ、大丈夫ですよ義経さん。少々びつくりしただけです」

「……血を吐いて見せても俺の言葉は曲がらんぞ?」

義経が椅子から飛び跳ねるように立ち上がってキツに駆け寄ったが、英雄も三郎も自身の席から動こうとしない。

「二人共！ 何を落ち着いて——」

「まだ毛玉は取れんか？」

「——へ？」

「ゴホツ、ええ。大きなものが奥の方でまだつつかえて……。食道は傷だらけですよ。食事も一苦勞ですよ……」

「え、え？」

「先程の吐血を見て奇妙だと思った。ただの吐血にしては妙に何か混じっていたからな。なるほど、あれは貴様の毛か」

その問答を聞き、義経はゆっくりとキツの腰臀部から飛び出す毛むくじやらかな尻尾に目をやった。フリフリと動く尻尾に生えているおびただしい数の黒い毛と、キツが吐き出した血の中に浮かぶ数十本の細い毛の束のようなものを見つけて見比べる。血が付着しているが、それは猫が吐き出す毛玉寸前のそれとほぼ同じ。

「やれやれ。そのように吐き出せないから痩せるのだぞ？ しかも中途半端に吐き出して消化器官を傷つける」

「ご心配おかけして申し訳ありません。ごふつ、生理現象に近いものでして」

「何が生理現象だ。全く、下らんことに振り回されたものだ」

「……………えっ？」



三郎たちがいる家屋のある村の跡地から遙か東、大陸の最東端。既に主を失い何十年と経ち雨風に曝され半壊している城に、百以上の黒い塊が犇めいていた。

その塊たちが集中している一階から吹き抜けて繋がっている三階の玉座の間。そこに置かれた蜘蛛の巣だらけの大きな赤い玉座に、世辞でも似つかわしいと決して言えないほど小さな体格の少女が脚を組んで一人の兵士を見下していた。

目の前で跪く兵士に対し、少女は紅葉の葉のような羽扇子を突出し問いかける。

『こちらの損失は、どの程度に留まった？』

『搜索部隊の斥候三名。他は怪我を負っただけで、命に別状はありません』

決して頭は上げず、兵士は問われたことに対し淀みなく返答する。頭の中で何度も考



えてきたのかと疑うほどにスラスラと、達成感すら覚える程の完璧な受け答えであつただろう。

その完璧すぎる答えに、ふっとほくそ笑んだ少女。

『……ふむ。まあまずは無事であつたことは誉れとして受け取れ』

『ありがとうございます』

『……で、だ。何故三名の死者を出しつつ、九割以上の兵は生きて帰つてきた?』

『……は?』

二つ目の問いで兵士のシミュレーションは崩壊する。彼の考えは極めて単純、このまま次回の編成を効かれ、出動時間を聞かれ、またすぐに出撃するように心掛ける旨を伝えて即座にこの場から脱するつもりであつた。

しかし、予想外の追及が始まり、兵士は思わず顔を上げ間拔けな顔を晒してしまふ。

『その三名がどれだけの命を奪い、どのように苦しませ蹂躪させたかという詳細も把握できず、何故お前たちは生きているのかと聞いていたのだが?』

『そ、それは! 一刻も早く行燈機構と漂流物の存在をお伝えしよう!』

『殺した、という報告でも問題はなかったが』

『独断での行動は控えて指示を仰ぐべきと判断した結果であります！』

黒い兵士は必死の訴えかけを始めた。目の前にいる少女に懇願するように言い訳を積み上げていく。

醜悪な容姿をしているといっても、生を受けてから何十年と経っているであろう人外の兵士が、ようやく両手の指では数えられなくなった程度の年齢にしか見えない少女に恐れ戦いている。

『戯言に過ぎん。貴様らの誉れは、新兵の初陣において首手柄のない生存報告、という兎戯にすら及ばない。死を迎えた三人の斥候の誉れは貴様らに比べて、いや、比べるのが無礼なほどの大輪を咲かせている。貴様ら蕾にすら届かない枯れ枝のような兵士の生存報告など要らぬ。適当な飛龍の餌にでもなっているほうがお似合いだ』

『し、しかし！』

何とか許しを請おうと、立ち上がり一步前に踏み出し接近して深々と跪こうとした兵士。

しかし、兵士の体は一寸たりとも動かなかつた。

動け動けと、脳が神経系を通して信号を四肢に伝え兵士を立ち上がらせようとするが、石膏で型でも取られているように全身が硬直し動けなかつた。

『つ……!?!』

『漂流物ドリフターズの存在と仲間の死に怯えおめおめと泣き叫び帰ってきた兵など、要らぬ』

続いて兵士に襲つてきたのは、手首や足首といった間接を締め付けるような圧迫感。血管は押しつぶされ、筋繊維は悲鳴を上げ、神経系は全身に危険信号を送り悶える。

『貴様ら中隊は何人だつたか、確か三十余名いたな。貴様ら全員、龍の餌すら勿体無い。麻袋を被せて新兵の試し切り用の木偶になると良い。捕虜とでも嘘をついて的にして、新兵どもに命を絶つ経験を味あわせるには丁度いいだろう』

少女が右手で何かを握つたように拳を作り、それをグツと下に引き下ろした。

『あぎっ——』

すると、先ほどまで硬直して動けないままでいた兵士が意識を失ったように倒れこんだかと思うと、突然立ち上がって少女を背にその場を後にした。その眼は何の光も宿っていない虚ろなもので、死人と言われても不思議に思わない。

兵士が玉座の間から出て行ったことを確認し、少女は呆れたようにため息をつく。

「……やれやれ。使えぬ人材ばかり、何故崩王様はこのような下等な臆病者共に兵を任せるのだ」

少女は立ち上がって吹き抜けから一階にいる兵士たちに目をやった。醜い風貌、農具しか握ったことのない土臭い手、蹄交じりの獣脚、緑色やら泥色やら汚らしい色の肌。

寄せ集めの兵士とは言っても、及第点にも満たない農民崩れ兵士未満の木偶の坊。それを指揮するべく派遣された少女は頭を抱えて再び玉座に座する。

「やはり、家畜を育てるよりも我が自ら「動かした」方が手っ取り早いかな？」

少女は両手の拳を開いたり閉じたりを繰り返しながら、右手に残る感触に嫌気を覚え

たのか、眉間にしわを寄せて舌打ちをする。

しかし、左手の感触には満足なようで、左手を燭台からくる明りに透かすように両面をじっくりと観察している。

「もう充分に、私の従者は揃っているのだが……。フハハハ、それにしても……。額に斜め十字傷の、若い男が漂流物……。！」

両腕を胸で交差させ身震いし、ピントの合っていない虚ろな目を浮かべながら喘ぎのような感嘆の声を漏らし、恍惚な表情を浮かべる。

「……………ふはははあつ……………！ お待ちください、兄上。今すぐ、愛しき妹が馳せ参じましよう……………！」

## 第十八幕 気まぐれのよう揺れる世界から

三郎と義経がケットシーの村に到着した翌朝、キツも英雄も三郎も目覚めぬほどの早朝に義経が一人で外に出て村を散歩していた。散歩とは言っても、気分は晴れないし朝の爽やかな気分も得られることはできなかった。

理由は明白。ケットシーの村に漂うのは死の香り、蔓延する煙霧と朝方の靄が陽光を段々に遮る不快な気候、それを体中で受け止めて快感に浸るような狂人ではないからだ。

改めて壊滅具合を確認していた義経だったが、徘徊すればするほど彼女の頭の中で、やり場のない複雑な感情がぐるぐると目まぐるしく動き回っていく。もつと早くこの場に辿り着けていればこの惨状も変わったかもしれない、という自責の念。何故このような悲劇が起こされたのか、という当然の疑問。流体状の重苦しい感情が義経の脳内を支配していく。

臨時に作られた火葬場は灰と木くず、こびりついた焼け焦げた死臭だけを残り、ただ

の更地に戻っていた。ひよっとすると、その更地には大きな一軒家が建っていたかもしれないし、この村の名産品を育てていた畑かもしれないが、義経にそれを知る術はない。あるのは、火葬場に使われたという事実のみ。

義経は踵を返し、火葬場であつた更地から墳墓へと向かう。

墳墓とは言つても、こちらでもまた元々は墓ではなかつたのは明白だ。家の枠組みがちらほらと残つた中央に膨れ上がる土の丘、死体を引きずつたとしか思えない血の轍、放り投げられた農耕具。必死に土を掘り起こし、せめてもの思いで吊つてやろうとした結果であろう。

その少し離れた部分に、こちらの墳墓より小さめの土の山がもう一つ建てられていた。義経はそれを見ただけで何かを察することができた。

——敵兵まで吊うその様、見事。

村を壊し命を奪い、殺戮の限りを尽くしたであろう黒い兵士と呼ばれる存在の墓。そのように丁寧な墓標が建てられている訳ではないが、土の盛り方が甘いことやより乱れた血の跡が、死者に対する敬意が薄れていることを示している。

義経は二つの墓に両手を合わせ、深く深く頭こぶを垂れた。

十数分かけて義経は村の徘徊を終わらせる。その徘徊の最中に見つけたほんの少しだけ開けた広場に座していた。石を土に埋め込んで作られた円形の、村人たちの憩いの場であつたと思われる広場の汚れと小石を払い、義経は膝を突き瞑想に入っていた。

思うことは多く、まとまることは決してないだろう。しかし、義経は乱れた心を正す必要があつた。今日明日中にやってくるであろう大隊を相手にするため、義経は剣をより鋭く尖らせて待機すると決めた。

それがこの混濁した脳内を解消し、死んだ村人の深き悔恨を晴らす最善の手段と判断したから。

義経は愛刀を鞘から引き抜き膝に寝かせ、目を瞑つたまま刀身を徐になぞる。義経ではない義経、彼女のオリジナルと言える平安末期の名武将、源義経が愛用されていたとされる刀に触れ、何かを確かめようとしているようだ。

罪人の身体を肩から膝まで切り裂き、怨恨が収束した妖怪を伐倒し、蛇の声で調べを奏でるように吠えた、千年近く失われていた刀に呼びかけ頼る。

ぬるい、ぬるすぎるね。

声が聞こえた。



道化が観衆の前でおどけたような、閻魔が罪人を糾弾したような、師匠が門下生に叱責したような、親友が肩を叩いて激励したような、幼児が大人を軽視したような、聞くものを錯綜させる不可解な笑い声。

—— ははは、笑わせやがる。こんな小娘ガキが僕のクローン？ お笑い種じゃないか。

「……何が、おかしい」

—— 全部、とは言わないで置いてやるよ。同一人物一歩手前の好よしみだ。

ギリリ、と義経の刀が鈍く光る。

—— 戦場に要らん感傷を持つことが一番の過ちだ。死んだ奴のことを顧みる、甘つちよろい奴だ。漂流物ドリフタスの中じゃお前が一番甘つちよろい。

「……………」

—— 精々、楽しむと良いさ。

刀から光が失われ、声は聞こえなくなった。

ほんの少しだけ差し込んでいた陽光が黒雲に飲み込まれ、村には自然の恵みとも言える明かりが辿り着かない暗さを引き起こしてしまう。

「……嫌な天気だ、本当に」



義経が徘徊を終わらせてから大よそ数時間が経過したところで、キツの容態が悪くなった。咳き込んだり血を吐いたりするいつもの生理的現象とは違い、頭を押さえ苦痛の表情を浮かべながらも、歯を食いしばり必死にペンにインクを染みこませて羊皮紙に書き込む様は実に痛々しかった。

—— 黒き兵士、おおよそ五十名……！

廃棄物<sup>エンス</sup>、しかと、確認しました……。一

名の廃棄物……！ 時間が、ないっ……！

その言葉を最後に、キツは意識を失い机に倒れ込んだ。

——キツは自然の精霊に呼びかけ索敵をすることができると不思議な言葉の力があるようだ。精霊崇拜の一種だそうだがな。

キツの代わりに状況を一番理解していた英雄が義経に説明した。かつて黒き兵士との戦いになった際にその能力のおかげで穴を突くことができた、英雄は感謝の意を気絶したキツに向けていた。

キツの最期の言葉、「時間が無い」とはどれほどのことなのか。キツの采配で言う所の紅茶が入られる程度の数分か、装備を整えてようやく対応できるかどうかの数十分か。

しかし、「時間が無い」と言われてしまえば、即座に動かないような人間はそうそういない。義経は勢いよくキツの家から飛び出して周囲の気配を探る。相手が生物で兵士であれば、義経が認識できないはずがないからだ。

半径一キロ弱に及ぶ索敵の結果、発見してしまう。索敵担当と思しき選考した五名程

度の何かが、散会しながらこちらに向かつてきていた。決して速いとは言えないのは慎重なためだろうが、一時間もしない内に敵軍の本体が村に到着することは明らかだった。

義経に続いて外に出てきた英雄にその旨を伝えると、英雄は「あやつらに伝える必要がある！」と村の奥へと駆け抜けて行ってしまった。

そして、その索敵終了から約十分。義経の定期的な索敵による若干の精神の乱れが顕になってきていた。相手に気づかれぬように気を巡らせ他人の気を探る、精神に相当地な負荷のかかる高度な技術の多様に、流石の義経も疲労の色を見せ始めた。

その時だった。

「阿呆。焦ってどうする」

聞き慣れた声と共に義経の頭が小突かれた。力強いが肉体的には痛く感じない、心にくく感じる拳に義経は目をパチパチとさせ、勢いよく後ろを振り向いた。

そこには、既に刀を抜いて戦闘態勢に突入している天神館が十勇士の大將が、呆れた

ような表情を浮かべて首を鳴らしていた。

「い、石田君……!?!」

「鳩が八八<sup>ア</sup>耗口径<sup>ハ</sup>高射砲<sup>ト</sup>でも食らったような顔を浮かべている暇があつたら少しでも休め。お前がこの中で一番頼りにされている自覚をしっかりと持て」

義経の頭を再び小突き、三郎は義経の一步前に出て肩を回して関節を解していく。その様に義経は数秒の間思考を停止させてしまったが、すぐに意識を明確にさせて三郎に食い掛かる。

「こ、断つたじゃないか!」

「……キツとやらの思惑にまんまとはまつてしまうことは、未だに不愉快だ。それは変わらん」

だがな、そう区切つて一息置く。

「い、一宿一飯の借りを返しに来ただけだ。甚だ不本意ではあるが協力してやろう」

——僕に力貸してくれないかな？

——全く、あの鍛錬馬鹿のせいだ。おかげで俺の出世街道は蛇腹になつてしまつた。

九鬼家の反逆において三郎は友人に頼まれた光景を思い出す。人の頼みを素直に聞き入れることのできない、仲間に対して不必要な感情移入、どれも三郎の出世街道の道のりを長くする行為だ。

そんな彼を応援し付き従つた腹心、そんな彼の陰に隠れた懐刀のような仮病使い、そんな彼の初めての友人とも言える好敵手。三郎の価値観はくだらない友情で情けのないものに墮落する。

それでも彼は出世街道の遠回りを楽しみ始めている。

——誰かから聞いたかは忘れたが、一番の近道は遠回りだつた、と言えるようだ。せいぜいそれが真実であると願ひ、邁進する他ない。果てしなく続くこの道を、心臓が破れんばかりに駆け抜けてやろう。

「この石田三郎、やるからには全力を賭して対処する。なに、出征街道を**暴進**するこの俺が味方になったのだ。有りがたく——」

「素直に協力してやると言えんのか、貴様」

三郎の言葉を遮る様に呆れたような文言が飛来する。

声の主を視界に入れるべく義経と三郎が背後を振り返ると、そこには声の主だけでなく、多くの兵士が武器を構え防具を纏い、燃え盛る闘志を瞳に宿して集っていた。ただの農民ではない、かと言って憤怒に支配された木偶でもない。

明確な勝機を手に入れるため参列した正規兵に近い。

「フハハハハハハハッ！ 九鬼英雄が即席兵团だ！ 剣兵十名、弓兵四名、槍兵十名、騎兵と銃兵がいらないのが辛いところだが、即席ならば十二分の成果を發揮できるぞ！」

「き、貴様……。一体いつの間に**武装兵团**を……」

「驚くのも無理はないだろうが、我が指南したのは武器の「驚異」だけだ。槍も剣も、このケツトシーとやら、種族柄なのか容易く身に付けおったわ！」

「ゴホッ……。かくいう私も、剣技なら腕に覚えがありますよ……」

その即席兵団の後ろからヒョコツ、と顔を覗かせたのは、先程まで完全に気を失っていたキツだった。

「キツさん！　大丈夫なのか？」

「皆さんが奮闘している中、私だけ倒れているなんて無様なことはできませんよ……」

余程無理をしているのか、義経の気遣いに対してキツが笑顔で答えても、その笑顔が青白く染まっていては大丈夫と思えるはずがない。

「無茶をするな阿呆。敵の初期行動を読めたただけでお前の役目は果たしただろう」

キツのその姿が無様だと言わんばかりに、三郎は苛立ちの籠った視線を向けていた。しかし、キツはそのむしやくしやくした感情を直に充てられて嫌な顔一つせず、それどころか心地良い様に微笑を浮かべているではないか。

「気味の悪い。ヨッシーそっくりなのも相まってかすこぶる気持ちが悪い」



「おっと、失礼しました」

両手で口を覆い隠して三郎のきげんをこれ以上損ねないように配慮するキツ。

「できる限り、敵の動きをお伝えします。剣の腕前と言つても、私には自衛しかできぬでしょう。ケツトシーは元来、俊敏な動きと短剣による刺突を得意とします。自分の身は自分で守りながら戦況を把握いたしましたましよう……ゴホツ」

「無理を言わず、女子供と一緒に隠れている方が賢明だと思つがな」

三郎のその悪意のない発言に義経も賛同していたが、その言動が彼らの心の傷を深く抉つてしまう。

「……女子供は、もうほとんどいません」

「……なに？」

「あのお墓に眠る大半は、子供や戦闘能力の低い女性なんです」

三郎と義経は目を見開き絶句してしまふ。よくよく見れば、英雄が編成し率いてきた

兵士の中には華奢な体躯の女戦士も混じっている。余程の覚悟と状況でなければ、このような弱い女性が戦場に駆り出されることはあつてはならない。

しかし、剣兵にも弓兵にも槍兵にも少なくとも一人ずつ、激しい闘志に身を焦がしている女兵士が混じっている。

「ここに居る四人の女は何とか生き延びることができた。子供はあと二人、地下に造られた食料庫にこの村の老いた村長と共に避難させてある。後の村人全て、この兵隊に参集している」

「男も数名殺されました。しかし、明らかな殺意のない、「殺しやすい」女子供、臆病そうな若者から狙つて……ゲホッ！ 殺して、いきました。私も狙われていたようですが……」

その場に居合わせたのかどうかは分からないが、英雄は唇を噛みやり場のない怒りと詫げる気持ちを抑え込んでいる。キツは生き残ってしまったと言わんばかりに、何故彼らだけ殺されたのか、返答者のいない疑問に頭を食い破られていた。

「……彼奴ら、そこまでの外道か」

その二人の姿と集った兵士たちの震える心を全身で受け止めた三郎の刀がバチツ！と唸り始めた。風も吹いていないこの村において、三郎の周囲に上昇気流が発生したかのように彼の髪がざわざわと震え始める。

「こんなに不快な気分になったのは、義経にとって初めてだ」

動揺に、義経も怒気の孕んだ声を吐き散らすと共に闘気を高めていた。三郎のように音を立てて身体に影響を与えるような変化はないが、周囲の靄が義経を中心に切り裂かれて僅かながらに晴れていく。

二人の剣士の戦う理由が、これ以上ないほどに定まった。

「……………っ!? み、皆さん！ 武器を構えてください！」

突然キツが叫んだ。

反射的に武器を構えることができたのは三郎と義経のみ、英雄は武器を持っていないので拳を握り、数秒遅れてケットシーの兵団が武器の穂先をキツの視線の先に向ける。

弓兵は二手に分かれ、高台に移動し高低差の攻撃を仕掛ける組とその場に残り支援する組を作る。

大よそ半径三キロ程度の円に治まってしまふような小さな村に静寂が訪れる。ほとんど更地と言つても問題のないこの土地に視界を遮るものは少ない。

鎧や武器が微細な体の動きで音を立てるが、それ以外の音は何もしない。呼吸が止まってしまったのではないかと思わせる程に、恐れを助長する金属音以外は排他されたようだ。

ゴクリ、と誰かが喉の渇きを無意識に潤そうと唾を飲みこんだ。次の瞬間――

数十以上の黒い塊の集合体が、彼らの頭上から落下してきた。

陽光がない状態での頭上からの攻撃に真っ先に気づいたのは義経だった。彼女が上を仰いだ瞬間、その場にいた者が上を見上げ、絶句する。

『う、うわ——』

ケツトシーの兵士が叫び声を上げる寸前、三郎が飛び立った。

「せえい!!」

黄金色の龍を纏ったように刀身が震え、眩い閃光と共にその塊は綺麗に十字に切り裂かれる。引き裂かれた塊を村に落ちないように空中で何とか弾き飛ばすが、二つの塊を零してしまう。

その切り裂いた感覚に驚愕した表情を浮かべながら、三郎は叫ぶ。

「義経え!!」

「ああ!!」

ケツトシーらに目掛けて振つてきた塊を、義経は着弾する前に高速の斬撃で細かく斬り、闘気を帯びた剣撃で村の外まで弾き飛ばした。残りの一つも対処しようと剣を振

るった義経だったが――

――曲がれ。

義経の鋭い踏み込みからの一閃は空を切ってしまう。その手ごたえのなさに義経は目を見開き対象の軌道を確認した。

黒い塊の欠片は一度重力に逆らい空中で跳ね上がり、落下予測地点を大幅に変更したではないか。

その不規則と言うか、不可解すぎる軌道に翻弄されたように、義経は踏込を止めてしまふ。そのまま残りの一つの欠片は村の誰もいない場所に落ちた。人的被害はなかったものの、その真下にあったものはあっさりと潰れてしまった。

『は、墓が……!』

「ちっ……!」

「……くそおっ!」

三郎は自身の対処の甘さに舌打ちし、義経は己の判断ミスに吠えた。

敵の攻撃はケットシーたちに肉体的攻撃を仕掛けるように遠距離の攻撃を仕掛けた。しかし、結果的に狙われたのは彼らの精神だ。

ケットシーの感情が揺さぶられ、武器を握る手が遂に激しい震えを伴い始めてしまう。

『突撃い!!』

ケットシーたちの不安定さが露呈したのを見計らったように、密林から数騎の黒騎兵が武装された馬を操り四方から飛び出してきた。騎兵は片手に手綱を握り、斧槍をもう片方の手に握り地を這わせて突撃してくる。

『弓兵え!! 動きが止まったら即座に敵騎を仕留めよ!!』

その瞬間、英雄が義経と三郎の聞き慣れない言語を用いて弓兵に喝を入れた。激しく震える大音響と、それに共鳴し膨れ上がる覇気を全身に浴びた弓兵は即座に弓と矢を構えた。

その爆弾のような喝撃に心身揺さぶられたのは弓兵に留まらず、ケットシー全体の士

気を立て直した。震える穂先は馬の眉間を差し、短剣を己の手のように馴染ませている。ケツトシーの洗練度は取り戻される。

ケツトシーの槍兵が敵騎兵の攻撃を回避しながら馬の脚を狙い落馬を誘発しようとするが、敵騎兵も手慣れた様にそれを跳躍し回避する。しかし、その先に待ち構えていたケツトシーが身軽に飛び跳ね騎兵の武器を切り落とし落馬させる。

ケツトシーから大きな恐怖が消えたことを確認した三郎と義経は、互いに背中を合わせて全方位からの攻撃に備える。しかし、二人が近づいた理由はもう一つあった。

「石田君、あの塊……!」

「やはりか、思い過ぎしであつてほしかったな」

二人は顔を見合わせることなく、刀から伝わった奇妙な感覚を共有し合う。

「死んだ生き物の寄せ集め」だ。それも、まだ死んで間もない」

「確りと血が抜き取られているのに何かわけがあるのかは分からないけど、趣味が悪いなんて言葉では片づけちゃいけない!」

「胸糞悪い、阿呆も極まった敵将がいるようだな」



二人の怒りのボルテージが最高潮に達する寸前だと分かるほど、彼らの内に秘められた闘気が膨れ上がっていく。それに呼応するように各々が握りしめる刀が震え吠える。

「まずは騎兵だ！ 次段が来る前に機動力を奪うぞ！」

「ああ！」

決意を新たに剣士が動いた。

## 第十九幕 誰ガ為ノ世界

「この阿呆共があ!!」

村の中央で騎兵に囲まれ今にも殺されそうになっていたケットシーの下に三郎が駆けつけ、敵の騎馬の後ろ脚に鋭い刺突を入れる。痛みに驚いた馬は前足を高く振り上げ倒れ込み、騎兵の動きが止まる。

その三郎の動きに恐れをなした他の敵兵の動きが若干鈍る。それを三郎は見逃さなかつた。

「今だ、切り崩せ!!」

三郎の言語はケットシーとは違う。言葉によるコミュニケーションは愚か、ハンドサインすら通じるか怪しいほど、彼らの文化には差異が生じている。

しかし、ケットシーは三郎の声に応えるように騎兵に攻めかかる。言葉は分からずとも、何を言いたいかは理解できる。戦闘意欲が向上した状態での意思疎通は、奇しくも単純で伝わりやすい。

騎兵は足に群がる虫を払う様にもがくが、ケットシーの軽やかな動きに翻弄されつつ短剣で体を切られてしまえば一瞬にして倒れてしまう。

「殺すなよ！ 尋問が済んでないからな！」

——言葉が通じていてようが、こいつらが止まるとは思えんが。

三郎は念のために忠告をするも、ケットシーの瞳孔が大きく開いた表情を見てその忠告が意味をなさないのではないかと心配しつつも、危機に陥りかけたケットシーを救いにその場を後にする。

その直後、黒き兵士の増援が現れる。数はおよそ五十、一つに固まって村の正面から突撃してきた。黒い波と表現されるほど、不気味で気味の悪い大軍だ。分が悪いと判断したケットシーの少ない槍兵は僅かに引け腰だ。

それに対処すべく高台の弓兵が矢を構えるが、その必要はないとキツがそれを制する。英雄もまた大声量で味方の援護を遮った。その大群から離れるようにと告げられたのは彼らの安全を図るためではあるが、その安全は黒き波からくる脅威に対してではない。

それは、その五十の兵団を凌駕する剣士の余波に充てられぬように放たれた、巻き添いを食らわれないようにと憂慮した結果から来た撤退命令。

剣士は馬の尻尾のような髪を揺らし駆け抜け、走り込んで生じた力を全て刀に乗せて叫ぶ。

「全員……っ、寝ていろおおおおおおおおおとおおおとおおおっ!!」

たった一閃、義経の薄緑が吠えた瞬間、敵兵は竜巻に舞い上げられた木の葉のように吹き飛んで行ってしまった。砂埃を吹き飛ばすように、黒き兵士たちはなす術もなく森追り返されてしまった。

「ケットシーさんが混じっていないのであれば、手加減する必要はない!」

『何をぼやぼやしている! 素早く敵騎兵、を……?』

その光景に唾然としていたケツトシーたちの集中力を取り戻すために叫んだ英雄だったが、残っていた敵騎兵たちが一目散に村から逃げ出して行ってしまった。泣き喚き、懇願するように馬を走らせ、馬のないものは防具を外して軽装になって敗走した。

あまりにも突然で不可解な現象に漂流物たちは首を傾げるが、ケツトシーは勝利を確信し歡喜の声を上げる。互いに剣を打ち鳴らしながら凱歌を奏で、生かしておいた敵騎兵を吊上げて尋問しようと意気揚々としていた。

しかし、肝心の問題が解決していない。

『みなさん！ まだ廃棄物エシズが来ていない！ 油断しては駄目だ！』

キツがケツトシーたちに呼びかけるも、ケツトシーは達成感に浸り集中力を切らしてしまっている。勝利と言う目先の褒章にかじりついたまま離れようとしなない。

その様子を見ながら決して刀は仕舞うことなく、周囲のあまりの静けさに違和感を覚えながら参集する三人の漂流物ドリフタルズ。

「一体、何の狙いが……？」

「何かを考えての行動としても、あれほどまで必死に逃げるものか？ 演技には思えん」

義経の訝しがる疑問の声を三郎が断じる。しかし、三郎も奇妙な違和感を感じているのは確かであった。そう感じているのは英雄も同じようで、三郎に問い質す。

「黒き兵士どもの策略だと？」

「知るか。奇策のような行動だったが作戦に思えん動き方をしている。義経の攻撃に怯える様などは到底演技とは言えん」

「面妖な……。だとすれば、何故あのような連中が責めて来たというのだ——」

「簡単なことだ。あの愚か者どもは兵士になりきれなかった、ただそれだけのことよ」

それは唐突に訪れた。

音もなく、気配もなく、村に一步足を踏み入れた。その瞬間に漂流物ドリフタメスの肌がぶわっと粟立つてしまう。

「農民が兵士に太刀打ちできるのは、死ぬ覚悟がある者だけである。これは至極当然のこと。死にに逝く勇気のない農民など、財産抱えたまま切り捨てられて死ぬだけよ」

その声の質は安らぎを与えるようで、伝える感情は恐怖をもたらず。齡十歳程度に見える小さな体躯の背後から、人とは思えない黒い何かがずると顔を覗かせているようだった。それはさながら幼き鬼が災厄を引き連れて来たかの様。

その声を、その鬼哭を、その姿を、その鬼面を、彼らは知っている。

天狗の伝説に現れる紅葉のような羽扇子。真つ黒な帯と紐で縛り上げられた銀色の長い髪。袖を全て切り落とした白衣びやくえに黒色の袴。額に刻まれた畏怖すべき×印。

「索敵が優秀なようだが、レーダーのように常時起動できないのは痛手であるな。その隙を縫って一気に詰めればこの通り、簡単に到達できる」

少し本気を出して走ったがな、そう付け足して自身の脚を叩いて労う鬼が、ゆつくりと英雄に視線を向ける。その瞳は血の色に染まり、彼らの記憶を穢す。

「嗚呼、この九鬼紋白、貴方に御逢いするのを心待ちにしておりましたぞ、兄上……！」  
「何を、何をしているのだ、紋……！」

驚愕を隠せない英雄。必死に問い質そうとするその声は無様に震え、体中の汗腺が洪水を起こしたような不快感が英雄を襲う。

義経も三郎も声にならない程驚きながらも、決して刀を下ろそうとはしなかった。得体のせれない部分が多すぎる以上、彼らの知る九鬼紋白とは違うと分かってしまった以上、決して警戒心を解くわけにはいかなかったのだ。

そんな剣士の対応など視界のすら入れず、紋白は英雄に一步近づく。

「こんな家畜ばかりの世界に一人で投げ出され二百と七日、いつ何時も家族のことばか



り考えておりました。何時か必ずあの世界に帰ると願ひながら……!」

「何をしているのかと、聞いている……!」

「しかし、ようやく兄上に会えました。それも、我と同じ世界の兄上! 臭いで分かりま  
すとも、あの男の臭いがする兄上です!」

「何をしているのかと聞いているのだ! 答えんかああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ!!」

痺れを切らした英雄の咆哮が紋白の鼓膜を引き裂きにかかす。

しかし、その激しい大声量の叫び声すらも、紋白を快楽を与える要因に他ならない。  
頬を紅潮させ、両腕を交差させながら身震いするその様は実に官能的だ。

「ああっ……! 懐かしい声、懐かしき覇気……! これで高笑いを「おまけ」されてし  
まえば、我はすぐにでも果ててしまうでしょう……!」

「紋、お前っ……! 一体どうしてしまったというのだ!!」

「……この世界の人間から聞いておりませんか? 廃棄物という存在について……」

その瞬間、英雄の目の前が真っ暗になる。目の前にいる愛しき妹、三郎に三つ首の犬

として例えた最愛の肉親の一人が、今こうして英雄に敵対する立場を取っている。それも、キツの説明でいう所の「同じ世界線の兄妹」だ。動揺してしまうのも無理もないだろう。

「この世界を滅ぼすために参集された負の体現者、などと言われております」

「お前も、お前もそのような愚かなことに参加しているのかっ!!」

「そのために呼ばれております故。だからこそ今こうやって殺戮に興じている訳であります」

何かおかしいところでもありませんか、そう付け足して小首を傾げた。

一切嫌悪感を示さず、命を奪うことを肯定した紋白。その姿を見た英雄の胸に、電柱が貫通してもおかしくないような穴がぼっかりと開いてしまったように、英雄は激しい虚無感と眩暈に襲われてしまう。

その姿を見てもなお、紋白は冗談だの嘘だのと言葉を取り消そうとしない。心からの発言であろう。

「ご安心ください兄上。兄上は私が責任を持って殺して差し上げます」

刹那も苦しませぬように、そう付け足して紋白は右手を開いた。

「動くな九鬼紋白お!! それ以上動けばその腕たたつ切る!」

三郎がその動きに即座に反応して一步足を踏み出し牽制しようとした、その瞬間だった。

「……………下郎めが……。我と兄上の間を引き裂く気か?」

先程の恍惚な表情から豹変し、それこそ鬼のような怒りの形相を浮かべた紋白の右手が三郎に向けられた。すると、三郎の足もとから巨大な西洋剣のような刀身が現れ、頭部を狙って突き出された。

「うおっ!」

その刃を何とか弾いていなが、三郎の左肩を刃が切り裂き出血させる。三郎を切り

裂いた刃は役目を終えた直後、住処に戻るウツボの様に再び地中へと姿を隠す。しかし、紋白の腕はまだ挙げられたままだ。

「ぐっ……!?!」

「石田君下がって!!」

「義経、お前も邪魔立てするか」

三郎を庇うように前に出た義経目掛け、再び地中から刃が襲いかかる。しかし、義経は「来る」と分かっていたために対処は容易だったのか、その巨大な刀身の腹から叩き切り真っ二つにしてしまう。

真っ二つにした、が――

「……………ふむ」

「……………な、なんだこの感触……!?!」

驚きの表情を浮かべていたのは義経の方だった。紋白は自身の攻撃が切られたことに対しては大して驚く素振りを見せず、義経の驚く様だけを見て愉しんでいるようだ。

斬られることが既に念頭に置かれていたように。

一方の義経は鋼鉄のような刃を切ったその時に伝わった感触を奇妙だと感じていた。石田の肩を服の上から引き裂くほど鋭利な鋼鉄の刃を切ったはずなのに、手に残るのは藁でも切ったような手ごたえのなさ。藁の束の強度は相当であっても、鋼鉄の硬さには及ぶことはない。

義経は鉄を切ったように感じることはできなかつた。

「あつさり斬られるもの、か。ならば数を増やしてやろう」

僅かに動揺する義経に向けて、今度は細<sup>レイ</sup>直<sup>イ</sup>剣<sup>ピア</sup>のような細く鋭い棘が波のように襲いかかった。それはさながら針の筵だ。

しかし、義経がこの程度を裁ききれぬわけがない。

壁を越えた者と称される実力を如何なく発揮し、迫り来る数十の刃を全て粉みじんに切り裂いてしまう。鉄と思わず切り裂いてしまえばそこまで、行うことに変化はない。

「おっと、すまぬ。一本出す場所を間違えた」

ブシュツ、と何かが嘖き出す音が義経の後方から聞こえた。

「あつ、ぐ………?」

「えっ………?」

響き渡る悲痛な呻き、何があつたかは直ぐに判断できる。しかし、義経はそれを己の目で確かめようと、ゆっくりと背後を振り向いた。

するとそこには、義経に迫ってきた細い針に腹部を貫かれた三郎が、膝について激痛に顔を歪めていた。

「し、死角からとは、卑怯なっ………!」

義経の影に隠れた三郎にとっての死角。そこから高速で伸びてきた一本の棘が三郎を射抜いていた。義経に襲いかかっていた針の群衆から離れた一本の「はぐれ」が、三郎へ容赦なく突き刺さる。

義経の対応が一点に集中しすぎていた結果招かれた、防ぐことができたはずの被害。

紋白はここぞとばかりに嘲笑う。

「守らなくてどうする。甘い性格の癖に、ここぞという時に何もできんのか」

——甘つちよろい。

その言葉が義経の頭の何かを、ブツリ、と切断する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

戦場を跳ねるように闊歩し、義経は紋白に刃を向けて突撃した。

「両腕を斬つてでも止める!! 覚悟!!」

ギラリと鈍い光を放つ刀が紋白の頭上から常軌を逸した高速の一閃を描く。空気も何もかもを引き裂き、紋白の肩を真つ二つに引き裂かんと刃が鳴った。

壁を越えた武人の放つ必殺の一撃を前に、紋白の顔は一切の恐怖を滲ませず、歪んだ

笑顔を張り付けていた。

「その両腕とは、お前のことか？」

ガキツ！ という音と共に義経の身体が空中で止まった。

義経の刀が紋白の剥き出しになった右肩に触れる寸前のところで、刀が何かに捕えられたように一切の挙動を許さなかった。それだけでなく、義経の身体の節々にも鋭い圧迫感が襲う。

「玉繭」  
フレイド

義経の柔肌に見えない細いものが食い込んでいき、義経の両腕がハムのように圧迫されていく。その鋭い痛みには耐えながら義経は刀を押し込む力を弱めようとしない。そ



の絶えない闘争心に呆れたように関心する紋白。

「弛めない、か。少しでも力を抜いてしまえば、その両腕は真つぷた——」  
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

激しい咆哮と共に義経の腕を添う様に、鋭い電撃を帯びた斬撃が走った。

「なに——」

大量の血をシャツに滲ませ、顔を酷く汚しながらも剣を振るい義経を解放しに突撃した三郎は、義経を縛る何かを切り裂いてそのまま倒れ込んだ。地に顔を擦らせ、血塗れになりながらも泥だらけになりながらも、三郎は気骨を折らなかつた。

血塗れの剣士の意地によって義経の拘束が僅かに緩む。腕や足の自由が確保できたその隙に、義経は刀をさらに強く押し出した。

「はあああああああああああああああああつ!!」

ズブリ、と紋白の肩に刀が食い込んだ。

紋白が僅かに顔を痛みに歪ませた瞬間、義経と三郎の背後から一人の男が飛び出してきた。

「ホワツタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

紋白の小さな体に巨体の跳び蹴りが突き刺さり、紋白は義経の刀に肩を引き裂かれながら後方に吹きとんでいった。

肩で息をし、腹部にサラシと下半身にふんどしだけを付けた半裸の身体が噴き出した汗で艶を出している。その表情は非常に痛々しく、直視することが躊躇われるほどだ。

男は疲弊しきったまま、倒れ込んでいた三郎を抱え上げて自陣まで義経と共に引き返し始める。

「く、九鬼……。 お前——」

「言うな!!」

三郎の言葉を声で制する英雄。言いたいことは分かっていると云わんばかりに、三郎

を鋭い眼光で射抜き黙れと威圧する。

「内部分裂を見てきたのだろう!? ならば察せ! 正さねばならんだ! 力づくでも、分かせてやらねばならんだ!!」

英雄の目から涙が零れ落ちる。自身の妹の変貌ふりと、その妹を罰せねばならないという状況にどうにかなってしまいそうだった英雄が、今こうして一撃を与えただけでどれほどの気力を使ったのか、三郎には予測もつかない。

英雄は紋白が立ち上がってこちらに向かつて来るまで、紋白から視線を外さなかった。責任は背負ってやると、兄の体裁を保とうと必死だったのだ。

しかし、彼が背負うのは兄としての責務だけではない。

この世界の構造は非情なものだ。

「<sup>エンズ</sup>廃棄物は、殺さねば、ならん……っ! 例えそれが友人だろうが、家族であろうが!!」

その決意の裏に何があるのかは分からない。しかし、家族を手に掛ける覚悟を手に入れるだけの何かを彼に降り注いできたのだろう。

「——そう。廃棄物我と漂流物兄上たちは争わなくてはならぬ」

英雄の視線の先で紋白がゆっくりと立ち上がる。

「兄上は、誰を殺めたのでしょうかね」

「っ!!」

廃棄物と言えど元は人間、それを殺めることは人間を殺したということと同義である。決してそれを口にはしない紋白ではあるが、十分にその意図は英雄に伝わってしまっている。それが英雄への言及と成り得る上、効果が高い。

「この世界は非情なものでありますなあ。かつての仲間や友人が仇敵と成り得るのですから。この異能も、クラウの犠牲なしではこのような発展には至れませんでしたぞ」

ヒュンツ、と何かが空気を切り裂く音が聞こえる。

「その我に対する全力の一撃を繰り出せるようになるまで、何人殺めました？」

自分の腹部を摩りながら微笑を浮かべる紋白。その服の下には内出血で肌がおどろおどろしいことになっていることだろう。

「少なくとも、あずみは兄上に殺されたはずですが、ね？」

すっかり黙りこくってしまっている英雄に、紋白はほくそ笑みながら糾弾する。自身の従者を殺したということに対する非難に加え、好奇心が見え隠れする口ぶりだ。

その言葉により生じた罪悪感にぐるぐると脳みそをかき回されているような錯覚に襲われながら、英雄は自身の犯した罪を振り返る。

——感謝の言葉も、ありません……。

「ああ、そうだ。我がこの手で殺した」

手をかけた人間の言葉で英雄は我に返った。

「別にあずみを殺めたからと言って責め立てたりはしませんよ。我らの宿業となった戦いに情など——」

「あずみは、強かったぞ」

紋白の言葉を遮り、英雄は過去を見つめて言葉を紡ぐ。

「廃棄物の宿業とやらに最後まで抗い、我に殺してくれと頼んだ。再開した当初はそこそ宿業に支配されつくしていたが、いやはや全く、我が最高の従者ながら天晴なものだ」

英雄は自分の両手を見つめ、脂汗を額に滲ませながら苦笑いを浮かべる。

「比べて……。紋、お前は「弱い」な」

その一言が紋白の機嫌を損ねてしまった。

紋白は目を見開き右手を振るい、見えない何かで英雄の右肩を狙った。英雄と違い、この世界にやつてきた時点で人としての柵しがらみを越えてしまった紋白にとって、人の四肢を落とす程度に何の罪悪感も覚えない。

罪悪感乗り越えた者に、罪悪感を踏みつぶした者の手が忍び寄る。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

そうはさせせじと、まだ罪悪感を知らぬ者が英雄を左手で押しつけた。

「うっ——」

ギチツ、と三郎の左腕が圧迫され、するりと切断された。

「ぎいっ——！！」

吹き出す鮮血が雨となつて彼らに降り注ぐ。それを浴びる者の対応は三者三様、吐き気を押さえながら嫌悪感を顕にする者、その光景に目を疑い駆け寄ろうとする者、あまりに悲惨な出来事に何もできず呆然としてしまつている者。

自分の服で切り口を必死に抑え始めるが、その服は直ぐに血を飽和して垂れ流してしまふ。ぐじゅぐじゅとした血だまりが発生してしまふ。

他人を助け、剣士にとって命であるてを失つた男を見下し紋白は吐き捨てる。

「気でも触れたか、西の愚か者」

「……………全く、だ……………」



紋白の侮蔑するような言葉に三郎は耳を傾け、苦笑する。

—— 誰かを助けようなど、今までしてこなかった、ツケが来た、か ——

苦笑したまま、三郎は激痛に意識を失って倒れ込んだ。

「石田君!!」

英雄同様に三郎に駆け寄ろうとした義経に対し、紋白の異能が襲いかかる。

「義経、お前も無様に腕を落とすと良い。お似合いだぞ」

刀を構えて紋白の攻撃を弾きながら英雄と三郎を背中に庇うように立ち、紋白の右手に全神経を集中する義経。あまりの眼光の鋭さに、紋白は掌に穴が開いたと錯覚してしまふほどだ。

「いい覚悟だ。では……どれだけしのぎ切れるかやって見せよ!!」

先程義経と三郎を襲った脆く鋭い針の束が義経に降りかかった。

——決して、一本も見逃すものか!!

襲い来る幾百の棘を全て切り裂く覚悟を宿した義経が刀を構え、全身全霊を刀に込めた——その時だった。

義経たちと紋白を隔てるように、紅に染まった水面のような壁が空間を断ち切った。

紋白の繰り出した全ての針を弾き返し、一瞬にして崩壊させた。壁に触れる寸前に全ての力を奪われ、文字通り門前払いされてしまう。

水面のようでありながら、流体のようでありながら、決して何物も寄せ付けようとなし、ない厳かさを秘めたその壁に、紋白は一步後退してしまふ。

義経たちはそれに守られる形となったが、決してそれに近寄ることができなかつた。義経たちですらその壁の前にはどうしようもできず、触れることすら拒絶されている。しかし、この中で唯一その壁に惹かれかけた存在がある。

義経の刀が、ガチガチと音を立てて震え始めたのだ。

刀だけではない。軸を失っているその鞘でさえも、生きているかのように動き始めたのではないか。

その震動に義経の意識が戻された。刀を押さえるように両手で握るが、刀の震えは止まらない。刀、薄緑そのものが武者震いを起こしているようだ。このようなことは義経にとつては初めての現象、戸惑いを顕にしてしまふ。

——宝の終着点、なるほど。

義経の刀が再び嘯き震えた。

「な、に――」

一方、壁を隔てた対面にいる紋白は驚愕の表情を浮かべる。自分の右手を見つめ、異能から通じて何かを確信したようだ。

弾かれた自身の異能が通らなかつたこと、その異能が壁に触れさえもできなかつたこと。

これは、この世界のルールに触れたということだ。

「――これが、扉だと言うのか!?!」

その声に呼応するように、水面のような壁が大きな波紋を生じさせる。波紋とは言ったものの、実際の海面の波の様に動きはしない。もつと軟い、流体に鉄球を落としたようにぬるりと動く。

その波紋は一つだけではない。自動車の車輪程度の直系のものから、アドバルーン級の大きさのものまで最少様々だ。その中央に何が沈んだ訳でもないのに、その波紋には「何か」の気配を感じる。

が  
——  
その数ある波紋の一つ、一際大きな波紋から、ずるりと、穢れた力を拒絶した主の腕

## 第十八幕 スラツシユ禪問答

“九鬼紋白來襲、ケットシー最大の危機!?”

見開きのまま放置されていた新聞紙が滲み、これでもかと大きな文字を使つた見出しが浮かび上がった。その見出しのすぐ下に移る写真は、幼い少女が一人の剣士の左腕を切り落としている無残なもの。おおよそ公共的に販売されているはずの新聞紙では載せられない、ないしは規制がかかつてもおかしくない記事だ。

だが、規制がかかつてもおかしくないのは“現実離れた拷問”離れた一枚の写真のみならず、それに続く細かな文章にも当てはまる。

何人が死亡した、どうやって死亡した。何人が負傷した、どうやって負傷した。

新聞記事とは到底呼べない、事務的の死傷者記録。そんな惨たらしい戦争記録は、真っ白な空間にポツンと置かれている整頓と言ふ言葉が忘れられた机の上に広げられていた。

それに目を通し、溝水のような濁りに濁つた珈琲を啜り、甘い煙で脳を絆す煙草を蒸

かし、極めて普段通りに過ごしている眼鏡の男が一人。普段通りというか、やれることは何もないと達観したかのような立ち振る舞いを見せている。

しかし、正確には「これ以上」やれることがないといったところだ。妙な安堵感はその肩の力の抜け具合から察することができる。

「やれやれ、という奴だな」

その真つ白な空間に、突如肉声が響き渡った。

その声の主は男が鎮座する机の前から堂々と、車椅子をぎいこら鳴らして接近してきて、ぎいこら鳴らしてとは表現したものの、男は突如現れた上にそれを自らの手で動かしていない。何か得体の知れない方法で足跡を刻んでいく。

男の吸い殻一つ落ちていない、乙女の柔肌のように美しかった純白の通路に轍を引いていく。実に無粋であり、実に堂に入ったものだ。到底純粹とはかけ離れた笑顔を張り付けた下半身のないその体躯がそれを助長する。

化け物と、見た者は罵り逃げる。

そんな常軌を逸した男に空間を穢されたことに対して表情を変えることはなかったが、眼鏡の男は声の主が現れたということで顔を顰めて眉間に皺を寄せた。決して車椅

子の男に視線はやらないが、敵意だけは剥き出しにしている。  
嫌悪感を剥き出しに、声の主に圧をかける。

「見境のない男だな、お前は」

その圧に屈することなく、車椅子はあわや机に衝突してしまうといった限界のところ  
で静止する。車椅子と机の距離は十センチも存在しない。もしこの車椅子の男に足が  
存在していたのなら、勢いよく蹴り上げることで書類の山と共に眼鏡の男はひっくり  
返るだろう。

掻き起こし、衝き動かす。

人の心にとだ触れるだけでなく、触れた様になぞり相手の出方を窺う嫌らしい行為を  
やってのける車椅子の男。失礼無礼は彼の十八番とも言える。

「私の大事な器まで呼び寄せるとは」

どういふつもりなのか、車椅子の男はそう問い質しているようだ。

机に座する眼鏡の男を挑発するような視線を下から向ける。ドロドロとした沼の底



に沈んだ得体のしれない沈殿物を集積させたようなその眼球は、沼の底にあるという前提から来る汚らわしさがあがりながら、謎だらけの正体を確かめたがる人間の本能的好奇心を併発させる。

麻薬のような、甘くも恐ろしい奇妙な双眸を男に向けている。

「私だけでは飽き足らなかったかな？ 役人見習い」

右手を挙げ、煽る。

任せるだけで傍観しかしていないくせにと、立場を穢す。

「どうせなら、嫉妬孤児フロイライオンに呼ばれた方がよかったですのではないかと思うのだよ」

左手を突出し、煽る。

敵対する者を引き合いに出し、優劣を明らかにする。

「……………」

しかし、その煽動的で作興的な視線と言葉に、眼鏡の男の表情は一切変わらない。視線すら上げず、皺だらけの表情の皺をピクリとも動かさず、新しく浮かび上がった生地にじつくりと目を通しているようだ。

文字通り、眼中にないと言ったところだろう。

からかい甲斐がない、車椅子の男はそう言わんばかりに肩を竦めて息を大きく吐き出した。

「無口な男だ。大体の意図を汲んでいるのかは知らないが、相槌一つ打たないと言うのは幾分か失礼というものじゃあないか？」

役人なら役人らしくしたらどうだ、と車椅子の男が叱責するが、未だに車椅子の男に大して顔を上げようとしめない眼鏡の男。

「なら、独り言を言わせてもらおうか」

相手にされないことを既に予期していたのか、車椅子の男は無理やりにも自分の言葉聞かせてやろうと独演を開始する。

馬耳東風に聞き流して見せろと挑発を止めないようだ。

「<sup>エンスズ</sup>廃棄物であれば、王の帰還が早まるかもしれないからだ」

これ以上ないくらいに歪んだ表情が浮かび上がった。今まで貼り付けていた不気味な表情がまだ可愛かったと思わせる程に、奇奇怪怪な相貌を顕にした。

「<sup>エンスズ</sup>廃棄物、あれは実にいい。大好きだ。欲望と本能を体現した能力が一つ、具現化されて渡されている」

車椅子の男が何かを掬い上げるように右手を再び伸ばした。そこには何も乗っていない。それこそが車椅子の男の暗示。

この手に何も乗らなかつたからこそ、車椅子の男は不機嫌そうに笑っている。

「まったく、何故私にはその機会が訪れなかつたものか」

グツ、と何も乗らなかつた右手を拳とする。自ら機会が訪れなかつたことを体現して

見せる。何も手に入れられなかった屈辱に身を焦がし、それでも車椅子の男は顔を歪めて笑う。笑顔を崩さないのはこの男の生き様から来るものか。

すると、新聞の中央に手を添え、眼鏡の男がようやく顔を上げ、

「貴様が『何度もやり直している』からだ」

開口一番、車椅子の男を責め立てた。車椅子の男の有り様を真つ向から否定し、世界のルールにそぐわなかったのだと言い放った。そこが気に入らないのだろうか、眼鏡の男のその言葉にはどこか怒気が孕んでいるようだった。

責め立てられ、雪辱を味わい、それでも車椅子の男は笑顔を崩さない。それどころか、その笑いは歡喜に打ち震えてさらに歪む。無意識か意識か、奇をてらう。

「待ちくたびれた。ようやく口を開いたな」

これで役人らしくなった、と歡喜する。役人氣取りと揶揄していたことなど既に記憶の彼方に追い払ったのか、掌を素早く返して役人振りを称賛する。

決してそれが褒め言葉とは限らないが。

「では、ご教授願おうか？ 上流階級氣取りの小僧」

ガツン！ と車椅子を机に衝突させる。

机がひっくり返らなかつたのは警告の意味合いか、それとも男の圧が勝つたのか。

「あの憐れな女が目を付けるのは、やり直しを願う者に限る」

ドサツ、と音を立てて手記帳が車椅子の男の目の前に置かれた。それは、眼鏡の男が

何度も何度も誰かの名を刻み、関所に立つ警備員のように境界を越えた人間を記録したもの。

車椅子の男はそれを無言で手に取り開く。そこに刻まれているのは「通された」者の名前と、その者自身に関する備考のようなもの。

その中には、車椅子の男の眉を顰める名前もあつた。

通したところで大した戦力にならないような子供、性根の腐つた基より廃棄物寄りの罪人、人間とすら呼べないような学習段階の何か。

車椅子の男は呆れたように手記帳を閉じ、眼鏡の男の前に投げ返した。

「この私や彼が、こんな奴らと同系列に見られているとなると、分かつてはいたことだが実に不愉快だ。特に——」

人間でない者がいることが遺憾だ、と車椅子の男は眼鏡の男を嘲笑する。曇つた眼鏡で品定めをしている鑑定人だと嘲笑う。

しかし、眼鏡の男はそれを否定しない。

「貴様のいう彼が向かった世界も、別世界の貴様の上官が呼ばれた世界も、エンスズ廃棄物となつ

たのは「やり直すことで叶う願い」を叶えてやると唆された者に限る。それ以外は私の偏見だ」

色眼鏡と言う意味なら曇っている、と自分の眼鏡を二回トントン、と叩き、眼鏡の男は口に加えていた煙草をグリグリと灰皿に押し潰す。そして即座に煙草の入った箱を振って飛び出した一本を加えて火をつける。その手際の良さは中毒者のそれだ。

眼鏡の男の呼気と共に排出された煙が彼らの視界を遮る。それでも、互いが互いを視界から外さない。

「……私はそれに当てはまらないと?」

自分の胸に両手を当てて問い質す。車椅子をガツンガツンと机にぶつけながら、返答を急かすその姿は若干の苛立ちが籠っているのだろう。一体どうやって車椅子を動かしているのか、傍から見ただけでは何が起こっているのか分からない。

その姿を見て、眼鏡の男は大きく溜め息を吐いた。見下すような視線を送った。

「自分で「やり直した」者はEASYのお眼鏡には叶わん」

ドンツ、と先程差し出したばかりの手記帳を男の目の前に再び叩きつけた。この中に書いてあることで察しろと訴えかける。

「願望を自ら叶え、自らの欲を満たそうとする貴様に、あの女の救済は差し出されない」  
「……それならば、どうしようもないものか」

車椅子の男は両手を挙げた。初めて眼鏡の男の言い分をすんなりと受け入れた様に超然とした態度を取る。

凶星、とはこのことだろう。開き直りもいいところだが。

「なれば、あの崩王だ」

と、話の矛先を途端に変える。開き直りではない、聞き流しだったようだ。

「疑問を投げかけよう。あれは廃棄物エンスズには成り得ない存在だろうか？ 今の定義から行けば、あの亡者は『やり直す必要のない』存在だ」



トントン、と男が叩きつけてきた手記帳を指先で小突く。ここに書いてあることだけでは理解できない事例があると、積もり上がった懷疑心を提示した。

まるで崩王という存在の本質を見て来たかのような物言い。車椅子の男は歪んだ笑いを取り戻し、手記帳に突き立てていた指を眼鏡の男の眉間に向けて伸ばす。

その指先を深い瞳で睨み付けながら、眼鏡の男は手掛かりを漏らす。

「……………あれは元々、漂流物<sup>ドリップ</sup>として呼ばれる存在だった」

「……………なんだと？」

眼鏡の男の端的な発言に、車椅子の男は目を丸くする。初めて車椅子の男の顔から笑顔が消えたのだ。全く予期していなかった言葉をぶつけられ、車椅子の男の対応が崩れてしまう。

「分からんか、直に触れた貴様でさえも」

眼鏡の男はそこに畳み掛ける。

手記帳を再び手に取った男は、その手記帳のある項目を開いて車椅子の男に突き出した。そこに書かれている歴戦の傭兵たちの名前。眼鏡の男が持つペンで書かれているように、その本人が書いたような奇妙なその欄に、車椅子の男は目を見開いた。そこに記されている名前は確かに――。

「あの不安定さと不完全さ、そして何より肉体と精神の齟齬が生じていることに」

――あれは、最早廃棄物<sup>エンスズ</sup>とも名状し難い。

「――ははあ。そんなことがあり得るものか」

眼鏡の男のその物言いで、車椅子の男はようやくやく得心が言ったようだ。彼の顔に笑顔が戻る。歪み捻じれ、黒く染まった純悪の微笑。ただし、その微笑はただ理解しただけではない。

「しかし、齟齬と言うならもう一人――いや、分かったぞ。そうか、そういうことだな。あくまで廃棄物を決めるのはEASYということか！」

—— 廃棄物エンスズを廃棄物エンスズ足らしめているもの、それは——！

「—— 失せよ」

「彼らのつ——」

ガチャリ、と音を立てて開け放たれた扉の向こうに見えるは、パイプが絡み合った空気の濁った工場地帯。そこに吸い込まれていくように、車椅子がフワリと浮き上がって男ごと吸い込んでしまう。

完全にその姿が扉の向こうに投げ出された瞬間、ボタン！ と大きな音を立てて扉は綴じられた。

「—— やれやれ、手荒い」

そのはずなのに、車椅子の男は眼鏡の男の背後に存在していた。

「……………」

その姿を見ることなく、眼鏡の男は珈琲を啜った。既に車椅子の男に対する興味も意識も失われ、存在しないように扱っている。

「さて、あの嫉妬孤児フロイライオンは元気かな。どこかの女神様と違って、怒りやすいのが玉に瑕だが  
ね——」

車椅子が廊下の奥の奥、暗く塗りたくられた空間に向かい進み始めた——。

## 第十九幕 moments

空気を切り裂き空間に蜘蛛の糸のように張り巡らされた白銀の異能、玉繭<sup>フレイト</sup>。

九鬼紋白が扱うその異能は、銀食器のような光沢を放ちながらも蜘蛛の糸よりも細く、それでいて鋼よりも硬い異次元の素材からなる糸状の能力である。僅かな光の反射でしか視認できないそれは対象が気を緩めずとも、確実に相手の死角に潜り込む。

縛り上げれば肉を断ち骨すら切り落とし、編み込めばダイヤモンドより硬く弾丸すら通さない高度を誇る、攻守兼ね備えた武器にもなり得る汎用性の高い能力だ。堅甲利兵不可視の能力。

とは言ったものの、その汎用性を活かすために必要なのは経験と発想だ。

元々紋白はこの能力を“武器”として扱ってはいなかったのだが、かつての自身の従者との邂逅によりこの応用にまで行き着いた。行き着いたとは表現するが、完全に模倣しきれている訳ではない。従者の糸による技には遠く及ばない。

それでも、人を殺めること自体は容易になった。首に巻けばするりと頭<sup>かしら</sup>が落下し、張

り巡らせておくだけで走ってきた者はこま切れとなる。こちらが躍起になる必要性が無くなる、利便性に長け過ぎた能力に昇華した。

その怠惰を誘う能力で糸を編み込み、剣や槍のような武器を象るような技は紋白の発想だ。分かりやすく明確に、視覚から死と言うイメージを与え付けることに着眼点を置き、糸を不可視な細さで扱うのは基本的には拘束の時だけ、と言ったスタイルに発展した。今まで見てきた糸の技が拘束ばかりだったことも影響していることだろう。

そんな戦闘方法を取っていた筈の紋白が、全力を以て一本の腕を細々と輪切りにするべく縛りつけるような糸を躍起になって放った。燻製される前の食肉のように縛りつけ、餃子の種になる玉ねぎの様にみじん切りにせんとする。

その対象となった『扉』から突き出された腕が、グツ、と拳を作る。

次の瞬間、襲いかかってきた見えないはずの糸は見えない壁のようなものに弾き飛ばされ、紋白の手を引きちぎる寸前で見捨てられる。再度編み込んだ剣を何本も精製して仕向けるが、それすらも弾き返されてしまう。

紋白が悔しさに顔を歪めた。次の瞬間、水面のような壁に浮かぶ波紋が音を立てずに大きく撓み、拳が握られたその腕が更なる姿を現していく。腕の主がようやく顕現しよ

うというのだ。

十秒以上の時間をかけてゆっくりと、腕の主が産み落とされた。

決して筋肉質と言えない、英雄と比べればか弱くか細い華奢な体躯。この場にいる誰もが血塗れ泥だらけと体を汚している中、一切の穢れを良しとしないような純白の装い。鬱陶しいほどに伸びきって視界を覆わんとする黄金色の前髪から、キラリと鈍く輝く紅の双眸。

そして何より、それら全ての異常として助長させた膨大な圧。彼の中性的ともとれる脆弱な身体を、歴戦の勇者を打ち負かす英雄の体躯と魅せる彼の圧倒的な存在感がこの場の生物全てを圧迫する。木々は恐れ慄き震え上がり葉を擦りあわせてざわざわと呻き、彼の周りを避けるように空气中に漂う煙が道を開ける。

鎧袖一触、金城鉄壁の立ち振る舞い。あまりにも傲岸で不遜で遠慮を知らないその姿を、九鬼英雄は、九鬼紋白は知っている。

「お、王貴……!?!」

思わず、英雄は其の人物の名を口にする。古くから知るその男の名前を、英雄は間違えるはずがなかった。少しばかり態度は変わってしまったが、全てが変わってしまった

訳ではないと信じている英雄の幼馴染。

それに応えるかのように、半身を傾け振り返る。ふわりと浮き上がった金色の前髪はこの戦争に不釣り合いで浮いている。その異常性が、この場における救世主らしさを表している。

「……英雄か、貴様？」

救世主とされた男、霧夜王貴は問いかける。

「……うむ。フハハハ……！」

変わらぬ気配、変わらぬ風貌。彼の全てが懐かしい。英雄は思わず歓喜の声を漏らし、緩みかけた涙腺を親指で押し潰す。

その様子を見ながら、王貴は僅かながらに疑問を覚える。

「老けたように見えるが、英雄だな。そのような臭いがする」



臭いとは表現したが、王貴の嗅覚に飛び込んできているのは戦争の臭いだけ。英雄自身を連想させる臭いと言うものが漂っていたとしても、王貴はそれを感じ取れる獣のような嗅覚に特化している訳ではない。

目の前にいるのは自分の知っている英雄だと、本能がそう告げていた。

「……天神館に、川神学園か」

英雄を護る様に立ち塞がっている義経、英雄の後ろで気絶している三郎、二人へ意識を移した。気絶している三郎は何の反応も示さなかったが、義経は王貴の意識が移ったのを感じ取って警戒心をさらに強めてしまう。

——この男は危険だ。

義経の遺伝子的な本能に加え、義経の握る刀がそう訴えかける。

しかし、英雄は警戒心の欠片もない。一切の疑惑、動揺を抱かぬまま王貴を見つめている。目の前に現れた王貴に対する期待がメーターを振り切っているようだ。

「場違いな連中が『相も変わらず』呼ばれている」

ただし、王貴の熟知り顔な態度と物言いには疑問を覚えざるを得なかったようで、英雄は思わずそれを問いたです。

「どういうことだ」

「……王にも分オレからん。何故この世界に呼ばれたのかも、この世界自体も何なのかは分からん」

だが、と付け足して自分頭を人差し指で小突く。

「以前はどうだった、前回はこうだったと、身に覚えのない情景が頭の中を這いずつてな。ここに至るまでの奇妙な空間で苦しめられた」

——次。

—— やれやれ、呼ばれてしまったか。

—— 何をしに来た、「違反者」。

—— 私は彼と対峙しようと画策していたところでね。今呼ばれるのは都合が悪い。

—— 貴様に「扉」は開かない。

—— 厄介なことだ。まあ、今この場にいることは、鉄道で上京する息子を入場券片手に見守る親のようなものだ。乗車券がないことは承知している。我が子の上京を受け止めきれない部分までそっくりだ。

—— 貴様ら、何を勝手に話を進めている。

—— ああ、これは失礼した。紫と私のことは忘れてくれて構わない。ただ、君は「過去の参加」を忘れたままでいられると困る。崩王に至る前に死んでもらっては、困

る。

—— つ……!?!? ガ、アアアア ——

「だが、何となくだ分かる」

勝手に、一方的に、身勝手に、王貴自身のことなど何も鑑みない勢いで流れ込んで来た記憶。たった一つ、単純であつて莫大な記憶群。

—— 行こうぜ霧夜！ 乗せてつてやるよ！

—— 王<sup>オレ</sup>を差し置いて酒を呷るか、無礼な女だ。

—— 貴女が私を男だと思ふのなら、私は男で良いよ。

——  
おかあさんは、わたしがたすける。

——  
悪いけど、君たちにはここで脱落してもらおうよ。僕と武神のために。

——  
行くぞ焔。大将首取らなきや港が浮かばれない。

——  
足りなかったな、僕たちには、何もかも——

「お前は護らねばならんのだ、英雄」

この世界に連れてこられたことに對する怒りもあるだろう。目の前で繰り返された惨劇に多少の思う所もあるだろう。頭の中をぐちゃぐちゃに掻き乱され、記憶にない記憶を投下されて何も思わないはずがない。

それら全てを弾き飛ばし、英雄を生かすことを宿命とでもしているような言動を見せた。英雄を護る義経にも完全に背を向けて、王貴を殺そうとしている一人の少女に立ち向かう。

「紋。思い切った反抗期だな？」

紋白に対し、王貴は笑いを向ける。実に余裕綽々たる態度をして紋白に話しかけた。

「——気安く話しかけるな」

対する紋白は、王貴に対して笑顔の一つも示さない。英雄に対する表情とは全くの別物だ。ごみ溜めに群がる害獣でも見つめるように冷ややかな視線、憎んでも憎み切れぬい仇でも見つけた様に歯を剥き出しにし、王貴に嫌悪感を体現する。

「……………ふ、クツ、ハハハハ、は。おおお、面白い冗談だな……」

不機嫌そうに睨まれる。たったそれだけのことで王貴の悠然たる態度は瓦解した。長距離走り切った後かと思わせる程額から汗を滲ませ、視線も紋白を直視できずに優雅に泳ぎまわり、疲労や傷害など一切感じていなのに膝が笑い始めた。

「霧夜とか言ったな。ギラギラした指輪なんぞ身に付けおつて、学生身分に粗暴な風貌だ」

加えて罵倒、既に王貴自身に余裕がないことは、後ろ姿しか見えない英雄や、出会つて間もない義経にさえ筒抜けだった。

「……………く、は……………」

必死に笑おうとしているのだろう。しかし、口から洩れる声は余りにも掠れていて、目は開き切つて動揺に支配されてしまつているのが火を見るより明らかだ。

目の前で自らを罵倒してくる親愛の対象に情けない姿は見せられないと、これ以上ないくらいに気を張っているのだろう。

「血の繋がっていない者は全て他人、汚らわしい存在なのだ。我はそう学んだ。教えられた」

だが、王貴の親愛の対象である紋白の瞳に、既に温かみのある光はない。

「故に、〃元〃兄様。決別の時だ。苦しんで死ぬがいい」

ズシヤア!! と盛大に膝から崩れ落ちた救世主。

「お、王貴!」

「か、覚悟はしていたが、こ、これほどか……!? 頭がどうにかなってしまいそうだ……!!」

義経たちから救世主のような第一印象を消し去り、敵方の紋白ですら若干引かせた王貴。

「先刻の頭痛の方が幾分かマシと思える……」



「よ、義経はどうしたらいいんだ!」

——これは危機的状況の打開にはならぬやもしれぬなあ。

状況を理解できずに慌てている義経と、四つん這いになって遂には吐血しそうな王貴の姿を見て、英雄は大きく溜め息を吐いて頭を抱えてしまった。

その僅かに空気が弛緩した瞬間、紋白は糸を放った。

王貴と義経の間を掻い潜り、英雄の身体を拘束しようと糸が伸びた。伸びた筈だった。

ベチン! と音を立てて糸が「見えない何か」に阻まれたのだ。それも、霧夜王貴という関門を突破する前に。的確に死角に潜り込んだはずなのに、紋白がそう思った瞬間、王貴の姿が紋白の目の前から消え、遅れて爆風が周囲を襲う。

煙と雲で完全に陽光が遮断されたが故の油断、上空に王貴が飛んで影ができたことに気が付けなかった一瞬の判断ミス。紋白は盛大に自身の甘さを呪った。

王貴を見上げた瞬間、王貴の姿が再び紋白の視界から消えた、瞬間——

「があつ——!?!」

紋白の身体は遙か後方の森まで一切の減速を許されず、まるで大砲から発射された球の様に弾き飛ばされた。

ほんの一瞬の出来事に、一体何が起きたか分からなかった義経は思わず口を開けたまま啞然としてしまう。王貴のその技を多少なりにも知っている英雄でさえも、王貴のこの行動には絶句してしまう。

王貴が紋白に手を挙げた、それだけで天地がひっくり返ってもおかしくない行動だ。

「英雄」

「……なんだ？」

「後で王を殴ることを許可する、いいな？」

紋白にぶつけたと思われる右手を挙げ、英雄にそう告げた。

「反抗期を正す役目は、王に譲れ」



「あの金髪、殺していいんでしょ？」

「落ち着けて。そういう衝動に駆られるのは分かるけどよ」

「君は違うの？」

「楽しければいいし、崩王ちゃんの機嫌を損ねさえしなければ何もしなくてもいいんでね」

「怠惰なんだ」

「心外な。こうやって君の手綱を握っているだけで十分な仕事をしてるつもりだぜ？」

「私のポニーテールはそういう類のものじゃないんだけれど」

「掴みやすかったし」

「十分なセクハラよ」

「どっちかってーと、パワハラだな。俺、上司だし？」

「蹴り飛ばしてやろうか？」

「どうどう。あとでいいコトしてあげっから」

「馬じゃないつつつてんでしょ！ あといい加減手え離せ!!」

## 第二十幕　ハンマーソングと痛みの塔

「正す、だと？」

ジャリツ、と草鞋が力強く地面を踏みしめる。立ち上がった紋白の上半身はふらふらとしながらも、纏う濃密な殺気と地を踏みつける足の強さには奇妙な威圧感がある。

それを全身で感じながらも、王貴の表情は変わらない。しかし、平然としている訳ではない。紋白を蹴り飛ばした時点で、表情には既に疲労が色濃く表れている。疲労と言うよりは悲痛というのか、辛さを押し殺しているようであった。

「笑わせてくれるな霧夜王貴……！　固よりお前に従順になる理由など、我は持ち合わせていないっ！」

紋白の右手が振り上げられ、王貴の頭上に大きな斧のような形状の鋭利な武器が形成

される。それは一軒家を真つ二つにしてしまひそうな程大きく、王貴一人を殺すだけならば十分過ぎる程に巨大だった。

「分を弁えろ！」

腕が振り降ろされ、斧が飛来する。村を覆う排煙や蒸気が斧に切り裂かれて渦を生み、周囲の空気がより混濁としたものとなる。

「その理由とやら、生憎と王には有つてな」

ガキーン！ と大きな金属音を立てて、大斧が見えない何かによつて阻まれる。あまりにも巨大するものが弾けた衝撃と爆音は、王貴と紋白だけでなく、その場にいる生命全ての心身に影響を及ぼす。ある者は吐き気を訴え、ある者は眩暈に寄り膝を曲げてしまふ。

未だに気絶したままの三郎はその衝撃に傷口を痛めつけられ、大きく唸り声を上げて苦しみ始める。キツがどうにかしようとか何を唱えているが、それはいい方向に作用していないようだ。

他人のことを一切慮らない、傍若無人な一騎打ちダイマン。民のことを一切考慮しない神々の戦争さながら、世界が違う戦いぶりを見せつけられる。

「理由？ いったいそれは何だと言うのだ」

「……今のお前にそれを説いたところで、決して伝わりはしない。断じてやろう」

「その態度が気に食わんのだ……！ 血も繋がっていない他人の癖に!!」

紋白の腕が横に払われると同時に、王貴の頭上で静止させられていた大斧が一瞬のうちに糸として分解される。その分解された糸は三日月のような形に再構築させられ、王貴の左脇腹から抉る鎌となって襲いかかった。

「喚くな」

コツン、王貴の手の甲が鎌の腹に軽く添えられた。たったそれだけの行為で、高速で襲いかかってきた鎌がひしゃげて地面に叩きつけられてしまったではないか。乱暴に破壊された武器から伝わる衝撃が紋白の右腕に流れ込む。

「痛々しい」

紋白に向けるその視線は、一体どのような感情が籠っていたのだろうか。怒りか、哀れみか、悲しみか、呆れか、切なさか、愛しさか。

どれもこれもが、今の紋白に対しての軽蔑に当たる。紋白はそう捉えてしまった。

「……いざ相手にすると厄介だな。その、衝撃波、気の障壁とやらは」

「なに、まだ力を入れ切っていない。精々感謝しろ」

「……隙だらけの貴様に」

敬意も謝意も示さん、そう呟いて紋白は右手を再び振り上げた。すると、ぐじゅり、と気味の悪い音が地面から聞こえた。チラリと視線を落とすと、王貴の足もとからトラバサミのような糸の牙が発生している。大きな口を開けて、王貴の脚を食いちぎろうと打ち震えていた。

「チツ——」

「せえい!!」

王貴が忌々しそうに脚を振り上げた瞬間、勢いよく王貴の背後から飛び出してきた影が糸の牙を全て切り裂き、王貴の脇へ素早く戻ってきた。

「……………貴様」

愛刀薄緑を構える義経に鋭い視線を送る。しかし、義経はその視線に籠っている敵意を受け流し、向けるべき紋白敵に殺気を送っていた。

「君がどんな人間かは知らない。けれど、今は共闘する時だというのは分かる！ 九鬼くんが信頼している人間だ、義経は全力で援助する！」

ギリリ、と義経の刀を握る手に籠る力が強くなった。手に滲んだ汗が刀の束に染みこみ、通常以上の摩擦力を発生させている。それがよかつたのかもしれない。義経が経験したはずのない戦場の記憶が、刀を通じて鮮明に蘇る。

義経から発せられる気迫が鋭くはつきりと、抜身の刀の様に鍛えられていく。義経の視界に入っただけで切られてしまいそうな、圧倒的な威圧が放たれていた。



「あれを一人で相手取るのは難しい。義経が気を引くから確実に——」  
「おい」

義経が一步前に踏み出そうとしたその時、王貴は彼女の上半身を動かさないように肩を掴んで固定する。下半身だけが先行して少し体勢を崩した瞬間、義経を自らに引き寄せ

——右の脇腹に、乱暴な蹴りを叩きこんだ。

「がつ——!?」

川辺から水面に向けて平らな石を回すように投げると水を切る様に跳ねて飛んでいく、そんな懐かしい光景を彷彿とさせてしまうかのように、三度四度と地面を跳ねてはじけ飛んでいく一人の少女。あまりにも現実離れした動きのせいで、それを見るケツト

シーたちの感覚は麻痺してしまうことだろう。

おおよそ人間が蹴られた反動とは思えない暴力的な扱いで吹き飛ばされた義経は、何度も何度も地面と熱烈な衝突を繰り返し、最終的には民家の残骸の中に突っ込んでしま

う。  
そのありえない動きをさせた本人は一切憂慮せず、そうされて当然だと言わんばかりに少女へ殺気を向ける。

「王<sup>オレ</sup>を無視して話を進める、一体誰の許可を得ての行動か」

ガララツ……。瓦礫の山が崩れてモゾモゾと何かが動いている、義経は命も意識を失つていなかったようだ。しかし、すぐに立ち上がらないということはダメージが深刻なのか、それとも、自分が何故蹴り飛ばされたのかを理解できていないのか。

「たかが剣士風情が、今王<sup>オレ</sup>と肩を並べようと考えること自体烏滸がましい」

王貴は分かりやすく苛立っていた。ただでさえ苦しみながら暴力を振るっているというのに、その場をかき乱そうとする存在に対して八つ当たりをすることはおかしくな

とではない。覚悟を鈍らせる存在を排除するのは当然とも言える。

しかし、その手段があまりにも乱暴だった。一切の言葉を持ちいることなく、己が誇る一撃必殺の破壊力を誇る衝撃波で義経と言う邪魔者を排除した。

話し合いの余地すらなかった一方的な暴力に、義経が当惑するのもまた無理はなかった。

「なっ……んで……!?!」

「義経！ 無事ならば戻ってこい！」

刀を支えに必死に立ち上がった義経に対し、英雄は帰還の命令を下す。その言葉に義経はさらに困惑してしまう。

「王貴に任せろ。あいつが任せろと言ったのだ」

有無を言わさぬ将の気配、視線。義経の身体が壁を越えていない人間の気迫で竦んでしまう。義経の刀の狂喜するように打ち震えはじめた。

「け、けど……！」

「……その塵芥。貴様には他になすべきことがあつたように思えたが、違うか？」

反論の言葉を口にしようとした義経に対し、王貴が気怠そうに苦言を呈する。

「王<sup>オレ</sup>が任せろと言つた以上、貴様は英雄とそこで倒れている男を護るのが筋と言うものだ。それすらも分からぬか？ 義経と名乗っていたが、名前負けにもほどがあるぞ無能め」

守護すると言う役目を放棄した愚かな行動を自覚させられる。吐き捨てられたその言葉に、義経は何も言い返せなかつた。

しかし、決して王貴は護りを全て義経に託した訳ではない。ああまで敵意を向けてきていた紋白が自分を無視して英雄を攻撃するはずがないと思つていたから、だからこそ「任せろ」という発言。仮に王貴をすり抜けて攻撃しようとするれば、紋白ごとそれを吹き飛ばす算段もあつた。

義経や三郎など、彼にとっては極めてどうでもよく、頼りにもしていない。

だが、突然義経が飛び出してきたのは王貴の予定にはなく、最も好ましくないところだった。紋白の矛先が王貴から外れてしまう恐れがあったからだ。

「王オレの口から二度同じことを言わせるとは。仕えることしか知らぬような甘い利口そんな顔をして、自分勝手に動くとは愚の骨頂よな？」

それも含め、まるで期待していた、少しばかり認めていたかの様に言葉を選んだ。見ず知らずの人間に対しそのような感情を抱くはずもないのに、王貴は義経をほんの少しだけ持ち上げていた。

いじらしく、義経の心をできる限りなじるために。

「引っ込んでいろ無能。貴様は何もせずに英雄に「護られて」いた方がお似合いやもしれんしな？」

そう言い放つて満足気に、王貴は紋白へ殺気を向け直した。

紋白も既に義経から意識を外している。王貴の隙を窺っていたのだろうが、あまりに

苛立ちすぎたあまり全身が逆鱗のように変化しており、紋白は触れることを躊躇っていたのだ。この世界に来る以前の紋白が持っていた王貴への畏怖や尊敬がそうさせたのだろうか。

「……………く、う……………」

ぐうの音も出ないとはこのことか、義経は力なく英雄の元へ引き下がった。

——だから甘つちよろいんだよ。

カタカタ、と義経の刀が振るえて地面を削る。

——簡単に引き下がりがりやがって。お前の上官はともかく、あの金ピカ坊主に好き放題言われてすげえ逃げた。元々共闘なんざ図るからそうなるんだよ。

「……………んやい……………」

——あそこでの正しい動きってのはな？ 「あの金ピカごと切り捨てる」ことだ。自尊心傷つけられて何もしいってのはもう剣士じゃあない。ただの——

「うるさいっ」

ザクツ、と刀が地面に突き立ち、震えが止まった。

「うるさい……………」

親の仇でも見つけたかのように刀を睨み、押し黙らせる。

——初めからそうやって、何でもかんでも黙らせればいいんだ。

その言葉を最後に、刀は余計なことを義経に伝えることはなくなった。耳障りな声が聞こえなくなり、義経は刀を引き抜いて英雄の元に戻った。

「さて、邪魔な塵芥はもういない」

ようやくだ、そう呟いて顔を上げる王貴。実にふてぶてしく笑う王貴に、紋白は歯を軋ませる。

「後悔するぞ。霧夜」

紋白が不敵に微笑み拳を握り、王貴の足もとに再びトラバサミのような刃物の大口を形成する。

「後悔？」

襲い来る刃に対し、王貴は先程と同様に片足を上げ、軽く地面を踏みつけた。

たったそれだけの行為で王貴の周囲に強力な竜巻が発生する。それは刃を逆に食い破り、一切の接触を許そうとはしない。吹き上がった砂埃全てが王貴の周囲に巻き上が



るだけで、彼を傷つけたり汚そうとしない。

「王たる王が間違いを起こしたと言うのか？」

「十二分にな！」

空気を引き裂く音共に王貴の四肢が固定される。ポケットにしまったままだった腕が無理やり引きずり出され、磔にでもされたかのように腕が地面と水平に伸ばされた。

「人のことより、己の行動を見返してみろ」

ボンツ！ と王貴の身体から爆ぜたような音が響いたのと同時に、紋白の右腕から延びる糸の感覚が奇妙なものに変わる。拘束が外れて弛んだのならば軽く、力任せに引きつけられたのならば強く、相手の動きが右腕に伝わる。しかし、今王貴から伝わってきた感覚はそれらではない。

王貴を縛る糸が緩み王貴から離れた筈なのに、力強く引つ張られている。まるで、王貴の腕が何十倍にも膨れ上がったように。

——腕からの衝撃波、糸を無理やり引き剥がしたのか……!?

「王オレに刃向った時点で過ちだ」

「過ち、だとっ……!?!」

糸が一つの形を形成することなく、刃物の竜巻の様に王貴に襲いかかる。しかし、王貴は一步も引かず一切動じず、微笑みながら紋白の攻撃を受け続ける。

「過失、仕損じ、何度でも言っつてやろうか?」

「黙れえ!!」

竜巻の回転速度が急激に上がり、乱雑に振るわれていた白銀の糸は一点に集中し始め、巨大な円錐を形成し回転する槍となる。ガリガリと音を立てて火花を散らす、王貴の展開する気の障壁を貫ける気配がない。

むしろ、紋白の放った攻撃が自ら身を滅ぼしているようだ。それを認めようとせず回転速度をさらに上げ、やけになって王貴の壁を突き破ろうとしている紋白。

その姿が痛々しく見ていられなかったのか、王貴は苦笑し溜め息を吐いた。ポケット

から右手をだして軽く目を押さえながら、王貴は徐に足を上げて地面を蹴った。

「大振り後の隙は、でかいぞ?」

地面を削り、暴力的な槍を掻い潜り、紋白の腹部に掌底を叩きこむ。その手にも衝撃波が籠っていたのか、紋白の口から透明な粘液を吐き出し、苦悶の表情を浮かべて地面を転がっていった。

「ぐっ……!? あっ、かはあ……!」

ドシャツ、と音を立てて泥濘に沈む紋白。湿り気の取れない村にいくつも発生している泥の塊に身を浸された、あまりの屈辱に紋白は唇を噛み切りそうだった。

「油断慢心も一緒だ。突かれれば、あっさりと崩れる」

その泥に身を汚そうとせず、泥濘の一步手前で紋白を見下す王貴。この世界に呼ばれてから一切の穢れを良しとせず、その装いは未だに血も土も付いていない。

紋白はひたすらに王貴を睨み続ける。その表情は腹部に襲いかかっている激痛に歪み、雪辱を受けた怒りを重ね塗りされていた。その表情は王貴の心を削っていく。

——終わらせる。

王貴は泥濘に足を踏み入れる。紋白への驍を終えるため。

「一瞬で終わる、我慢しろ」

——我慢するのは、王と英雄オレか。

紋白の腹部に狙いを定め、今まで以上に足を振り上げる。

全身の筋繊維を動かさないようにする理性を振り切り、紋白の腹部へつま先を——

「はいストップ」

ズドン！ と大きな地響きと共に何かが王貴と紋白の間に着弾した。

「——痛うつ……!?!」

王貴のつま先が紋白に触れる寸でのところでぐしゃり、と泥まみれに踏みつぶされていた。泥濘の下の土すら抉り固定され、王貴の表情は苦悶に歪む。

「油断慢心が云々言ってたけど、そっくりお返しするね。金髪くん？」

王貴の足を踏みつぶしながらしやがみこみ、用を足しているかのような姿勢で王貴を見上げ嘲笑する一人の少女。真つ赤なポニーテールを揺らし、紋白の上半身を隠す様に王貴の前に座り塞がる。

「はいはい、大丈夫かいちびっ子？」

その反対側、王貴に背を向けるようにして一人の男が立っていた。王貴は苦痛に加えて驚愕の色も表情に映し出していく。

「貴様っ——」

「灯、くん……!?!」

その男の名を王貴よりも早く、義経が震える声で口にした。

## 第二十一幕 百萬発弾

ズキン、ズキン、と体を奔る鋭くも後を引く痛みには三郎はゆっくりと意識を取り戻す。その痛みの発信源は己の左腕、折れた曲がった程度では納得のできないその痛みの理由を、意識の曖昧な三郎は認識できないでいた。

一体どんな状況に晒されているのだろうか。潰されているのか、引き裂かれているのか、まだ救いがあるのかどうか。三郎の右手が半身を握りしめようと稼働する。

しかし、ガタガタと震えるその手には何の感触も得られない。どうにも狙いが定まらないのか、左腕を掴むことができない。二度三度、何度も何度も空を切る三郎の手の震えは、か弱い命の儚さを映し出しているようだ。

長い時間をかけて、三郎の左肩が自らの手によって掴まれる。ここまでくれば後は手を這わせるだけ。児童でもできる簡単な行為だ。

しかし、三郎の手がするりと落ちる。何も掴めず何も触れず、沿うべきはずの輪郭を失い彷徨ってしまう。

三郎は痺れを切らし、体中に走る痛み全てを無視して体を無理やりに動かし、左半身を見ようと首を傾げる。閉じられたままの目蓋を強引に抉じ開け、暗闇に閉ざされていた世界に光を差し込ませる。

真紅に染まった制服、体を雁字搦めに固定する古臭い布、所々に飛び散る骨肉の欠片。自分の身体についていたものを視認し、ようやく三郎は不明瞭だった意識をはつきりと覚醒させた。

「い、石田さん！ ご無事ですか！」

耳元で発せられる疲弊した叫び声。寝起きがけに襲いかかる鼓膜の痛み嫌悪感を示して上半身を起こそうとする三郎だが、左肩から迸る激痛がそれを許そうとしない。

「お前……!!? ぐうっ……!!」

「無理をなさらないで！ 血も足りていません！」

「……………お前が、手当てを…………?」

三郎の視界に移った人影は、自分のよく知る病弱を装った男に猫の耳という不要な才



プシヨンを取り付けた奇妙な存在、キツ。その目の見開き具合、口元の歪み具合が三郎の気絶するまでの感覚を次第に呼び戻していく。

得体の知れない能力に風穴を開けられた腹部。何の抵抗もできず、死角からの刺突に呆気なく膝を付いてしまった。

その腹部から大量に漏れ出す己の血液。一矢報いる前に少女を救い出した、彼にしては珍しい他人を優先した行動で無様に倒れ込んだ。

そして、他人のために犠牲にした左腕。

戦争の臭い、襲い来る仲間、切られた左腕。気絶してしまっている状況でないことがようやく思い出された三郎は、居ても立つても居られず体に鞭を打って必死に立ち上ろうとする。

「止めておけ。それ以上の無茶は体に障る」

グツ、と三郎の右肩が力強く押さえられた。

「……九鬼……？ 何故、泣いて……」

「十分だ。十分やってくれた」

英雄は三郎の右肩を強く強く握りしめる。英雄は恐らく今にも抱き着き感謝の意を示したいのだろう。体がウズウズしているのが見て取るようにわかる。

しかし、自分を庇ってくれたことで剣士の命とも言える腕を失った三郎の身体を労わり、普段なら誰彼とどこ構わずハグをする自分自身を抑えつけている。申し訳なさと感じの気持ちで既に彼の感情のダムは決壊してしまっているが、そのあふれ出た思いは全て涙と三郎の右肩を握る力に変換している。

「感謝を言葉にしても伝えきれぬ。すまない。感謝している……！！」

「……………そう、だったか……………あまり、記憶に、なくてな」

三郎は嘘を吐いた。

糸のような細く固い何かに腕をしつちやかめつちやかに締め付けられ、跡形もなくなった自分の左腕を求めるように肩から噴き出した鮮血、気を失ってしまうほどの精神的衝撃と激しい痛み。どれもこれも鮮明に思い出される。

それなのに、三郎は何の気まぐれか、はたまた痛みで頭がおかしくなったのか。普段の彼ならばしないような他人を護ると言う行為に加え、お前のせいだと他人に責任をなすりつけようとしなさい。

三郎は痛みを振り切って自嘲してしまふ。

「それより、だ……！ 九鬼紋白は、どうなった……!?」

「……まだそこにいる。まだ、な」

英雄は親指を突き立てて自分の背後を確認しろと指示した。英雄の肩から顔を出し、その先の戦況を確かめようとする。

——なんだ、これは。

「貴、様あ……!!」

小規模ながらも全てを抉り風化させんとする竜巻が金髪紅眼の少年を中心として吹き荒れる。竜巻の勢いを少年の威勢、威圧と捉えるのであれば人を殺すような勢いだ。しかしその中心にいる少年は地に伏して立ち上がれないでいる。それだけでこの竜巻の性質が途端に保守的なものに見えてしまう。少年を護ろうと必死に吹き荒れている。

加えて、竜巻は一つではない。もう一つの竜巻が少年を食らおうと牙を向いている。

「……はっ、はぁ……！ す、すまない……」

「お気になさらずお嬢様。獲物をもらっちゃつてるからね」

吹きすさぶ竜巻に真つ赤な頭髪を靡かせ、身を削るような風の爪を肌で心地よく受け止める少女。少女の周りにも砂埃が巻き上がった削岩機のような嵐が吹き荒んでいた。それでいながら少女の後ろで活きを整えている満身創痕の幼女を護る、攻守一体の能力だ。

バチバチ！ と音を立てて互いに身を削り合わせるように衝突する二つの竜巻。その中心部から生じる衝撃波のような突風は大地に砂の津波を起こしているようだ。

「待てえっ…!! 待つんだ、灯くんっ…!!」

その衝突を背に、刀を支えとして激昂する少女。怒りだけでなく、何故と問うた様に困惑にも支配された体はぶるぶると震えて止まらない。息も不規則に乱れ、滲む汗も不快感しか感じないようなものとなっていく。

背中に滲む引き裂かれたような三本の傷跡さえなければ、ただの動揺と捉えられたことだろう。

少女の意識は、既に痛覚に寄り麻痺し弾得ている。その状況下でも決して倒れることなく、橙色に近い頭髪を携えた少年を呼び止める。

「まだ立つか。そんな頑張りは見てて結構悲しいぜ？ 悲しいけどこれ戦争なのよね」

飄々と笑いながら少女を嗜めようとする少年。ギラリと鈍く光る彼の犬歯と、煙が漂っている右腕にべつとりと張り付く血液がその笑みを一層不気味に映している。

三郎の目に映る二人の漂流物<sup>ドリフ</sup>、三人の廃棄物<sup>エンス</sup>。彼らの小戦争が勃発したのは、三郎が目覚めるほんの数分前のことだった——。



「何をしているんだ！ 灯くん！」

一步、無意識に義経の脚が前に出た。英雄を護れる範囲からはみ出さず、それでいて新たな来襲者に一足で攻撃に移れる距離。義経はその限界を見極めながら、足を細かに動かしてにじり寄る。

「何って言われてもなあ……」

その義経の行動に対して全くの警戒を見せない廃棄物<sup>エンス</sup>、国吉灯は笑いを崩さない。

義経と灯、二人は前々からの面識がある様に話を進めていく。それも、灯にはそのことにも動揺していない。

「今はこつちも戦力を失うのが惜しくてね。最後の仕上げまでに玉繭<sup>そのカ</sup>を手放すわけにはいかなくつてよ」

そう言つて灯は背後で倒れ込んでゐる紋白に視線を一瞬だけ向けた。

「分かる様に説明してくれ……！　もう何が何だかさっぱりだ!!」

精神状況が平常心そのものの灯に対し、義経の脳内は既に疲労困憊、こんがらがつて理解が追いついていなかった。

「……あー、おいそこの行燈機構」

今の義経では話にはならないと判断したのか、灯は英雄の後ろでビクビク震えているキツに苛立ったような声で呼びかけた。

「わ、私……?」

「虚木霊ココダマのキツだろ、お前。お前のおかげで何人漂流物ドリフを逃がしたことか。こつちの修行馬鹿がぐちぐち漏らしててな。せいぜい夜道には気を付けた方がいいぜ?」

不気味に微笑んだ灯に、キツはささつと英雄の背後に身を隠して灯の視界から姿を消した。キツにとっては隠したつもりだったのだろうが、尻尾がピヨコピヨコと見え隠れしている。

その尻尾が英雄の視界にも映っているのか、英雄も苛立っているように言葉を荒くする。

「おいお前、隠れるならしつかり隠れる。頭隠して尾隠さずとは無様だぞ」

「す、すいません……」

「うーん、これで姿が天神館のEカップちゃんだったらよかったんだが、天神館は天神館でも病弱男じゃあな……」

そう愚痴をこぼし、

「——しつかり説明してやれ。俺のことを知らない訳じゃあるまいし、なあ？」

英雄とキツをまとめて鋭い眼光で射抜いた。この件に関してほぼ非のない英雄も巻き添いで身を震わせ、叱責の対象となったキツはその目を見ていないのにビクリと震え



怯えていた。

しかしキツもただ怯えているだけではない。

震える体に鞭を打ち、英雄の脇からゆっくりと顔を出し、カタカタと歯を打ち合わせる口を動かして声を発しようとする。

「……お、崩王軍最高幹部、遊撃の将、バルチザン国吉灯……！」

「……幹部……？」

何度目の驚愕だろうか、義経は目を見開いたまま灯を見つめ続けていた。

「そういうこと。悪いけど黙っててくれ。義経ちゃんを殺すのはまだ時期尚早、つてやつでな」

「灯、く——」

信じられないと、嘘だと言ってくれと懇願するように、刀を右手だけに持ち替えて一歩足を踏み出そうとした義経。

——躊躇うなよ？

それを制止したのは、またしても義経の刀。

先程出てくるなど、義経が力づくで黙らせた刀がまたしても騒ぎ始める。

——仮にも「僕」だ。身内が裏切ったら敵対する覚悟がなきゃ——「僕」じゃないぞ？

ドクン、と義経の中に眠る何かが衝き動かされた。

その何かは義経には分からなかった。しかし、「裏切り」という言葉に何故か義経は心を揺さぶられた。まるで、その裏切りを経験しているように、その裏切りに対する反抗を義務としているように。

——鎌倉のバカ兄上も、奥州のハゲも、自分の保身のために僕を殺そうとした。

そんな甘つちよろい奴らに、お前は どうするべきだ、なあ？

あるはずのない記憶が、ようやく、ようやく義経の中を駆け巡った。刀を発信源として、脳内から神経系に伝わる電気信号の様に、心臓をポンプとして血管流れる血液の様に、全身くまなく至る所に迸った。

——そう、か。そうなんだな。

義経の脳内の靄が一気に晴れ、疲労も何もかもが消し飛んだ。

——それでいいんだよ。まったく、遠回りしすぎたな、バカな「僕」。さあて、あの娘になんて言い訳しようか……。勝手なことするなつて、また怒られちゃうかな。

多岐亡羊、様々な言い訳からいいものを選び出そうと思ひ悩んだような声を最後に、すつ……、と刀から僅かな重みが抜けた様に、義経の腕にかかる負荷が無くなった。

それ以上に、義経を縛る見えない何かが解き放たれたように、自分の体が軽くなったように義経の一步が大きく踏み出された。

「……ん？」

その一步を踏み出した後、目にも止まらぬ速さで刀を両手に持ち替えて振り上げた。袈裟切りでもするような構えを取った義経の顔を見た灯の背筋に悪寒が走る。

普段の義経を知っている者なら想像することはできない、目蓋を半分下ろした酷く冷たい目。

「ぜえい!!」

灯の完全な虚を突いた一撃。正確には、灯の義経に対する固定観念の影に身を隠しての反撃。

その明確な殺意を伴った斬撃を、灯は紙一重で回避する。

「うおっ——!?!」

ズパツ、と音を立てて切り裂かれる灯の衣服。あと一歩行動が遅れていたら確実に肉体まで切り裂かれていた、その事実には灯は——

「へえ……。目つき、変わったじゃない」

笑っていた。子供の成長を喜ぶ親の様に、義経の精神的变化を楽しんでいた。彼女の表情を見ると、垢抜けたように表情から無駄な力が抜けているのが見て取れた。常に見開かれていたような目はとろんと垂れ、それでいて奥に潜む瞳には明確な敵意と殺意が絡み合って濁っている。

「義経は、義経だ。義経なら、義経でなければならない。特に、この場合は」

轟っ!! と義経から闘気が溢れ出る。それを全身に浴びながら灯はうーん、と唸って何かを考えているようだ。

「……ちよつと待てよ、これ驚異つてレベルじゃねえな……。廃棄物廃の宿敵敵に成り得るレベルにのし上がつちまつたんじゃねえか……？」

灯の笑顔が僅かに変わり、苦笑と呼べるようなものになった。義経の変化が精神的な

ものだけでなく、肉体的、戦闘力的にも変化してしまっていることが予想外だったのだろうか。

「やれやれ、壁越えの中でも上位クラスだったのに、もう一段強くなったか……？ 先に謝つとくぜ崩王ちゃん、間違つてここいらの連中殺しちゃっても許してくれよ——」

灯は義経の前に、右手で口を塞ぎ左手で頭を抑え、体を丸めるように腰を曲げてブルブルと震えだし、こう呟いた。

「——  
ウールブヘジン  
迅狼」

瞬間、義経の目に映っていた灯が変貌した。変貌とは言つても、姿形に変化はないし、これと言った攻撃態勢を見せてはいない。

しかし、義経の目に映っている灯は何もかもが違う。まるで別人のような気配、別人

のような闘気、中身だけごっそりと入れ替わってしまったような違和感に、義経は気味の悪さを禁じ得なかった。

その違和感ごと、義経は灯を切り捨てようと全力で駆け寄り左肩を一閃――

「!?」

切り裂いたはずだった。しかし、まるで煙を払ったように灯の身体は乱れ剣をすり抜ける。一切の手ごたえの無さ、この灯が別人に思えた理由も身代わりであると考えて納得した義経は、即座に振り返って灯の姿を探る。

英雄やキツ、他のケツトシーたちに手を出していないかと警戒してのことだった。

「どつち向いてんだ」

その警戒を粉々に打ち砕く様に、義経の背後から声がかけられる。義経の背後には、漂う煙のようなものしか残っていない筈だ。義経はそう確信したまま振り返った。案の定、そこには灯の身代わりのようなものしかなかった。

しかし、その煙を凝視すると、水蒸気や工場の排煙よりも濃く、それでいて白濁とし

た奇妙な煙の中で何かがもぞもぞと動いていた。

その何かは、白銀の毛皮で作られた縄の様なもの。しかしそれでいて蛇の様に骨が通っているのか、美しい曲線を描き丸まっていた。

「簡単に死ぬんじゃねえぞ義経ちゃん……！」

灯の聲が煙から響いた瞬間、身代わりは途端に明確な輪郭を取り戻し始め、再び国吉灯という人物を象っていく。

しかし、完全に元には戻らなかった。

切り裂かれた左肩からその毛皮の縄のようなものが灯の左半身を包み込み、全身を獣の毛皮の様に覆い尽くした。それだけならばまだ灯として認識できる。

それに包まれた左の口角が裂けた様に上がり、狼のような顎と牙を形成していく。

右半身は義経のよく知る国吉灯、左半身は白銀の毛を生やした獣人。最早、義経の知る国吉灯はどこにもいない。そう実感させられるその異形の姿。



「……  
狼、  
男……  
!？」

## 第二十二幕　　お願い！シンデレラ

「紋から離れろ、雌馬めが！」

王貴の上段蹴りが赤髪の少女の頭部目掛けて放たれた。大した速度もなく威力もあるようには見えない、極々平凡な学生が遊び半分で蹴りだしたような様だが、少年はその行為に絶対的な自信を持っていた。

「おっと」

そのご自慢の蹴りを、赤髪の少女は全力の蹴りで迎え撃った。王貴の蹴りとは対照的に、鋭く素早く放たれた蹴りだ。格闘技を齧ってすらいなかっただの一般人にも、その脚から放たれた蹴りが無駄のない洗練されたものだと感じてしまうほどに流麗な蹴り。

力量の差が、技としての優劣が一目瞭然と言っても過言でない両者の蹴りが激突す

る。

その瞬間、互いの脚の接地点を中心として球状に爆風のような波動が広がった。それでいて生じた音は爆発のそれではなく、大きな鉄球が二つぶつかったような、大地を激しく揺らすような金属音。

土煙を晴らして、その後が生じた風の乱流で再び大気を汚す。互いの頭髮は突風にあおられたように暴れて乱れる。

——王の蹴りを、いとも容易くつ……!?

しかし、精神を乱されたのは王貴だけ。少女はこの結果を予測していたかのように不敵に笑う。

「衝撃波って言うんでしょ？ それ、私にはちよーつと相性悪いよ？ 金髪」

「無礼な口の利き方だな、雌馬！」

「雌馬雌馬うるせえな貧弱っ！」

ガキーン!! と不快感しか覚ええない金属音が再び響き渡り、両者の脚が衝突した。

「私には南浦梓っていう女の子らしい名前があつてね」

「名前？ 塵芥にすらなれん存在が名を持つと？ 烏澁がましいな、雌馬」

「衝撃波を破られた程度で動揺する豆腐精神メンタルの王様なんて聞いたことないけどね」

ゴリゴリ、と梓と王貴の脚が擦りあつていく。互いに一步も譲らないと言う意思表示だろうか。衝撃波は既に出しきった王貴も、全力を出しきった後の梓も脚を引つ込めようとしなない。ただただ押し付けるだけの、意地の張り合い。押し切るだの蹴り倒すだの一切考えていない。

ただただ、擦りあわせる。ゴリゴリと脛を擦り合わせて立ち続ける。

しかし、王貴の目に映る光景は脛を擦りあわせるようなものではなかった。

——何故、王オレはこの雌馬の脚に届かない？

王貴と梓の脚の間には確かに隙間が空いていた。卓球の球がすっぽり挟まってしま  
いそうな、僅かな空間。

僅かでも、確かに空いている。王貴は彼女の脚に拒絶されている。

「単純なことなんだよ。これ」

王貴の当惑した表情に快楽を感じ取ったのか、梓の口角がククツ、と上がる。

「単純かつ大胆な異能<sup>これ</sup>で、私は戦場<sup>ここ</sup>を闊歩するのよ」

「……ふん、虚仮威しにすぎん！」

「<sup>シンデレラ</sup>  
灰靴」

王貴の衝撃波の装填された蹴りを、再び梓が迎撃する。そして同時に発生する波動と金属音。あまりにも規模の大きすぎる金属音が王貴の臍物をしつちやかめつちやか掻き乱し、王貴の体調を内側から破壊していく。

「ちっ……!」

王貴と梓の脚が再び鏝迫り合いを起こすも、彼らの脚は視覚的に接地しない。それでも王貴の脚には確かに蹴りあっている感覚がある。奇妙な現象に加えて激しい金属音に揺さぶられた脳髓が思考を鈍くする。

——<sup>オレ</sup>王の牙、<sup>フアング</sup>釈迦堂のリングとは別系統の、高密度の気か何か……? ええい、己の技を自慢げに披露するだけの未熟者め。<sup>オレ</sup>王が手ずから相手取ってやっていると言  
うのに、極めて不愉快だ……。

忌々しそうに舌を打ち、梓を睨み付ける。

「いつまでこうしてるつもり?」

その王貴の態度を甘美な蜜と捉えて食らい、くつくつと笑う。

「言われずとも動いてやる」

すつ、と王貴が梓から一瞬だけ足を離して、衝撃波を再装填する。そのまま足を押し付けるように梓の脚へ再び蹴りをぶつける。そして鳴り響く金属音に、王貴だけでなく不意を突かれた梓も顔を顰める。

蹴りのようでありながら、その実王貴の狙いはこの一撃だけではなかった。

衝撃波を打ち込んだ反動を敢えて身に受け、王貴は右足を勢いよく地面に戻した。普段以上に負担のかかった脚が僅かに悲鳴を上げたが、彼の経験の中では大した痛みではない。

あの時の、王貴が一目置く彼との「喧嘩」で達した限界に比べれば、蚊に刺された程度と王貴は断ずるだろう。

両脚が地面に付いたその瞬間、王貴の脚元が爆発したように抉り取られる。梓の脚による迎撃を掻い潜るように超々近接戦闘に持ち込み、王貴は右手を広げて首を掴む様に腕を伸ばした。

「うおっ」とー」

梓はそれを咄嗟に脚で止めた。

上体を反らし、足の裏で何かを蹴り落とすような体勢で王貴の不意打ちを防ぎ切つた。

——届かんな。

またしても王貴の手は梓の脚に確りと触れられない。見えない壁のようなものに阻まれて王貴の手は拒絶される。

——王のオレ気の障壁とも違う。原理が違えど似通っている分、気に食わんな。

「まあ、固いことだけは認めてやろうか。馬は蹄鉄を付けていることが当然であるからな」

「素直に褒められないの？ それに、女の子に向ける言葉じゃないね」  
「女の子？ 思慮の足りない餓鬼の様に素足を晒し、最早着崩しとも着古しとも言えない着壊し振り。貴様を女と思える要素など皆無だ」

梓の風貌を再確認して王貴は言い捨てた。素足は素足でも、靴どころか靴下すら身に



付けない、義務教育真っ只中の学生が運動会の徒競走で靴を脱ぎすてた様を彷彿とさせる脚だ。彼は女性らしさをそこから感じ取ることはできなかつたのだろう。

「失礼しちゃう。これでもDカップよ?」

しかし、梓の体型自体が女らしさを秘めていないかと言われるとそうではない。学生にしては十分に発育した胸部に加え、鍛え上げられた脚を繋ぐその臀部もまたハリがある。ティーンズ雑誌に載っていても差し支えないスタイルだ。

「ふん。Dで見栄を張るか、中途半端な。どこぞの武神らしくFまで伸ばして見せろ」

「何で知ってるの?」

「……不本意ながら共闘した塵芥との他愛話で知った程度だ」

——俺は見ただけで女のスリーサイズが分かるからな。

「何故そのようなことを話したかまでは覚えておらんがな」

「………いつがい。そういうこと話すんだね」

そう指摘され、王貴の目を丸くした。その言葉に驚いたのか、その言葉があまりにも的確だったからか、兎にも角にも王貴は自分自身に驚愕していた。

——ちつ、あの裏切り者め。くだらんことで王を掻き乱す。

「……これから死ぬ貴様への冥土の土産だ。滅多にくれてやるものではないが、今回は特別興が乗ってな。感謝しろ」

「君の世界のモモちゃんの情報をもらってもなあ。モモちゃんは私の世界のモモちゃん一人で十分なんだよね。ちよっぴり弱くて、ものすごく強い可愛い武神だけで」

「世界が違うのだ。同一であつてたまるものか。あんなものが五人も十人もいてみる。地球が消滅して超新星が爆誕し、全知全能の霊が森羅万象を司る地球の王によつて世界が再構成されて凄い」

「やばいつてことは何となくわかつた」

「川神百代は、王の知る一人で十二分だ」

「そこに関しては同感ね。私の知るモモちゃんだけでいい」

それが相容れぬと決まっている以上、と梓が付けたし、

「生き残るのは一人で十分ね！」

「王<sup>オレ</sup>一人、だな」

王貴の頭部目掛けて梓の右足を、対象となった王貴本人は微動だにせず防ぎ切った。一切の動作を見せることなく、相手の攻撃を全てうけきる金城鉄壁、気の障壁が展開されているのだ。

その城壁が真正面から打ち砕かれたことなど、彼の記憶にはない。

その障壁が、突如音を立てて軋み始める。

「……………な、に……………!?!」

「もういつちよ!!」

ガキーン!! と王貴と梓の攻撃が衝突した際に生じた金属音が再び響き渡り、梓の脚が王貴の気の障壁を痛めつける。一切の欠損も破損もなかった、装飾品に用いられる鉞石がかけてしまったように、気の障壁に罅が入る。

「っ……っ！」

障壁が破られると言うことが直接的に王貴の死に直結するわけではない。しかし、障壁が消滅すればその分の気が消滅する。王貴の莫大な気の貯蔵量から気の障壁分の気がごっそりと持って行かれれば、王貴に突如虚無感が襲い来ることだろう。

気の障壁に込められている気の量は膨大だ。だからこそ、今まで一切の侵入者を拒んできた堅固な壁であり続けたし、壊れることなど想定されていなかった。ある種の油断が具現化し塊となったものがこの障壁だ。

己の手を煩わせたくないという戦闘スタイルを極めた結果の、過ち。

「そおらっ！」

ピシリ、梓の三度目の攻撃に耐えきれなくなった気の障壁は音を立て、決定的な稲妻

を己の身に走らせてしまう。

—— 障壁の内側から、裂けた……!? 巫山戯るな、このような雌馬に……!?

自らの気がどのようなにして打ち破られつつあるかを理解しながらも、目の前の現実を否定し梓への殺気を膨らませる王貴。

「硬ければ硬いほど、壊れやすい。ほんの少しのきつかけで、あっさりと」

まるで止めと言わんばかりに、梓は爪先を気の障壁に突き出す。王貴の障壁の中心にそれは音を立ててめり込み、毛細血管のように細かく複雑な模様の罅を伝播させた。

あとは触れるだけで瓦解する、藁を積み上げた建造物より容易く壊される。

「相性良すぎだねホント。いやあ私の見立ても捨てたもんじゃ——」

捨てたものじゃない、そう言いかけた梓は目の前の光景に声を詰まらせた。

障壁が破られ、気の減少にえも言われぬ脱力感と虚脱感に苛まれているはずの王貴の

足が唸っていた。王貴の足から太陽の灼熱に焼かれた舗装道路のような熱量が発生しているように、王貴の足の周囲が揺らめき空気が収束していくように見られる。

気の障壁が破られることを覚悟していたわけではなかった。この右足に溜まった高密度の気は、王貴が無意識に貯めていた苛立ちの現れ。

「――分を弁えろ、塵芥にも届かぬ畜生が」

ぐるぐると回転させて練り上げた衝撃波を飛ばす。打撃に込めるのではなく衝撃波を単体の凶器として扱う、霧夜王貴が最も信頼するその技の名は――

「征け――フアング牙っ!!」

何もない空間を蹴りぬく王貴。その脚に付随していた気はその行為をスイッチとして体を扇状に広げ、巣から飛び立った。まるで死神の鎌のようでありながら、刃と峰を選ばず全てを薙ぎ払い打ち砕く。

絶対的な破壊の象徴、牙が梓の腹部目がけて奔る。

「行くよ灰靴！」  
シンデレラ

その圧倒的な暴力を前に、梓は己の脚を平手で叩き鼓舞し、己の新たな力の名を叫ぶ。襲い来る気の塊に対し、梓は真つ向から右足を立ち向かわせた。

ガキーン!! と再び激しい金属音が響き渡り、梓の脚が王貴の牙により削られ始める。ガリガリと音を立てながら王貴が届かなかった僅かな溝を食っていく。

「う、おおおおおおおおおつらあ!!」

その溝が埋まり切る寸前、梓の脚を添うようにして牙の方向が変化する。所謂「いなされた」と表現されるような、斜め上方に弾かれてしまったのだ。

「へっ、へへ……。ちよつと危なかつたかな?」

「あら絶句? ご自慢の技を足蹴にあしらわれて驚嘆のご様子で」

——削れたな。

梓に煽られながらも、王貴は思考を巡らせる。

王貴が相手を分析し、事細かに状況を把握しながら戦うことは極めて稀有な行動だろう。彼を知る者がこれを見れば、違和感や嫌悪感を抱くやもしれない。

圧倒的暴力で押し伏せることを放棄し、多方面から観察し値踏みする。雑感、慢心とは掛け離れた行動を取る王貴。

——厄介な記憶だ。

「そろそろ私も帰りたいし、終わらせちやおうかしら……ね！」

止めだと言わんばかりに、梓のハイキックが王貴の頭部に襲いかかった。

「な——」

「——早計だったな、雌馬」



しかし、梓の足が王貴の頭部に触れる直前、見えない何かに阻まれて止まってしまっていた。まるで、先程の脚による罅迫り合いの時の様に触れることができないでいた。先程と違うのは、その溝を創り出しているのが梓だけでなく、王貴も関わっていると言うことだ。

「なるほど、相性は素晴らしい。その言葉は受け取ってやろう。だが、それを貴様が発言することは金輪際許可しない。それは優位に立つ者のみが許された特権だ」

梓の足がギリギリと悲鳴を上げる。ただ蹴りを止められているだけではない。見えない何かに脚が締め付けられているのだと気付くのは難しくなかった。

「下らぬ芸当だ。原理は知らんが法則さえ見抜けばこの有様。全く、前回も今回も、工夫が足りんな廃棄物共」

「……工夫……ですって?」

「貴様にそれ以上享受する資格はない。精々、奇つ怪な彫像となり果てた後に考えることが可能であれば、独りで悩むことを許——」

「あんまり新人を虐めんなよ霧夜」

堂々と講釈を述べる王貴の背後から、突如目にも止まらぬ速さで飛び出してきた白銀の巨軀の何かが突進してきた。

「いぼっ……!?!」

「講釈たれてるお前も、気の使い方が一辺倒なんだよ。相変わらず背後はすつからかんだし」

背中にのしかかる巨大な獣の重量。その獣の体軀にまとわりつくように、白い煙が細

く漂っている。

「義経ちゃんダウンさせたし、遊びに来たぜ？」

## 第二十三幕 例外の方が多い規則

太く鋭利な刃物で切り裂かれた傷を背中に受け、源義経は地に伏し立ち上がれずじまつた。純白の制服を己の鮮血で染め上げ、さらには大地に血だまりをも作っている。

友人を切り捨てることに覚悟を決めた筈の剣士が、その友人に切り捨てられ生かされている。もともと動いてはいるが、立ち上がる気配はない。

それをやってのけた張本人、国吉灯は己の狼の様に爪の尖った右手をゴキゴキと鳴らして霧夜王貴を踏みつぶしていた。肩甲骨と肩甲骨の間と腰の付け根を両脚で抑え、力づくでは立ち上がれないようにしながら王貴の上にしゃがみこんでニヤニヤと笑っている。

「ぎゃっ、ぎゃまあ……!!」

常人でも怒りを覚える踏みつけという行為に、積み上がった自尊心が大気圏を突破す

るほどの高さを誇る王貴が耐えられる訳もなく、顔面にぶくぶくと青い血管を浮かびあげている。顔も真つ赤で、怒りに塗れていることが明らかであった。

体も僅かに震え、体から殺気が滲み出している。堂々と講釈を垂れていたところで不意を突かれたことによる苛立ちも相まってか、無意識に漏れ出した気が体の震えに合わせて大気や大地に震動を与え始めていた。

「熱烈なキスで大地も大喜びじゃん？ま、生かしてやるから感謝してくれ」

殺気を全身で浴び、王貴の顔が真つ赤になっっていることも把握していながら、ぐりぐりと足を動かして彼をさらに地に擦りつける灯。ただの怖いもの知らずなのか、それとも王貴を抑え込める自信があるのか。灯は笑いを崩さない。

その光景を見ていた南浦梓が顔を顰め、カツンカツンと音を立てて灯に近づいていく。裸足の筈の梓の足もとは地面から僅かに浮き、地面の小石を蹴散らし音を立てていた。

「ちよつとアツカリン!!人の獲物横取りしないでよ!!」

「ぶくっー」

梓はご立腹のようで、声を荒げながら灯の胸元に蓄えられた白銀の獣毛を巻る様に握りしめ、力強く引き寄せて鋭く睨み付けていた。

その際、王貴の頭を踏みつけて地面と同化させようとしていた梓だが、その視線を一切王貴に向けていなかった。道端の小石でも切り飛ばすかのような関心で踏みつけられた王貴、彼の怒りのボルテージは極点に達し、メーターを振り切って破壊しようとしている。

「うっせーな。負けそうになってたくせに文句言うな」

灯もその怒りを確かに体で感じ取っているはずなのに、王貴に視線を落そうとはしない。あくまでも梓との対話に意識を向けているようだ。

「コイツもお前も、能力の使い方が単純なんだよ。そこらへん優秀な高坂にでも訓練してもらえ」

そう言うと、灯は自分の左腕を梓の前に突き出した。すると、その腕がまるで陽炎の

ように揺らめき輪郭が曖昧なものになる。まるで煙の様に色素まで抜けて行ったその腕が梓の周囲に漂い、彼女の怒気を霞ませていった。

僅かに灯を惹きつける力が弱まった瞬間、ギリリと鈍く光る巨大な爪が梓の首元に添えられた。灯の肘から手首までは煙の様に原形を保っていなかったが、手首より先だけは梓の首元で実体化している。

奇妙な異能、廃棄物が畏怖されるべく所以を肌で感じて、ようやく梓は身震いした。

「っ……………」

「ばけもの廃棄物になり立てだからって怯えるのはもうこれつきりにしとけ。あずにゃんももうおれら廃棄物と同じなんだから」

「……………分かったわよ」

梓は突き放す様に灯から手を放したが、灯は大してバランスを崩すことなく王貴の上でしやがみ続けている。

「おい金髪くん。次会ったら絶対殺すからな！」

グイツ、と王貴の顎を脚で持ち上げて顔を無理やり上向かせて梓は宣言する。異能を解除して、文字通りの素足で顔面をなじった。

その瞬間、王貴の中で溜め込まれていた何かがようやく爆発した。

「雌馬」

轟ッ!! と王貴を中心として竜巻が発生した。

「っ!?!」

「おっ、と……っ?」

その瞬間、王貴の頭に脚を添えていた梓の脚に細かな擦過傷が無数に刻まれ、王貴の上に乗っていた灯がバランスを崩し竜巻に巻き上げられた。



「ただでは、殺さん、ぞ……!!　貴様らあ……!!」

圧倒的な気の量、それを無意識に竜巻に変換し周囲を拒絶する王貴の異能<sup>ちから</sup>。地面を抉って取り出した砂や石すらも気を付随させ凶器と変貌させ、彼ら廃棄物<sup>エンスズ</sup>を甚振り殺すような技を展開していた。

梓の脚に食い込む棘のような石と、傷口を広げるように這いずる砂。梓の表情が苦痛に歪む。ただ傷つけられただけではなく、「痛む様に傷つけられた」脚は異能を解除していた。

能力を解除した油断からの失態、自慢の脚が傷つけられた怒り、おろし金で何度も傷つけられたような激痛。それら全てを込めて王貴の竜巻を突破しようと異能を再装填した梓だったが、それらの複雑に絡み合った感情群が瞬間的に冷めてしまった。

吹き荒ぶ竜巻が、王貴のその知れない莫大な気を食らってさらに膨張していったからだ。

まだまだ大きくなるその異能はまさに廃棄物<sup>エンスズ</sup>のそれじやないか、と梓は感じてしまった。なまじ廃棄物<sup>エンスズ</sup>として生まれた自分よりも、漂流物<sup>ドリフ</sup>でありながら圧倒的な異能を行使する王貴に、恐れを抱いてしまったのだ。

一歩、その竜巻から退く。

「怯えるのはこれつきりにしろって言ったろ」

それを背中から支えるように押し止めた白銀の狼男。

「おーおー、刺激しすぎちゃったか……。霧夜め、少しは大人しくなっただと思っただが……」

「国吉い……。貴様、生きて帰れると思うな……。王が満足するまで痛めつけて、それから首を刎ねて血を抜き奇怪なオブジェにしてやる……。裏切った結果の廃棄物、貴様にはお似合いだ!!」

「首飛んだらその時点で俺らはオブジェなんだが？」

立てた親指で自らの首に一筋の軌跡を描く灯。

たったそれだけの行為に、王貴の不機嫌さも計測不能なまでにメーターを振り切ろうとしていた。

「っ…………!!」

「まあそんなことはどうでもいいんだよ」

王貴の苛立ちを意に介さず、灯は梓の肩に手を置く。

「お前は立った今重大なミスを犯したぜ」

「何…………!?!」

ぼそりと梓に何かを耳打ちする。

「えっ…………」

「やりやあでできる。お前と霧夜は相性がいい。そんじゃあな霧夜。また会えたらちゃんと戦ってやるよ」

ヒラヒラと手を振って王貴に背を向ける灯。その視線の先には刀を突き立てて上半身を地から浮かしている剣士がいた。

「はっ、はあっ……!!」

「もうよそうぜ義経ちゃん。痛々しくて見てらんねえよ」

「誰のせいだどっ……!!」

「俺のせいだよ——」

ボンツ!! と灯の足もとが弾ける。

「——だから、最後まで面倒見てやるよ」

その音が聞こえた時には、既に義経の背後に灯が回り込んでいた。後ろから聞こえた声に振り返ろうとした義経だったが、体が必要以上に回転してしまう。

「……が、ふっ?」

二転三転、くるくると血しぶきを上げながら空中に弾き飛ばされていることに義経が気が付いたのは、酷く冷たい視線で自分を見上げる灯を視界に入れた時だった。

数秒の滞空時間を終えて着弾する義経。高く放り投げられ、背中の傷をさらに増やし

ながらも意識は刈り取られていない。それどころか、再び立ち上がろうともがく。その姿から灯は視線を逸らしてしまった。

「……あずにゃん、ちびっ子と帰るぞ」

「おい国吉、何を勝手に逃げようと——」

「シンデレラ  
灰靴!!」

灯を止めようと手を伸ばし前進しようとした王貴の身体が勢いよく後方に弾き飛ばされた。竜巻も付随して弾かれたことにより数メートルの轍が刻まれる。

「すつ、ごーい……。本当にできちゃった」

それをやってのけた張本人である梓は己の能力に感嘆の声を漏らした。自分の周囲に王貴のような竜巻を発生させながら。

「だから言っただろ？ アイツとお前の愛称は実際良いんだよ」

「いいものもらっちゃったー！」

「やれやれ……。ちびっ子、大丈夫か？」

彼らの小戦争は、漂流物の惜敗を持って終戦する。



「やれやれ、困ったものだ」

自らの内臓を贅肉という贅肉で包んだ肥満体系の男が忌々しそうに呟いた。

「あのような登場をしておいて、まさかあの程度とは」

「……………」

「五行？ 気の障壁？ フアング 牙？ 悪いとは言わんがそうではない」

トントン、と車椅子の肘掛を指で小突く。

「あの紅あかが欲しいな。鮮血を極限まで薄めた潤いのある艶やかな「扉」が欲しい。そうは思わんかね「EASY」」

男は手を指しだし、対話している少女の答えを待った。しかし、少女はその投げかけに嫌悪感しか示さない。怒っていいものか、泣いていいものか、はたまた笑っていいものか。そんな複雑な感情から適した表情を探し当てられずにいるようで、少女の表情は二転三転。

「連れないな。この通路の住人は挙って無口を信条とするのか？」

「あんな役人風情と一緒にしないでほしいの」

思わず少女の口から苛立ったような声が漏れる。その声が発せられたことをきつかけに、少女の表情は苛立ちにより固定されたらしい。

「この私と、あんな奴のどこが似ていると言うの」

「そうだな……。強いて言うのであれば、親子のようなんだよ」

カツン！ EASYの脚が一步前に出される。

「その腹搔つ捌いてもらおうかしら。丁度連れてこようと思っていた落ち武者がいるの」

「それは「崩王の世界」ではなく、「黒王の世界」のことだろうか？」

キリリ、車輪が三十度回され前進する。

「桔梗紋を呼ぶその人選には脱帽するよEASY。しかし、あの世界とこの世界を混ぜる特権は私に「だけ」ある。その意味が分かるか？」

「そうよ。お前がやり直したせいで、お前のところの金髪が厄介な状態で向こう側に付いたの」

「しかし、その代わりにお前は崩王とその忠臣を手に入れた」

「そうだとしても、お前がやったことは邪魔ではないの。あっちの悪七兵衛の件も、こっちの立花の一件も！ 全部全部狂い始めたの！」



カツン、カツン！ EASYの脚が肥満体系の男の前で止められた。

「今度何かしてみなさい。お前からありとあらゆる能力を奪わせてから奇怪なオブジェにしてやるの」

「おや、私は塩の塊の方が好みなんだが」

「ふざけるのも大概にするの」

ガツン！ EASYの蹴りで車椅子が傾く。

「暫く「黒王」にこき使われているといいの」

車椅子が倒れ込む先には、まるで舞台に取り付けられた奈落のような穴があった。

「おやおや手厳し——」

言葉を最後まで紡ぐこと叶わず、男は吸い込まれるように穴の中に落ちて行つた。

「ええい紫め。自分の不始末は自分で処理しなさいよ」

## 第二十四幕 われらフロシャイム川崎支部

中央大陸最大都市、アンガー。

そこはかつて靈峰ホーエンシユルツトを名所とし、その山の中腹に聳え立つ古城ネットワークを継承する王族を中心に、他国の羨望を糧としてぐんぐん膨れ上がっていた。周囲の村々を呑み込み大きな城下町を完成させ、莫大な資金と権力を知らしめる大都市であった。

かつて、人間以外の生物は虐げられて然るべきだと提唱した当時の国王の考えが激しく伝播し、黒き森に亜人や獣人を追い込む運動を開始した発端の国とも言われている。「人間のあるべき生活」を求め、一定数の亜人たちを家畜として蔑んできたようだ。コウガ第三帝国もこの考えに賛同し寸動に参入していた。

そんな人間至上の理念を掲げていたアンガーに、一つの影が来襲する。

——ここが一番汚らわしい。

そう考えたかの人物は古城に仕えていた王族直属の兵士全てを力任せに蹂躪し、王族の血を受け継いでいる人間を全て焼き払って大都市を半日足らずで壊滅させた。

当時から人物の配下にいた二人の少年は脱走した残党狩りと、黒き森に追いやられた種族の救済をおこなっていた。その時の光景を見た者は彼らを人と思わず、自分たち同様の化け物だと認識するほど醜くも、その醜さを打ち負かすほどの力を有していたらしい。

今やアングーのかつての姿はなく、そこは誰も近寄ることのできない絶対不可侵の領域、廃棄城へと姿を変えて今に至る。



陽光を遮断する黒雲立ち込める空を龍が旋回している。その背には黒い甲冑を身に纏った人ならざる者が槍を担いで周囲を見回していた。どうやら彼らは監視体制にあるようで、実に規則的な動きで空を飛びまわっている。

黒い甲冑と表現したが、甲冑は関節部分に大きく露出しているだけで、基本的には布で全身を覆っている。鼻も口も布で塞がれ、監視に必要なのは目だけだと言わんばかり

に全てを黒く覆い隠されている。

その龍の軍勢に、一匹の赤い龍が一際大きな翼で大気を叩いて速度を落とさずに飛び込んできた。

『パルチザンだ』

龍の顎にかかる手綱を引いて旋回行動を止めた一人の黒い兵士が呟いた。その龍と向き合うようにもう一匹の龍が速度を落として滞空する。

『やれやれ、あのお方も気楽なものだ。招集がかかっているながら幾度となく飛び出して』

『今回は特別だろう。紋白様の回収命令があったそうだ』

『紋白様の？』  
ブレイド  
ドリフターズ玉繭が漂流物に劣ったのか？』

『劣ったとは言い難いだろう。紋白様はまだ「左腕」を使えない』

『左腕？』

『古くから崩王様に仕えていれば分かることだが、紋白様には崩王様からの特例が下っているからな』

『おいお前ら』

二体の龍の真横から、一回り大きな龍がぬつ、と首を伸ばして威嚇してきた。翼が実際大きいように見えたが、並んでみればこの赤い龍は他の龍の親のような大きさに見える。

素通りするものだと思っていたのか、思わず跳び落ちてしまいそうなほど体を跳ねさせた兵士二人。

『ば、パルチザン!』

『話すなら小声でやれ。俺じやなかったら痛いお仕置きだぞ? 特に閻騎士様に見つかってみろ。電撃だけじゃすまないだろうよ』

『し、失礼いたしました!!』

槍の穂先を灯に向けないように斜め下に向け、空いた左手で敬礼する黒い兵士たち。

『しつかり働けよ。後で差し入れ持ってきてやるから』

『おお! パルチザンの手土産ですか!』

『いやありがたい。空ばかり飛んでいてはろくに休憩もできませんので』

彼らの声のトーンが上がった。先程まで喉がまともに機能していなかったのではないかと疑わせる程、如実に差が表れている。

『あんまり無理しないようにな。俺ぐらい適当にやってればいいから』

『貴方ほど適当にやっけていたらそれこそクリスティアーネ様に殺されてしまいますよ』

『ははは、違くない。パルチザンが羨ましい限りだ』

『じゃあ呼んでみるか？ 崩王ちゃん！ ってな』

灯のおどけた言動に、黒い兵士たちは顔を青くして首を振る。

『御冗談を！ 出来る訳がない！』

『パルチザンが連絡なしに姿を消した時、いつも崩王様にやられてしまったのかと疑っているくらいですよ！』

『……何気に酷いなお前ら』

呆れた様に灯がため息交じりに呟くと、黒い兵士たちの隠された顔から唯一露出した

目が緩む。

『こうやって話せるのはパルチザンくらいですよ』

『他の廃棄物エンスズの方々は殺気だっていますからね』

『あー……。余裕の無さそうな奴らばかりだから……。まあ、なんとか言っておいてやるよ。兵士たちに少し優しくしてやれって』

『是非』

『真剣に』

『苦労してんなー……。あんまり期待はしないでくれよ。ほんじゃあ頑張れ』

灯はそう言い残すと、ぐいつ、と手綱を引っ張って龍を大きく空へはばたかせ、監視を続ける龍騎兵たちの上空を飛び越えて古城へと向かった。

「口を出すなどはこのことか」

灯の背後に積まれ龍に括りつけられている荷物がごそごそと動いて言葉を発した。



「ああ。もう出てきていいぜ」

「なん、でっ………！ 私まで隠れてなきやいけないのよ！」

荷物を包んでいた毛布を勢いよく取り捨て、人形のように抱えられている紋白と不機嫌そうな表情の梓が灯につつかかる。

「おもりに決まってるんだろ新人」

「おい！ おもりとはどういうことだ！」

「誰がアンタのこと先輩だっと思っうか！」

「崩王軍古参だっって言ってるじゃん」



「ただいまー！」

古城内部、一人では開けられなさそうな重圧感を放つ一際大きな扉を、まるで西部劇の酒場によく設置されているスイングドアでも開けるかのように軽々と開け放った。

相当質量があつたのだろう、そのせいで扉の奥の大きな広間の天井から細々とした石が落ちてくる。

「壊れる壊れる！ 何やってんの!？」

「大丈夫大丈夫、いつもこんなのだし」

思い切り動揺する梓に尻を蹴られながらふざけて魅せる灯。どうやら紋白は初めて見る光景ではないようで、少し警戒しながらも梓よりは落ち着いていた。

「お帰りなさい国吉先輩……そちらの二人は？」

その部屋の中に既にいた少女が頭に付いた砂埃を払いながら近寄って声をかけた。少女は帽子を深くかぶっていて表情が読めない。

「あれベイちゃん、あずにゃんはともかくとして……ちびっ子のこと知らなかったっけ」  
「私、参加は割と最近ですから」

ベイちゃんと呼ばれた少女は被っていた帽子を取って梓と紋白に素顔を見せた。後頭部で髪をまとめ上げ、動きやすそうなホットパンツに「18」と刺繍された運動着を身に纏っている。

「そっか。ほれあずにゃん、ちびっ子、挨拶」

灯はそれを見て梓と紋白の頭を浮かんでぐいっと押し付ける。

「アンタは私の親か！」

「我を子供扱いするなとあれほど！」

犬にでも噛まれそうになったように手を引っ込めて悪がきのような笑顔を浮かべる灯。

「崩王軍南方制圧部隊副隊長、N・B・S、スターマイン星怒の大和田伊代です。新参者ですが、宜しくお願います」

「あー、私のが新参者なんだけども……。えー、この度エシズ廃棄物？ になりました、南浦梓

です。宜しくお願いします」

伸びた背筋で静かに腰を曲げた伊予とは違い、後頭部を搔きながら軽く頭を下げる梓。

「あずにゃん確か二年生だろ？ 伊代ちゃん一年生だからタメ口でもいいんだぜ？」

「バイトじや就職順で先輩後輩決まるんだし、こんなもんじやない？」

「その割に俺にはタメなのな。一応最古参なんだけどよ」

「セクハラ野郎に敬意は払わないわよ普通」

「規律に準じてるのかそうでないのかはつきりしろよ」

「崩<sup>ち</sup>王軍はそのあたり全くの自由だし、崩王様にある程度の敬意を払ってくればそれでいいよ」

梓と灯が慣れた手つきで蹴ったり蹴られたりを繰り返していると、灯が開け放った扉から一人の男が入室した。

「首尾はどんな感じだ？」

「各地の廃棄物<sup>エンスズ</sup>はここに集結命令がかかって一ヶ月。まだ一人戻ってこない」

「国吉灯、まさかお前のことではなからうな。お前が浮浪癖を持つていることはあまりにも有名だ」

紋白がジロリと冷めた目つきで灯を睨み付けるが、本人はそれを笑って受け流す。

「信用無さすぎねえ？ 割と俺は命令には従順なんだけどよ」

「どうだか、怪しいところではないか？」

「……………崩王様も呆れて命令しなくなったしな」

「うるせーよ修行馬鹿！」

軽く拳を肩にぶつけようとした灯だったが、男はそれを目で制する。

「……………ねえアツカリン。あのおつきい人は誰？」

「あれはな、タンパク質を摂取することでヌタのような液体を分泌できる廃棄物<sup>エンスズ</sup>で——

「聞こえてるよ国吉。法螺を吹くのも大概にした方がいい」

ガシリ、と灯の頭を掴んで言葉を遮る男。はははと笑いながらも灯が男の手を振り払おうとする手には力がこもっている。

「僕からしたら初めましてではないんですけど、改めて。港三千尋です。こここの参謀とかやっています。誤解なきよう念の為訂正しておくけど、僕の異能はそんな標準的な能力ではないから」

「よ、宜しくお願いします!」

「向こうでは同い年だし、気軽に話しかけてね」

「おい! それよりも早く放せ!」

「フハハハハ! 無様だな国吉灯!!」

灯が三千尋の手の中でもがいている様を大げさに笑う少女が現れる。

「……クリステイアーネさん、で良かったかしら」

「残念ながら自分はお前のことを知らん。ので、名を述べる。自己紹介タイムだ!」

「お、それやるなら今いる廃棄物全員でやつておこうぜ。どうせ二人以外はいるんだし」  
その提案に便乗する形で灯が提案する。その案に賛同したのか、三千尋はようやく灯から手を放した。

「二人？」

「命令だとか作戦だとかの訳あつて帰つてこれない奴と、命令を無視してドンパチやつてる奴」

「命令を無視してもお咎めないの？」

その言葉に、普段から命令を無視しているという話題ばかりの男が自らを柵に上げて難色を示した。

「うーん、こればかりは特例だな。毎日ずっと漂流物ドリフターズと戦つてんだから」

俺も一人は顔を知らねえよ、そう言つておどけて見せる。

「んじや闇騎士様？ あそこに連中固まってるし、あずにゃん連れてって」  
「応！」

クリスが梓の手をがっしり掴んで部屋の奥へと引つ張っていく。

「ちよ、急に引つ張らないでよ！」

「いいではないか！ 女の仲間は嬉しいからな！」

「……………引つ張るのが嫌ならおんぶしてあげようかな」

「止めておけ港。殺されるぞ」

「……………さて、そんじやあ崩王様の容態でも見に行きますか」

梓が受け入れられたことを確認し、灯は部屋の外へ出て行った。



## 第二十五幕 v i v i

古城の中は複雑に入り組んでいる訳ではないが、廃棄物が根城にするには持て余す大さきであるため未使用な部屋が多い。廃棄物たちが暇であれば集う大広間と、念のため用意されている個々の部屋を除いても、残された部屋の数は容易に五十を超える。

奥に進めば進むほど廃棄物たちの色は薄れていく。多く設置された部屋から自由に選んでいいとされているが、皆一様に最奥の部屋まで行こうとしない。歩いていくことが面倒だということもあるだろうし、何より掃除も何も行き届いていないせいで汚く衛生面に支障をきたす可能性があるからだろう。

常に服を着崩してろくに着替えもしないクリステイアーネ・フリードリヒや、靴を履かずに裸足で過ごす南浦梓がいる時点で衛生面もへつたくれもないように思われる。しかし、廃棄物きつての育ち盛り、伊達瑠奈の存在がそれを許さない。

悪い病気にでもかかって小さな体に異常が出たら大変だ、と奥の部屋に拠点を構えることを廃棄物全体で禁止している。瑠奈は廃棄物内部で特に可愛がられているようだ。

そんな規則を堂々と打ち破る様に、灯はずんずん奥へと歩いて行つた。通路の隅に張られた蜘蛛の巣と蜘蛛の巣が絡み合つてしまふほど混沌とし、足を踏む度に埃が紙風船のように舞い上がる。見るからに清潔とは言えない空間だ。気管が弱いものならその場でアミダながらにむせ返つてしまふようなほどだ。

そんな汚らしい通路の突き当りを道なりに順じて右に曲がると、一つの部屋の周りだけ妙に小奇麗だった。ドアを何度も開閉したように埃が捌けられており、扉もほんの少しだけ補修されていた。

そんな扉を躊躇なく開け放つ。

「国吉灯、帰りましたよーっと」

「ノックしてから入れ、無礼な奴だな相変わらず」

部屋の中には椅子にもたれ掛つている一人の少年と、寝具の上で横になっている人物がいた。寝具に一度目を移した後、少年に向けて灯は声をかける。

「なんでここにいんだよ高坂」

その言い分に、まるで蓑虫の様に全身を布のベルトで縛られた少年、高坂虎綱がモゾリと動く。

「僕の異能、忘れたとは言わせないぞ」

虎綱が灯を死んだ魚のような目で睨み付けると、虎綱の身体から一本のベルトが伸びて灯の首を二回叩く。それを灯は笑って掴み取り、西部劇に出てくるカウボーイが先端に輪っかが付いたロープを回す様に、虎綱の綱を弄って遊び始めた。

「……これどこまで伸びるんだよ」

「僕の命が尽きるまで」

「死んでるじゃん、お前」

「目だけ見てものを言うなよ」

いいい加減放せ、と帯がぶるんぶるんと反抗を初める。笑いながら灯がそれを手放すと、帯が灯の頬をベシッ、と叩いてから虎綱の元に戻った。

「……何だよ崩王ちゃん。そんなに具合悪いのか？」

灯が寝具に目を向ける。そこでは普段通りに顔を布で覆い隠し、できるだけ虎綱からも灯からも目を逸らす様に壁に目を向けて横になっている崩王。灯の声にも一切反応せず、まるで彫像のように固まって動かない。

「元から廃棄物僕たちとはちよつと違う部分があるからね。繋ぎ止めないと危うい」

しゆるしゆる、音を立てて寝具から複数のベルトが顔を覗かせる。両手の指では足りない本数のベルトが虎綱の身体に戻っていった。

「丁度調整が終わったところだったんだ。もう動いてもいいですよ崩王様」

「おーい、崩王ちゃん、元気か？」

灯が再び声をかけると、先程まで無機質なまでに不動を貫いていた崩王がゆつくりと体を起こし、寝具に腰掛けるような体勢になって灯に向き返った。顔を包んでいた布を取り払って狐面を素早く取り付け、肌が見えなくなるように全身を布で覆い隠す。

「——帰ったか」

「調子はどうよ」

「高坂の異能で、楽にはなっている。感謝するぞ」

「勿体無いお言葉です」

深々と頭を垂れる虎綱。

「時に国吉。九鬼紋白の回収、大儀であった」

「……………ああ」

崩王の言葉に何とも言えない、不機嫌そうな表情を浮かべて曖昧な返事をする灯。それを  
を見てか、崩王は高坂に命を下す。

「……………高坂、少し外してくれ」

「……………分かりました。何かあればお呼びください」

そう言われて徐に立ち上がり、

「いいか国吉、無茶はさせるなよ？　いくら僕でも限界があるからな」

と念を押してふらふらと退出した。その幽霊のような背後に飽き飽きしたような声をかける。

「分かってるよ。何年目だと思ってるんだ」

二人きりになり、しばしの沈黙が灯と崩王を包む。虎綱が完全に部屋から離れ切ったであろう頃合いを見計らってか、灯が口を開いた。

「——ドリフターズ漂流物にな？」

「皆まで言わなくていいよ、灯」

手で制した崩王の声が途端に和らいだ。先程までの奇妙な威圧とも言える迫力はどこに行ったのやら、借りてきた猫の様に大人しくなっていた。

「今生きてる漂流物をあらかた確認したけど、これ以上の発見はなかったな」  
「そうか……。まいったね」

気心の知れた友人の様に会話を交わす二人。他の廃棄物が来ていれば卒倒ものだろう。

「向こうも苦しんでたぜ。恐らくだが、お前と同じ理由だ」

「……そうか」

「すまねエ。これ以上護ってやれなくて」

すると突然、灯が両膝に掌を乗せて頭を下げた。

「この身体に生まれた定めみたいな物さ。お前のせいじゃない」

決して表情を見せようとしませんが、柔らかい声色は布の奥で笑みを浮かべていると想像できる。それを思い浮かべたであろう灯は、ギリツ、と奥歯をかみしめる。

「……終わらせる。今回で」

「お前らしくないな、そんな真剣な表情」

「……そうだな、自分でもそう思うよほんと」

呆れた様に声を漏らした灯はゆつくりと立ち上がる。

「さて、そろそろ出るわ」

「ああ」

「あずにやんとちびっ子が増えてっから、宜しくな」



「やあ高坂」

廃棄物<sup>エシズ</sup>たちが使用禁止と定めた廊下の境界線にそれはいた。正確にはその境界線よりほんの少し手前、極力埃の舞う空間に近寄りたくないという潔癖の表れだろうか。そ



れはまるで戦闘でも始めるかのように両手の指抜きグローブの具合を確かめていた。

不可侵の境界線を挟み、虎綱は対峙する。

「……………何でここにいるんだよ、港」

極めて訝しげに、港三千尋を見定めようとする。それを飄々とかわす様に能面のよう  
な笑みを浮かべていた。

「いや、僕も崩王様の容態が気になってさ。城主様の状況を知るのもまた家臣の務め  
じゃないか」

「…………お前にできることは何もないよ。異能だって、他人を圧迫させるだけの攻撃的な  
ものじゃないか」  
「縛るしか能のないような異能のお前がそれを言うんだ？」

一歩、虎綱が退く。まるで一歩踏み出してきたような気配に虎綱は足を下げてしまっ  
た。

「命綱」  
クリンク

追い打ちと言わんばかりに、三千尋はそれを口にする。

「——なんだって？」

「君の「本当の異能」だそうじゃないか。亡者の異能にぴったりだ」

「誰から聞いた。僕の異能の名は国吉と崩王様以外知らないはずだぞ」

殺気にも近い威圧、それを放つと同時に一步前に大きく踏み出す虎綱。しかし、まるでその行動を知っていたかのように虎綱の足もとを見据え、僅かに微笑む三千尋。

「いやあ、実に素晴らしい能力だと思うよ。自分を縛りつけて喜ぶだけの被虐能力だとばかり思っていたことを謝るよ」

そう言つて両肩をふつと持ち上げ、片眉を吊り上げてみせた。

「なんだそれは。馬鹿にしているつもりか」

「まさか。それなら堂々と言いに来ないでどこか陰で吐き捨てているよ。ちよつとだけ、確認と相談があつてさ」

それを聞き入れなければ通さないぞと、ギリリ、と唸るグローブが威嚇する。

「……………言つてみてよ」

「君が死んだら崩王様はすぐ死んでしまう、なんてことにはならないよな?」

最もな意見だったのと同時に、そこまで知っていることに驚きを隠しきれなかったのだろう。目を見開きながらもその質問に対して反射的に疑問が飛び出した。

「国吉から聞いたのか?」

「それは後で答えてやるからさ、実際のところどうなの?」

「死にはしない、けど——」

「タイミングによつては死んでしまうんだろう?」

ぞわり、と虎綱の背筋に怪奇が這いずる。全てを見透かされているような恐怖が虎綱

を支配し始めた。

「かつ……確認する必要あったのか……？ 答えまで知ってるじゃないか……」  
 「確認する必要があつたんだよ。これは仮定だからね。これを確信に返るための根拠と  
 いうか、答えあわせをしたかつた」

「……………」

相手の出方を窺うように、自然と腰を落としてしまう虎綱。同じ廃棄物であるはずなのに、虎綱の視線には明確な敵意が籠っていた。

その体勢を見て、やれやれと溜め息をつき、

「……………」  
 “ブレッシャー  
 圧轆”

高坂虎綱を無様に沈ませた。

「ぐぐぐ………?!」

膝を無理やり尽かされ、それでも襲い来る重圧に咄嗟の対応ができずに手もついてしまふ。加えて、それはただの重圧ではない。頭の中を快樂で満たし溢れさせ、行き過ぎた麻薬が体内から虎綱を蝕んでいく魅惑の障害。

「手加減してあるから僕の話も問題なく聞けるはずだ」

虎綱を見下しながら三千尋は話を続ける。

「確認をもう一つ、それは崩王様以外にも適応できるのか？」

「っ……だ、だとしても、お前に施す義理は……！　ぐ、うっ……！」

拒絶の意思を示そうとする度に虎綱の頭が大きく重く揺れる。協会に取り付けられているような大きな鐘がゴーンゴーン、と音を響かせて揺れるイメージが彼の瞼の裏にふと見えた。

「仮の話だし、何も僕だけにという訳じゃなくてね」

「ど、どういふ……!?!」

話を聞き入れようとする、ほんの少しだが彼を襲う鈍痛や重圧が収まる。三千尋の言い様に誘導されている虎綱だが、術中に嵌ってしまったことを悔やみながら敢えて誘いに乗った。

「お前が、生き延びるためじゃ……!」

「馬鹿を言うなよ。ただでさえ手早く済ませたいのに、僕一人のためにここまで手心加えた優しい手段はとらない」

手加減をしていると、面倒なやり方を取っていると暗に言い張った。

「……誰が、こんな脅しに……!」

「脅し? おいおい勘弁してよ」

余裕の笑みを浮かべていた三千尋だったが、僅かに目を細めて虎綱を冷たい視線で射抜く。

「……………手早く済ませたいって言っただろ。時間をかけて甚振って、お前の根気が折れるまで続けるほど余裕があるはずないだろ。戦争間近だということを忘れるな」

そう言つて三千尋は窓の外に視線をやった。そこからは霊峰の麓に作られた、かつて人間が暮らしていた廃村が見下ろすことができる。とは言つても、生物がいけないという訳ではない。

崩王たちが集つた人ならざる亜人たちが人間の様に営みを行い暮らしている。果実を屋台で販売しているゴブリンを中肉中背の髭男に置き換えたり、子供と手をつないで歩く牛<sup>ミンタワロス</sup>人も上半身を取り換えればただの親子だ。

しかし、三千尋の視線はそちらを見ていない。

その市場となつてきているかつての廃村と古城を挟んだ霊峰の中腹、そこには霊峰を覆う黒き森がさらに黒くなつていようように思えるほど、黒き兵士たちが密集していた。さらにはその傍らに竜専用の駐屯場とも言える空間があつた。

兵士たちは既に臨戦態勢を整えようとしていた。あの市場が機能しなくなつたその時、完全に漂流物<sup>ドリフターズ</sup>との、この世界との戦いが開始されるのだろう。

「じゃあ、なんなんだ……………」

虎綱は三千尋の意図が未だに読めなかった。

廃棄物<sup>エンズ</sup>となった者は、誰かしらどこかしら何かしらに怨恨や憎悪や憤怒を抱いて完成される。虎綱自身もあるものに恨みを持ち、完成された。

しかし、三千尋は楽しんでいるように思える節が多々見られる。国吉灯もそれに追隨する部分があり、崩王に至っては苦痛を糧に産み落とされたようにも思われた。狂い壊れていることは確かだが、狂い方のベクトルが奇妙だと虎綱は判断していた。

虎綱は廃棄物<sup>エンズ</sup>としては道を外れていると自覚しているが、多少の踏み外しだとも自負している。

そんな彼よりも廃棄物<sup>エンズ</sup>らしくない三千尋が何を考えているのか理解できなかった。

「これは恐喝でもなんでもない、交渉だ。それもお前にとってはかなり蜜だからね」

狂人は笑って提案する。

「一切消耗していない武神と戦いたいだろ？」



その一言で、彼の考えなどどうでもよく思えてしまう程度に彼も壊れているのだが。

## 第二十六幕　いつか君に殺されても

日が沈んでいく。ほんの少し小高い丘から見下ろせる地平線に飲まれていく光源は、段々と見る者の心を冷静にさせていくようだが、そこに座っている少年の心は冷めることを知らなかった。

ほっそりと開けられた目蓋から覗く瞳の奥にはごうごうと燃える炎が見える。真っ黒で、情熱的とは世辞でも言えない冷たい炎が。

彼の背後ではいくらか騒がしい声が聞こえてくる。騒がしいとは言っても、それは悲鳴や絶叫の類ではなく、どちらかと言えば活気だっている方が近しいかもしれない。ああしようこうしよう、といった提案する声が多ければ多い程、その声たちが前向きな姿勢であると彼に認識させる。

そこに入ろうとはしなかった。今少年の頭の中は、処理しようにもしきれない、ぶつかけ所も吐き出しどころも分からない感情が彼の脳漿を潰して削って渦巻いているから。先程、その感情に任せて禿頭の男を跳ね返したばかりだった。必死に宥めてくれた彼

には悪いとは思いながらも、ほんの少し溜まっていたストレスに近いものも吐き出せたのだらう、あの時より幾分か落ち着いたのだと少年は感じている。

「ふう……」

もつと冷静になろうと息を吐き出してみる。それでも、彼の中で蠢くものは一切の減退を見せない。ただただかれのなかで単食っている。

どうしようもできないこの感情の塊は、数時間前の会談の中で生まれた。

戦争に巻き込まれただけでなく、少年の大切な人が道具にされて目も当てられなくなっているということから来る怒りが、どうしようもなく彼を炙って痛めつけたのだ。その際に生じたものが化膿し、膨れ上がって蝕んでいた。

どうにかしなきゃいけない。しかし、どうしたらいいか分からない。何に對してどう感じればいいのか、何を止めれば何が解決するのか、混乱を極めた彼は考えることを既に放棄している。

ただただ、黒い炎を宿したまま、彼は動かない。

「十夜くん、でよかったかしら」

そこに新たな来訪者が来る。数時間に渡って大きな動きをしなかった少年、川神十夜がその声に体を翻した。

「……千李、さん、でしたっけ」

十夜は来訪者に問いかける。彼にとってはどこか見たことのあるような風貌でありながらも、全くと言っていいほど未知な存在である女、川神千李は肯定の意思を示す様に笑ってみせる。

「呼び捨てでもさん付けでも、貴方の呼びやすい呼び方でいいわ。ただでさえ厄介な状況なんだからね」

そうやって苦笑して見せる千李から視線を外し、十夜は彼女の周囲や背後に誰もいないことを確かめる。

「……………ハゲ……………井上、先輩は」

「彼はユイちゃんに頼まれて治療分野で頑張ってるよ。ロリコンだけど出来る奴らしいしね」

「そう、ですか……」

自分から追い返したはずなのに、来ないと分かった途端十夜の顔が僅かに陰りを見せる。それを見た千李は小さく溜め息を吐き、そのまま地面に腰を下ろした。近すぎず遠すぎない、数メートル離れた位置で二人は座ったまま向かい合う。

そのまましばしの沈黙が流れたが、それを千李が断ち切った。

「……………川神ってことは、ワン子とは家族だったのよね？」

十夜は無言で頷く。

「そっか……。ねえ、私たち血が繋がってるらしいわよ？ どう思う？」

「……………信じられると思います？」

おどけて言ってみせた千李に逆に問いかける十夜。もつともね、と千李も同意した。

「まったくもって信じられないのが本音。生き別れならまだしも異世界よ？ 困ったことに受け入れ難いわ。未来人の方がまだ信じられるってね」

「……はは」

乾き切った笑いで相槌を打つ。

「——でも、あのワン子を見ちやうとね」

「っ……っ！」

「川神流がどんなものだったかも分からなくなりそうだったけど、異世界の存在ってのは何となく知らしめられた感じがする」

そこに厄介な爆弾が飛び込んだ。口角を挙げながら目を見開く、奇妙な表情のまま十夜は硬直してしまう。

「同じ川神でも、十夜くんは……あんまり武と関わってない感じがする」

そのせいだろうか、普段ならば逃げ出したくなるような言葉に反応が遅れてしまう。幾分か戦闘に対する勘を取り戻しているにしても、取り除き切れない心的障害による圧迫感はまだ染み着いたままだ。

ただでさえこんがらがっている脳内が遂にオーバーヒートする。パタリ、と人形のように倒れこんでしまう十夜に焦りを覚えた千季だったが、十夜が先に口を開いた。

「……わ、わか、分かるもん、ですか……？」

実に拙い言葉ではあったが、千季はとりあえず安心して立ち上がりかけた身体を元に戻す。

「……まあ、伊達に武神の姉やってないってことにおいて。それに、例え異世界の人間でも川神。身内の気配がすれば尚更分かっちゃうの。それに、一方的にやられちゃつてたからね」

「……色々ありました」

ハーピーの村での事件のことを言っているのだろう。十夜は不甲斐なくなったのか

自嘲的な薄ら笑いを浮かべる。

「……そっか」

「……聞かないんですか？」

「なんとなくだけど、聞かれ過ぎてうんざりしてると思ってたね。これ以上は流石に気が引けるわ。デリケートな問題だろうし、出会ったばかりの人間に話せる内容とは思えない。あの家なら尚のことかな」

私にも言いにくいことだってあるしね、と笑った。

「……」

それに対して十夜はほんの少し表情を変えた。安心というよりは珍しいものを見たような驚きに近い。

「意外だった？」

「……すいません。少し」



出会ってほんの数分の異国人にも尋ねられた質問と似ていたが、深く追求しようとしていない千李の態度には十夜も一種の不安に近いものを覚えてしまう。体つきのことも何も言われない、何故武との関わりを立ったのかも聞こうとしない。背中に触られた感覚があるのに、背後を振り向けば誰もいないような奇妙な感覚だった。

鋭すぎる感覚が、十夜の境界線を見定めているのかもしれない。あまりの強かさに、十夜の脳内で何かが音を立てて這いずる。

「お節介すぎるとは思って、少し自重するわ。異世界の弟とは言え、あんまりお姉ちゃんぶるのも違うと思って」

「……その方が、助かります、はい」

ひとまず、追及されないことに安堵しておくことにした。

「……でも、これだけは聞いてほしいし、聞かせて欲しい」

そうやって安心した際に、狼の牙のような鋭利なものが十夜の懐にまで。

「川神十夜くん。君は自分の尊厳を、自分の思い出を取り返すため、あのワン子に立ち向かう覚悟はある?」

立ち向かう覚悟。

武というものにブランクがあると見極められた上で問われる以上、あの怪物のような少女に立ち向かう覚悟には死が伴うという意が込められていることは明白だった。

唐突に叩きつけられた疑問。いや、これは尋問や詰問に近いものだ。追い詰め追い込み、逃げられないような状況にまで十夜を追いやるような類のもの。

既に、十夜を狙う武骨な顎が鎌首をもたげて開き始めていた。

「私たちは結局、あのワン子を逃がしちゃったわ。十夜くんはワン子に、私はワン子を押えられたけど、結局釈迦堂さんにも惨めな負け方をして、色々と失ってる」

笑っているような表情ではあるが、千李の瞳にもまた炎が燃え盛っていた。しかし、十夜の瞳にある黒い炎とは違う。真っ赤に燃え盛り、鋼鉄すらも溶かさん勢いで白熱を帯びた高温の炎。太陽の表面爆発のような火炎、フレア。

情熱的など既に通り越した、怒り一色。全ての要因全てを怒りと言う感情に集約しきることに成功した色の炎だ。

「堅苦しくいうならそうね、自尊心が傷付けられて大切な物は奪われた。私が今からすべきことはその修復と奪還」

「……修復、奪還……」

「どうすればいいかなんて、正しい答えは分からない。なにせユイちゃんですら知らないんだからね。でも、私の世界のワン子を穢し尽くした連中には、然るべき報いを与える必要がある。そのためには、あのワン子を叩きのめすことも入っている」

「……」

川神一子を叩き潰す。その明確過ぎる手段に逡巡する十夜には、まだ異世界のワン子も自分の知るワン子と同じところがあると思っっているのだろう。思い起こすは先程の戦いの最中の一子の言動。

言葉遣いは、とてもではないが同一人物とはいいい難い。気が触れたような言葉尻に、命を塵屑のように見ている発言は、心優しいと親しまれた少女のものではない。

しかし、長刀を扱う所作、歩き方といった本当に細々としたところだけを切りだせば、

あれは確かに川神一子なのだ。狂い切っていない、そう言ってしまう。まだ何とかできるかもしれない、方法があるかもしれない。十夜の脳裏に、そんな甘言がするりと過る程度には。

しかし、彼の目の前で座る姉によく似た女は、叩き潰すと明言した。その可能性全てを、一緒にたにしてに殺すようなこと。それが救いだと、自らに言い聞かせて。

——そんな決意、俺にはできない。

強かさというよりは、意志の強さ。それに僅かな敬意のようなものを覚えた十夜。

「……正直、私はまだ決意できていない」

しかし、それは自分の思い違いだったと知る。

「釈迦堂さんが抱えている私の過去と、ワン子に奪われた私の歴史。そして、私の可愛い大切な娘を救い出す。全てを解決するには、廃棄物エンズとやらを殺さなくてはいけないとは思う……けど……」

弱弱しそうに逆説の言葉を発した。ここから先の言葉に自信がないような、そんなか弱さが滲み出している。

「私にはまだ……いや、この言い方は少し違うか。私には「もう」人を簡単に殺すことはできない。人生を、そんな風に奪えない」

人生を奪う。

十夜からすれば、自分とは程遠い言葉だったのだろう。一体何があつてそんな言葉が出てきたのか、到底想像もつかなかった。

自分が、奪われた側の人間であるとも知らず。

「私には立ち向かう覚悟がないの。例え殺す事が廃棄物エンスズにされた人間を救うこととなろうともね。さつき、ワン子を人だと思わずにやった一撃で精一杯。結局ワン子を殺しきれなかった。拳の一番大きな衝撃は地面に逃がしちやった」

たはは、と苦笑する千李の拳は音を立てて握られている。今にも血が滲みそうだと、

十夜の背筋に僅かに悪寒が走る。

「いつか殺すという覚悟は決めなくていいと思う。でも、今決めなきゃならないことがひとつあると思うの」

「……今、決めなきゃいけないこと」

「殺すかどうかじゃなく、いつか殺されること。ワン子に立ち向かうか、逃げるか。私も貴方も、決めなきゃいけない」

日が沈みきって、二人の会話が終わった。

## 第二十七幕 NEEDING/GETTING

「……薬草、ですか？」

川神異界兄弟がほんの少しだけ心内を吐露し合っていた頃、井上準はこの世界に一番詳しいと見込んだユイにある提案を持ちかけていた。その顔はいつになく真剣で、隣で話を聞いていた那須与一は訝しげに準の様子を窺っている。

「ああ、常備してあるやつ、栽培してあるやつ、何でもいい。薬や応急手当できる道具を見せてくれ。今の内に俺がそれに適応しておかなきゃならない」

幼女嗜好だの禿だのとののしられることが多い準であるが、その性能は一般学生から遙かにかげ離れている。大人でも敵わない者の方が多くいかもしれない。

かつて彼がいた世界において、井上準という生徒は成績優秀という位置づけで、運動

自体も得意と自他ともに認められている水準にあった。加えて、葵紋病院という大病院の副院長の息子という血統書付き。

たった一つの汚点、幼女趣味の変態ということさえなければ女子から引く手数多だったことだろう。現に、幼女嗜好という理由で告白を幾度となく断ってきたという。

しかし、そういった負の面を除けば優秀であることは事実。単身ここに飛ばされたこともあつてか、何か憑き物が落ちたような表情を見せるようになった彼はある役目を全うしようとしていた。

それは、叩き込まれた知識を用いた医療班である。

初歩的な応急処置からある程度の薬学の知識まで、彼はこの未発達の世界において間違いなく五指に入る医学の知識を持っていた。異常な教育の影響で特に薬に関しては最先端を行っているだろう。

「……………少々お待ちください」

その意図を理解し、ユイは準の頼みで連れてきていたハーピーの村の長に対して事情を説明する。



『ムラオサ！』

『一体なんでしょうか、行灯ラン機構トの方』

『実はですね——』

ユイが交渉を進めていく中、ようやく状況を理解した与一が準に話しかける。

「そう言えばお前、医者の子だったか」

「まあな。大規模な手術は無理だが、応急手当ならできる。普段から自分の体に叩き込まれてるからな……」

「そうか、あのラジオか……。だとすると、手術まで自分でできてもおかしくなさそうだけどな……」

ある時は骨を外されたり、ある時は顔を殴られたり、またある時は気絶から起こさせるために水責めにされる。その光景を見ていないものの、毎日のように準の叫び声を聞いている与一はその辛さに共感せずにはいられなかった。

準の武神から折檻を受ける毎日と、自分が姉貴分から関節技を決められる毎日を重ねてしまっている。

「他にも色んな無茶ぶりに答えてるからな……」

「苦労してるな……お前も……」

「なあに、もう慣れたもんさ……」

どこか遠い目でありながら、沈む夕日を見つめるその瞳は僅かに潤んでいるようだった。

「お待たせしま……どうしたんですか？」

そこへ、交渉を進めていたユイが怪訝そうな表情を貼り付けてやってきた。その両手には瓶詰にされた種のようなものから、摘んできたばかりのような青々とした数種類の葉がある。

「なんでもない」と追及をかわしつつ、準は目に見えた成果を素直に受け取ることはせずに敢えて問いただす。

「どうだった」

「……見たとおりですよ。食材以外に備蓄してあるものは枯れた種、知識が乏しいせいかどれがどう利くかも分かっていないようで、手当たり次第に摘んできたんです。その昔、旅人に採っておけと言われたものは優先したようですが……」

ドサツ、と音を立てて落とされる植物たち。その音からして相当な量があるようだが、散乱させられたそれらを見る限り統一性はない。言葉通り、手当たり次第で聞きそうなものを持ってきたようだ。まるでゴミをかき集めてきたかのような達成感のない顔を浮かべるユイ。

しかし、それを見て準は呆れも諦めもしていなかった。

「まあ織物ができるんだから包帯は布で補えるとして割愛してだな……。アロエ、ヤロウ、オトギリソウにコンフリー……なんだ、全くという程じゃないな」

「え……？」

「誰がこういう鎮痛やら止血やらに使える薬草を教えておいたのかは知らないが、中々に知識がある奴だろうな。山奥の田舎者か、時代錯誤のご隠居か、幅広い医学に優れた秀才か……」

はたから見ればただの雑草や種子にしか見えないようなものを手に取り、瞬時に葉草の名前と効能を把握する準を見た与一は目を丸くさせる。

「……なんだよ」

「いや、真面目で気味が悪いと思つてな。槍か剣でも降るか？」

「扱いがぞんざいすぎやしないか？ 普段の俺をなんだと思つている」

「その普段がああ普段だからな」

「そんなことは……うん……それを言われるとな……」

「まあ見直したということだ。評価が上がったんだから喜んでおけば——」

子供をからかうような笑顔を浮かべていた与一だったが、突然言葉を遮断して両目を見開き動きを止めてしまった。

一体どうしたのか、と尋ねようとした準を手で制し、人差し指を口に添えて声を上げるなどという指示を出す。

「……………転がる、音……。地面が抉れる音もする……」

何かを聞き取っている与一の真似をするように準も耳を澄ませてみるが、聞こえるのは少し離れたところで談笑しているハーピーたちの話し声が精いっぱいだった。しかし、与一はどうやらそれとは違う異質な音を感じしているらしい。

「……石を弾いて、こつちに……馬車か？」

「馬車って……敵か!？」

準の顔色が目に見えて青くなる。今や壊滅状態のこの村に追撃が来てしまえば、いくら川神千李という天災がいても多大な被害は免れない。何よりも、川神姓を持つ二人は今村から少し離れたところにいる。例え千李が万全でも無傷では済まないだろう。

しかし、与一は誰よりも敵の接近に早く気が付いていながらも、その対応は実に落ち着いていたものだった。

「分かんが……明らかに音が少ない。戦でいえば使者程度の量しか感じない……」

「て、敵じゃないかも知れないってことか？」

「むしろ、敵じゃない方に賭けたいくらいだ」

そう言いながらも、与一の左手には既に弓が握られている。右手に匣ゆがけははめられていないものの、いつでもこの場から離れて狙撃準備ができるような用意を整えているようだった。

一分と経たないうちに、馬車の音が準の耳にも届くようになっていた。ガラガラ、と小石を弾き飛ばしながらけもの道を駆け抜ける車輪の音が、その音を聞いている者の心臓を早めようと急かしているようだった。

「どっせーいー！」

その音の発信源が到着する前に、何か黒い物体が飛来して準の体を押し倒した。

「どうわあ!？」

「んー……敵影なし、だが………ちよつと遅かったか」

黒いそれは、準の頭を足蹴にしながら村の惨状を確認していた。既に廃棄物エンスズに襲われ

て戦いに区切りがついてしまっていることを理解し、来襲者は顔に苦渋の思いを滲ませている。

「……………も、モモ……………せん、ば……………？」

「ん……………？ お、おお！ ハゲ、生きてたか!!」

下敷きになっていた準の胸倉を掴んで持ち上げ、がくがくと揺さぶるのは長身の女性だった。

体の輪郭が分かりやすいタイトな黒いスーツを身に纏い、現代から飛ばされてもなお維持されている髪や肌の艶は彼女が常識外の存在であることを象徴していた。

武神と讃え恐れられた少女、川神百代がそこにいた。

「……………モモ先輩が、俺を殺しに来た」

「失敬な！」

スパン！ と張り手が準の頬を襲った。頬をはたいたただけなのに、準の目はぐるぐると回っているようにピントが合っていないようだった。

「私は漂流物だぞー！」

「ぶ、武神だと……!?!」

あまりにも突飛な登場に腰を抜かしかけた与一だったが、当の本人は一切の動揺を見せていなかった。近所の商店街で偶然出くわした、という程度の反応に近いだろう。

「お、与一だ。が、私の世界の与一ではないな。匂いが違う」

百代が準を乱暴に離れたところで、ようやく与一が探知した音の発信源が到着した。ガラガラ、と獣道を踏破しながらやってきたそれは、二頭の馬によつて運ばれてきた馬車だった。屋根も何も無い荷台に、複数人の人間が詰め込まれている。

その荷台から素早く飛び降りたのは、ユイと似たような恰好をした顔立ちの整った男だった。



「ユイ、無事か」

「と、燈火様!？」

「普段から連絡用の扇子は携帯しろと——いや、ふむ、連絡している暇がなかったと見る」

燈火は村の様子を一瞥し、ユイが知らせようとした状況を把握しきって見せたように頷く。

「申し訳ありません。つい先程まで廃棄物と交戦を」

「いやいい。よく漂流物を護り切った。漂流物は二人か?」

「いえ、あと二人」

「四人か……。こちらの保護した漂流物を含めれば新たに七人か。十分に揃いつつある」

荷台に乗っている三人の人間に目を向けて確かな実感を得たように、燈火はぐつと自分の拳を握りしめた。

「……………なあ京極先輩。何してるんですか」

「やあ井上。私の世界の井上かは分かんが、元気そうで何よりだ」

燈火と騙誑る京極彦一の登場に、準は愕然とせざるを得なかった。

## 第二十八幕 涙をぶつ飛ばせ!!

行燈機構ラの頭だという燈火という男を準は知っていた。ユイたちと似た和服の上から一枚羽織を着た男を知っていた。

京極彦一。川神学園においてイケメンエレガンテ・クアットロ四天王の一人として数えられていた学園屈指の美男子であり、言霊部部长として学園の様々な行事に際して活躍していた有名人であつた。

その言霊の力を準はよく知っていた。超能力というよりは催眠や洗脳に近い精神面を操作する技であるそれは、主に軍の士気を高めたりする時によく見られたものだった。川神学園は何かと争う形式の行事が多いからか、京極彦一という男の能力は重宝されていたのだ。

しかし、行燈機構の能力はどう考えてもそういう精神の話では片づけられなかった。それこそ超能力のような、廃棄物エンズたちが行使するような力を以て漂流物ドリフターズを援護する様は、とても京極彦一が頭だとは思ひ描かせてはくれなかつた。

しかし、彼は燈火と慕われている。

自分の目の前で燈火と呼ばれている。

シンと呼ばれるいた少女とユイを引き連れ、ハーピーの村の再建を指揮し、そこを漂流物の拠点としようとしていた。

——信じられるかよ。知った顔が異世界で正義の味方みたいなことやってるなんて。

ある程度の作業が片付いた頃、漂流物たちは村から少し離れた開けた場所にいた。いくつかのテントのようなものを建て、漂流物の根城を作っておいたのだ。

そこで、準は作業が落ち着きだした彦一に声をかけることにした。

「……ほ、本当に先輩ですか……？」

「少し年をとってしまっただがな。ふむ……よくよく見れば、どうやら元の世界は違うようだな。まだまだお前は「つかれている」」

年月を重ねたことによる外見の変化や、別の世界から来たのかどうかを聞いている訳

ではなかったのだが、準はとりあえず受け取ることにした。

何より、顔も知らない学園生よりは顔を知った別人の方が幾分かやり易かった。

「で、何をしているかだったか。簡単なことだ。漂流物ドリフターズを掻き集めている」  
「漂流物おれたちを？」

その通りだ、と深刻そうに彦一は頷いた。

「崩王軍がこの世界を飲み込んでしまうのも時間の問題だ。我らの力を集結しておく必要がある。その時のために私の代の漂流物ドリフターズで作った行灯機構だ」

「その組織のトップ、先輩だったんですね……。ということは」

「私も漂流物ドリフターズだ」

やりやすい知己の顔とは言え他人である成分は消え去っていたわけではない。はつきりと漂流物ドリフターズだとくちにしてもらったことで、ほうつ、と準の口から生ぬるい息が漏れた。同時に上がり固まっていた肩も落ちる。

幾らか彼が緊張していた証拠で、同時に安心感を覚えた、彦一に心を許し始めた証

だった。

ようやく緊張のようなものもなくなったところで、準は純粋な質問をぶつけることにした。

「私の代の、つてのはどう言う意味ですか。他にも漂流物ドリップが行灯機構に？」

その質問に、彦一は何やら答えにくそうな表情を浮かべるが、少し考えたようにして言葉を紡ぐ。

「代とは言ったが、そうだな……………いや、もう私たちの代は私しかない」  
「……………まるで定期的に呼ばれているような言い草だな」

そこで与一がようやく話に加わってきた。

準よりも警戒心の強い彼は百代からも彦一からも距離をある程度とっている。したがって準からも離れている位置なので、よく話が聞き取れるものだ。準は那須与一という男のスペックに感心する。

「私の代のことであることを説明するのは少し面倒だが、簡単に言えば十数年前に呼ばれた漂流物ドリフターズのことだ。この時はまとまって呼ばれてな」

「先輩今いくつですか！ とても三十路越えには見えませんが！」  
「もうすぐ半世紀を生きる」

準は絶句する。何十年前に飛ばされてきたということよりも何よりも、その風貌は三十路を迎えていないと言われても信じてしまう程に美しかったからだ。

「……なしてそんな若いのですか」

「何故訛った」

与一の突っ込みが入る。僅かに距離が縮まってきていることに気が付いたからか、彦一は優しく微笑んでいる。

「私の代の漂流物で作り上げた技法によるものだ。行灯機構の異能は全てそこから来ている」

「あれを、先輩が？」

「私が廃棄物<sup>エンスズ</sup>だったなら一人でできただろうがな」

準が言いたかつたことがすぐに分かつたのだろう。廃棄物<sup>エンスズ</sup>という単語を出して順に説明を続けた。

「技を模倣する漂流物<sup>ドリフ</sup>と、霊を操ることに長けた陰陽師漂流物<sup>ドリフ</sup>。そして言霊の漂流物<sup>わたし</sup>で作り上げた。言霊信仰、技の名の霊を扱うことでこれは成立している」

「言霊か……確かに、詠唱すれば力が湧いて」  
「お前黙ってる」

どうやら言霊自身に興味は多分にあつたのか、与一は既に準の横で話を聞いていた。

「物についた名前を強い力を込めて発することとその事象と関連付ける。遙か昔から忌言葉などと言われているものもこれが関係している」

「ああ、縁起が悪いってやつですか。言葉にすると縁起が悪いことがそのまま起こるって言う……」



深く頷く彦一。

「それを応用した。技を模倣する漂流物ドリフが廃棄物エンズの名のない技を写し取り、それを技にまで昇華させた事象を私ともう一人の漂流物で名を込めた。その名を呼ぶことで精霊を操り現象を引き起こす。精霊信仰アニミズムにも近い部分があるか。他人の技を完璧に仕上げられる能力があつてこそだったかな」

「それじゃあ、どれくらい作つたんですか。その、新しい異能は」

「……四だ」

「えっ……」

期待のこもつた準の声を断ち切るような彦一の言葉。与一も驚いた様子で次ぐ話を待った。

「技を模倣する漂流物ドリフに限界が来たんだ。元々廃棄物じんがいの異能だ。最後の一つを披露したのと同時に霧のように分解され消えていった」

彦一はその終わりを明確に語る。

「技をコピーした瞬間、川神百代の瞬間回復を以てしても回復できない呪いのようなものがかけられた。廃棄物の技は後天的に「弄られて」できたものだ。人間として問題があったと言えど、あの女は人間であり続けた。化け物になるかどうか、あれも悩んだことだろう。だが、あいつにはしつかりとした目的があった。それを成し遂げるには、いや、成し遂げた後でも人間であり続けたいといけなかった。だから、あいつは命を手放した」

目を瞑り、想起するように語るその口調は実に淡々としていた。しかし、その感情は何故か準に伝わっていた。恐らく、与一にも伝わっていたことだろう。遠く離れて聞いている百代にも伝わっていることだろう。

言霊使いの性か、抑えきれない感情は声のトーンには表れず、姿をひそめて第三者に伝わっていく。

「あいつも廃棄物との因縁を終えて覚悟していた事だ。重く捉える必要はないからな」

ひとしきり思い出しきつたからか、大きく息を吐き出して一人の漂流物の話を終え

た。

「では話を続ける。作り上げたのは「風の柱」、「竜巻」など風に関する四つの異能。「音響探索」と「無線通話」、「翻訳扇子」は残りの二人で作り上げた。とは言っても、私は翻訳意外はほとんど何もしていないがな。私は二人が残したこれを力の持たない行灯機構の人間に教えることしかできなかつた」

「……じゃあ、ユイも？」

「ああ、ユイは——」

「わ、私は素質がなかつたようで、音響探索に特化させてました……つとー!」

ドサツ! と音を立てて荷物を運んできたユイも話を聞いていたように答えた。犬耳は伊達ではないということだろう。

「もう少しあつたので運んできますね、お医者様!」

「おう、頼む。それにしても……」

汗を拭っているユイを全身を眺め、ぼそりと一言。

「もう十年若かったらお医者様として奮起して——」

「〃黙れ井上〃」

「たんぐつ」

「舌？」

良からぬことを口にしようとした準の喉がギユツと何かに締め付けられる。不思議に思いつつ、ユイは彦一に促され仕事に戻った。

「〃井上、喋っていいぞ〃」

「ぶつふえ!!」

「バイキング？」

「さつきからうつせーぞ与一！ 苦しんでるだけなの見りや分かんذار!!」

言霊による催眠から解かれた準だったが、「次はないぞ」と扇子をチラつかせられてくぎを刺されてしまう。

「この素質は完全にランダムだな。身体能力の差などに一切関係なく万人に可能性があるが、素質を持つものは極めて稀だ」

「行灯機構は故に少数精鋭になってしまっている、という訳か……。もし誰もがそんなことをできるようになっていれば、今この場に来ている行燈機構は軍勢のほずで、ここまで漂流物集めに躍起になることもなかったろう」

瞬時に言い当てた与一に感心する彦一。それは凶星だったということもあり、浮かべるのは苦々しい笑顔であつたが。

「極まれに漂流物が素質を持っているんだが……この場にはいないようだ」

「……とところで先輩。あそこの老人二人も漂流物ドリフタレスですか？」

準が指差す先には、百代たちが乗ってきた馬車があつた。その荷台には二人の老人が縁側に茶でも啜るように座しており、ハーピーの村が壊滅状態から持ち直そうと再建に乗り出している様子を黙って眺めていた。

どちらの越にも、この世界にはふさわしくない日本刀が差してあつた。そのため、準は確信を持った上で質問を投げかけていた。

しかし、彦一の反応は好ましくはなかった。

「……そうなのだがな。荷台に座つてより丸まつてしまつてゐる側、名を立花虎蔵という。あちらはほんの少しだけ無気力症のようになつてしまつた」

「ええっ!?!」

—— そんなんで漂流物ドリフターズつて呼べるのかよ!?

「顔に出ているぞ井上」

「えっ、あ、いやその……」

「以前から「ああ」ではなかつたんだ。「ああ」なる前は睨むだけで敵を気絶させる強者だつたんだ」

信じられないものを見る目で準はその老人を見る。

いつ死んでもおかしくないような体の丸まり方。軽く押し倒しただけで節々を痛めてしまいそうな弱弱しさを見て、彦一の言葉を信じるのは難しかった。

「もう一人いたんだ、立花虎之助という若い漂流物が」

準を納得させるような理由を述べ始めた。

「再会したばかりの血族だったのだが、上空から襲いかかってきた飛龍の追撃と廃棄物の猛攻に武神も手一杯で、荷馬車から彼が落ちた瞬間に助けることができなかつた。引き返そうとしたが、先程話した技をコピーした嵐のような廃棄物に襲われたのが痛かつた。搜索もできず撤退しただけ。崩王の手に落ちていないといいが」

「……実際問題、難しいだろう」

僅かでも希望を持たせた意味合いで閉めようとした彦一の言葉を、与一は冷たく切り捨てる。

「その廃棄物とやら、お前たちとは長年の因縁があるものだろうか？ いわゆる手練れに位置するはずだ。何十年たつても討伐しきれないんだからな」

「……確かに、あれは廃棄物の中では一級品だな」

「だとしたら、期待を持ちすぎるのは酷だ。半分半分とは言わんがな、少しは覚悟を――」

「ぐすつ」

与一の足もとが小さく爆発したかのように、彼はその危うい音に飛び跳ねた。

準も与一も、その声の元を見る。そこには、川神学園のものではない学生服を着た、どこか見たことのあるような面影のある少女が涙をこらえていた。

——あの娘は確か……。

準の大事に保管されている記憶のフォルダが開かれる。

百代たちが到着した直後、ユイの姿を見て泣きつくように抱きついた少女だった。その光景はきつちりと画像として準の脳内に保存されている。

しかし、ユイの困惑する姿を見るや否や。少女は申し訳なさそうに頭を下げ、百代に慰められるように抱きしめられていた。



ユイの顔は黛由紀江の顔に瓜二つだった。世界が違う、ということを行きつめた結果、別の世界では家族ですらなかったのだろう。ユイからみればその少女は顔がよく似た完全な他人だった。

ユイに似た黛由紀江に抱きついていた少女の名は、黛沙也佳。

——サーヤ、とモモ先輩は呼んでいたな。あの一年の妹だったか。

外見での判断は準の狭いストライクゾーンへ入り込む少女、そして主と離れてしまった小動物感のある行動を見てしまったからか、彼の眼は不謹慎ながらも保養されていた。

そんな彼女が、与一の言葉に泣き出してしまった。その漂流物ドリフと親しかったか、この世界に来て仲良くなったか。

「……トラさん……」

どちらにしろ、与一の言葉が無神経極まりなかったのは間違いない。

「……おい、与一。あつちでモモ先輩が手招きしてるぞ」

「……………いってくる。骨は拾ってくれ」

「よう……可憐な少女を泣かせたお前にそんな慈悲をくれてやると思うか？」

「そう、だったな……」

与一は震える足を勧め、死地に赴いて行つた。百代に肩を掴まれると、彼女と一緒に瞬間的に姿を消した。声も姿も見えないところで折檻するつもりなのだろう。

「シン、みてやってくれ……………話を戻すぞ」

シンという少女に沙也佳を任せ、彦一は話を再開する。

「以来彼は「ああ」だ。完全に呆けているわけではないが、余程ショックだったのだろう。反応が遅れたりと歳相応の老人になってしまった。キツとハチに搜索するよう要請も出した。私も今ここにいる漂流物ドリフタリスを本拠地に送り届けてからすぐに搜索に戻る」

「……………戯けめ……」





コンクリートによる舗装という知恵の結晶が生まれていないこの世界において、幾分かその馬車道は均されていた方ではあった。時折小石を弾く程度のぐらつきはあったが、比較的快適なものであったと言える。

その相対的に快適であった馬車に、風を纏った廃棄物<sup>エンスズ</sup>が、それこそ嵐のように襲いかかってきたのだ。

即座に反応したのは同じく風の力を扱える燈火と呼ばれる男であった。風の柱、竜巻、おおよそ人に耐えられないであろう異能を用いての応戦。瞬間的に襲われたにしては上出来な反応であったと少年は感心する。

しかし、燈火の顔は優れなかった。何故ならば、燈火が扱った術の全てが「まるで元の主に操られるように襲いかかってきた」からだ。

それに対抗したのは武神と呼ばれる女性であった。風を蹴りの一つで薙ぎ払い、廃棄物<sup>エンスズ</sup>に対して殴る蹴ると体術で張り合ってみせる。

しかし、彼女の顔は優れなかった。何故ならば、彼女が振るった技の全てが「まるでかつての家族を殺せないような躊躇いを帯びていた」からだ。

燈火と武神、二人が彼を撃退することができなかった以上、馬車の乗客たちは防戦一方となってしまう。廃棄物<sup>エンスズ</sup>が馬車に巨大な竜巻を放ったのは、そんな折である。地面ごと抉り、馬車を浮かせ、地面へ勢いよく叩き付けようとするその攻撃に、武神は馬車全

体の衝撃を抑えることしかできなかつた。

その隙を突かれ、一人の少年が廃棄物の攻撃によって弾き飛ばされてしまった。鎌鼬にでも遭遇したように体を薄く切り裂かれ、血をまき散らしてふっ飛んで行った。馬車から落とされ、馬車道のように舗装がなされていない崖下へ。

結論を言えば、彼に助けは来なかつた。武神も燈火も応戦で手いっぱいであつたといふことは少年から見ても容易に想像できた。一人を切り捨て多数を救う、至極全うな話である。社会の勉強でもしていればそういう考え方に直面する。

しかし、だからと言って、彼が自ら命を諦めるといふ話では決してない。

「何か獣道みたいだけど足跡あるから辿ってみようと思つてみたが、行けども行けども出会うのは野兎ばかり!!」

廃棄物が追撃に來ないのは僥倖であつた。恐らく、武神と燈火が精いっぱい引き留めていたのだろう。それもまた容易に想像ができた。

彼はとにかく人里へ向かい、助けを求めることを第一目標にした。崖下へ吹き飛ばされた時についた擦り傷や切り傷の大きいものは止血し、人が通つた形跡のある獣道を進んでいる。

「確かに俺のあだ名トラだけど、本当にトラみたいに樹に登ったり森で過ごしたりするわけじゃないんだからな！」

トラこと立花虎之助は声を大きく上げ、気落ちを防ぐ。大所帯から途端に一人、どこからかこみ上げてくる奇妙な不安を無意識に打ち消そうとしてるのか。

「……にしても、どれくらい持つか……」

しかし、鬱陶しい草木を鞘に入ったままの刀で振り払いながら、この密林地帯でどれだけ長く生き延びれるかをぼやいてしまう。力任せの抑え込みを、するりとかいくぐる不安。

「食べられそうな果物は採った」

彼の刀の柄の部分に結ばれた小さな包みを持ち上げた。包帯同様、元は彼が来ていたシャツだったそれに包まれているのは、林檎にも似た赤い果実。臭いや味見を既に済ま

せ、ある程度の数をもぎ取って非常食としていた。

「綺麗な小川も見つけた」

彼が辿る獣道を沿うように、密林地帯のオアシスとも言える水流が確認できる。獣道を歩き進めてもそれが途切れないのは僥倖と言えた。

「火を起こせそうな薪には困らない」

密林地帯と言えるほどには、周囲は木々で溢れかえっている。切ったばかりの木では何とも言えないが、樹の皮を剥けば十分に火おこしの燃料として扱えるはずだ。

「……………肉も、うん。最悪南蛮人の野兎狩りみたい」

彼の視界に何度か移る小さな茶色の物体。恐らく兎だろうと判断し、最悪肉を欲した時の食糧として記憶にとどめている。



「……………取り敢えず、人肌恋しいなあ……………」

サバイバル感満載の現状を嘆き、苦笑する。なまじやつていけそうな環境下であるせいか、絶望できないのがまた厄介であった。

希望的観測を持ってしてしまう状況を再認識した、その時だった。

「……………ん？ 何だこれ？」

虎之助の足もとに、密林地帯にはあるはずがないと断言できるものが置かれていた。彼はそれに見覚えがあった。この世界に飛ばされてくる直前の記憶であるため、とても鮮明にそれを思い出せる。

「……………川神学園の、制服？」

ほんの少し泥に塗れているとはいえ、綺麗に折り畳まれたその制服は、これを着ていた人間が脱いで畳んだものと推測できた。スカートまでも綺麗に四角に畳まれている。決して肉食動物に襲われた誰かの残骸などではなかった。

「ひっ、人がいる!? どどっ、どこだどこだあ!!」

この時、虎之助は異常なまでに興奮していた。途方に暮れている中に差した一条の光明、諦めていたことが急にできてしまった驚愕、大金の入った財布が無傷で見つかった幸福感、何とも言えない心臓の高鳴りが彼を襲う。

脳汁がじゃぶじゃぶと溢れて耳や目から吹き出しそうな状態になった彼は、思わず叫んであたりを走り回る。

「トウラトウラトウラアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その声に反応してか、ばしやり、と水の跳ねる音が聞こえた。獣道に沿っている小川の方から聞こえたその水音を、トリップ状態に入っている虎之助は聞き逃さなかった。音の発信源へ向かい、韋駄天の如く駆け抜ける。

「アアアだあああああああああああああああああああああつ!!」

草木をかき分け、虎之助は目的の人物を見つけ出した。

しかし、何故彼は気が付けなかったのだろうか。制服が脱いで置いてあるということ、件の人物は今それを着ていないことになる。さらに、スカートを見ればその制服は女物であるということは明瞭だ。

そこに小川の水音とくれば、導き出される答えはかなり限定される。いや、ひよつとすると、彼はそれを本能的に察したからこそ、今の妙なテンションになつてしまったのかもかもしれない。

「……………え？」

「……………っ！」

虎之助の視線の先には一糸まとわぬ姿の女性が二人、小川の開けた水の溜まり場で汗を洗い流していたのだった。

「……………水浴び中の廃棄物<sup>エシズ</sup>つてのはありえない気がするから、あの二人は漂<sup>ド</sup>——」

「きゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「ま、待って！ 俺は漂流物<sup>ドリップ</sup>だ！」

「黙れ廃棄物エンズ以下の下衆人格め!!」



場所は変わって、ケットシーの村――

「……………なあ、王貴」

ズズウ、やけに綺麗なティーカップを口につけていた霧夜王貴はゆっくりと赤銅色の茶を飲み切り、一息つくとうまくその呼びかけに言葉を返した。

「……………なんだ英雄」

「紋が攻めて来たのは、いつのことだったか」

「そうだな、今より二週間ほど前のことか」

彼らが惜敗を受けざるを得なかった戦いから二週間経過していたことを念のため確認し、九鬼英雄は自分のあたりを見回しながら王貴との会話を続けようとする。

「それで我らはこの村の再建を——」

「王国だ、勘違いするなよ」

「——ああ、そうか、王国だったな。その王国を造り上げようとしてまだ二週間だ」  
「そうだな。半月程だ」

何度も言わせるな、そう言いたげに王貴はティーカップをずい、と英雄に突き出した。  
お代わりの催促である。

普段の英雄ならば自分で入れろと言うか、従者の誰かしらに任せていたことだろう。  
しかし、なんと英雄がそのお代わりを自らの手で注いだのだ。従者もいない異世界だからと言って、英雄が高圧的な態度に施しをすることなど、そうそうあり得ることではない。

英雄をそうさせたのは何であるか、彼自身もよく分かっていなかった。ただ、英雄はあたりを見回しながら困惑気味であるのは確かである。

「その半月程の半分、一週間前までには「こんなもの」はなかったぞ?」

「「こんなもの」? 何を指して、疑問に思う?」

あたりを見回す英雄の目が、ようやく王貴の眼を貫いた。

「……気のせいかな、ケットシーの数が異常なまでに増えているばかりか、村の敷地は以前の十倍以上……。」「こんなもの」と濁したが、正面から言つてやろう。このような「豪華な城」まで建つているとはどういうことだ？」

英雄は手を大きく広げ、今自分がいる城の存在理由を問いただした。

かつて存在した、英雄が拠点としていたケットシーの村一つ分の面積を以て建てられた巨大な城。その城下町のように連なる村々——未だ発展途上でキャンプのようであるが、しっかりと衣食住は完備されている——に集められた多数のケットシーたち。

英雄が一週間目を離れただけで、王貴はとんでもないことをしでかしていた。

「ケットシーの村は複数に分かれていた。人間が市町村に別れている感覚とさほど変わらん。それらの生き残りを集めるべく動いてくれたお前や石なんとかは労おう。おかげでこの猫<sup>パレロニヤ</sup>代<sup>ニヤ</sup>王国は最盛期を更なる先に見据えることができた。尤も、その大半をかき集めたのはハンターたる王<sup>オレ</sup>の功績だがな」

一体全体どうやってハンティングしたというのか、英雄は問いただそうとする欲求をぐつとこらえた。

「……まあいい。それで、小規模とは言え、城下町のみならず城までどうやって完成させた？」

その質問に、王貴はその時を思い出してやれやれと言った具合に話し始める。その呆れながらも口角が上がっている様子は、甘えて足にすり寄ってくる猫の視線に射抜かれ「しょうがないな」と抱きかかえる独身女性のようにであった。

「ふん。ケットシーの働きぶりは見ていられなかったのだな。木の枝で手を切ったり、重いものを運べずへたりこんだりと惨憺たるものだ。こちらを申し訳なさそうに潤んだ瞳で見つめてきたが故に、五行を全開にして簡易ながら城と城下町を建てた」

——骨抜きにされているではないか。

「丸二日動けなくなつたがその間常に五匹のね——五人のケツトシーが付きつきりであつたおかげで今や全快よ。見ろこの溢れんばかり王氣<sup>オーラ</sup>」

「ぬ、確かに莫大な王氣<sup>オーラ</sup>」

「おい九鬼！ ボケに転じるな！ 困惑するだろうが！」

今まで沈黙を決め込んでいたもう一人の少年、石田三郎が爆発したように話に割り込んできた。

「ぬ、貴様は石田鉄工所の石某」

「石田鉄工所を覚えていた癖に何故石以降出てこんのだ！ 俺の名前は石田三郎！

しつかり覚えろ霧夜王貴！ 第一、元天神館の癖に出世街道を歩む俺を知らんとは！」

「王の世界に貴様のような奴はいないものでな」

「何をやっているんだ異世界の俺!! 意識されてすらいはないとは!!」

——意識されていなくて助かつたようなものだがな。

「して、王貴よ。王国を建て……その後のことは考えているのか？」



ぎやあぎやあ騒ぎ立てる三郎を後ろへ追いやり、英雄は最も聞きたかったことをぶつけてみた。それに対する王貴の反応は、数秒の沈黙。先ほどまでの満足げな微笑はどこへやら。

「……………紋を待つのも一考だったのだが、まだ雌馬と傀儡の始末が済んでいない。場所さえ割ればすぐにでも彫像にしてやるところだが、生憎と行方知らず。そこで、キツとやらだ」

「行灯ラント機構か」

「あやつには無能剣士と共に居場所を割らせている。照明器具（ランプ）だか簡易住居（テント）だか知らんが、本拠地を探っているそうなの」

次に王貴の顔に浮かび上がってきたのは、よからぬことを企んでいるような不敵な笑い。

「なあに、ケットシーの中にも怨恨覚めやまぬ優秀な素質を持った物が多い。なればそれを汲み取り、王オレの軍勢に参集させようではないか」

「……行燈<sup>ラ</sup>機構<sup>ト</sup>を巻き込んだ以上、全面戦争となるな」

「ケツトシー以外の塵芥、況してや顔も知らぬ連中に頼むのは甚だ本意ではある……。  
そこでだ、石某」

「いっしっだ!! さつぶつろう!!」

「貴様にはそこそこ働いてもらう。先の戦いで貴様には多少の感心を持った。精々死なぬよう気張るといい」

## 第三十幕 ポケットにファンタジー

『という惨状で……』

「……できうる限りその暴走を止める。若しくは流れをこちらに寄せろ」

『後者で善処します……では』

パチツ、と通話機能を持つ扇子を閉じ、燈火は大きく息を吸い込み、臍あたりに溜まった疲労を呼気へ混ぜ込んで垂れ流す。

「はあ……」

「心労が滲みでてるな、灯火様」

人がいないからこそできた燈火の疲労のアピールであったが、運悪く、よりにもよってクラスメイトであった女子に目撃されてしまう。

「……なんだそれは、嫌味か川神」

「べつつに？　ただ、よくそんな疲れ切った表情を隠しながら老けないな―って」

百代のニヤニヤというオノマトペが似合う表情に、燈火も若干苛立ちがあつたのだろう。滅多に見せない反抗心が、燈火の喉からひよつこり顔を出す。

「老けているとも。もうすぐ五〇だ。そういうお前もアラサ」

「舌を縛られるのと歯を裏返されるの、どっちがいい？」

「悪かった、こちらが悪かったからその恐ろしい脅迫を止めろ」

「乙女の年齢を暴露するもんじゃないぞ？　えい！」

女子が同級生の男子の肩を軽く小突く、ということの威力はさして大きいものではない筈であつた。蚊蜻蛉のような儂さはないにしろ、小動物がぶつかった程度の衝撃があるかないかと言つたところだと燈火も思つていた。

しかし、その女子は既に三十路を彷徨う洗練された武神。襲いかかつてきたのは小動物などという生易しさとは程遠い、巨大な羆の得物を狩る一振り。

「はっ!？」

—— 本来ならば、ここは島津あたりの役どころだろうに —— !

地面に叩き伏せられながら、燈火は今置かれてある立ち位置に納得がいかなかった。しかし、それを口に出せば更なる過剰な親愛表現スキシンシップが飛んでいることを体で覚えている彼は、喉にさえその言葉を通らせることはしなかった。本来そこに居座るべき男島津岳人よりも、燈火は比較にならないほど理性的で賢かった。

「どうした京極。私はそんなに強く殴ってないぞ?」

「……わ、私は戦闘要員じゃないんだ、加減を間違えるな」

ゆつくりと起き上り、百代の物差しで言えば小突いた程度のタツチで痛めた肩をさする燈火。

「まったく……二〇年近く経っても恐ろしい女だ。こういうところは変わらん」

「……まあ一〇年、二〇年ならまだ変わらずにいられるさ」

ふと、百代の表情が翳りゆく。燈火がこの世界に飛ばされる前には決して見ることもなかつた、憂いを伴う大人びた表情だった。

こんな表情をする時の百代は、決まって同じ話題に心を砕いている。

「……あの、<sup>エンスズ</sup>廃棄物のことか」

「……何十年と待たせたらしい」

憂いの表情の上から罪悪感が塗りたくられ、幼さが追いやられて年相応の雰囲気が見られる。

「顔も無駄な皺が見えないように覆う恥ずかしがり屋だ……死人のような目は相変わらずだったかな」

「こちらでそれほど長く続いているとなると」

「ああ、限界なんだろう。異能なしではもう戦えないとも言っていた……私がもう少し早く呼ばれていたらな」

「それでも——十年以上決着はつかないままで」

この世界に百代が飛ばされたのは十数年ほど前のこと。まだ川神学園の制服は原型を留めており、幼さも残る川神院総代候補としての才能と危うさを秘めた頃のことであつた。

そんな百代を真つ先に発見したのが、彼女が語る恥ずかしがり屋である。

「それは何故だ？ 私には何もわからん。廃棄物エシズになつてしまつた以上、意思疎通など……」

「………あいつの異能で殺されそうになつた時、あいつは手を緩めて自分が卑怯だつたと詫びたよ。次回に持ち越しだつてね」

「な……」

廃棄物エシズの考えられない行動に瞠目してしまふ燈火に対し、全くその通りだと言わんばかりに笑つて見せる百代。

「おかしいだろ？ 廃棄物エシズなんだぞ？ 世界を崩壊させようと統一意志を持つ廃棄物あいつが、侘びたんだぞ？」

「……昨今の廃棄物<sup>エンス</sup>は、やはり何かがおかしい。指導者のせいかは知らんが、人臭い……やはり、今一度調べる必要がある、か……」

「あいつ以上に人臭い廃棄物<sup>エンス</sup>は知らないがな。たまに一緒に釣りしたりもした」

「………はは、傑作だな」

驚きの余り、ついには笑い声すら出てしまう。燈火の中にある廃棄物<sup>エンス</sup>像のどれにも、百代が語る恥ずかしがり屋は当てはまらない。

「………その滑稽なやりとりも、もうすぐ終わるんだな」

「………ああ、全面戦争だ」

「………引導を渡してやらなきやな。人臭いうちに、殺してやらなきやな」

「………さて、川神次女」

「うっ」

川神次女、そのたった一つの単語で百代の視線が泳ぎ始めた。

「川神長女と川神長男と親睦を深めて来い。半月ほど経つのにどことなくぎこちない



じゃないか」

「し、仕方ないだろ。ワン子ならともかく、姉に弟だぞ？ 弟分がいるがあれとは全く違うし、姉に至ってはジジイより強いし年下。もう何がなんだか分からん！」

◇

「……………」

「……………」

「……………」

—— 拝啓、俺の世界の少ない友人と家族へ。空気が重過ぎて滅びてしまいです。

「…………と、とりあえず闘<sup>や</sup>る!？」

「そ、そうね！」

「肉体言語禁止って今しがた決めたばかりじゃん!!」



「ふむ、どうやら……和解とまではいかなかったか？」

「残念ながらな。血は繋がっているとは言えやはり勝手が違う。特に、私の心労はでかいぞ」

はあ、と大きく溜め息を漏らす百代。奇しくもその大きさは先ほどの燈火の溜め息にも匹敵するほどであった。故に、燈火からは労いと気遣いの言葉がかけられる。

「ああ、それならば無理にやることはない。武神はこちらの最高戦力、純度は保ってもらわないとな」

「その戦力の事だが、私同様に川神千李は扱っていいぞ」

武神として崇められ、それに恥じることのない屈強さを誇る川神百代自身が、強さに焦点を当てて同列として扱う。それがどれほど異常で驚異的であるのか、それが分からない燈火ではなかった。

「お、お前にそこまで言わせるのか……。川神千李、ハーピーの話では廃棄物エンズより悪魔的であるとのことであつたが」

「あれは口だけじゃないな。弱体化してるとて話が嘘みたいだ」

「ふむ……。覚えておこう。これならば被害をより抑えることができるだろう」

「……。切り捨てることも考えろよ?」

その言葉が、燈火の頭にこびりついた。

「……。なんの、話だ?」

「お前は捨て駒を嫌いすぎてる。そんなんが頭じゃダメだぞ? 必要犠牲というものがあることを忘れるな? 川神千李というお前の知らない全くの他人だろうが、世界戦は違えど互いに顔見知りだった私だろうが、切り捨てるという選択肢はあつて当然なんだぞ?」

「……。ああ、頭では分かつてるつもりだ。安心しろ」

「……。京極、今のお前の悪いところだ。昔のお前は他人と関わりが薄い生活ばかり送っていたから分からなかつたが、お前は実のところ熱すぎる。燈火なんて名前、お前の熱心さを表すには弱すぎる。獄炎とでも言い換えたらどうだ?」

「……私が言葉を操ることを忘れたか？ そんな名前を自らに課したら、それこそ私は形振り構わずみんなを助けようとするさ」

「……それもそうだな」



「これより、行灯機構の本拠地へ移る。漂流物は着いてくるといふ志願兵に準備するよう伝えてくれ」

百代との会話から数時間後、燈火は漂流物《ドリフターズ》を招集して次の行動に就いての会議を開始していた。

会議の要点は二つ。

一つは、このハーピーの村から離れて行燈機構の本拠地へ移動するという事。移動には数日を要するが、次の作戦、ひいては崩王軍への対策をするのであればここではやれることが少ないという理由に基づいた判断であった。

もう一つは、崩王軍の圧倒的兵量に対抗するべく、少しでも多くの戦闘員をかき集めてほしいということ。性別も年齢も人種も問わず、我こそはと志願する勇気ある者を呼

び集めて戦力の補強を図つてのことだった。

「漂流物に拒否権はない、つてか？」

「なんだ井上。逃げたいのか？」

「ええまあ、死にたくないんで……なんて言つてられないっすね」

「物分かりが良くて助かる」

準は心底戦いたがつていない、と暗に訴えていたが、そんな我が儘が一人通じるはずもなかった。

加えて、敵と接触することが避けられない後輩が彼の隣に一人いる。後輩を見捨てられないお人よしな部分が、準を戦線へと引っ張つてしまう。

「……他に異論はないな？ では、移動するぞ。他の漂流物と合流を——」

「あ、あのっ」

燈火としては、「漂流物は廃棄物を打ち倒すことを義務としている」と考えている。そのため、異論が出ることを考えていない、というよりは異論が出ることをは許さない

と言った具合で、直にでも出発する心構えでいた。

しかし、そこに待ったをかけたのが沙也佳であった。

「と、トラさんは……トラさんは助けに行かないんですか……？」

「……我々は行かない」

沙也佳が納得がいけないと詰め寄ろうとする直前、しかし、と大きく楔を打ち込む。

「その代わり、信頼できる漂流物ドリップと行灯機構ラントの仲間を捜索に出した。そう気を揉むな。聞いたところ、彼はサバイバルの極限状態で君を庇いながら生き延びた強者だろう？  
ならばきつと生きている」

「……そう、です……ね……」

沙也佳の心の中は酷く濁って渦巻いていた。

燈火がシンの情報を共有しているとすれば、虎之助と沙也佳がシンに出会ったあの「勘違い」がそのまま伝わっている筈であった。

本当のことを言うべきなのか、黙ったまま男を立ててやるべきなのか。虎之助の生存

力を信じるべきなのか、虎之助を危うさを信じるべきなのか。

結果として、沙也佳は曖昧な返事しかできなかつた。

「川神百代、千季、十夜。井上準。那須与一。立花虎蔵。黛沙也佳。そして、私。今ここに  
いる漂流物ドリフ八人と行灯機構ラント、そしてハーピーの志願兵を参集し、地獄の蓋を開けに行  
くぞ」

「そう言えば、どこなんです先輩？ 行灯機構ラントの本拠地って……」

「……そうだな、つい最近奇妙な城ができたケットシーの村の隣だ。お陰で崩王に目を  
つけられたようだがね」

第三十一幕　W O W　W A R　T O N I G H T　　（時に  
は起こせよムーヴメント）

場所は変わって密林地帯。

少年が一人、樹に縛り付けられていた。

「あなたが立花虎之助？」

三角コーナーに捨てられた生ごみを見るかのような冷え切った視線で貫かれ続けた虎之助は、その質問に対して声を出すことはできず頷くことしかできなかった。

「本当に漂流物ドリフでしょうか。怪しいところです、拷問にかけるべきです」

ギラリ、と狐耳の少女が手にしていたナイフが鈍く輝く。今にも独りでに少年に飛びかかつて心臓を突き刺してしまいそうな危うさを放っていた。

対して、今の今まで剣山に活けられていたような状況だった虎之助も流石に命の危機



を感じたのだろう。溜まっていた分の声を一気に吐き出して許しを請い始める。

「の、覗いちやったのは謝ってるだろう!? 信じてくれよ、あれは事故なんだよ!!」

事の始まりは数十分前、虎之助が不用意に人の気配がした水場へ飛び込んだことにあった。

脱いであった制服から学園を割り出したはいいものの、それが女性ものであるという判断までは至れずに川に飛び込んでしまったせいで、二人の少女の水浴び現場に遭遇してしまったのだ。

叫び声は「トウラトウラトウラー」、サバイバルを覚悟したが故に血走った眼、人を見つけた興奮と全力で駆け抜けた疲労が相まって現れた荒い息遣い。これを見て変質者と思わなければ何だと思ふのだろうか。少なくとも、少女二人は覗き魔の変質者として手早く拘束をしていた。

それから数十分、少女二人から冷たい視線を浴びせられ続けていた。

「では、事故であることを信じてもらうのと、漂流物お仲間であることを信じてもらうの、どちらがいいですか?」

「両方信じてもらえないと殺されるじゃんか!!」

「ふむ、見かけによらず頭は回るようですね。虎に関わる服を着た異世界人は馬鹿丸出しだと聞いたことがありますか」

「偏見もいいところだ!!」

確かに俺は虎柄の服着てるしあだ名はトラだけど!! と声を大にして、自分を含めた全ての虎にまつわる服装をした人間を擁護する。

「どうしようか? これだけ会話が成り立つなら、漂流物か<sup>ドリフ</sup>どうかはともかくとしてまともみたいだし」

その必死さが伝わったからなのか、二人の少女の片割れ——長い髪を乾かし終えて馬の尻尾のような形に纏め上げた少女——は情状酌量の余地があるように提案している。もつとも、虎之助に向ける視線は未だにマイナスであった。

「<sup>エシンス</sup>廃棄物よりは、という補足が抜けていますよ? 女の水浴びを覗くとはまともとは思えませんが」

「だーかーらー、事故なんだってば!!」

ジタバタと脚を地面に叩き付けて足掻く姿を見て、ほんの少し警戒心を解いた少女は大きく溜め息をついた。

「……ねえハツ、そろそろ樹からだけでも解放してあげましょ? 何だか理不尽なことばつかしてると廃棄物エンスズになった気分嫌になるの」

「……そうですか」

ハツと呼ばれた狐耳の少女は、握っていたナイフをしつかりと握り直すと、少年を樹に縛り付けていた縄をスパツ、と叩き斬った。

その瞬間、虎之助は少女二人から勢いよく距離を取るため後ろへ跳び、勢いそのままに足を畳んで膝を地面にこすり付けながら着地する。

「大っ変っ、申し訳ありませんでしたあっ!!」

「あはは、綺麗な土下座」

「笑ってる場合ですか。きつとあなたのスカートの中を覗こうとしているのですよ」

「どうすりやいいんだよ!」

許しが出るまで続けるつもりであった土下座も、思わず顔を上げて反応してしまったせいで崩れてしまった。仕方がないのでゆっくりと立ち上がった虎之助は、縄の跡が残る手首の調子を確かめる。

「とまあ、二割の冗談はこれくらいに」

「ほ、本気も本気じゃないか……」

ゴホン、とハツが咳払いを一つ。

「立花虎之助、燈火様のご命令で捜索に参りました。私は行灯機構ラのハツと申します」

ピコピコ、と初の狐耳が動く。表情を読み取るより耳を見た方が感情の機微が分かるのではないかと虎之助が思う程、狐耳は頻繁に動いていた。

「行灯機構ラ、ね。何だか沢山いるなあ……。で、そちらも行灯機構ラ……いや、漂流物ド？」

川神学園の制服着てるってことは、飛ばされたんだろ? ……というか、見た事あるし」

「そうなの?」

「……その話しぶりだと、どうやら俺のことは知らないようで」

「顔見知りだったらこんな慎重に疑わないわ」

「それもそうか」

顔見知りだったら容赦なく殴ってるわ、という小さな呟きが無邪気ながら冷えた声で発せられて、虎之助の背筋に奇妙なものが這いずった。

「……で、あの燈火って奴と同じ行燈機構所属?」

「うーん、協力はしてるけど所属ではないのよね」

「?」

「私、風の異能の適性がないのよ。突風も起こせないし、壁も作れないし……」

「なに、行燈機構所属の条件ってのがあるのか?」

——軍力強化してるって聞いてたのに、意外と選り好みするんだな。

「燈火様が兵隊を選抜している、なんて考えているんじゃないでしょうね」

「え、違うの？」

「はあ……」

——「これだから素人は」って感じの目を向けられている。

「崩王軍と戦う軍力と行燈機構トは完全に分けているんです」

「なんで」

「行燈機構トのメンバーが使う術のほとんどが廃棄物エンスズの遺産、人の手に余るもの。今の今まで戦いを知らなかった者に持たせるには荷が重いだけでなく、どうしてもその異能自体が彼らの恐怖を掻きたててしまう。だからこそ、参集した国や村の兵隊はすべて傘下に入るとしても、その極々一部だけが漂流物ドリフターズと肩を並べて戦うことを許されているんです。燈火様は選り好みをしているのではなく、区分しているだけ。皆等しく戦士であるのと同時に、その戦士の中で将たりえる人材にマークをつけているにすぎません。そちらの時代にも十勇士だとか四天王だとか……兵を率いる兵がいますよね？」

「……その極々一部になる条件っていうのが、異能の適性？」

「廃棄物エンスズを目の前にしても怯まない精神などの条件もありますが、異能の適性は大きな

条件の一つであることは確かです」

「漂流物だからーって理由で行燈機構には入れないのはそういうこと。まあ、普通に戦いに協力できるから漂流物である人間が行燈機構に所属しているかどうかは本当に小さな問題なのよ。……できることなら使いたかったんだけどね」

「使いたかった？」

「ん、こつちの話」

それ以上、少女はそのことについて語ろうとはしなかった。

「……それで、名前は？」

「あれ、私のこと知ってるんじゃないの？」

「……いや、見た事あるって言っても交流戦の頃だぞ？ お前、大分大人びてて印象とだいぶ違うんだよ……確認だよ、確認」

「あはは、確かに歳取ったからね、私も」

そう言うと、少女は虎之助に握手を求めた。

「私、川神一子。ヨロシクね」

◇

「っ…………く、う…………」

廃棄された城、ネツカーメイトハイム。その崩壊した城壁に背中を預け、頭を抱えながらうめき声をあげている一人の男がいた。

そのうめき声の原因は理解できるものではなかったが、見たものはおよその予測が付けられるものだった。

頭を押さえている手の隙間から、ゆらゆらと白い煙のようなものが上がっている。そこだけではなく、体の輪郭が曖昧になっているかのように煙が吹き出していた。極めつけに、くいしばっている歯が人の者とは思えぬほど鋭利に尖り、人の形から離れかけている。

そうなっている理由は一見して分かるものではない。しかし、それが国吉灯を蝕んでいるということ間違いないかった。



「やあやあ狼男、随分と息苦しそうに息を吐くね……いや、煙か」

ズシン、と大げさに足音を立てて体格の良い男が現れた。体つきだけ見れば、後から現れたこの男の方が狼男に近しいかもしれない。

「……なんだ、港か」

「なんだとはなんだよ。様子を見に来てやったのに……どうだ、頭の具合は」

コツンコツン、と人差し指で頭を突くしぐさを見せると、灯は心底辛そうに溜め息を吐き出した。

「……………すこぶる、最悪なんだぜ、これがよ」

「だろうと思った。他の連中にも定期的にくる苦痛を、君だけ味わってないのは不公平だからね」

「そういうお前はどうかんだ」

「勿論苦しいもんだけど、皆よりは楽だと思うよ？ 何せ、折り合いが付いてる」

——折り合い付けられるもんじゃねえだろ……。

「……けつ、羨ましい限りだぜ」

「尤も、一番苦しいのは崩王様かな？」

三千尋の言はさも常識を語るかのようなことだった。魚は水がないと生きていけない、程度の言い方にしか取れないものであった。

しかし、その当然らしさには塗り潰せない秘匿が彼の言葉にはあった。灯は自分の頭痛すら忘れるほどの驚愕に見舞われ、頭を押さえていた手を思わず離してしまう。

「……………おまえ——」

「何で知ってるかって？——」——テメエが一番の古参だかなんだか知らないけどな、何でも隠し通せると思つたら思い上がりもいいところだぞ？」

三千尋の気配がガラリと変わる。先ほどの笑顔——本心から笑っていなかっただにしろ、体裁はしっかり保とうとした作り笑い——はあつさりと身を潜め、灯を嘲笑うよう

な口角が引き裂かれた笑みを浮かべていた。

——折り合いなんか、付けられねえはずなのに……！

「……他の連中には言ってねえだろうな」

「——当然だろ？ 言ったところでメリットないしさあ」

「……一応忠告しとくぞ、港。崩王ちゃんを裏切ったその時は、俺が容赦なく噛み殺すからな」

ギリリ、と灯の牙が三千尋の首元に狙いを定めていた。

「おお怖い怖い、ドンドン発想が狼じみてるじゃねえか。——ま、安心するといいよ。崩王様が約束を守ってくれる限り、僕や高坂や「あの女」は離れることはないだろうや」

「約束……？ 高坂やアイツは知ってるが、お前もなんか取引してたのか？」

「聞かされて無いの？ あらあらそれは——」

一步、三千尋は灯との距離を詰め、クスツ、と音を立てる。その鼻息が消えぬまま――

「――お気の毒に、どんな気分？」

憐れみを恵んでやった、その瞬間に灯の「狼のように毛並みだった巨大な腕が三千尋の腹部を貫いた」。

「がふあつ?!」

「おう、もういつペン言ってみろや」

城壁に叩き付けられた三千尋の喉元に狼男灯の太い爪が突きたてられる。

「や、止めてくれよ……いきなり迅ウルブヘジン狼の全力は……「先手を取れなかったら」僕死んだよ?」

三千尋自分に向けられていた獣人の腕にそつ、と手を置くと、灯の全身に激しい虚脱感が襲いかかってきた。

「なっ……!!?」

堪らず三千尋から距離を取り、獣人化を解除してしまう。

「<sup>フレスンヤ</sup>庄 轆」……この距離じゃ感覚を鈍らせるのが精一杯だったかな。できれば、地面に熱烈な抱擁を交わしてほしかったところだけど」

「……」

「そう好戦的にならないでくれよ——崩王が裏切らなければ、俺が裏切らないのは約束してやるから」

「……………港、お前は「何を使ってる」、「何を持っている」」

「——さあてね、答え合わせなら受け付けてあげるから、少しくらい考えてみるといいよ」